

国立国語研究所学術情報リポジトリ

言語行動における日独比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001318

国立国語研究所報告 80

言語行動における 日独比較

A CONTRASTIVE STUDY
OF
JAPANESE AND GERMAN
LINGUISTIC BEHAVIOUR

三省堂

© 1984 The National Language Research Institute

Sanseido Publishing Co., Ltd. Tokyo, Japan

Printed in Japan

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所は創立以来、国民の言語生活の実態を知るために多くの調査をしてきました。このような国民の言語生活の実態は、日本人以外の人の言語生活との対比によって一層はっきりすると思われます。私どももこの見地から、外国人との言語行動様式の比較対照的研究をいくつか手がけております。

この報告書はそのうちの一つ、日独語の対照言語学的研究の一部を主としたものです。この研究は「日独文化協定」の趣旨に基づいて国立国語研究所とドイツ連邦共和国ドイツ語研究所との間で取り交された「日独語の対照言語学的研究」に関する共同研究計画についての合意書に則って進められました。特に昭和 52 年度から 3 年間、日本学術振興会——国際共同研究——の援助を受けることができました。同会に厚く御礼申し上げます。この間の経過については 1.2. に詳しく述べてあります。

この種の調査研究は、言うまでもなく、各地の関係機関の御協力がなければ達成できません。これらの 1.3. に挙げた機関の方々、また熱意をもって調査に応じて下さった被調査者の方々に謹んで御礼を申し上げます。さらに、1.3. に述べてありませんが、実践女子大学教授福島邦道氏はじめ多くの方々に調査について非常なご協力をいただきました。厚く感謝いたします。

なお、この報告書の執筆には、目次に名の挙がっている 10 人が当たり、また、概要の英訳にはコーネル大学博士過程（言語学、筑波大学大学院）のポリリー・ザトラウスキー氏の協力を得ました。

昭和 59 年 3 月

国立国語研究所長

野元 菊雄

目 次

刊行のことば

1. 調査の意義・方法	1
1.1. 言語行動様式の対照研究について	野元菊雄 1
1.1.1. 言語行動とは何か	1
1.1.2. 言語行動の様式にはどんなものがあるか	3
1.1.3. 言語行動と場面	5
1.1.4. 異文化間の言語行動研究	6
1.2. 研究の発端	林 大 9
1.3. 研究方法・実施	江川 清 11
1.3.1. 調査の構成	11
1.3.2. 担当者・協力者	12
1.3.3. 調査の経過	14
1.3.4. 被調査者	16
2. 言語生活・言語意識	25
2.1. 言語生活	江川 清 25
2.1.1. マスメディア接触	25
2.1.2. パーソナルメディア接触	34
2.1.3. 対人接触態度	38
2.1.4. 日本人の言語生活の特徴	44
2.2. 外国語・外国人との接触	高田 誠 45
2.2.1. 外国語との接触	45
2.2.2. 外国人と自国語	52
2.2.3. ドイツ人のドイツ語意識	60
2.3. 在日外国人の日本人および日本語との接触	田中 望 70
2.3.1. 日本人との接触度	70
2.3.2. 外国人の日本語観	73
2.4. 在日外国人からみた日本人・日本文化	江川 清 80
2.4.1. 日本文化に対する好み	80

(4) 目 次

2.4.2.	日本人の習慣的行動に対する意見	84
2.4.3.	異文化への適応力	89
2.4.4.	日本人の性格	91
3.	あいさつ行動	97
3.1.	家庭でのあいさつ	石井久雄 97
3.1.1.	日本人	99
3.1.2.	ドイツ人	106
3.1.3.	在日外国人	110
3.1.4.	対照	114
3.2.	道でのあいさつ	石井久雄 116
3.2.1.	日本人	117
3.2.2.	ドイツ人	122
3.2.3.	在日外国人	126
3.2.4.	対照	129
3.3.	公園でのあいさつ	米田正人 131
3.3.1.	日本人	131
3.3.2.	ドイツ人	137
3.3.3.	在日外国人	142
3.3.4.	まとめ	151
3.4.	学校でのあいさつ	志部昭平 153
3.4.1.	校門でのあいさつ	155
3.4.2.	廊下でのあいさつ	162
3.4.3.	授業開始のあいさつ	167
3.4.4.	授業終了のあいさつ	174
3.4.5.	質問に答える生徒は？	177
3.4.6.	終わりに——比較	182
4.	買物・道聞き	185
4.1.	駅の売店で	田中 望 185
4.2.	万年筆買い	日向茂男・杉戸清樹 193
4.2.1.	万年筆のケースに近づいたら	194
4.2.2.	万年筆のケースに近づくと店員は	212
4.2.3.	ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは	228
4.2.4.	これはと思う万年筆が見つかったら	日向茂男 238
4.2.5.	万年筆を試すことはできるか	242
4.2.6.	万年筆の指し示し方	247
4.2.7.	買う万年筆が決まったとき、	

店員にどう話すか	杉戸清樹	250
4.2.8. 買った品物を受けとるとき, 客は?		259
4.2.9. 品物を手渡すとき, 店員は?		270
4.2.10. まとめ		285
4.3. 道聞き	高田 誠	288
4.3.1. 誰にたずねるか		289
4.3.2. 道をたずねる		291
4.3.3. 道をたずねられたら		300
5. 身体の空間的な位置・距離	杉戸清樹	305
5.1. 対人行動における空間的要素		305
5.1.1. 調査の視点と項目		305
5.1.2. 想定された相手		308
5.2. 出会ってから, 着席するまで		311
5.2.1. 出会ったときのあいさつ・接触		311
5.2.2. 街で立ち話をするときの距離		323
5.2.3. 街で立ち話をするときの, 体の向き		331
5.2.4. 街を並んで歩くときの距離		333
5.2.5. 観察調査の試み		341
5.2.6. レストランでの座席		345
5.2.7. まとめ		347
6. 反省と今後の課題	江川 清	349
日本人用調査票		353
英文概要		373
参考文献		379
索 引		381

CONTENTS

1. The Investigation: Justification and Methodology	1
1.1. Linguistic Behaviour Patterns and Contrastive Research	2
1.2. Motivation for this Research	9
1.3. Research, Methodology, and Procedure	11
2. The Use of Language in Social Context and Linguistic Awareness	25
2.1. The Use of Language in Social Context	25
2.2. Contact with Foreign Languages	45
2.3. Contact between Foreigners in Japan and the Japanese People and Japanese Language	70
2.4. Japanese People and Culture as Seen by Foreigners in Japan	80
3. Greeting Behaviour	97
3.1. Greetings in the Home	97
3.2. Greetings on the Street	116
3.3. Greetings in the Park	131
3.4. Greetings in School	153
4. Shopping and Asking for Directions	185
4.1. Making Purchases at a Station Newsstand	185
4.2. Buying a Fountain Pen	193
4.3. Asking for Directions	288
5. Physical Contact, Proxemics	305
5.1. Physical Contact in Personal Interaction	305
5.2. Physical Contact in Four Situations — Meeting, Talking, Walking and Sitting	311
6. Reflections and Problems for Future Research	349
Japanese Questionnaire	353
English Summary	373
Bibliography	379
Index	381

図 表 目 次

1. 調査の意義・方法

表 1-1	市役所職員(社会人)の所属別分布	18
表 1-2	学生の所属別分布	18
表 1-3	在日外国人の母語別分布	19
表 1-4	在日外国人(英語話者)の国籍別分布	19
表 1-5	被調査者各層の性別分布	19
表 1-6	被調査者各層の平均年齢	20
表 1-7	社会人の年齢階級別分布 (1)	21
表 1-8	社会人の年齢階級別分布 (2)	22
表 1-9	市役所(日本)別の年齢階級別分布	22
表 1-10	在日外国人(社会人)の来日理由	24
表 1-11	在日外国人各層の滞日期間分布	24

2. 言語生活・言語意識

表 2-1	テレビ視聴時間(日本人・ドイツ人)	26
表 2-2	テレビ視聴時間(在日外国人)	28
表 2-3	新聞閲読時間(日本人・ドイツ人)	29
表 2-4	新聞閲読時間(在日外国人)	30
表 2-5	閲読新聞の種類(在日外国人・社会人)	31
表 2-6	閲読新聞の種類(在日外国人・学生)	31
図 2-7	キオスクで新聞を買う程度(社会人)	32
表 2-8	新聞や雑誌を読むのは好きか	33
図 2-9	私信を書いた人の割合	34
図 2-10	手紙や日記を書くのは好きか	36
表 2-11	電話利用回数	36
表 2-12	在日外国人の電話での使用言語	37
図 2-13	近所の人とおしゃべりは好きか	39
図 2-14	集会や会議に出席するのは好きか	40
図 2-15	見知らぬ人に話しかけるか	40
図 2-16	日独英社会人の対人接触態度(「好き」の割合)	41
表 2-17	質問ごとの中間回答(「どちらともいえない」)の出現率	43
表 2-18	「外国語」ということばを聞いたなら何語を思い浮かべるか	46
表 2-19	外国人は滞在している国のことばを話すべきか (1)	52

(8) 図表目次

表 2-20	外国人は滞在している国のことばを話すべきか (2)	53
表 2-21	外国人は母語話者と同じくらいに上手に話せるようになると思うか	54
表 2-22	外国人がまちがえたら訂正するか	56
表 2-23	片言で道を聞かれたら	59
表 2-24	ドイツ語・アナウンサーのことばは軽快か	61
表 2-25	ドイツ語・アナウンサーのことばは聞きやすいか	62
表 2-26	ドイツ語・アナウンサーのことばはきれいに聞こえるか	63
表 2-27	アナウンサーのことばは好きか	64
表 2-28	ドイツ語は論理的か	65
表 2-29	„Sie“ と „du“ の使い分けは	67
表 2-30	ドイツ語はどの分野で重要か	68
図 2-31	日本語の学習経験	70
図 2-32	日本語学習の教師	71
図 2-33	日本人との接触 (1)	71
図 2-34	日本人との接触 (2)	71
図 2-35	日本人とことばをかわす頻度	72
図 2-36	そのとき何語を使うか	72
図 2-37	外国人にとって日本語はむずかしいか (1)	73
図 2-38	外国人にとって日本語はむずかしいか (2)	74
図 2-39	外国人にとって日本語はむずかしいか (3)	76
図 2-40	在日外国人の文字の読み・書き能力	78
図 2-41	どの程度、日本語がうまくなりたいか	79
表 2-42	日本食が好きか	81
表 2-43	箸が使えるか	81
表 2-44	和式旅館と洋式ホテルのいずれを選ぶか	82
図 2-45	歌舞伎や能が好きか (社会人)	83
表 2-46	音をたててソバをすする習慣について	85
表 2-47	話すとき視線を避けるのをどう思うか	87
表 2-48	イエス・ノーをはっきり言わないのは	88
表 2-49	3項目の比較	88
表 2-50	可能なら日本に永住したいか(全体)	89
表 2-51	異文化に適応しやすいか	91
表 2-52	日本人の性格特徴 (社会人)	92
図 2-53	日本人の性格 (中国・英語両話者の差)	95

3. あいさつ行動

図 3-1	家庭でのあいさつ (日本人)	100
表 3-2	相手とあいさつ (日本人)	101
図 3-3	家庭でのあいさつのみぶり (日本人)	103
図 3-4	家庭でのあいさつのことば (日本人)	105

図3-5	家庭でのあいさつ（ドイツ人）	107
図3-6	家庭でのあいさつのみぶり（ドイツ人）	108
図3-7	家庭でのあいさつのことば（ドイツ人）	109
図3-8	家庭でのあいさつ（在日外国人）	111
図3-9	家庭でのあいさつのみぶり（在日外国人）	113
図3-10	道でのあいさつ（日本人）	117
図3-11	道でのあいさつのみぶり（日本人）	119
図3-12	道でのあいさつのことば（日本人）	121
図3-13	道でのあいさつ（ドイツ人）	123
図3-14	道でのあいさつのみぶり（ドイツ人）	124
図3-15	道でのあいさつのことば（ドイツ人）	125
図3-16	道でのあいさつ（在日外国人）	126
図3-17	道でのあいさつのみぶり（在日外国人）	128
表3-18	出会ったときのことば（日本人）	131
表3-19	出会ったときの動作（日本人）	132
表3-20	出会ったときのみぶり（日本人）	133
表3-21	話題（日本人）	134
表3-22	相手のどこを見るか（日本人）	135
表3-23	別れるときのことば（日本人）	136
表3-24	別れるときのみぶり（日本人）	136
表3-25	出会ったときのことば（ドイツ人）	137
表3-26	出会ったときのみぶり（ドイツ人）	138
表3-27	話題（ドイツ人）	140
表3-28	相手のどこを見るか（ドイツ人）	141
表3-29	別れるときのことば（ドイツ人）	142
表3-30	別れるときのみぶり（ドイツ人）	142
表3-31	出会ったときのことば（在日外国人）	144
表3-32	想定した人と、出会ったときのことば（在日外国人）	144
表3-33	出会ったときのみぶり（在日外国人）	146
表3-34	想定した人と、出会ったときのみぶり（在日外国人）	146
表3-35	話題（在日外国人）	147
表3-36	相手のどこを見るか（在日外国人）	148
表3-37	別れるときのことば（在日外国人）	149
表3-38	想定した人と、別れるときのことば（在日外国人）	149
表3-39	別れるときのみぶり（在日外国人）	150
表3-40	想定した人と、別れるときのみぶり（在日外国人）	150
表3-41	校門での動作（日本人・生徒）	156
表3-42	校門でのみぶり（日本人・生徒）	157
表3-43	校門での動作（ドイツ人・生徒）	159
表3-44	校門でのみぶり（ドイツ人・生徒）	160
表3-45	授業開始・あいさつことばの有無（日本人・生徒）	168

(10) 図表目次

表 3-46	授業開始・あいさつ行動の有無（ドイツ人・生徒）	170
表 3-47	授業開始の動作（ドイツ人・生徒）	171
表 3-48	授業開始のみぶり（ドイツ人・先生）	174
表 3-49	質問に答える，腕（日本人）	178
表 3-50	質問に答える，腕組み（日本人）	180
表 3-51	質問に答える，腕（ドイツ人）	181
表 3-52	質問に答える，動作（ドイツ人）	182
表 3-53	質問に答える，腕組みなど（ドイツ人）	182

4. 買物・道聞き

図 4-1	駅の売店で何を買うか	187
図 4-2	何がほしいかを店員に伝えるときどうするか	188
図 4-3	お金を払うときどうするか	188
図 4-4	店員はどういう売り方をするか	189
図 4-5	買い終えて売店を離れるときどうするか	190
図 4-6	ことばを発するかどうか（男女別）	191
図 4-7	ことばを発するかどうか（社会人・学生別）	191
図 4-8	万年筆が並んでいるケースに近づいたら	194
表 4-9	万年筆が並んでいるケースに近づいたら（日本人）	196
表 4-10	万年筆が並んでいるケースに近づいたら（ドイツ人）	196
表 4-11	店員への呼びかけの有無（日本人）	199
表 4-12	店員を呼ぶための言語形式（日本人）	199
表 4-13	店員に「相談する」段階を答えたか（日本人）	200
表 4-14	「呼びかけ」の有無と「相談」の有無（日本人）	200
表 4-15	「相談」の内容——特定・不特定——（日本人）	202
表 4-16	「呼びかけ」の有無と種類（ドイツ人）	205
表 4-17	「呼びかけ」「もちかけ」「要求・希望」の有無（ドイツ人）	205
表 4-18	「要求・希望」の種類——特定・不特定——（ドイツ人）	209
図 4-19	万年筆のケースに近づくと店員は	213
表 4-20	万年筆のケースに近づくと店員は（日本人）	213
表 4-21	万年筆のケースに近づくと店員は（ドイツ人）	214
表 4-22	客の「迎え入れ」表現（日本人）	216
表 4-23	客の「迎え入れ」と「質問」の有無（日本人）	216
表 4-24	「質問」の話題部分（日本人）	217
表 4-25	「質問」の述語部分（日本人）	218
表 4-26	「迎え入れ」+「初接触」の構文（ドイツ人）	224
図 4-27	ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは	229
表 4-28	ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは（日本人）	230
表 4-29	ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは（ドイツ人）	231
図 4-30	これはと思う万年筆が見つかったら，使い方を聞くか (1)	238

図 4-31	これだと思う万年筆がみつかったら、使い方を聞くか (2)	239
表 4-32	これだと思う万年筆がみつかったら、使い方を聞くか (日本人)	240
表 4-33	これだと思う万年筆がみつかったら、使い方を聞くか (ドイツ人)	241
図 4-34	万年筆を試すことはできるか	243
表 4-35	万年筆を試すことはできるか (日本人)	243
表 4-36	万年筆を試すことはできるか (ドイツ人)	244
図 4-37	試させてくれと要求するか	245
図 4-38	万年筆をどう指すか	248
表 4-39	購入希望申し出の前置き (日本人)	250
表 4-40	購入申し出の希望・要求表現(動詞) (日本人)	251
表 4-41	品物をうけとる客の感謝表現 (日本人)	260
表 4-42	品物をうけとる客の表現 (ドイツ人)	261
表 4-43	品物をうけとる客の感謝表現 (在日外国人)	263
表 4-44	客のみぶり「なし」の比率	266
表 4-45	客のみぶり (日本人)	267
表 4-46	客のみぶり (ドイツ人)	267
表 4-47	客のみぶり (在日外国人)	268
図 4-48	客のみぶり (日・独・在日外国人の比較)	269
表 4-49	品物を渡す店員の表現内容 (日本人)	271
表 4-50	品物を渡す店員の発話 ——「お待たせしました」と感謝表現—— (日本人)	272
表 4-51	店員の感謝表現 (日本人)	273
表 4-52	品物を渡す店員の表現内容 (ドイツ人)	275
表 4-53	店員のみぶり「なし」の比率	279
表 4-54	店員のみぶり (日本人)	280
表 4-55	店員のみぶり (ドイツ人)	281
表 4-56	店員のみぶり (在日外国人)	281
図 4-57	店員のみぶり (日・独・在日外国人の比較)	282
図 4-58	客と店員のみぶり	283
図 4-59	誰にたずねるか (社会人)	289
図 4-60	誰にたずねるか (学生)	289
図 4-61	道聞きのみぶり (社会人)	293
図 4-62	道聞きのみぶり (学生)	293
表 4-63	何と言ってたずねるか (ドイツ人)	297
図 4-64	礼のことは (ドイツ人)	299

5. 身体の空間的な位置・距離

表 5-1	「空間的位置・距離」の質問へのドイツ人回答者属性	307
図 5-2	出会ったとき —— A さん (疎・同性)	313
図 5-3	出会ったとき —— B さん (疎・異性)	314

(12) 図表目次

図5-4	出会ったとき——Cさん（親・同性）	315
図5-5	出会ったとき——Dさん（親・異性）	317
図5-6	出会ったときの「ほほえみ」	318
図5-7	出会ったときの「手をあげる」	318
図5-8	出会ったときの「会釈する」	319
図5-9	出会ったときの「おじぎ」	319
図5-10	出会ったときの、ドイツで目立つ行動（ドイツ人・全体）	320
表5-11	「近所の人」がAさんに想定された場合（日本人）	321
表5-12	会い方によるちがい（日本人・社会人）	322
図5-13	立ち話・距離——Aさん（疎・同性）	324
図5-14	立ち話・距離——Bさん（疎・異性）	325
図5-15	立ち話・距離——Cさん（親・同性）	326
図5-16	立ち話・距離——Dさん（親・異性）	327
図5-17	立ち話・距離の「握手のできない距離」	327
図5-18	立ち話・距離の「握手のできる距離」	328
図5-19	立ち話・距離の「相手の体に触れられる距離」	328
図5-20	立ち話の「距離得点」の比較	330
表5-21	立ち話の体の向き（ドイツ人・全体）	332
図5-22	歩くとき——Aさん（疎・同性）	334
図5-23	歩くとき——Bさん（疎・異性）	334
図5-24	歩くとき——Cさん（親・同性）	335
図5-25	歩くとき——Dさん（親・異性）	336
図5-26	歩くときの「肩が触れない距離」	337
図5-27	歩くときの「肩が触れ合う距離」	338
図5-28	歩くときの、ドイツで目立つ行動（ドイツ人・全体）	338
図5-29	歩くときの「距離得点」の比較	340
表5-30	観察調査——ベアの性別による集計	343
図5-31	観察調査——主な歩き方の年齢層別グラフ	344
図5-32	観察調査——「距離得点」	345
図5-33	レストランの座席（ドイツ人・全体）	347

1. 調査の意義・方法

1.1. 言語行動様式の対照研究について

1.1.1. 言語行動とは何か

国立国語研究所の報告書で、言語行動を広い意味で主題とするのは本報告が最初である。そこで、まず「言語行動」をどのように考えているか、ということについて述べておくことにする。

「言語行動」はコトの概念である。コトであるならば、これまでも「言語生活」「文字生活」といったものを主題とする報告書は出ているが、「言語行動」はこれよりは広い概念である。

「言語行動」に似た用語としては「言語運用」「言語行為」「言語活動」がある。

このうち「言語運用」や「言語行為」は個人的、あるいは個別的なもので、社会との結びつきは弱い。「言語運用」の方は特に「言語技術」的な感じが強くする。

「言語活動」は「言語行動」に近いと思われるが、この語はソシユール学でいう langage の訳語として固定しすぎている感があるので使わない方がいいであろう。また「活動」という語を使うと非常に積極的な意味が強く出すぎるので「行動」の方がいいと思われる。

「言語行動」はコトの概念であるから、極めて具体的な営みである。この具体的な場面において、ある言語形式、あるいは言語記号が選択され使用されて、それによって起こる伝達行動をいうと考えていい。

「選択」ということを上で述べたが、「選択」である以上、「不選択」という

2 1. 調査の意義・方法

こと、あるいはゼロの選択ということも当然あるのである。これは「非言語行動」と呼ばれることがあるが、「言語行動」との対比によって意味を持つものであり、当然これをも含めて「言語行動」としなければならない。特に、ここで扱っているような国際比較においては、ゼロの「言語行動」は重要である。

以上のように考えると、言語音的音波が観察されないとしても、これも「言語行動」とすべきである。こうしてみると、「言語行動」は、言語の有無にかかわらず言語的観点からした「人間行動」である。このように言語音的音波の有無を問わないのであるから、もう一歩進めて、視覚的に見たときの行動の有無も問わないこととなろう。こうしたときは、非常に広くなるが、人間の存在する限り「言語行動」はあることになる。

このように広く考えると、「言語行動」は「言語生活」と同じとも考えられる。「言語生活」という語は、言語を人間生活の一形態と考える広汎な立場に立つものである。「生活」という語は、「生活する」とも言うからコトの概念ではあるが、意識するとしないうにかかわらず人間の伝達行動であるというように考えるならば、その行動という語をとって「言語行動」といった方が適当であろう。

なお、言語行動はその時々によってプラス、あるいはゼロとして具現化する。その時々がある一定の時間において集積されたものが「言語生活」であるとも考えられる。この故に「言語生活」は「言語行動」よりもモノ寄りのものと捉えられるのである。

「言語行動」を以上のように規定したが、「言語行動」の研究は、ソシユール学の用語で言えば、ラングの研究ではなく、パロールの研究ということになる。パロールというコトは、それが現存したという事実を否定することができない。「言語行動」に関する研究はこの事実を出発点とする。これに対してラングというモノは、パロールのよって立つモノには違いないが、具体性ということになると極めて漠としたものである。それだけに学問の対象としてはあやふやであり、確乎としたものではない。学としての優位はこうに考えるならばパロールの学の方にある。

かくして、現在の言語形式に関する記述は具体性を欠くものであることが多

い。この記述には作例が使われることもあるが、これは好ましくない。特にその作例を文法的文と非文法的文とに分けるのは理由がない。非文法的文であろうとも、その文がパロールの面において実在したならば、これは事実として重要視しなければならない。実在したものを非文法的の名のもとに消し去るのは不遜である。多くの文法面の変化は、その第一歩はこの人たちの言う「非文法的文」であったはずである。これを抹殺することは言語変化の研究を放棄するものである。

1.1.2. 言語行動の様式にはどんなものがあるか

以上のように「言語行動」を規定することとすると、このいろいろの言語行動をいろいろな視点から類別していったとき、ある定型性が認められることになる。この認められた型を「言語行動様式」というのである。

様式については、その構成要素は、いくつかの試案が出ている。

そのうちの一つに D. ハイムズのものがある。ハイムズは、要素を1968年には、1. addresser 発信者, 2. addressee 受信者, 3. message 発信形式, 4. context 内容事物, 5. code 言語体系, 6. contact 接触, 7. setting 場所・状況, の七つに分け、さらにこれに改良を加えて1972年には16の要素に分けた。J. V. ニューストプニーはこれを八つに大別して、次のように「言語行動のモデル」(講座『言語』第3巻「言語と行動」所収, 1979) で紹介している。

- | | |
|---------------------|---|
| a. アクト act | 1. メッセージの形 |
| | 2. メッセージの内容 |
| b. 状況 situation | 3. ^{セッティング} 場面 |
| | 4. ^{シーン} 場 |
| c. 参加者 participants | 5. 話し手あるいは ^{センドー} 発信者 |
| | 6. アドレッサー |
| | 7. 聞き手あるいは ^{リシーバー} 受信者, あるいは ^{オーディエンス} 聴取者／
読者 |
| | 8. アドレッシー |

4 1. 調査の意義・方法

- | | |
|-------------------------|-----------------------------------|
| d. 目当て ends | 9. 結果 outcomes |
| | 10. 目的 goals |
| e. 調子 key | 11. 調子 key |
| f. 道具 instrumentalities | 12. チャンネル channels |
| | 13. ことばの形 forms of speech |
| g. 規範 norms | 14. 行動の規範 norms of interaction |
| | 15. 解釈の規範 norms of interpretation |
| h. ジャンル genres | 16. ジャンル genres |

林大は『日・仏語の対照言語学的研究 論集』の中の「言語行動の国際比較のために」で、言語行動の要素を次のような6項目にまとめている。

1. 動機, 目的, 内容及び発話意志の決定
2. 場面, 環境条件
3. 主体が意志を決定し, 形式を選ぶ条件
4. 選ばれる形式
 - a. メディア
 - b. 主語形式
 - c. 身体表現形式
 - d. 挙動・姿勢・態度

5. 実行の展開・経過

6. 効果・影響・評価

さらに、言語行動を変える意識についても次の六つをあげている。

1. 言語また言語行動を意識すること
2. ことばと文字との関係
3. 場面適応
4. 共同意識
5. 規範
6. 評価

以上のようないわゆる“モデル”にはいくつかの欠点がある。ネウストプニ一の指摘は数点あるが、そのうちの最も大きな点は、これらが根本的には生成

的ではない、という点であるとする。この意見は非常にもったもなものであるが、ネウストプニーのあげていない点としては次のことがあると考える。

すなわち、これらは要素をばらばらに分けたものであって、これには総合的なものが考慮されていない。言語行動は全人間的な全体行動であるのに、これを総合する手続きへの言及がないのである。総合する際には当然それぞれの要素のウェイトが考慮されなければならない。また、ウェイトを量るためには、一つには頻度などをも調べなければならない。しかし、これらに着手するにはまだ要素自身のモデルも不完全である。

このわれわれの研究のグループの中にも、先に述べた林のもののほか、江川、杉戸など、モデルを提示したものもあるが、この研究が発足するに当たって、グループの間で共通の認識とするようなモデルは立てなかったので、ここではこれについては提示しないこととする。まず実践から出発するのがわれわれの基本的な姿勢である。

1.1.3. 言語行動と場面

言語行動は具体的な場面において行われるものである。いわゆる「場面論」があるべきである。場面は、場所および時間に分けることができる。言語行動の環境としての時空に関するものである。われわれの定義では、外見的には行われないものをも、この「行われる」というときには含むのである。

したがって言語行動を記述するためには、まずその具体的な場面を洗い出しておくことが望ましい。しかし、この場面はグループごとに違うのではないか、と思われる。このグループは大きくなればなるほど共通の部分が少なくなつて、それだけ得られた場面表の具体性は弱くなると考えられる。そこで、グループはなるべく小さなものとする必要が一方ではあるが、また他方、小さいものであればその価値はそれに伴って低くなるであろう。このあたりに適当な大きさのグループの直面する場面を出発点とすべきことが示されている。日本人の言語行動場面というようなものは、いわゆるラングとしての日本語を考えるのと同様、漠とした実態を伴わないものとなるであろう。

例えば、「外国人の日本語能力に関する調査研究協力者会議」は、1982年に『外国人留学生の日本語能力の標準と測定（試案）』をまとめ、その中で、日本の大学（教養課程）で勉強しようとする留学生の直面すると思われる場面を洗い出し、その場面で行われる言語行動の種類を大学での聴講およびそれに付随した行動、並びに日常の基本的な生活維持のための行動を表示した。この言語行動は、外見的な言語行動を主体としているが、少なくともこの程度のグループについて考えるべきであろうと思う。留学生にもいろいろの種類があるので、留生一般についての場面表を作るともう少し漠然とし、具体性が失われるであろう。

一例として留学生のうちのある部分に関して今考えたのであるが、このように場面をどこでとるか、というところから始めて、その場面における言語行動を考えるべきである。にもかかわらず、今回は、この手続きを経ないで個々のケースについての考察および調査に入った。これはこの調査が、最初のものであり、日本人とドイツ人との言語行動の比較という、漠とした広い範囲のものを出発の時は考えていたからである。

ある人間、あるいはある集団（社会）ごとにその直面する場面が違い、また同じ名目の場面であっても全生活に対するウエイトが違う。したがって、そこにおける言語行動も大きく違はずである。この意味において、場面およびそこでの言語行動は非常に社会言語学的であるといつてよかろう。これらは行動の面で捉えられるものであるから、いわばパロール的であり、したがって社会言語学的なものである。

1.1.4. 異文化間の言語行動研究

ある一つの文化の中だけの言語行動研究だけでも、まだ始まったばかりであるが、早くも先に述べたいろいろな問題点が出て来ている。異文化間では一層これが複雑になる。

まず、場面とそこでの言語行動を比較すべき集団は本来は同じものでなければ厳密には比較できないのである。その集団およびそこでの言語行動のウエイトまで同一であることは考えられない。しかし同一ではないとき、比較が可能

であるかどうかの問題が生じる。一般には、国際比較をする以上、そこまでの純粋性には眼をつぶるべきであろう。

場面の比較の場合、例えば、第4章で取り上げるキオスクのようなものでは、そのある場所が、同じキオスクでも、違っていることがある。さらに同じキオスクでも、新聞を買う場合に、日本では一般紙のいわゆる宅配が発達しているが、そのような社会と、そうでない社会とではそこに立ち寄る意味ないしウエイトが相当違うということになる。

以上のような制限つきではあるが、比較をしようということになると、言語行動が現れない場合、さらに言語行動、人間行動そのものが現れない場合をも当然記述しなければならない。これらのある文化との対比において、ないことの意味が出てきて、これが無視できない力を持つことになるからである。

言語行動をあまりに広く考えすぎる、という批判が、上に述べた言語行動の定義の考え方に対してあるのであるが、これを広くとるということは、異文化間の研究にとって大いに必要だからである。一つの文化における言語行動が、他の文化における言語行動に対当するとはいつも定めがたい。一方が言語的ではない行動で示される場合もあるから、当然ここまで拡げて考えなければならないことになる。第3章「あいさつ行動」では、このようなことの基礎的な資料が得られるであろう。この場合、主として日本とドイツとを比較しているのであるが、もっと多くの社会を対象とすれば、ゼロの言語行動が対当する例はもっと多くなるであろう。

第4章では、上述のキオスクのほか、万年筆買いや道聞きについても触れることにしている。これらについても、相手に話しかける頻度というものが、国民によって違うということが、その問いかけの言語形式の比較の前にまずあるであろう。

第5章で取り上げる空間的距離については、先行の研究がいろいろあるのに、われわれはさらに一つを加えるわけである。あいさつなどについては国際比較の場合、さらに時間的な関係も考えられるところである。何時までが朝のあいさつであり、何時からが「おやすみなさい」となるかということがその一つであり、さらに、どのくらいの時間的隔たりがあるとき、「久しぶり」となるのか

8 1. 調査の意義・方法

も問題になる。ある日のご馳走についての謝辞は、いつまで言い得るのか、あるいは言うべきなのかについての国民あるいは民族の間の違いは有名である。

以上のように、異文化間の言語行動研究についてはこれからの研究に残されたことは非常に多いのである。

1.2. 研究の発端

この研究の由来について、簡単に述べておくこととする。

1957年に日本国とドイツ連邦共和国との間に「日独文化協定」が結ばれた。その中で、両国が共同して行う研究課題の一つとして、日本語とドイツ語との相互対照的研究があげられている。これについて、ドイツ側では、マンハイムのドイツ語研究所で早く独自に研究が始められ、ドイツ側研究の必要のために日本人の日本語研究者が招かれ、また在独の日本人ドイツ語研究者が参加していたのであるが、日本側としては、かの研究所に提携共同すべき主体が定まらなかった。その間、ドイツ側からは日本政府にたびたび公式の要請があったようであるが、実現しないで数年を経過した。

1974年に日本語教育部（76年日本語教育センター）を新たに設けた国立国語研究所は、その任務に諸外国語との対照的研究を掲げている。担当すべき人員が十分でない実情ではあるが、ドイツ語研究所からの接触によって、国語研究所が日本における研究の担当者となる考えを固め、文化庁および文部省学術国際局の助言を得て、1977年4月、国立国語研究所長（林大）とドイツ連邦共和国ドイツ語研究所長（ゲアハルト・シュティッケル氏）との間で、「日独語の対照言語学的研究に関する共同研究についての合意書」をとりかわした。

この合意書は、両研究所に共通の研究題目を「日独語の対照言語学的研究 (Deutsch-Japanische Kontrastive Grammatik)」とするとともに、共同研究の意義および目的として、それぞれの研究所が、研究成果をたがいに提供することによって共同研究を効果的に推進し、ドイツ語話者のための日本語教育、および日本語話者のためのドイツ語教育に対して、言語学的な基礎を確立するということを掲げた。研究者の派遣、シンポジウムの開催、成果の発表等につ

いての取り決めはここに省略するが、その研究の内容と分担は、次のように定められた。

- (1) 国立国語研究所は、①語彙を中心とした「基本的な語彙の意味・用法に関する対照言語学的研究」、②言語行動を中心とした「日独語各話者の言語行動様式に関する対照的研究」の二つを具体的研究テーマとして分担する。
- (2) ドイツ語研究所は、主として「シンタックス」を研究テーマとして分担する。
- (3) 両研究所は、それぞれのテーマを分担すると同時に、他方の分担する研究にも積極的に参加する。

本書に報告するのは、すなわち上の(1)②のテーマによる研究の結果であるが、この研究のため国語研究所では、日本語教育センターのほか、言語行動研究部の研究員が参加し、研究チームを作って協同した。

この研究のドイツにおける実施については、国語研究所にはもともと海外渡航費等の予算の計上はなかった。しかし、文部省、文化庁の配慮によって、幸いに日本学術振興会から、国際共同研究として1977年から3年にわたってチーム派遣のために外国旅費の援助を受け、一方、1977、78両年度にわたって文部省在外研究員として主任研究官の一人をドイツ語研究所に出張させることができた。

実際の研究調査の経過については、本書の1.3.3.に述べられることであるが、マンハイムにおいてドイツ側研究者諸氏の懇切な協力を受け、シュティッケル所長をはじめドイツ語研究所から多大の便宜を与えられたことをここにも記しておく。ドイツ語研究所側の日本語研究班は、1980年に残念ながら解散したので、われわれとの共同研究は今日打ち切られている。

なおドイツ語研究所側の研究成果は、Gerhard Stickel, Tohru Kaneko 編 „Deutsch und Japanisch im Kontrast “ (Julius Groos, Heidelberg) と題する4巻からなる報告書として1983年から出版が始まり、現在1巻と2巻とが既に刊行されている。

1.3. 研究方法・実施

1.3.1 調査の構成

この研究は、1.1.および1.2.で述べた経緯や目的に沿って企画・立案されたもので、具体的目標としては次の点を明らかにすることにある。つまり、日本人とドイツ人のそれぞれが実際の言語生活場面で営む言語行動（非言語行動を含む）の実態を記述・対照することにより、両国語話者間の言語行動様式の差異を探究することにある。そこで、われわれは、両国語話者が日常経験すると思われる具体的な言語場面のうちからいくつかを取り上げて、日独語各話者がそれぞれの場面で、どのような言語行動をとるかを明らかにするために、留置式のアンケート調査を中心に、一部の観察その他の調査を行った。

調査は、下記に示すように、西ドイツ国と日本国内で、ドイツ人、日本人および在日外国人を対象として行った。

		アンケート調査		観察その他
調 査 国	対 象	使用言語	実施年度	調査年度
西ドイツ	ド イ ツ 人	ドイツ語	1978 年度	1977～79 年度
日 本	日 本 人	日 本 語	1979～80 年度	1981 年度
	在日外国人	英 語	1980～81 年度	—

日本人およびドイツ人を対象とする調査は、この研究の当初の目的また本書の題目からしても、当然のことであるが、在日外国人調査を加えた理由をひとこと付言しておこう。

在日外国人調査の第1の目的は、日本人の言語行動様式の特徴を知るための一つの手がかりを得るためである。これは、日本人調査の結果をドイツ国内のドイツ人のそれと比較対照することによっても明らかにしうるが、これとは別に、日常、日本人と接している在日外国人の眼に写る日本人の言語行動の姿を

知ることによってより一層明確にしうる。つまり、日本人同士では当然のこととして見逃されてしまう行動のうちにも、外国人から見れば意外な行動様式と目される部分が少なくなかろうと考えたからである。第2の理由は、この研究の主対象としての日独両国人とは異なって、異文化社会での生活者である在日外国人の言語行動様式、とくに異文化適応の様相の一端を探りたいがためである——同じ意味で在独外国人、在独日本人を対象とする調査を試みたが、残念ながら分析に堪えるだけの資料は得られなかった。

したがって、日独両国人用の調査票は一部を除いて並行的な関係になっているのに対して、在日外国人用のそれはかなりの面で異なった構成になっている。なお、各種調査票のうち、日本人用アンケート票については巻末に示したが、他のものについては紙面の制約上割愛せざるをえなかった。個々の具体的な項目内容については第2章以降の分析結果の項を参照されたい。

1.3.2 担当者・協力者

この研究は、国立国語研究所の日本語教育センターと言語行動研究部が共同して実施してきたものである。以下、研究段階ごとの担当者を記す——所属はいずれも実施当時のもの。

(1) 調査企画・実施

調査は、1977年より5か年にわたって実施されたが、その間、下記の2機関からの研究助成金を得ている。

(イ) 日本学術振興会国際共同研究助成金(1977~79年度)による調査研究——研究課題名:日独語の対照言語学的研究(総額9,565千円)

この調査研究は、1.2.で述べたように、国立国語研究所と西ドイツ国のドイツ語研究所とが、それぞれの下位課題を分担しながら行ったものである。両研究所の担当者は次の通りである。

〔国立国語研究所〕 林大^{*}(所長, 研究代表者), 野元菊雄^{*}, 水谷修, 高田誠, 志部昭平^{*}, 日向茂男^{*}, 田中望^{*}, 石井久雄^{*}(以上, 日本語教育センター), 渡辺友

左, 江川清^{*}, 米田正人^{*}, 杉戸清樹^{*} (以上, 言語行動研究部)

〔ドイツ語研究所〕 ゲアハルト・シュティッケル (所長, 西ドイツ側代表者), 金子亨 (千葉大学教授, 研究グループ責任者), イエンス・リックマイヤー, ルドルフ・シュルテペルクム, 本田義昭 (九州大学大学院生), ユッタ・キューナスト, ヨプスト・マティアス・シュパンナーゲル, クラウス・フォルダビュルベッケ, ピエール・ブルスタン

なお, この調査を実施するに当たって, 国立国語研究所側の担当者のうち, 高田が長期間(1977~78年度), 林以下*印を付した8名が短期間, それぞれ渡独した。また, ドイツ語研究所側からは, リックマイヤー(1977~79年度), ブールスタン(1978年)の両氏が, 国立国語研究所に滞在して, この研究に協力した。

(ロ) 文部省科学研究費補助金一般研究(B)(1980~81年度)による調査研究——研究課題名: 日本人の言語行動様式に関する比較対照的研究(総額2,800千円)

これは, (イ)で行った西ドイツ国内での言語調査結果との比較対照を目標として, 日本国内数地点で行った調査研究であり, この調査には, 前記(イ)のメンバーのうち, 次の8名が当たった。

分担者: 江川清(研究代表者, 言語行動研究部), 高田誠, 日向茂男, 志部昭平, 田中望, 石井久雄(以上, 日本語教育センター), 米田正人, 杉戸清樹(以上, 言語行動研究部)。

なお, (イ)および(ロ)の調査を実施するに際して, 西ドイツ国内および日本国内で, 多数の機関および関係者のご協力を得ている(機関名は1.3.4.参照)。関係者各位に深く感謝する。

(2) 調査資料の整理

調査資料全般の整理には, 上記(1)の(ロ)で挙げた8名(とりわけ, 米田正人・杉戸清樹の両名)が分担して当たり, これを日本語教育センター研究補助員の早田(旧姓高野)美智子と言語行動研究部研究補助員の塚田実知代・磯部よし子が助けた。また, 臨時の手伝いとして, 阿左美厚子, 伊能敦子, 熊

野京子、鈴木令子、野田羊子、備前徹、深井えり子、虫明茂などが、資料の整理その他の作業に従事した。

(3) 本書の執筆者(執筆順)

野元菊雄(所長)

林 大(名誉所員, 前所長)

江川 清(言語行動研究部第二研究室長)

高田 誠(日本語教育センター第一研究室長)

田中 望(日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室長)

石井久雄(日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室員)

米田正人(言語行動研究部第二研究室員)

志部昭平(日本語教育センター第一研究室主任研究官)

日向茂男(日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室長)

杉戸清樹(言語行動研究部第一研究室員)

1.3.3. 調査の経過

この調査研究は、1977年度からの5か年にかけて、西ドイツおよび日本国内で、ドイツ人、日本人および在日外国人を対象として行ってきたものである。以下、その概略を年度ごとに示しておく。

(1) 1977年度(予備的研究)

研究全体の第1年次として、次年度以降の本調査に備えて、以下の予備的調査作業を行った。

(イ) 準備的研究——日本人とドイツ人(を含む欧米人)の言語行動様式の相違、そこから生じた諸種の誤解あるいはコミュニケーション上の障害などに触れた各種文献資料を収集整理し、調査項目の第1次素案を作成した。

(ロ) 言語行動様式項目一覧の検討——11月から12月にかけて林、江川、志部の3名が渡独し、(イ)で得た素案についてドイツ語研究所員および在独日本人

とともに検討し、ドイツ人の言語行動様式の総体にわたる項目一覧を修正増補した。

(ハ)ドイツ人の言語行動の観察調査——(ロ)の作業と並行して、買物・レストラン・公園・家庭などにおける、ドイツ人同士あるいはドイツ人と日本人との間における言語行動の客観的な観察記録を試みた。

(2) 1978 年度 (西ドイツ国内本調査)

(イ)ドイツ国内調査票の作成——前年度の成果を踏まえ、ドイツ人の言語生活・言語意識・言語行動(非言語行動を含む)などに関する調査項目の選定と調査票原案の作成を行った。

(ロ)アンケート調査——9月から10月にかけて野元、日向、米田、杉戸の4名が渡独し、ドイツ語研究所員の助言を受けて(イ)で得られた調査票原案の修正を行った上で、マンハイム市その他の学生、市民、研究者などを対象にアンケート調査を実施した。なお、被調査者数および属性別の人数については、1.3.4を参照されたい。

(ハ)観察記録調査——上記アンケートで質問した事項のうち、買物・道聞き・あいさつなど、いくつかの場面におけるドイツ人の言語行動の実際を録音・録画などによって記録した。

(3) 1979 年度 (西ドイツでの補充調査および日本国内調査の開始)

(イ)補足・検証調査——前年度のアンケート調査のうち、あいさつ行動など具体的な言語表現を尋ねたものについて、ひとつひとつの回答表現形式の分類およびドイツ語としての正しい度の判定作業を行った。このため、9月から10月にかけて高田、杉戸、石井の3名が渡独し、ドイツ語研究所の社会言語学者数名と討論を重ねた。なお、少人数ではあるが在独日本人に対するアンケート調査を並行的に行った。

(ロ)観察調査——前年度までのものに引き続きドイツ人の行動様式およびドイツ人の言語生活に関する観察調査を実施した。とくに、この年は、第5章で報告する、ドイツ人の空間的距離に関する観察調査に重点を置いた。

(ハ)日本人調査——前年度に得られたドイツ人に対するアンケート調査資料と比較対照するために、ほぼ同内容の日本人向け調査票を作成し、次年度以降の調査の先駆けとして八王子市役所職員に対する調査を実施した。

(4) 1980 年度（日本人調査および在日外国人調査）

(イ)日本人調査——前年度の（ハ）で作成・一部実施した調査を、関東・中部・関西その他の市役所職員および学生に対して実施した。調査票については巻末付表、また被調査者数については1.3.4.を参照されたい。

(ロ)在日外国人用調査票の作成——在日外国人（とくに、英語を母国語とする人々）が日本語・日本人とどのように接触し、かつ日本人の言語行動をどのようにみているかを調べるために、英語による調査票を作成した。

(ハ)在日外国人調査——上記（ロ）で得られた調査票を、関東、中部、関西、中国、北海道の日本語教育機関の外国人教員・父兄および留学生ならびに在日大使館職員その他に配布し回収した。なお、被調査者数については1.3.4.を参照されたい。

(5) 1981 年度（国内の補充調査）

(イ)キオスクでの買物調査——アンケート調査項目のうち、キオスクでの買物の場面の結果を検証するために、いくつかの店舗で実際場面の観察調査を行った。

(ロ)在日外国人の補充調査——前年度に引き続き、在日外国人に対するアンケート調査を行った。

1.3.4. 被調査者

今まで述べてきたように、この研究では、ドイツ人、日本人および在日外国人のそれぞれに対する留置式のアンケート調査を主として行っている。各対象群の被調査者の選定に関してはサンプリングによることが望ましいわけであるが、外国での実行の困難性と費用の制約などの点から、伝手を求めての配布・

回収によらざるをえなかった。そのため、各対象群の被調査者は、市役所その他の機関に所属する社会人と学生とが大半を占めることになった。

以下、ドイツ人、日本人、在日外国人の順に、得られた被調査者の性格を述べる。

(1) ドイツ人調査

調査は、1978 年秋に、西ドイツ国内数都市で行われ、下記の諸層から総計 336 名の回答が得られている（各層の後の数字は得られたサンプル数）。

マンハイム …… マンハイム市役所職員 152, ドイツ語研究所員 13, 一般市民 41, マンハイム大学学生 44。

ハイデルベルク …… 一般市民 5, ハイデルベルク大学学生 28。

ボン …… ボン大学教職員 12, 同大学学生 7。

ケルン …… ケルン大学教職員ほか 27, 同大学学生 7。

この 336 票を点検したところ、ドイツ人以外の者の回答が 8 票、ドイツ国籍者中、性・年齢・母国語のいずれか一つ以上に無回答であったものが 5 票含まれていた。そこで、この 13 票を除いた 323 票を以降の分析対象とすることとした。なお、有効全サンプルの属性別の内訳については（4）でまとめて示す。

(2) 日本人調査

調査は、1979～80 年度にかけて、国内数地区で行われ、1,323 票の回答を得た。その内訳は次のとおりである。

関東地区 …… 八王子市役所一般職員 147, 国立国語研究所職員ほか 81, 一般市民 8, 中央大学学生 71。

中部地区 …… 名古屋市役所一般職員 120, 同現業職員 24, 一般市民 72, 名古屋大学学生 170, 椙山女学園大学学生 148。

関西地区 …… 奈良市役所一般職員 100, 豊中市役所一般職員 161, 同現業職員 12, 関西大学学生 101, 神戸大学学生 108。

これらのうち、われわれは分析対象として、各大学の学生と各市役所一般職員を選んだ——社会人資料中、市役所一般職員外のを除外したのはできる

だけ均質な資料を得たいがためである。なお、ドイツ人調査の場合と同様に、重要な被調査者属性に対する無回答票を除いたことは言うまでもない。

最終的に得られたサンプルの所属機関別の内訳は表1-1、表1-2のとおりである。

表1-1 市役所職員（社会人）の所属別分布 (3) 在日外国人調査

	男	女	計
全 体	449(87.9)	62(12.1)	511
八王子市役所	121(84.6)	22(15.4)	143
名古屋市役所	94(78.3)	26(21.7)	120
奈良市役所	92(97.9)	2(2.1)	94
豊中市役所	142(92.2)	12(7.8)	154

調査は、1980～81年度にかけて、下記の527名を対象に行われた(機関内の社会人、学生の内数は省略)。

表1-2 学生の所属別分布

	男	女	計
全 体	284(48.4)	303(51.6)	587
中央大学	42(60.0)	28(40.0)	70
名古屋大学	125(75.3)	41(24.7)	166
椋山女学園大学	—	148(100.0)	148
関西大学	95(100.0)	—	95
神戸大学	22(20.4)	86(79.6)	108

関東地区……アメリカ大使館員7、カナダ大使館員21、アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター職員5、言語文化研究所附属東京日本語学校21、国際基督教大学56、国際交流基金14、国際聖マリア学園3、サンモール・インターナショナル・スクール4、聖

心インターナショナル・スクール5、聖ヨセフ日本語学院11、西町インターナショナル・スクール10、米国国務省日本語研修所15、横浜インターナショナル・スクール2、早稲田大学42。

中部地区……名古屋国際学園11、南山大学48。

関西地区……大阪大学22、関西外国語大学53、近畿大学49、同志社大学29。

その他……北海道大学37、広島大学12。

以上の527名中、無効回答者を除くと、487名が残った。その母語(mother tongue)別の分布をみると表1-3のようになっている。

われわれが得たサンプルの限りでは、母語別の在日外国人の割合は、英語79%、中国語9%、その他12%となっており、英語話者が圧倒的多数を占めている。そこで、資料の均質性を保つために被調査者をもう一段絞って、以降はと

表 1-3 在日外国人の母語別分布

	社 会 人	学 生	計
全 体	241(49.5)	246(50.5)	487
英 語	205(53.4)	179(46.6)	384
中 国 語	3(6.7)	42(93.3)	45
そ の 他	33(56.9)	25(43.1)	58

この 384 名の国籍をみると表 1-4 のようになる。

表 1-4 在日外国人（英語話者）の国籍別分布

	アメリカ	イギリス	カナダ	オーストラリア	二重国籍	そ の 他	計
全 体	303(78.9)	30(7.8)	27(7.0)	11(2.9)	12(3.1)	7(1.8)	384
社会人	148(72.2)	19(9.3)	24(11.7)	6(2.9)	4(2.0)	4(2.0)	205
学 生	155(86.6)	11(6.1)	3(1.7)	5(2.8)	8(4.5)	3(1.7)	179

なお、表 1-3 で母語「その他」の 58 名のうち、6 名は二つ以上の言語を母語とする二重言語話者（バイリンガル）である。他はフランス語 7 名、ドイツ語 6 名、韓国語 4 名のほか、東南アジアの諸言語その他（いずれも 3 名以下）が占めている。

（4）三つの調査対象者の比較

以上、ドイツ人・日本人・在日外国人のそれぞれの調査対象について概略述べてきたが、この 3 対象群の被調査者の属性別相違点をみつつ、第 2 章以降の図表を見るときに留意点を示しておこう。

表 1-5 は、各群の社会人・学生別の性別分布を示したものである。

細かい説明は省くが、日本の社会人の性別分布が他とは著しく片寄っていることに注意されたい。とくに、以降の各章で、

表 1-5 被調査者各層の性別分布

		男	女	全体
社会人	日 本 人	449(87.9)	62(12.1)	511
	ド イ ツ 人	107(49.1)	111(50.9)	218
	在日外国人	120(58.5)	85(41.5)	205
学 生	日 本 人	284(48.4)	303(51.6)	587
	ド イ ツ 人	45(42.9)	60(57.1)	105
	在日外国人	83(46.4)	96(53.6)	179

くに断らない限り、「在日外国人」を英語話者に限定して処理することにした。以降の分析対象としての在日外国人の数は、社会人 205 名、学生 179 名、総計 384 名ということになる。

社会人全体において日本人・ドイツ人・在日外国人（以下、「日独英」と略す）を比較する場合、たとえ日本人と他とで数値に差があったとしても、それだけからでは日本人が他と異なると早断することは甚だ危険である——とりわけ男女差の大きい事項においては。

これは、単に数値の見方の問題にすぎないが、「社会人」の比較資料を見るに当たって次の点に留意する必要がある。つまり、この調査でいう「社会人」は、(1)～(3)で直接また間接に示してきたことだが、日独英でサンプルの性格が異なっているのである。それぞれの社会人の内容は、

日 本 人 …… 全員が市役所職員

ド イ ツ 人 …… 市役所職員 60 %, 研究職・専門職 25 %, その他 15 %

在日外国人 …… 日本語教育関係者 55 %, 大使館員・宣教師 29 %,

その他 16 %

となっている。職業階層という点では、日独はある程度似ているといえないこともないが、英は他とは著しく性格を異にしているわけである。日独と英とで調査結果、とくに言語意識等で異なる場合は、まずこの点を考慮する必要があるといえよう。

表 1-6 被調査者各層の平均年齢

		男		女		全 体	
		平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差
社会人	日 本 人	34.64	8.333	28.60	7.598	33.96	8.480
	ドイツ人	38.69	11.900	34.44	12.677	36.53	12.484
	在日外国人	35.13	10.446	33.68	9.775	34.53	10.198
学 生	日 本 人	20.40	2.680	19.79	1.348	20.08	2.123
	ドイツ人	23.60	2.736	21.70	2.716	22.51	2.882
	在日外国人	22.82	4.695	21.91	3.018	22.33	3.913

次に、各層の被調査者の平均年齢を表 1-6 にみてみよう。

まず学生についてみよう。平均年齢では、日本に比べて、独英の学生は男女ともに 2 歳程度高くなっている。日本人とドイツ人との平均年齢の差にはいろいろの理由があろうが、最大の理由は学校制度の違いにあるとみられる。つまり、日本では小学校の段階から数えて 12 年の教育期間を経て大学に進学するわ

けであるが、ドイツでは、通常、小学校基礎課程4年、ギムナジウム(Gymnasium)9年の計13年間の教育後に大学等の高等教育機関に入るわけである。しかも、原則としてギムナジウム修了後もアビトゥーア(Abitur=大学入学資格試験)に合格しないと、大学へ進学できないのである。このあたりに、日独の大学生で平均年齢に差異が生じた一つの事情があるといえよう。

在日外国人の場合はまた別の事情がある。在日外国人の場合、学生といってもその大部分は大学あるいは各地の日本語教育機関に在籍する留学生である。この中には高校段階から直接日本の大学に入学する者もあるが、本国等で高等教育課程を終えた後に留学してくる者が多い。したがって、平均年齢は高くなるとともに、留学生間の年齢のバラツキも大きくなるわけである(表中の標準偏差はこのことを示している)。

以上のように、同じ「学生」といっても日独英ではその性格が異なるのである。以降の章で示される図表を見る場合、この点に留意されたい。

表1-6に戻って、社会人の欄をみよう。

ここでも、日本人は他と比べて男女ともに平均年齢が低くなっている。とくに、女の場合は他の群よりも平均年齢で5歳以上も若い。次に、各群の10歳きざみの年齢階級別の人数を表1-7に掲げる。

各群の年代別の被調査者の割合はそれぞれで相当異なっているが、女は20代に、男はドイツ人以外は20・30代にピークがあることで一致している。そこで、

表1-7 社会人の年齢階級別分布 (1)

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
日 本 人	全 体	1(0.2)	194(38.0)	187(36.6)	98(19.2)	30(5.9)	1(0.2)	511
	男	—	151(33.6)	176(39.2)	92(20.5)	29(6.5)	1(0.2)	449
	女	1(1.6)	43(69.4)	11(17.7)	6(9.7)	1(1.6)	—	62
ド イ ッ シ 人	全 体	4(1.8)	84(38.5)	44(20.2)	42(19.3)	37(17.0)	11(5.0)	218
	男	—	34(31.8)	24(22.4)	25(23.4)	22(20.6)	2(1.9)	107
	女	4(3.6)	50(45.0)	20(18.0)	17(15.3)	15(13.5)	9(8.1)	111
在 日 外 国 人	全 体	1(0.5)	78(38.0)	74(36.1)	27(13.2)	21(10.2)	4(2.0)	205
	男	1(0.8)	44(36.7)	44(36.7)	14(11.7)	15(12.5)	2(1.7)	120
	女	—	34(40.0)	30(35.3)	13(15.3)	6(7.1)	2(2.4)	85

表 1-8 社会人の年齢階級別分布 (2)

		20代以下			30 代			40代以上			計
		人数	%	平均年齢	人数	%	平均年齢	人数	%	平均年齢	
日 本 人	全 体	195	(38.2)	26.05	187	(36.6)	33.78	129	(25.2)	45.98	511
	男	151	(33.6)	26.48	176	(39.2)	33.74	122	(27.2)	46.02	449
	女	44	(71.0)	24.55	11	(17.7)	34.27	7	(11.3)	45.14	62
ド イ ツ 人	全 体	88	(40.4)	24.40	44	(20.2)	34.48	86	(39.4)	49.99	218
	男	34	(31.8)	25.44	24	(22.4)	34.75	49	(45.8)	49.82	107
	女	54	(48.6)	23.74	20	(18.0)	34.15	37	(33.3)	50.22	111
在 日 外 国 人	全 体	79	(38.5)	25.65	74	(36.1)	33.77	52	(25.4)	49.12	205
	男	45	(37.5)	26.09	44	(36.7)	33.68	31	(25.8)	50.32	120
	女	34	(40.0)	25.06	30	(35.3)	33.90	21	(24.7)	47.33	85

以降の年齢別の分析では、「20代以下」「30代」「40代以上」の3階級に区分することにする。表1-8に、この区分による各層の被調査者の割合と各階級ごとの平均年齢を示しておく。ちなみに、日本の社会人の市役所ごとの年齢階級別

表 1-9 市役所（日本）別の年齢階級別分布

		20代以下	30 代	40代以上	計
八 王 子	全 体	51(45.1)	54(47.8)	38(33.6)	143
	男	33(27.3)	51(42.1)	37(30.6)	121
	女	18(81.8)	3(13.6)	1(4.5)	22
名 古 屋	全 体	51(42.5)	51(42.5)	18(15.0)	120
	男	34(36.2)	45(47.9)	15(16.0)	94
	女	17(65.4)	6(23.1)	3(11.5)	26
奈 良	全 体	57(60.6)	37(39.4)	—	94
	男	55(59.8)	37(40.2)	—	92
	女	2(100.0)	—	—	2
豊 中	全 体	36(23.4)	45(29.2)	73(47.4)	154
	男	29(20.4)	43(30.3)	70(49.3)	142
	女	7(58.3)	2(16.7)	3(25.0)	12

の被調査者の割合は表

1-9に示すとおりである。ここでも、市役所による年代の片寄りが目立っている。これらの年代別の分布の違いが全体の結果に影響を与えることも少なくないので、第2章以降の図表を見るときには注意されたい。

なお、この年代の3

区分は、以下原則として、20代以下を「若(年層)」, 30代を「中(年層)」, 40代以上を「壮(年層)」と呼ぶことにする。

次に、被調査者(社会人)の学歴構成をみてみよう。日独英で質問の仕方と

選択肢が異なっているので個別にみていくことにする。

日本の場合は次のとおりである。

	男	女
中 学	1(0.2)	0(—)
高 校	119(26.5)	26(41.9)
大 学	315(70.2)	31(50.0)
その他	13(2.9)	4(6.5)
無回答	1(0.2)	1(1.6)

ドイツの場合は、

	男	女
Hauptschule (小中一貫の学校。以下, schule は～で略す)		
	23(21.5)	21(18.9)
Real～(実科学校), Mittel～(中間学校)	22(20.6)	20(18.0)
Gymnasium (ギムナジウム), Progymnasium (中間高等学校)		
	20(18.7)	18(16.2)
Hoch～(専門学校)	17(15.9)	14(12.6)
Universität (総合大学)	19(17.8)	19(17.1)
Akademie (高等専門学校), College of Technology (工科大学)		
	1(0.9)	2(1.8)
Fach～(職業学校), Handel～(商業学校), Gewerbe～(工業学校)		
	5(4.7)	15(13.5)
無回答・その他	0(—)	2(1.8)

となっている。ドイツの学校制度は州により時代により異なるので日本とは直接比較しにくい。Hochschule, Universität および Akademie の三つが大学相当とみなすことができよう。この三つの大学相当学校修了者の合計は男 35 %, 女 32 %となる。この数値は日本の社会人のそれに比べてかなり低い。この差は日独両国の大学進学率の違いに起因しているといえる。

在日外国人の場合は、下記に示すように、圧倒的に大学卒が多い。これは、被調査者が日本語教育関係者とか大使館員といった層に集中していることと関

係があるといえよう。

	男	女
義務教育	1(0.8)	1(1.2)
高校	9(7.5)	11(12.9)
大学	109(90.8)	70(82.4)
無回答	1(0.8)	3(3.5)

最後に、在日外国人の来日の理由および滞日期間を示しておく。

表 1-10 は来日理由 (社会人) である。当然のことながら、男は職業上の理由が圧倒的に多い。

表 1-11 は、各層の被調査者の日本での生活期間の長さ (何度も来日した者は以前の滞在期間は無視) を示したものである。社会人の方が学生よりも滞在期間が長くなっているが当然のことであろう。なお、学生の場合、滞日期間が「5 年以上」のものはきわめて少数であるので、以降の分析では、これを「1 年以上」として扱う。

表 1-10 在日外国人 (社会人) の来日理由 [複数回答]

	研究・学習	職 業	家族の構成	そ の 他
全 体	47(22.9)	127(62.0)	24(11.7)	22(10.7)
男	25(20.8)	86(71.7)	—	13(10.8)
女	22(25.9)	41(48.2)	24(28.2)	9(10.6)

(注) ひとりで二つ以上の理由を挙げた人がいるため、%の合計は100を超える。

表 1-11 在日外国人各層の滞日期間分布

		0～6 か月	6～12か月	1～5 年	5 年以上	不 明	計
社 会 人	全体	31(15.1)	33(16.1)	83(40.5)	55(26.8)	3(1.5)	205
	男	23(19.2)	19(15.8)	43(35.8)	35(29.2)	—	120
	女	8(9.4)	14(16.5)	40(47.1)	20(23.5)	3(3.5)	85
学 生	全体	59(33.0)	65(36.3)	43(24.0)	4(2.2)	8(4.5)	179
	男	28(33.7)	31(37.3)	17(20.5)	1(1.2)	6(7.2)	83
	女	31(32.3)	34(35.4)	26(27.1)	3(3.1)	2(2.1)	96

2. 言語生活・言語意識

2.1. 言語生活

1.1.でもごく簡単にふれているように、「言語生活」ということばの指す範囲は非常に広い。一般に、「生活の中で、話したり聞いたり、書いたり読んだりするような、言語を運用する行為」全体をいうが、ここではマスメディア、手紙・電話への接触および対人接触態度のごく一部に限って言及する。

2.1.1. マスメディア接触

調査対象者のうち、日独両国人がそれぞれの自国で生活している人々であるのに対して、英（在日外国人）は母国を離れて外国としての日本で暮している人々である。したがって、日独と英とでは同じくマスメディアへの接触といっても事情が若干異なる。そこで、ここでは、日本人とドイツ人の資料は両国の比較対照という形で、また在日外国人資料は別の観点で扱うことにする。

（1）テレビ接触

まず、テレビ視聴時間であるが、これは下記的方式で調べられている。

質問文：毎日平均してどのくらいテレビを見ますか

選択肢：①全く見ない ②30分未満 ③1時間未満 ④2時間未満 ⑤3時間未満 ⑥4時間未満 ⑦5時間未満 ⑧5時間以上

この質問に対する日独各層の結果を示したものが表2-1である。ただし、表

表2-1 テレビ視聴時間（日本人・ドイツ人）

			全 見 ない	30分未満	30～60分	1～2時間	2～3時間	3時間 以上	人 数	平 均 時間(分)
社 会 人	日 本 人	男	0.9	4.9	19.2	44.6	21.0	9.4	* 448	105
		女	—	11.3	33.9	32.3	14.5	8.1	62	86
	ドイツ人	男	3.8	23.8	28.6	34.3	8.6	1.0	* 105	64
		女	10.5	22.9	24.8	29.5	11.4	1.0	* 105	60
学 生	日 本 人	男	12.8	15.2	14.5	30.9	20.6	6.0	* 282	82
		女	10.6	13.9	21.2	33.4	15.9	5.0	* 302	77
	ドイツ人	男	24.4	22.2	24.4	26.7	2.2	—	45 *	42
		女	26.3	28.1	29.8	14.0	1.8	—	57 *	33

(注) 「人数」の欄のうち*印のついたものは元のサンプル数から「無回答」者を除いたことを示す。
以下、表2-12まで同じ。

では選択肢⑥～⑧は「3時間以上」としてまとめている。

この表で、日本人とドイツ人の比較を行う前に、日本人のテレビ視聴時間に関する別の方式での調査結果を示しておく。それはNHKが1979年11月（われわれの日本人調査時期にはほぼ一致する）に行ったものである（放送世論調査所視聴率グループ，1980）。

この調査は、全国7歳以上の国民3,600人を対象に、配布回収法による「時間目盛り日記式調査」によって行われている。これによると、日本人全体の平均テレビ視聴時間量は、平日3時間29分、土曜日3時間42分、日曜日4時間31分となっている。

これに対して、われわれの調査では、日本人のテレビ視聴時間の平均(推定)は、一番時間量の多い「社会人男」の場合でも1時間45分とNHK調査の半分には過ぎない。ただし、社会人男に対応するとみられる職業層との比較では差は幾分減少する（NHK調査の事務・技術職の平均時間は2時間36分）。われわれの調査結果とNHKのそれとの間の数値の差異の理由にはさまざまなことが考えられるが、最も大きな原因は両者の調査法の違いにあるといえよう。従来の各種の調査結果をみると、われわれのような時間区分の選択肢で回答を求めた場合の結果は、相対的な関係は維持されるが、数値そのものは実態よりはか

なり高めまたは低めの値となるようである。言うまでもなく、表2-1の「平均時間」は、各層の実際のテレビ視聴時間量よりも低めの数値となっているのである。この点を頭に置きながら、表2-1の結果をみてみよう。

まず性別でみると、程度の差こそあれ、どの層でも男の方が女よりもテレビへの接触時間が長くなっていることがわかる。

次に社会人と学生とで比較すると、やはり各層とも社会人の方が学生よりもテレビ視聴量が多くなっている。この差は、表の「全く見ない」の割合が、社会人に比して学生の方が10%強（ドイツ人男では20%）も高いことが関与しているといえる。

社会人と学生との違いは両者の年齢差とみることもできる。そこで、日独両社会人の年齢別の結果をみてみよう。

	若(20代以下)	中(30代)	壮(40代以上)
日本人	111分	97分	97分
ドイツ人	43分	51分	71分

ドイツ人の場合は、予想通り、年代が進むにつれてテレビ視聴量が増加しているが、日本人の場合は20代以下の社会人のテレビ接触時間が最も長くなっている。これは市役所の若年層の男に長視聴者が13%もいたことによっている。

さて、日本人とドイツ人を比較してみよう。表2-1から明らかなように、テレビ視聴量はいずれの層でも日本人の方が多く、社会人ではドイツ人の約1.5倍、学生では約2倍となっている。

調査時当時の対人口普及率をみると、日本の25.3%に対して西ドイツは34.3%と、テレビの普及率の上では日本の方が低いにもかかわらず視聴時間の方は日本の方が多いためである。これは家族構成数や国民性の違いといったことも関係しているようであるが、チャンネル数や放送時間といったことも関与している。調査時当時のそれは、

	局数	平日放送時間(最長)
日本(東京)	7	19時間40分(日本テレビ)
西ドイツ(ケルン)	3	9時間43分(WDR=西部ドイツ放送、週68時間の平均)

とチャンネル数、放送時間ともに日本の方が多いのである（放送事情調査部、1980）。

これとは別に日本人の方が視聴時間の長いことの原因として、日本人には「ながら視聴」が多いことがあげられる。「ながら視聴」というのは食事や家事をしながらテレビを見るという行動であり、テレビ視聴は「二次(的な)行動」といえる。これに対して、テレビ番組そのものを楽しむといった場合を「一次行動」という。ちなみにテレビ視聴における日独の一次・二次行動別の接触時間は次のとおりである（経済企画庁国民生活局、1975）。

	一次行動		二次行動	
	(男)	(女)	(男)	(女)
日 本	1.6 時間	1.5 時間	0.9 時間	1.9 時間
西ドイツ	1.0 時間	1.2 時間	0.2 時間	0.2 時間

次に、在日外国人のテレビ視聴時間をみてみよう（表 2-2 参照）。

表 2-2 テレビ視聴時間（在日外国人）

		全 見 ない	30分未満	30-60分	1-2時間	2-3時間	3 時 間 以 上	人 数	平 均 時間(分)
社 会 人	男	28.3	22.5	15.8	25.0	8.3	—	120	46
	女	40.0	31.8	12.9	9.4	3.5	2.4	85	29
学 生	男	19.5	26.8	24.4	17.0	7.3	4.9	*82	52
	女	30.5	32.6	18.9	12.6	2.1	3.2	*95	36

性別では、日独同様、社会人でも学生でも男の方が女よりもテレビ視聴時間が長い。一方、社会人と学生との比較では、日独とは逆に、男女ともに学生の方がテレビをよく見るという結果となっている。社会人と学生との差は、「全く見ない」という回答が学生の方が 10 % 弱低いことに起因しているが、日独との傾向の違いの理由についてはこの資料だけからははっきりとしたことはいえない——恐らく、自国生活者と異国生活者との違いであろうが。なお、表には示さなかったが、在日外国人を滞り期間別にみると、

	1 年未満	1 ～ 5 年	5 年以上
社会人	34 分	42 分	41 分

学 生 41 分 45 分^(注)

と日本での生活が長くなるにつれてテレビ視聴量が増加している。

(注) 学生の場合、滞在年数「5年以上」は4名に過ぎないので、「1～5年」と合算して示した。以下同じ。

(2) 新聞接触 — 閲読時間量

新聞に関しては、閲読時間量、キオスク等で買う頻度、購読新聞名および新聞や雑誌を読むことの好ききらい、について質問している。以下、順にみていく。

まず、閲読（接触）量については次の質問文、選択肢によって回答を求めた。

質問文：1日平均してどのくらい新聞を読みますか

選択肢：①全く読まない ②10分未満 ③20分未満 ④30分未満 ⑤30分以上

表2-3 新聞閲読時間（日本人・ドイツ人）

			全 く 読 ま ない	10分未満	10～20分	20～30分	30分以上	人 数	平 均 時 間(分)
社 会 人	日 本 人	男	0.9	8.5	17.4	32.6	40.6	* 448	27
		女	—	23.7	30.5	25.4	20.3	* 59	19
	ドイ ツ 人	男	1.0	12.5	31.7	36.5	18.3	* 104	21
		女	3.6	18.0	29.7	36.0	12.6	111	20
学 生	日 本 人	男	3.9	13.1	26.9	24.7	31.3	* 283	22
		女	1.7	20.7	38.3	26.0	13.3	* 300	17
	ドイ ツ 人	男	2.2	28.9	20.0	35.6	13.3	45	19
		女	15.3	27.1	35.6	18.6	3.4	* 59	12

(注) ここでの「平均時間」は累積で50%に達した区間の数値をもとに比例配分法により算出した。表2-4、表2-11も同じ。

表2-3は日独両国人各層の結果である。ただし、この表で示した「平均時間」は、テレビの場合同様、実態を下まわることには留意されたい。ちなみに、NHKの国民生活時間調査では平日の新聞（雑誌を含む）を読む時間は日本人全体の平均で43分となっている。

表2-3をみると、テレビの場合同様、新聞でも各層ともに、性別では男、社会人・学生では社会人、日独では日本人の方が他より新聞をよく読むという結果になっている——一部の属性で差の小さいものもあるが。また、社会人において年齢別にみると、

	若年層	中年層	壮年層
日本人	23分	27分	28分
ドイツ人	18分	19分	23分

となっており、日独ともに年齢が高い者ほど新聞接触時間が長くなっている。

なお、参考までに日本人の購読新聞名を掲げておく（複数回答。ドイツは調査項目なし）。

朝日 49.9% 読売 32.7% 毎日 26.1% サンケイ 12.7% 日経
7.6% スポーツ紙 29.2% ブロック紙・地方紙 25.2% 夕刊紙 1.6
% その他 4.0% 無回答 3.6%

この数値は社会人男の回答によっているが、性別また社会人・学生別といった区分ではスポーツ紙など一部を除いてはほとんど差は認められない——むしろ、ブロック紙・地方紙の影響により被調査者の居住地別集計では全体の分布が著しく異なる。

表2-4 新聞閲読時間（在日外国人）

		全く 読まない	10分未満	10～20分	20～30分	30分以上	人 数	平 均 時間(分)
社 会 人	男	6.7	14.2	20.0	25.0	34.2	120	24
	女	8.3	10.7	41.7	21.4	17.9	* 84	17
学 生	男	8.5	31.7	15.9	23.2	20.7	* 82	16
	女	18.9	33.7	21.1	13.7	12.6	* 95	9

次に、在日外国人の新聞閲読時間量についてみてみよう。表2-4がその結果であるが、大局的にみると、新聞接触傾向は日独とほとんど一致しているといえる。つまり、在日外国人の場合も、性別では男、社会人・学生別では社会人の方が他よりも新聞を読む時間が多くなっている。

また、在日外国人がふだん読む新聞の種類について示したものが表2-5、表

表2-5 閲読新聞の種類（在日外国人・社会人）〔複数回答〕

		日 本 の 新 聞		外 国 の 新 聞		人 数
		和 文 紙	英 文 紙	英 文 紙	非英文紙	
性	男	37.5	82.5	23.3	1.7	120
	女	17.6	85.9	25.9	—	85
年 齢	若年層	22.8	82.3	19.0	2.5	79
	中年層	25.7	89.2	21.6	—	74
	壮年層	44.2	78.8	36.5	—	52
滞 日 期 間	～0.5年	12.9	77.4	25.8	3.2	31
	0.5～1年	27.3	93.9	18.2	3.0	33
	1～5年	26.5	86.7	24.1	—	83
	5年～	45.5	76.4	27.3	—	55

（注） 滞日期間欄で、「不明」は除外してある。表2-6も同じ。

表2-6 閲読新聞の種類（在日外国人・学生）
〔複数回答〕

		日 本 の 新 聞		外 国 の	人 数
		和 文 紙	英 文 紙	英 字 紙	
性	男	22.9	79.5	6.0	83
	女	13.5	69.8	6.3	96
滞 日 期 間	～0.5年	11.9	61.0	5.1	59
	0.5～1年	18.5	78.5	6.2	65
	1年～	21.3	85.1	8.5	47

2-6である。各層ともに、言うまでもなく、英文紙を購入している者が圧倒的多数を占めている。和文紙についてみると、性別では男、年齢別では高齢層ほど和文紙購読者の割合が高くなっている。滞日年数別では、当然のことながら、日本での生活が長くなるにつれて和文紙を読む人が多くなっている——とくに、5年以上の滞日年数を有する社会人の場合では半数近くが和文紙を読んでいるわけである。ちなみに、最も多く読む新聞1紙の使用言語を尋ねた結果では各層とも90％前後が母国語の英語をあげている。

(3) 新聞接触——キオスクでの購入頻度

質問文と選択肢は次のとおりである。

質問文：新聞を駅の売店などで買うことがありますか

選択肢：①買わない ②まれにしか買わない（独 *selten*, 英 *Rarely*）③ときどき買う（独 *manchmal*, 英 *Once in a while*）④しょっちゅう買う（独 *sehr oft*, 英 *Always*）

図2-7は日独英各社会人の結果である。

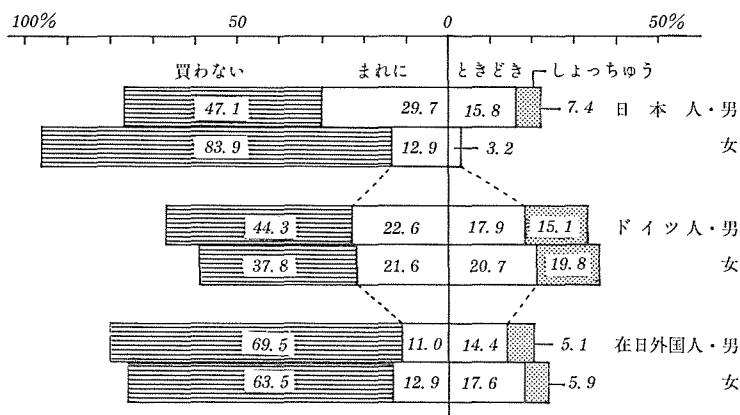


図2-7 キオスクで新聞を買う程度（社会人）

（注）「無回答」は表から除外してある。

この図でまず目立つことは、ドイツ人や在日外国人に比べて、日本人の性別による行動の差異が著しく大きいことである。つまり、日本人の男の4分の1程度はキオスクで新聞を買う（「ときどき」+「しょっちゅう」）行動をとっているのに対して、女は僅か3%しか買わないのである。日本人がキオスクで買う新聞名について尋ねた集計結果をみると（複数回答）、

	五大紙	スポーツ紙	夕刊紙	その他	無回答	買わない
男	11.8%	34.7%	5.6%	11.6%	7.8%	47.1%
女	4.8%	9.7%	1.6%	4.8%	—	83.9%

と、とくにスポーツ紙の購読率で男女の差が生じている。

また、図2-7では日独英を比較すると、新聞を買う行動は、ドイツ人が最も多く、次いで在日外国人、日本人の順になっている。ドイツ人が他よりもキオスクでの新聞購読率が高くなっているが、これは日本に比べてドイツでの新聞宅配の浸透度がきわめて低いことと関係があると思われる。

以上は社会人だけの結果であるが、学生の場合も、数値には若干の差異があるが、ほとんど同じ傾向が認められている（図表は省略）。

（4）新聞・雑誌を読むことの好き嫌い

質問文：新聞や雑誌などを読むのは好きですか

選択肢：①嫌いなほう ②好きなほう ③どちらともいえない

日独英の各社会人男女の結果は表2-8に示すとおりである。

いずれの層でも「好き」が圧倒的に多く、国民性による差はほとんど認められないようである。ただ、僅かに差があるといえば、「どちらともいえない」の割合が異なっているといえるが、これについてはこの節の最後の2.1.3.の（5）で取り上げる。

表2-8 新聞や雑誌を読むのは好きか

			好 き	どちらとも いえない	きらい	人 数
社 会 人	日 本 人	男	77.3	19.2	3.6	449
		女	77.4	19.4	3.2	62
	ド イ ツ 人	男	90.7	6.5	2.8	107
		女	91.0	5.4	3.6	111
	在日外国人	男	87.3	10.2	2.5	118*
		女	90.5	9.5	—	84*
学 生	日 本 人	男	79.5	17.7	2.8	283*
		女	83.2	15.2	1.7	303
	ド イ ツ 人	男	88.9	8.9	2.2	45
		女	93.3	5.0	1.7	60
	在日外国人	男	83.1	8.4	8.4	83
		女	90.6	7.3	2.1	96

2.1.2. パーソナルメディア接触

ここでは、先のマスメディアに對置するものとして、個人的なコミュニケーション手段としての手紙と電話への接触度について述べる。

(1) 手紙・はがき

質問文：この1カ月（ドイツは4週間）に個人的な手紙やはがきを何通くらい書きましたか

選択肢：①書かなかった ②1～3通 ③4～5通 ④6通以上

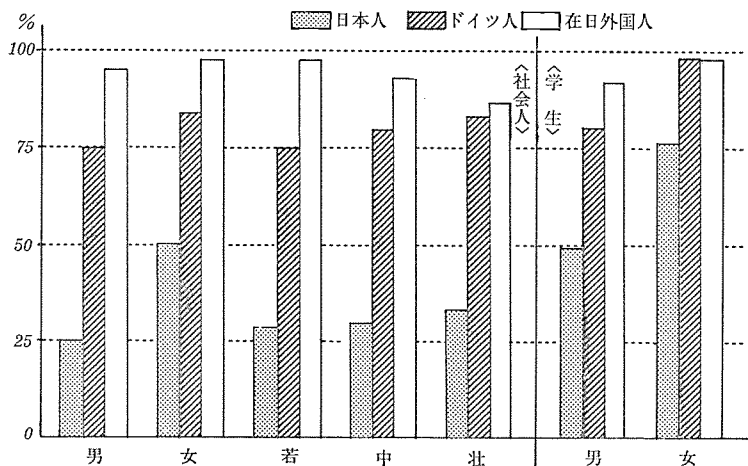


図2-9 私信を書いた人の割合

図2-9は、調査前1か月間に、個人的な用件で手紙やはがきを1通でも書いた人の割合を図示したものである。

結果は一目瞭然であり、私信を書く人の割合は在日外国人が最も多く、次いでドイツ人、日本人の順になっているが、ドイツ人と日本人との間に顕著な差が認められている。

また、性別で比較すると、日独英各層とも女の方が男よりも手紙を書く人の

割合が多いという点で一致しているが、日本人の性による差がやはり目立つ結果となっている。つまり、日本の男は他に比べて手紙を書くことがきわめて少ないのである。なお、社会人の年齢別の結果でも、すべての年齢層で日本人の手紙を書く行動の割合が低くなっているが、これは日本人サンプルが男に大きく偏っているためである。

次に、日独英各層における平均私信通数（推定値）を示しておく。

	社会人男	社会人女	学生男	学生女
日 本 人	0.7 通	1.4 通	1.3 通	2.3 通
ド イ ツ 人	3.2 通	3.5 通	3.3 通	4.6 通
在日外国人	4.9 通	5.2 通	5.1 通	5.6 通

ここでも、日本人が最も手紙を利用することがないという結果になっている。ちなみに、調査時当時の年間1人当たりの郵便利用通数に関する郵政省(1980)の調査によると、日本121通、西ドイツ191通、アメリカ429通となっており、全体の傾向としてはわれわれの調査結果と一致する。ただし、郵政省統計でわれわれの結果よりも日独間の差が小さくなっているのは、日本ではダイレクトメールなど事業所差し出しの郵便物の占める割合が高い（約8割）からである。

（2）手紙・日記を書くことの好ききらい

質問文：手紙や日記を書くのは好きですか

選択肢：①嫌いなほう ②好きなほう ③どちらともいえない

日独英各層の結果は図2-10に示すようになっている。

手紙や日記を書くのが「好き」の割合（図の中央線から左に伸びた棒グラフ）は、どの層をみても、在日外国人が最も高く、次いでドイツ人、日本人の順となっている。性別では女の方が、社会人・学生別では学生の方がそれぞれ他より「好き」と答えている者が多い。これらの結果は、（1）でみてきた、私信通数の場合と非常に似た関係になっている。したがって、書くことの好ききらいと実際に書くか否かという行動とはかなり相関があるといえそうである。

一方、「きらい」とする回答（図2-10の右半分）でみると、大略「好き」の割合を裏返した形になってはいるが、異なった部分も目につく。「どちらともい

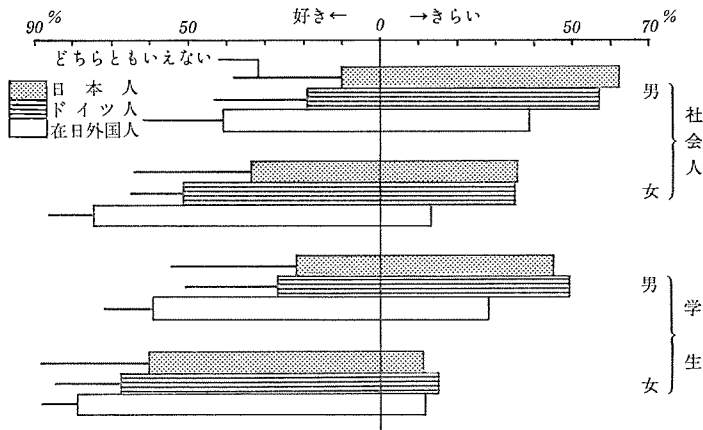


図 2-10 手紙や日記を書くのは好きか

えない」という中間回答の多寡が関与しているからであるが、この中間回答については他の項目と合わせて 2.1.3. の (5) で改めて吟味する。

(3) 電話

質問文：この 1 週間に個人的な電話を何回くらいかけましたか

選択肢：① かけなかった ② 1～5 回 ③ 6～10 回 ④ 11～20 回 ⑤ 21 回以上

表 2-11 電話利用回数

			かけない	1～5回	6～10回	11～20回	21回以上	人 数	平均回数
社会人	日 本 人	男	19.8	54.2	18.0	5.8	2.0	445*	2.8
		女	9.8	55.7	29.5	1.6	3.3	61*	3.6
	在日外国人	男	8.4	46.2	23.5	6.7	15.1	119*	4.5
		女	6.0	52.4	23.8	15.5	2.4	84*	4.2
学生	日 本 人	男	29.6	55.3	11.6	2.8	0.7	284*	1.8
		女	12.3	61.3	19.9	5.0	1.7	302*	3.1
	在日外国人	男	26.8	54.9	14.6	1.2	2.4	82*	2.1
		女	18.9	65.3	7.4	4.2	4.2	95*	2.4

この項目は、ドイツ人対象の調査票（ドイツ語版）には含まれていないので、日本人と在日外国人について述べる。

表2-11は日英各層の個人的電話利用回数（週当たり）を示したものである。

週平均の電話量は、全般的にみれば、性別では男よりも女が、社会人・学生別では社会人が、また日英では在日外国人の方がそれぞれ他より多いという傾向になっている。

年齢別でみると、

	若年層	中年層	壮年層
日 本 人	3.2 回	2.5 回	2.9 回
在日外国人	3.0 回	4.7 回	8.0 回

となっており、在日外国人（社会人）の場合は年齢の上昇とともに電話利用回数が増加している。一方、日本人の場合は、若年層が他よりやや多いともいえるが、きわだった年齢差は認められないようである。このような日英での差の理由は、この資料だけでは明らかではないが、興味ある現象といえよう。

なお、在日外国人の電話利用回数を滞日年数別にみると、下記のように日本での生活期間が長くなるにつれて回数も多くなるという関係が認められている。

	0～0.5年	0.5～1年	1～5年	5年以上
社会人	2.5 回	3.9 回	4.3 回	8.3 回
学 生	1.4 回	2.3 回	3.2 回	

次に、在日外国人に対して「電話をかけるときに最も多く使用する言語」を尋ねた結果をみてみよう（表2-12）。

表2-12 在日外国人の電話での使用言語

		日 本 語	日・英語 併 用	英 語	そ の 他	人 数
社会人	全 体	24.9	12.7	58.4	4.1	* 197
	男	29.6	15.7	51.3	3.5	* 115
	女	18.3	8.5	68.3	4.9	* 82
学 生	全 体	32.5	6.1	52.1	9.2	* 163
	男	33.3	5.6	52.8	8.3	* 72
	女	31.9	6.6	51.6	9.9	* 91

当然ながら、電話での言語は英語が最も多く使われており、表中のどの層でも過半数となっている。一方、日本語も社会人の4分の1、学生の3分の1と、かなりの割合で使用されている。

日本語使用者の割合を属性別にみると、性別では男が、社会人・学生別では学生がより多くなっている。また、滞日期間別に日本語使用者の比率をみると（括弧内は英語併用者をも含めた比率）,

	0.5年未満	0.5～1年	1～5年	5年以上
社会人	10.3(20.7)%	16.1(25.9)%	21.3(30.0)%	42.6(64.8)%
学 生	17.3(26.9)%	24.1(27.6)%	57.8(64.4)%	

となっており、滞日年数の長い者ほど日本語で電話をする人が増加している——とくに、5年以上の滞在者では半数前後が日本語を用いている。これは、滞日期間が長くなるほど日本語能力が上昇し、また日本人との交際範囲も広まることを意味しているのであろう。

2.1.3. 対人接触態度

ここでは、対面的コミュニケーション状況への好き嫌いなどの態度の日独英の相違について述べる。

(1) 近所の人とおしゃべり

質問文：近所の人とおしゃべりするのは好きですか

選択肢：①嫌いなほう ②好きなほう ③どちらともいえない

日独英各層の回答分布は図2-13のとおりである。

近所の人と話すのが「好き」という回答（図の左から伸びた各棒）をみると、性別、社会人・学生別ではあまり差はないが、日独英の比較、とりわけ独英と日との間でかなり大きな差が認められている。すなわち、近所の人とおしゃべりを好む人の割合は、在日外国人は約50%、ドイツ人は約40%もいるのに対して、日本人は僅か10%前後に過ぎない。国民性の違いといったところであろうか。

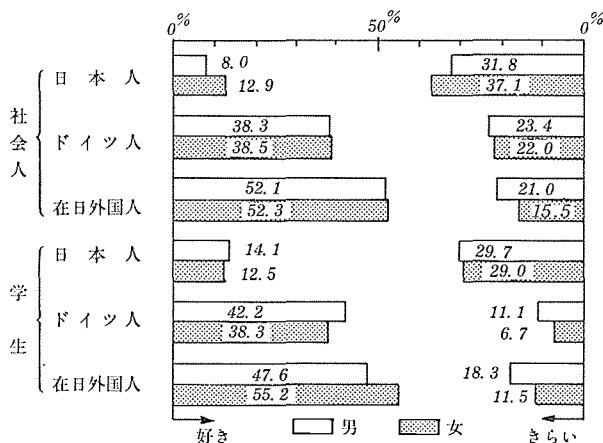


図 2-13 近所の人とおしゃべりは好きか

(注) 両端から伸びた棒の間の空間は「どちらともいえない」の%を示す。図 2-14, 図 2-15 も同じ。

一方、図の右側の「嫌い」をみると、これは必ずしも「好き」の回答率の裏返しとはなっておらず、全体的には差が小さくなっている——ドイツ人学生と在日外国人学生とでの逆転現象さえみられる。

(2) 集会への出席

質問文：集会や会議などに出席するのは好きですか

選択肢：①嫌いなほう ②好きなほう ③どちらともいえない

この間に対する各層の回答は図 2-14 に示すとおりである。

集会などへの出席を好む者の割合は、前問の近所の人とおしゃべりに比べて、日独英の間の差は少なくなっている。これは、前問に比して、ドイツ人、在日外国人の「好き」の比率がそれぞれ 2 割程度減少したためである——日本人の場合はほとんど差がない。

一方、「嫌い」という回答は、ドイツ人学生男と在日外国人学生女を除くと、全般的に高く、いずれも多数回答となっている。

(3) 見知らぬ人に話しかけるか

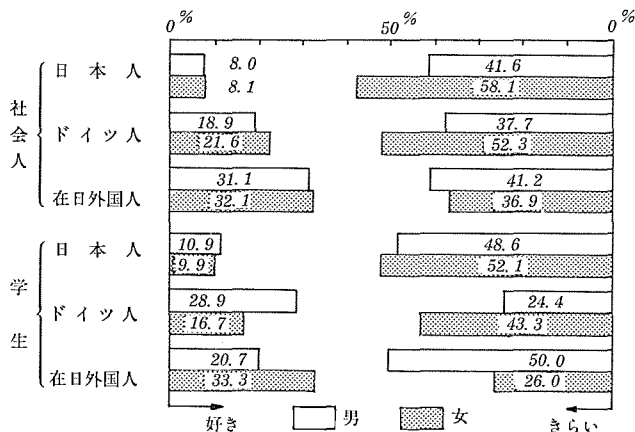


図2-14 集会や会議に出席するのは好きか

質問文：待合室で見知らぬ人に話しかけますか

選択肢：①話しかけないほう ②ときどき話しかけるほう ③どちらともいえない

結果は図2-15に示すとおりであるが、ここでは前2問とは違って「どちらともいえない」という中間回答が著しく少ないが、これは選択肢の②に「ときど

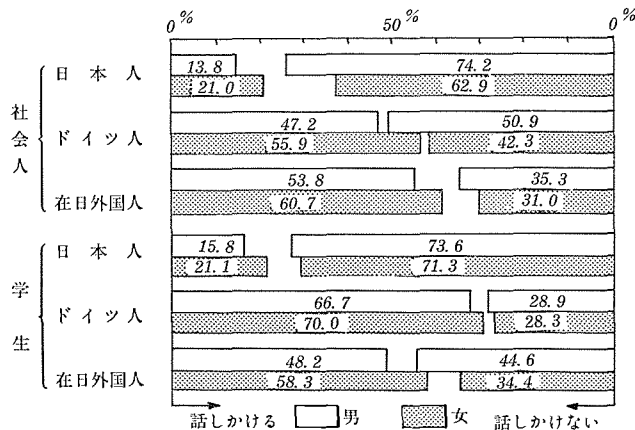


図2-15 見知らぬ人に話しかけるか

き」ということばが添えられているためといえよう。

図2-15で「(ときどき) 話しかける」の回答率は、社会人・学生のいずれを比べても、これまでにみた2問同様に日本人が一番低くなっている。ところが、ドイツ人と在日外国人とを比較すると、社会人では僅かの差ながら前2問と同じく在日外国人の方が高率であるのに対して、学生では逆にドイツ人の方が「話しかける」割合が高くなっている。独英(とくに独)の学生は被調査者の数が少ないので、このような逆転現象に積極的な意味があるか否かは今のところ何ともいいがたい。今後の検討課題といえようか。なお、この間に関しては独英で質問文が若干異なっているので、両調査票の質問文と選択肢とを掲げておく。

〔ドイツ語版〕

質問文：Sprechen Sie in einem Wartesaal oder Wartezimmer einen Unbekannten an ?

選択肢：① nein ② manchmal ③ weiß nicht

〔英語版〕

質問文：Do you make conversation with strangers in waiting rooms ?

選択肢：① No, tend not to ② Yes, sometimes ③ Neither

(4) 3項目を通しての日独英比較

以上の3項目を通じて、日独英のそれぞれの特徴をみてみよう。

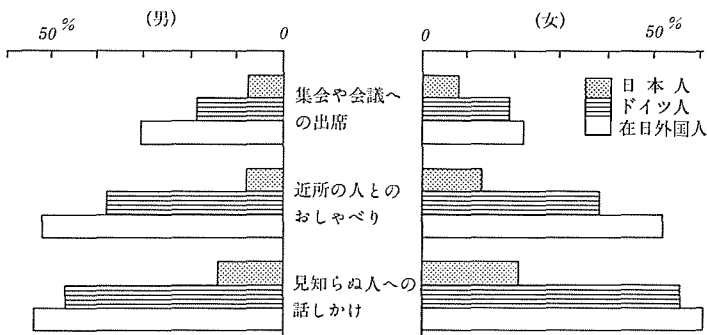


図2-16 日独英社会人の対人接触態度(「好き」)の割合

社会人について、各項目に対する「好き」「見知らぬ人への話しかけ」では「話しかける」の比率を再掲すると図2-16のようになる。

図から明らかなように、日本人は男女とも、集会や会議といった片苦しい場面はもとより、近所の人のおしゃべりも好きでなく、全般的に対人接触に消極的な態度が表れている。ただし、この調査での分析対象となった日本の社会人は全員都市部の有職者（市役所職員）であったことがこの結果に大きな影響を与えているかも知れない。

日本人と対極にあるのが在日外国人である。彼らはすべての場面で日本人やドイツ人以上に積極的な対人行動を好むようである。これは異国で生活するためにはどうしても積極的にならざるをえないという面もあるだろうが、必ずしもそれだけとはいえないようである。たとえば、NHKが1980～81年に日独米を対象とした比較調査の結果（NHK放送世論調査所、1982）にもそれが表れている。この調査のうちの対人接触にかかわる項目を示すと次のようになっている。

「初対面で気軽に話せるか」ということでは、「話せる（どちらかといえば話せるを含む）」とする者は、日本人63％、ドイツ人69％であるのに対して、アメリカ人は87％もの人が話せると答えている。また、「年齢や考え方の違った人たちとつきあいたいか」という質問に対しても89％が「そうだ」と回答している（日本人は68％、ドイツ人は57％）。

アメリカ人（1.3.で述べたように、われわれの調査対象者としての在日外国人の大部分はアメリカ人である）の行動の積極さがうかがわれる。

一方、ドイツ人は日本人と在日外国人との中間にあるが、この調査で取り上げた項目の範囲内でみると、在日外国人にやや近いといえる。

なお、学生は、(3)で述べたように、見知らぬ人への話しかけに関する部分がドイツ人と在日外国人（留学生）とで逆転することを除くと、社会人の場合とほぼ平行関係にあることだけを指摘しておく。

(5) 中間回答「どちらともいえない」の現れ方

以上でみてきた対人接触態度に関する三つの項目では、「どちらともいえない」という中間回答が現れている。そこで、ここではこれらの3項目に、2.1.1.お

よび2.1.2.に示した同種の2項目を合わせた合計5項目を対象に、中間回答の現れ方をみてみよう。

対象とする項目は次の五つである（中間回答率の低い順）。

- ① 待合室などで見知らぬ人に話しかけるほうか（略称「見知らぬ人」）
- ② 新聞や雑誌などを読むのは好きか（「新聞」）
- ③ 手紙や日記を書くのは好きか（「手紙」）
- ④ 集会や会議などに出席するのは好きか（「会議」）
- ⑤ 近所の人とおしゃべりするのは好きか（「近所の人」）

この5項目に対する各層の中間回答の出現率をまとめたものが表2-17である。

表2-17 質問ごとの中間回答（「どちらともいえない」）の出現率

			見知らぬ人	新 聞	手 紙	会 議	近所の人	平 均	
社 会 人	日 本 人	男	12.0	19.2	28.1	50.1 [*]	60.0 [*]	33.88	} 31.94
		女	16.1	19.4	30.6	33.9	50.0 [*]	30.00	
	ド イ ツ 人	男	1.9	6.5	24.3	43.4 [*]	38.3 [*]	22.88	} 20.09
		女	1.8	5.4	13.8	26.1	39.4 [*]	17.30	
	在日外国人	男	10.9	10.2	20.5	27.7	26.9	19.24	} 18.90
		女	8.3	9.5	11.9	31.0	32.1	18.56	
学 生	日 本 人	男	10.6	17.7	33.1	40.5	55.1 [*]	31.40	} 30.43
		女	7.6	15.2	28.1	38.0	58.4 [*]	29.46	
	ド イ ツ 人	男	4.4	8.9	24.4	46.7 [*]	46.7 [*]	26.22	} 24.45
		女	1.7	5.0	16.7	40.0	50.0 [*]	22.68	
	在日外国人	男	7.2	8.4	18.3	29.3 [*]	34.1	19.46	} 19.52
		女	7.3	7.3	9.4	40.6 [*]	33.3	19.58	

（注） *印のついた数値は、「どちらともいえない」が最頻カテゴリであったことを示す。

5項目全体の中間回答率の平均は、各層とも、日本人、ドイツ人、在日外国人の順になっており、とりわけ日本人の中間回答率の高さが目につく。従来から言われているように日本人は他に比べてイエス・ノーをはっきりさせたがらないということがここにも反映しているようである。

日本人の中間回答の現れ方と質問項目との関係を見ると、「見知らぬ人」「新聞」「手紙」の3項目と「会議」「近所の人」の2項目との間で大きな断層がみられる。また、ドイツ人・在日外国人の場合でも、日本人の場合同様、前3項

目と後2項目とで同じような断層がみられる——若干の相違はあるが。そこで、両者の項目内容をみてもみると、前者（「見知らぬ人」を除く）は本人だけの世界での言語生活であり、後者は対人的な言語生活である、という違いに気づく。言語生活面のこの質の違いが中間回答率の多寡を左右していると考えることができよう。なお、対人的言語生活である「見知らぬ人」の中間回答が最も少なかったのは、(3)で述べたように、この項目の選択肢に「ときどき話しかける」が含まれていたからである。

2.1.4. 日本人の言語生活の特徴

この節でみてきた各側面の言語生活を、日本人を中心に他との対比で、まとめてみると次のようになろう。

(イ) 日本人のテレビ、新聞などマスメディアへの（受容的）接触量は、ドイツ人や在日外国人に比べて、数段に多い。

(ロ) 一方、手紙やはがき、電話といった個人的メディアの発信量は、日本人が他に比して最も低い。

(ハ) また、手紙や日記を書くことを好む者も日本人が最も少ない。

(ニ) さらに、近所の人また見知らぬ人とのおしゃべりといった対面的コミュニケーションを好む者の割合も日本人が他より著しく少ない。

(ホ) 以上を要約すると、日本人はドイツ人や在日外国人に比べて、受動的コミュニケーションの量は著しく多いが、対人的な働きかけを中心とする能動的側面に乏しい。つまり、日本人の言語生活の特徴は、どちらかといえば、受動型だといえる。

(ヘ) これに対して、ドイツ人や在日外国人は能動的である。なお、両者を比較すれば、在日外国人（主にアメリカ人）の方がより積極的な対人活動を好むといえる。

2.2. 外国語・外国人との接触

この節では、外国語に対する意識、経験、および、外国人と接触する場合の言語にかかわる意識、さらに、ドイツ人のドイツ語意識についての調査結果を示す。

2.2.1. 外国語との接触

(1) 「外国語」というは何語？

『「外国語」ということばを聞いたら何語を思い浮かべるか』という質問をした。回答は、思い浮かべる順に言語名を記入してもらう方式をとった。表2-18にその結果を示す。ドイツ人と在日外国人に対する質問では、回答欄を三つ設けたが、日本人に対しては四つの欄を設けた。表は、第1、第2、第3の回答を示し、日本人の第4回答は示さなかった。

まず、第1回答を見ると、日本人、ドイツ人とも「英語」の割合が最も高い。社会人、学生とも、先ず想いつくのは「英語」というわけである。ただ、数字を見ると、日本人の方は社会人、学生とも9割前後となっているのに対して、ドイツ人の場合は、数値がやや低い。学生で言えば、3割の人は英語以外の言語を思い浮かべている。ドイツ人の場合は、「英語」が第1位を占める点では日本人と同じだが、日本人ほど英語一辺倒ではないということになるうか。

在日外国人の回答には注意を要する。日本で生活している外国人で、英語を第1言語としている人による回答に「英語」が2割も見られるのは不可解である。質問の前おきに、「日本におけるあなたの言語意識を……」という表現をしたため、自分の言語を「外国語」と客体視したものであろうか。「日本語」の中

表 2-18 「外国語」ということばを聞いたら何語を思い浮かべるか

		英 語	ドイツ語	フランス語	イタリア語	スペイン語	ロシア語	中国語	朝鮮語	日本語	その他	無 回 答	人 数
		日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人	日本人 ドイツ人 在日外国人
社 会 人	第 1 回 答	92.0 79.4 20.0	0.6 — 2.4	0.8 7.3 8.3	— 0.5 —	0.2 0.5 1.0	— 1.4 0.5	0.8 3.7 2.9	— — 0.5	— 1.8 43.9	0.2 4.6 6.3	5.5 0.9 14.1	511 218 205
	第 2 回 答	2.3 6.4 5.4	25.6 — 10.2	45.2 70.6 20.5	0.4 2.3 —	1.4 2.8 6.8	0.8 5.5 3.5	10.4 1.4 9.3	0.2 — 1.5	— 1.8 11.2	0.4 5.5 5.4	13.3 3.7 26.3	511 218 205
	第 3 回 答	— 2.8 1.5	31.5 — 13.2	24.9 4.1 15.1	1.0 22.5 —	2.3 26.6 8.3	2.2 13.8 3.9	13.7 1.8 4.9	0.8 — 1.0	— 0.9 4.9	0.8 13.8 8.8	22.9 13.8 38.5	511 218 205
	延 べ	94.3 88.5 26.9	57.7 — 25.8	70.9 82.1 43.9	1.4 25.2 —	3.9 29.8 16.1	3.0 20.6 7.9	24.9 6.9 17.1	1.0 — 3.0	— 4.6 60.0	1.4 23.9 20.5	— — —	511 218 205
	第 1 回 答	89.9 70.5 25.7	3.2 — 4.5	2.2 12.4 14.5	— 1.0 —	0.7 3.8 5.6	0.3 4.8 0.6	0.3 2.9 3.4	0.2 — —	— 1.0 35.2	— 4.6 4.5	3.1 — 6.1	587 105 179
	第 2 回 答	4.8 7.6 4.5	34.1 — 17.3	43.1 57.1 20.1	0.2 1.9 —	0.5 7.6 11.2	4.3 6.7 2.2	6.1 7.6 6.1	0.2 — 1.1	— 1.0 17.9	0.5 10.5 5.0	6.3 — 14.5	587 105 179
学 生	第 3 回 答	0.7 3.8 4.5	37.5 — 14.0	33.4 9.5 14.5	0.2 11.4 —	1.7 26.7 14.5	4.3 23.8 5.0	9.7 6.7 2.8	0.2 — 0.6	— 1.9 6.1	2.2 14.3 5.6	10.2 1.9 32.4	587 105 179
	延 べ	95.4 81.9 37.7	74.8 — 35.8	78.7 79.0 49.1	0.4 14.3 —	2.9 38.1 31.3	8.9 35.2 7.8	16.1 17.1 12.3	0.6 — 0.7	— 3.8 59.2	2.7 29.4 15.1	— — —	587 105 179

で生活しているにもかかわらず、回答には、「日本語」が4割ほどしか現れないのも、上の「英語」という回答と同じ発想によるものであろうか。「日本語」は現在の自分にとっては日常接する言語であって、「外国語」とするにはあまりに身近にあるというのであろうか。

第2回答では、どのグループをとってみても「フランス語」が第1位を占めている。日本人にとっても、ドイツ人にとっても、「英語」のつぎに思い浮かぶのは「フランス語」というわけである。しかし、日本人では、第2位に「ドイツ語」が続き、「フランス語」は4割強しか占めていない。ドイツ人の場合は、「フランス語」に集中している点が特徴的である。

在日外国人では、「フランス語」が1位であることに変わりはないが、20%そこそこしかない点で日本人、ドイツ人と異なる。そして、「日本語」と「ドイツ語」とがこれに続き、第2回答が3分されている点が特徴であろう。

第3回答を見ると、日本人では「ドイツ語」が1位で、「フランス語」が2位を占めている。第2回答の逆である。第2、第3回答で「フランス語」「ドイツ語」と回答した日本人の反応を属性別に詳しく見ると、つぎのようになる。

		第 2 回 答		第 3 回 答	
		「独」	「仏」	「独」	「仏」
社会人	若年層(195人)	23.6%	49.7%	36.4%	25.1%
	中年層(187)	25.7	46.0	33.7	24.6
	壮年層(129)	28.7	37.2	20.9	24.8
学 生	男 (284)	40.5	28.2	27.5	39.8
	女 (303)	28.1	57.1	46.9	27.4

第2回答で「フランス語」1位を支えているのは、社会人では若い世代、学生では女子学生であり、2番手の「ドイツ語」の支持層は社会人の上の世代と男子学生ということになる。これと相補うかたちで、第2回答の「フランス語」派は3番目に「ドイツ語」を思い出し、「ドイツ語」派は3番目には「フランス語」を回答している。「フランス語」は女学生、若者好み、「ドイツ語」は熟年、男子学生好みというわけである。

ドイツ人の第3回答は、「スペイン語」「ロシア語」「イタリア語」と続いてい

る。言語圏としては隣接している「イタリア語」の数値が低い点や、「ロシア語」の得点が学生の方では「イタリア語」よりはるかに高くなっている点などが注目される。

在日外国人では、「ドイツ語」「フランス語」「スペイン語」がほぼ同率で並んでいる。

以上は、英独仏3言語を中心に見たが、そのほかの言語について見てみよう。表の下欄に「延べ」のパーセンテージを示した。第1, 第2, 第3の回答の和である。三つの回答のうち、どこかでその言語を思い浮かべた人の割合である。英, 独, 仏語のほかを見ると, 日本人でははるかに値が下がって「中国語」を思い浮かべている。「ロシア語」は人気がない。「朝鮮語」にいたっては1%以下である。最も近い隣国でありながら, 思い浮かべる日本人はほとんどいないというのが現状である。日本人がいかに西欧を向いているかがよく分かる数字である。

ドイツ人にとって, 「英語」「フランス語」以外に思い浮かべる「外国語」は豊富である。「ロシア語」が英, 仏, 西に次いで4番, 5番目に位置している点は注目に値する。ヨーロッパの政治的流れの中で, 西ドイツがソビエトに対して独自の対話共存政策をとっていることとこの数字との間に, 何かつながりを感じるのは穿ちすぎであろうか。英語話者である在日外国人が「ロシア語」をほとんど思い浮かべないことを合わせ考えると, そのように思えて仕方がない。

「その他」を見ると, 日本人は3%にも満たない。表に掲げた言語以外にはほとんど思い浮かべないことがうかがえる。言ってみれば, 「外国語の世界」の広がりや狭い範囲に集中しているということである。これに対して, ドイツ人の方は第1回答の段階から拡散している。「外国語」に対するイメージの広がりが広いということであろう。「延べ」で目についたものとしては, 「ラテン語」(社会人7.3, 学生6.7), 「トルコ語」(社会人2.3, 学生1.0), 「アラビア語」(社会人2.8, 学生6.7) などである。

「トルコ語」の得点の少ない点も注目される。外国人労働者として西ドイツ国内に何百万人も居住し, 今や社会問題から政治問題にまで発展しているトルコ人の言語であるにもかかわらず, 「外国語」としてはドイツ人の中にあまり意

識されていないということである。もちろん、第4、第5回答を求めれば、高率を以て回答されるのかもしれないが。

在日外国人も「その他」がやや多い。日本人に比べ「外国語の世界」が広いと言えようが、ドイツ人よりはやや狭い。

「無回答」については、在日外国人に多く見られる。自分自身がすでに日本語という「外国語」の中に暮しているところへ、さらに「外国語は」と言われて、とまどいのようなものがあつたのだろうか。日本人とドイツ人とは、自国語の中で生活しているという点で条件は同じであるとすれば、ドイツ人には「無回答」が少なく、日本人に多いということは注目してよからう。とくに、学生の場合、ドイツ人は第3回答ではじめて「無回答」がわずかに現れるだけであるのに対して、日本人学生では、初めから何も想い浮かばない人が3%いるという点は、彼等の学生の「外国語」に関する実情を反映していると言うべきであろうか。

(2) 学習した外国語

「これまでに学習した外国語は何か」をたずねた。日本人と在日外国人に対しては、「英語」「フランス語」「ドイツ語」「中国語」「ロシア語」を選択肢として示し、その他は書き込んでもらった。在日外国人には、「日本語以外に」という限定をした。「英語」を入れたのは、英語以外を第1言語とする回答者も考えられたからである。ドイツ人に対しては、想いつく順に言語名を三つまで記入してもらった方式をとった。

日本人では、「英語」が最も多く、社会人で511人のうち95.7%、学生で587人のうち99.3%の人が学習している。次いで多いのは「ドイツ語」である。社会人40.7%、学生47.0%である。「フランス語」は、社会人で19.4%、学生で34.2%の人が学習したと答えている。属性別に見ると、社会人では、「ドイツ語」「フランス語」とも年齢による差はあまり見られないが、学生の性別による差は、次に示すように顕著である。

		「独」	「仏」
社 会 人	若年層(195人)	40.0%	16.9%

	中年層(187)	44.4	25.7
	壮年層(129)	36.4	14.0
学 生	男 (284)	59.9	26.8
	女 (303)	35.0	41.3

男子学生は「ドイツ語」を選び、女子学生は「フランス語」を好む傾向があると言えよう。この点、前項(1)で見た、「外国語」と聞いて「英語」の次に思い浮かべる言語が、男子学生では「ドイツ語」「フランス語」の順となり、女子学生ではその逆となっていることと並行している。社会人の若い世代を見ると、前項(1)では「フランス語」に傾いていたが、実際学習した外国語は「ドイツ語」がはるかに多く、学生の示す傾向とは趣が異なる。

そのほか、「中国語」は、社会人で6.7％、学生で7.7％の人が学習している。「ロシア語」も少なく、社会人で1.0％、学生で9.7％となっている。

ドイツ人の回答を3回答欄を加えた延べで見ると、社会人(218人)では、「英語」79.8％、「フランス語」47.7％が他からぬきんでている。そのほかでは、「ラテン語」の17.0％が目立つ程度で、「スペイン語」「ロシア語」の各5.0％以外はみな1％以下である。日本人と比べて、決して多いとは言えない。とくに、「英語」などを見ると、日本人は95.7％も「学習」しているのに比べれば、その差は明らかである。この数字を見るかぎり、ドイツより、日本の方がはるかに英語が通じなければならないが、現実はどうでもないようである。

ドイツ人学生(105人)では、「英語」96.2％、「フランス語」70.5％が上位を占めている。ついで、「ラテン語」が46.7％にものぼっている。「古典ギリシャ語」はわずかに2.9％であったが、非古典語化が進んでいるといわれるドイツの高等教育において、なお、古典語が多くの学生に学ばれていることが分かる。さらに「スペイン語」19.0％、「ロシア語」11.4％、「現代ギリシャ語」4.8％と続いている。

「日本語」と答えた人は、社会人で1.2％、学生で1.0％であった。前項(1)の結果を合わせて考えると、日本人にとって、「ドイツ語」は第2番目ないし3番目に位置する外国語であるのに対して、ドイツ人にとっては、「日本語」は、「思い浮かべる」ことも、また、実際に「学習する」こともほとんどない、い

わば、無縁の言語だと言うことができよう。

在日外国人については、「日本語」以外の「外国語」についてたずねた。社会人(205人)では、「フランス語」66.8%、「ドイツ語」34.6%が多く、他はわずかである。学生(179人)については、「フランス語」48.0%、「ドイツ語」31.8%となっている。日本人、ドイツ人と異なり、社会人の方が数値が高い。彼らが特殊な社会階層に属する人々であるということであろう。「ロシア語」「中国語」は、社会人でそれぞれ9.3%、8.8%、学生で5.6%、3.9%となっている。ドイツ人学生と比べて学生で「ロシア語」の割合が低いのが目につくが、彼らは、「日本語」を外国語として選んだ学生だということを考慮に入れるべきであろう。

(3) ドイツ人の日本語経験

ドイツ人に対して、日本語に関する質問を二つした。「日本語を聞いたことがあるか」というものと「漢字を見たことがあるか」という質問である。「漢字」は、chinesische Schriftzeichen とした。「漢字」であって「日本文字」と受けとられたという保障はない。表にすると下のようである。

「日本語を聞いた」 「漢字を見た」

社会人 (218人)	89.0%	97.2%
学 生 (105)	82.9	99.0
男 (45)	93.3	100.0
女 (60)	75.0	98.3

ほとんどのドイツ人が「日本語」の経験があることになる。ただ、疑ってかかれば、耳にしたのが本当に「日本語」だったかどうかは分からない。また、「漢字」といっても、大きな町にはたいい見られる中国レストランの看板か空手映画の広告程度のもが含まれている可能性はある。日本語を聞いたことがある学生では、女子学生の方がかなり低くなっている。日本人学生との接触が少ないのだろうか。筆者が西ドイツ滞在中、ある日本人男子学生が、「日本人の女の子はドイツ人の男子学生によくもてるのに、男の方はドイツ女性に少しももてない」と嘆いていた。真偽のほどは不明だが、交際の範囲が違うという

ことはありそうである。

2.2.2. 外国人と自国語

この項では、外国人のことばに対する、日本人、ドイツ人の意識や、日本人の外国人に対する行動についての在日外国人の受けとり方などをとりあげる。

(1) 外国人は滞在している国のことばを話すべきか

日本人，ドイツ人，在日外国人に対して用いた質問文をはじめに示しておく。

「日本に來ている外国人は，当然日本語を話すべきだと思いますか」

Erwarten Sie, daß ein Ausländer in Deutschland ohne weiteres Deutsch sprechen kann ?

Do you think it a matter of course that foreigners in Japan should be able to speak Japanese ?

選択肢は「はい」「いいえ」「わからない」の三つとした。

その結果を表2-19に掲げる。社会人，学生について，日本人，ドイツ人，在日外国人の数値を列記した。まず目につくのは，ドイツ人の反応が極端に否定的なことである。ドイツ人は外国人に対してこんなにも寛大なのだろうか。こ

表2-19 外国人は滞在している国のことばを話すべきか (1)

		は	い	いいえ	わからない	その他・ 無回答	人 数
社 会 人	日 本 人	38.9	47.6	13.5	—	—	511
	ドイツ人	0.9	95.0	4.1	—	—	218
	在日外国人	49.8	38.0	10.7	1.5	—	205
学 生	日 本 人	42.2	35.9	26.1	0.2	—	587
	ドイツ人	1.9	94.3	3.8	—	—	105
	在日外国人	54.2	27.9	15.1	2.8	—	179

の場合、質問文にやや問題があるのかもしれない。質問文の翻訳は正確を期したが、なお、微妙な意味のちがいが残ることはいたし方のないことであった。ドイツ文は、文字通り受けとれば、「ドイツ語が話せることを期待するか」であるが、erwarten には、「べきだと期待する」と「だろうと期待する」との両方があるようである。ここで得られた 95 % にもものぼる「いいえ」は、「べきかどうかは別として、外国人がみんなドイツ語ができるとは考えていない」という反応を含んでいよう。いくつもの言語が境を接し、ことばの通じない人間に相対することが日常のこととなっている人々にとっては、意識というよりは、現実なのかもしれない。

これに対して、日本人に対する質問文は、「べきだと期待する」方の意味だけであるから、40 % 前後を占める「はい」は、本当に「外国人は日本に来たら日本語を話せ」と考えていると見てよからう。

在日外国人の反応も顕著に肯定的である。英語の質問文は、「べきだと思うか」の意味であるから、日本人の反応の方に近くさらに肯定的ということになろう。被調査者の多くは、何らかの形で日本語を学習しており、このような意識を持つのは当然かもしれない。東京のまん中で日本語などとは無縁の生活をしている外国人の意識など聞きたいものである。

属性による違いについて補足すると、日本人と在日外国人の学生に男女の差が見られた。表 2-20 に示すとおりである。日本人学生では男の方が「べきである」意識が強く、在日外国人学生では、逆に、女の方が「べきだ」とする意見が多い。これをどう解釈すべきかは分からないが、ひとつ言えることとして、日本人学生は、大学で外国語の学習はしているとしても、実際に外国語の中に

表 2-20 外国人は滞在している国のことばを話すべきか (2)

	は い		い い え		人 数	
	日本人学生	在日外国人学生	日本人学生	在日外国人学生	日本人学生	在日外国人学生
男	51.8	49.4	30.3	34.9	284	83
女	33.3	58.3	41.3	21.9	303	96

いるわけではないのに対して、在日外国人学生は留学生として来日し、現実に日本語という外国語の中で奮闘しているという点である。この点を考えると、日本人の男子学生は、「ひとごとだと思って『べきだ』と言っている『理想派(からえぱり型)』」であり、女子留学生は「そのために日本に来たのだからしっかり勉強しなきゃという『現実派(順応型)』」なのかなどという想像が湧いてくる。日本人の女、留学生の男はそれぞれその逆だと見れば、「男はからえぱり型、女は順応型」ということになるがどうであろうか。

(2) 外国人も母語話者と同じくらい上手に話せるようになって思うか

実際の質問は、日本人と在日外国人に対しては、「日本人と同じくらいに日本語が上手になるか」、ドイツ人に対しては、「ドイツ人と同じくらいにドイツ語が上手になるか」という個別的なものであった。その結果を表2-21に示す。各カテゴリーの選択肢は表のようにまとめたが、それぞれの質問における選択肢に用いた程度表現は、少しずつニュアンスが違う。「ほとんどの人が」としたカテゴリーは、ドイツ語の *sehr oft*、英語の *most people* をまとめたものである。以下同様に示すと、「かなりの人が」は、*manchmal, many people*、「なる人は少ない」は、*sehr selten, very few people* をそれぞれまとめたものである。それぞれの程度表現が等価であるかどうか、厳密には検討を要しよう。とくに、ドイツ語の *manchmal* が、*many* あるいは「かなりの」に相当するかどうか、

表2-21 外国人は母語話者と同じくらいに上手に話せるようになって思うか

		ほとんどの 人になる	かなりの 人になる	なる人は 少ない	なる人は 全然いない	わからない	その他・ 無回答	人数
社会人	日本人	11.9	58.7	24.9	—	4.1	0.4	511
	ドイツ人	26.6	46.8	21.1	4.6	0.9	—	218
	在日外国人	6.8	20.5	65.4	3.9	2.4	1.0	205
学生	日本人	10.4	50.1	34.2	0.2	4.9	0.2	587
	ドイツ人	15.2	50.5	26.7	7.6	—	—	105
	在日外国人	6.1	38.5	45.8	5.0	2.2	2.3	179

問題が残る。しかし、ここでは一応相対応するものとして上のようにまとめた。

「ほとんどの人がなる」と「かなりの人がなる」の二つを「肯定的」と考え、「少ない」と「全然いない」を「否定的」とすると、日本人とドイツ人とはかなり「肯定的」で、在日外国人のうち、社会人は「否定的」で、学生は半々や「否定的」と言うことができよう。上の(1)の場合と同じく、日本人とドイツ人とは自国語の中で生活しており、現在外国語に直面していないのに対して、在日外国人は、目下、日本語という外国語の中で生活しているという状況の相違は考慮に入れる必要はあろう。

日本人とドイツ人は同程度に「肯定的」と見えるが、カテゴリーごとに見ると多少の違いがある。「ほとんどの人がなる」と「全然いない」という、それぞれの極端を示すカテゴリーでドイツ人の方が多いことと、その逆で、「かなり」「少ない」という中間的程度を示す表現に対しては、反応がやや少ないことが目につく。ドイツ人の方が肯定、否定の態度がはっきりしているということだろうか。あるいは、「ほとんど」という程度表現と *sehr oft* という程度表現のニュアンスの違いによるものであろうか。また、「全然いない」のドイツ語選択肢は *nein* であった。日本語で「全然いない」と否定するには、かなりの勇気が必要であるが、ドイツ語の応答詞の場合はどうであろうか。一般に、返答をするときは、*ja* か *nein* で始めなければならないとすれば、多少の可能性は捨象して *nein* と始めなければなるまい。したがって、肯定、否定が結果としてははっきりと出るということになるわけである。

(3) 外国人がまちがえたら訂正するか

「顔見知りの外国人が、まちがった日本語で話したら、直ちに訂正しますか」という質問をした。ドイツ人に対する質問文もこれとほぼ同じもので、「日本語」の部分で「ドイツ語」と変えたものであった。在日外国人に対しては、「日本人の知合いに日本語で話していてまちがえたとき、その人は直してくれますか」という立場を変えた質問をした。日本語文の中の「直ちに」が、英語の中に入られていない点では、質問文は同じではない。その結果を日独英合わせて示したのが表 2-22 である。

表 2-22 外国人がまちがえたら訂正するか

		する・することが多い	ときどきする	まれにしかしない	しない	わからない・その他	無回答	人数
社会人	日本人	19.5	16.8	12.9	19.0	25.1	6.7	511
	ドイツ人	15.6	45.0	15.6	17.4	6.5	—	218
	在日外国人	2.9	17.1	36.6	32.7	9.3	1.5	205
学生	日本人	24.1	25.2	14.8	11.9	23.9	2.4	587
	ドイツ人	12.4	54.3	23.8	8.6	1.0	—	105
	在日外国人	6.7	26.3	39.1	24.0	3.9	—	179

第1のカテゴリー「する・することが多い」には、日本語と英語の選択肢二つ、「必ずする」／yes,always と、「することが多い」／usually とをまとめて示した。ドイツ語は ja のみである。「ときどきする」には、ドイツ語の manchmal, 英語の sometimes を当て、「まれにしかしない」には, selten, rarely を, 「しない」には, nein, never をそれぞれ対応させた。

「する」と「ときどきする」を「肯定的」反応とすると, 社会人, 学生とも日本人よりドイツ人の方がよく訂正すると意識しているように見える。しかし, 選択肢別に見ると, 「することが多い」と積極的な反応を示したのは日本人に多く, 「ときどきする」とやや消極的なものがドイツ人に多い。筆者の経験からも, 外国人と話をしていて誤りがあったとき, それをその場で訂正するのは案外と難しいものである。話の流れが必ずそこで途切れてしまうからである。日本語教育にかかわるものの態度としては, 多少のことをおいても訂正すべきだと思うのだが, そのタイミングをとらえるのはやさしくない。そのような目でこの結果を見ると, ドイツ人の反応が他の質問に対する答と違って歯切れが悪いのは, 現実の経験に裏打ちされたものだからであろうという推測が成り立つ。ドイツの大学はいずれも外国人留学生の数が多く, また, 市役所職員の調査をしたマンハイム市も, 外国人の多い町であることから, 彼等は常日ごろ「まちがったドイツ語」を話す外国人に多く接していると考えられるからである。

否定的な反応は, 日独ともに同じ程度と言うことができよう。「わからない」

について、日本人の反応が多いのが目立つ。記入欄に書き込んでもらったものを見ると、そのほとんどが「実際に、顔見知りの外国人がいないから分からない」というものであった。社会人はともかくとして、学生でも4分の1が「経験がない」と答えている点はいささか気になる。「国際化」が叫ばれている今日ではあるが、大学キャンパス内での「国際化」はいまだしということなのであるだろうか。

在日外国人の回答は注目すべきである。「その他」「無回答」は別として、日本人の意識と比較して「否定的」な反応が非常に多い。「ときどきする」がほぼ等しくなっているが、「する・することが多い」では、全くちがった反応をしていると言ってよい。日本人が意識として「訂正する」と思っているのに反して、実際にはあまり訂正していないということであろう。もちろん、外国人の側にも、実際は直されているにもかかわらず、それが意識として顕在化せず、「直してくれない」という一種の被害者意識のようなものがあるかもしれないという疑問も残るが。

(4) 片言で道を聞かれたら

「外国人に片言の日本語で道を聞かれたら、どうしますか」という質問をした。ドイツ語の質問は、Was machen Sie, wenn Sie von einem Ausländer in gebrochenem Deutsch nach dem Weg gefragt werden? とした。翻訳対応には問題がないと思われる。在日外国人に対する質問は、上の(3)と同じく、立場を変え、「日本人はどう思うか」というものにした。質問文は、If you were to use broken Japanese in asking directions, how do you think a Japanese person would react? (あなたが道を聞くときに片言の日本語を使ったとすると、日本人はどう反応すると思いますか) である。

結果を表2-23に示す。各選択肢はやや長いものを用意した。表にまとめた各カテゴリー名との対比を以下に示しておく。

「ふつうの速さで」

日：ふつうの日本語で道を説明する

独：Ich erkläre ihm den Weg in normal gesprochenem Deutsch,

英: He would give directions as though he were speaking to a native.

「ゆっくりと」

日: とくにゆっくりと, はっきりした日本語で, 道を説明する

独: Ich erkläre ihm den Weg in besonders langsam und deutlich gesprochenem Deutsch.

英: He would speak slowly and clearly in giving directions.

「片言で」

日: 片言の日本語で話す (さもなければ通じないと思うから)

独: Ich spreche auch gebrochen, weil er mich sonst nicht verstehe.

英: He would give directions in broken Japanese (thinking that standard Japanese would not be understood).

「英語で」

……省略……

「その人の言語で」

日: 何語が話せるか確かめて, もしそのことばができれば, そのことばで道を説明する

独: Ich vergewissere mich, welche Sprache er sprechen kann; wenn ich die Sprache verstehe, erkläre ich ihm den Weg in dieser Sprache.

英: He would ask what language you could speak and if he knew that language he would use it in giving directions.

「何も言わない」

日: 何も言わないで (あいまいに, にやにやしながら) 手を左右に振って逃げる

独: Ich sage, er soll jemanden anders fragen. (だれかほかの人に聞くようにと言う)

英: He would grin evasively and saying nothing, walk away waving his hand in front of him to the right and left as though clearing a pass.

(その日本人は, 逃れるように, 何も言わないでにやりと笑い, 道をあけろという風に手を自分の前で左右に振りながら行ってしまう)

表 2-23 片言で道を聞かれたら

〔複数回答〕

		ふつうの 速さで	ゆっくりと	片言で	英語で	その人の 言語で	何も言 わない	その他・ 無回答	人 数
社 会 人	日 本 人	10.2	61.1	4.7	6.7	10.4	2.2	4.9	511
	ドイツ人	11.0	66.1	5.5	3.7	42.2	—	0.5	218
	在日外国人	43.9	34.6	12.7	27.8	2.0	11.7	6.3	205
学 生	日 本 人	4.4	61.2	3.4	6.1	15.8	0.5	8.5	587
	ドイツ人	8.6	67.6	1.9	1.9	52.3	—	—	105
	在日外国人	26.8	50.3	8.9	17.9	5.6	5.0	6.7	179

「何も言わない」が日英と独とでかなり違っているほかは、ほぼ似た選択肢であると考えてよからう。なお、日本人調査では複数回答が無視できるほど少なかったのに対して、ドイツ人、および在日外国人の調査ではかなり多く、したがって、合計が100%を超えている。

日本人とドイツ人とを比べると、どちらも「ゆっくりと」が最も多く、同じ程度の値を示している。「ふつうの速さで」はともに少ない。学生の方が、日独とも社会人より低くなっている。相手が片言だからこちらも「片言で」返そうというのは、日独ともに低い。「英語で」という反応が日本人でやや高く、ドイツ人で低い点が注目される。実際にできるかどうかは別として、「外国人」とみたらすぐ「英語」と結びつける人の割合が学生、社会人とも6%強いるということである。「その人の言語で」だけは日独で大きく違っている。「何も言わない」という人は少ないが0ではない。実際にはよくあるのではないかと考え選択肢に加えたのであるが、意識としてはそのような行動はとらないと考えているのであろう。

在日外国人の回答は、複数回答が多く、日本人の回答とすぐさま対比することはできないが、その違いがかなり大きい点は、注目してよからう。「ふつうの速さで」と感じるのとはそれぞれの日本語能力とも関係があるかもしれない。外国語（方言なども同じであろうが）は、よくできないと速く感じられるということは言えよう。「片言で」というのが多い点、日本人の意識と少し違う。「英

語で」というのが、日本人の意識よりかなり多い点も注目されよう。実際には、日本人は、意識する以上に英語を口にしてしているのかもしれない。「その人の言語で」という回答は、日本人の意識では「英語で」より多いということになっているが、外国人の意識には、そのようにして答えてもらったという印象は薄いようである。とくに、この被調査者は英語話者であるから、「英語ができるか」とたずねるまえにいきなり英語で道を教える日本人が多いという風に考えられているということになる。「何も言わない」で行ってしまう日本人がいるという反応が、社会人で10%強、学生で5%見られる。日本人の意識にはごくわずかなが、外国人の側からすると、かなり経験しているということであろうか。

2.2.3. ドイツ人のドイツ語意識

ドイツ人が自分たちのことばであるドイツ語に対して、どのような意識を持っているかという観点から、いくつかの質問をした。今回の調査はドイツ人にだけ行ったが、国立国語研究所がこれまでに国内で行った調査に類似のものがあるので、日本人との比較も適宜行うことにする。

(1) ドイツ語をどう思うか

表2-24から表2-28までに示した一連のものは、「ドイツ語についてどう思うか」と「ラジオやテレビのアナウンサーのことばをどう思うか」という二つの質問に対する回答をまとめたものである。この質問は、国立国語研究所(1981)のために行ったものをもとにしたもので、これと比較するために、質問文、評定語ともできる限りそろえるように配慮した。表に示した評定語は、上に述べた前回調査のものをそのまま用いた。ドイツ語の評定語をこれと対比させて示しておく。以下の分析では、各対の左側の反応を「プラス評価」、右側の反応を「マイナス評価」と仮に呼ぶことにする。

◦軽快だ	——	重苦しい	leicht	——	schwer
◦聞きやすい	——	聞きにくい	deutlich	——	undeutlich
◦きれい	——	きたない	wohlklingend	——	grob

- 好き ——— きれい angenehm ——— nicht angenehm
 ○論理的 ——— 非論理的 logisch ——— unlogisch
 ○どちらでもない weder noch

「軽快か」「聞きやすいか」「きれいに聞こえるか」の三つは、「ドイツ語」「アナウンサーのことば」のそれぞれについて質問し、「好きか」は「アナウンサーのことば」だけ、「論理的か」は「ドイツ語」だけについて質問した。このうち、「論理的か」という評定語は、前掲の国立国語研究所（1981）の調査ではとりあげていない。

また、上記調査では、「山の手ことば」「下町ことば」等と「ことば」を具体的に示したが、ドイツでの調査では、「ドイツ語」die deutsche Sprache というやや漠然としたものについて問うた。したがって、被調査者が、方言的なものをも含んだ自分自身のドイツ語について回答したか、Hochdeutsch（標準ドイツ語）のような、やや一般的なものについて反応したかについては分からない。以下の分析では、便宜上「ドイツ語一般」という表現を用いることにする。

(i) 軽快か

この評定語については、「ドイツ語一般」と「アナウンサーのことば」との間で大きな違いの見られる点が特徴的である。社会人、学生とも、すべての属性

表2-24 ドイツ語・アナウンサーのことばは軽快か

		ドイツ語は			アナウンサーのことばは			人 数
		軽快だ	重苦しい	どちらでもない	軽快だ	重苦しい	どちらでもない	
社 会 人	全 体	12.8	58.7	24.3	36.7	13.3	42.2	218
	男	14.0	58.9	24.3	41.1	13.1	39.3	107
	女	11.7	58.6	24.3	32.4	13.5	45.0	111
	若	11.4	60.2	27.3	34.1	12.5	48.9	88
	中	9.1	72.7	15.9	34.1	15.9	43.2	44
学 生	壮	16.3	50.0	25.6	40.7	12.8	34.9	86
	全 体	14.2	61.3	24.5	43.3	17.9	36.8	105
	男	21.7	60.9	17.4	39.1	21.7	34.8	45
	女	8.3	61.7	30.0	46.7	15.0	38.3	60

で「プラス評価」と「マイナス評価」の割合が逆転している。すなわち、「ドイツ語一般は大いに重苦しいが、アナウンサーのことばは、それに比べてかなり軽快にひびく」というのが、ドイツ人全体に共通した意識であると言えよう。とくに、社会人の中年層と学生の女とが「ドイツ語一般」について「マイナス評価」に傾いているようである。「アナウンサーのことば」について「プラス評価」を与えているのは、社会人では男、学生では女と逆の傾向が見られる。

なお、この質問のドイツ語評定語は、先に示したように、leicht — schwer である。これらの語には、「軽い — 重い」という意味のほかに、「やさしい — 難しい」という意味もある。質問の意図とは違って、「ドイツ語は難しいか」という問と受けとられた可能性は否定できない。

日本人の評価については、前掲の国立国語研究所(1981)128 ページ以下に示されたものが参考となる。「ドイツ語一般」に対応する「日本語について」という項目がないため、厳密な対比は求められないが、「アナウンサーのことば」については、日本人の方は約6割の人が「プラス評価」をしている。ドイツ人よりかなり高いと言ってよい。「山の手ことば」を見ると、「マイナス評価」がかなり高いが、「ドイツ語一般」ほどではない。「下町ことば」は「プラス評価」が高く、「ドイツ語一般」とは全く違った傾向を示している。

表2-25 ドイツ語・アナウンサーのことばは聞きやすいか

		ドイツ語は			アナウンサーのことばは			人 数
		聞きやすい	聞きにくい	どちらでもない	聞きやすい	聞きにくい	どちらでもない	
社会人	全 体	67.4	8.3	19.3	80.7	5.0	11.0	218
	男 女	69.2	9.3	17.8	82.2	4.7	9.3	107
		65.8	7.2	20.7	79.3	5.4	12.6	111
	若 中 壮	60.2	10.2	26.1	78.4	6.8	14.8	88
		65.9	13.6	13.6	86.4	9.1	2.3	44
		75.6	3.5	15.1	80.2	1.2	11.6	86
学 生	全 体	70.8	9.4	17.9	83.0	6.6	10.1	105
	男 女	65.2	8.7	21.7	87.0	6.5	6.5	45
		75.0	10.0	15.0	80.0	6.8	13.3	60

(ii) 聞きやすいか

「ドイツ語一般」についても「アナウンサーのことば」についても、おしなべて「プラスの評価」が与えられているが、「アナウンサーのことば」の方がやや評価が高い(表2-25 参照)。年齢、性別による違いは、社会人、学生とも少し見られる。学生では男女間で評価が逆になっている。「どちらでもない」が他の質問に比べて少ない点が特徴的である。判断のしやすい評定語なのであろう。

「アナウンサーのことば」について日本人の反応を見ると、9割以上の人々が「プラス評価」を与えている。ドイツ人の方よりかなり高率と言えよう(前掲書129ページ参照)。「アナウンサーのことば」に対しては、ドイツ人もかなり肯定的だが日本人の方がさらに肯定的であるということになろう。

(iii) きれいに聞こえるか

「ドイツ語一般」についても「アナウンサーのことば」についても、「どちらでもない」が半数強を占め、この評定語 *wohlklingend* が答えにくい間違ったことを思わせる。とくに、学生の反応は6割前後になり、中立的な評価が支配的である。判定を下した人の割合は半数を割るが、その中で見ると、「ドイツ語一般」については、社会人と学生の反応が逆になっている点が注目される。社会人が「プラスの評価」をし、とりわけ、女性と年齢の高い層が肯定的なのに対

表2-26 ドイツ語・アナウンサーのことばはきれいに聞こえるか

		ドイツ語は			アナウンサーのことばは			人 数
		き れ い	きたない	どちらでも ない	き れ い	きたない	どちらでも ない	
社 会 人	全 体	27.5	11.9	54.1	44.0	3.2	44.5	218
	男	25.2	10.3	59.8	46.7	0.9	46.7	107
	女	29.7	13.5	48.6	41.4	5.4	42.3	111
	若	20.5	15.9	58.0	29.5	6.8	58.0	88
	中	29.4	18.2	50.0	54.6	2.3	38.6	44
	壮	33.7	4.7	52.3	53.3	—	33.7	86
学 生	全 体	13.2	26.4	59.4	24.5	8.5	66.0	105
	男	17.4	23.9	56.5	23.9	8.7	65.2	45
	女	10.0	28.3	61.7	25.0	8.3	66.7	60

し、学生は「マイナス評価」を下し、とくに女性がマイナスの度合いが強い。「きれい」と答えた女子学生は10%しかいない。

「アナウンサーのことば」に対しては、社会人、学生とも、「プラス評価」をする人の方が確実に多い。ここでも、「ドイツ語一般」と同じく学生の方が評価が低いが、男女を比べると、こちらでは女子学生の方がやや高くなっている。

日本人の反応を上と同じように見ると、「アナウンサーのことば」については8割以上の「プラス評価」が与えられている。しかし、前掲書130ページによれば、若い層で「プラス評価」の割合がきわめて低くなっているという。ドイツ人の場合も、社会人で若年層と学生とが、他の層よりかなり低くなっている。日独の若年層で同じ傾向を示していると言えるか。

(iv) アナウンサーのことばは好きか

表2-27 アナウンサーのことばは好きか

		好 き	きらい	どちらでも ない	人 数
社 会 人	全 体	60.1	2.3	29.8	218
	男 女	62.6 57.7	0.9 3.6	30.8 28.8	107 111
	若 中 壮	52.3 70.6 62.8	4.5 — 1.2	38.6 27.3 22.1	88 44 86
	学 生	41.5	16.0	40.6	105
学 生	男 女	34.8 46.7	21.7 11.7	39.1 41.7	45 60

この質問は「ドイツ語一般」については行わなかった。社会人では、おおむね肯定的で、「どちらでもない」は3割前後であるが、「きれい」というのはごくわずかであった。学生は、「プラス評価」の割合がかなり減り、「中立的」な意見と相半ばしている。「マイナス評価」

も増加している。

日本人調査と比べると、全体ではドイツ人の方に「好き」の率が高い。ドイツ人学生では「好き」の率が下がっていて、日本人の若年層の傾向と一致している。直接に「同じ」とは言えないが、世代的な傾向なのかもしれない。

(v) ドイツ語は論理的か

「ドイツ語一般」についてのみ行った質問である。また、前掲書の中にもこの質問はなされていない。社会人で「論理的」とする意見が4割程度見られるが、学生では4分の1ほどしかない。「どちらでもない」という反応が多く、回

答のしにくい質問だったの
 だろう。「論理的でない」
 とする意見が、社会人で2
 割弱、学生では「論理的だ」
 とほぼ同率の25%程度見
 られる点注目される。

(2) 標準ドイツ語と方言
 標準ドイツ語と方言とに
 ついて、経験や意識を聞く

質問をいくつか行った。以下、それぞれについてあらましを報告する。

(i) 標準ドイツ語を話すか

Sprechen Sie Hochdeutsch? という質問である。答は、

	話す	話さない
社会人 (218 人)	65.6 %	34.4 %
学 生 (105)	76.4	23.6

となっている。この場合、「話している」のか、「話せるけど話さない」のか、「話せない」のかは明確でない。社会人より、学生の方が標準ドイツ語よりだと言える。男女でみると、社会人、学生ともに女性の方が標準語よりの傾向が見られた。とくに、女子学生は、「話す」が81.7%、「話さない」が18.3%と大きくひらいていた。

「話さない場合、日常話すのはどの地域のことばか」という二次質問をした。「北部ドイツ語」と「南部ドイツ語」という大まかな区分を回答してもらった。結果は、すべての人が「南部ドイツ語」を使うということであった。調査した地域が、マンハイム市、ハイデルベルク市周辺の南部ドイツ語圏内が多かったから、当然かもしれない。

(ii) 子供のとき身につけたことばは

これも、北部ドイツ語か南部ドイツ語かという大まかな区分で質問した。「北部ドイツ語」は、社会人で218人中29.4%、学生では105人中46.2%、「南部

表 2-28 ドイツ語は論理的か

		論理的だ	論理的で ない	どちらで もない	合 計
社 会 人	全 体	44.0	17.4	33.0	218
	男	48.6	17.8	29.0	107
	女	39.6	17.1	36.9	111
	若 中 壮	26.1 45.5 50.0	19.3 27.3 10.5	40.9 22.7 30.2	88 44 86
学 生	全 体	25.5	24.5	47.2	105
	男 女	32.6 20.0	17.4 30.0	45.7 48.3	45 60

ドイツ語」は、社会人 64.7 %, 学生 49.1 %となっていた。調査した地域が一か所ではないため、それぞれの出身地がこの数字の上に反映しているということであろう。

(iii) 子供のとき身につけたことばと、現在使っていることばとの違いは
 選択肢は4段階として、「全くない」「わずか」「中くらい」「大いに」とした。「全くない」としている人は4割くらいいて、社会人の方にやや多く、「わずか」「中くらい」とする人が、社会人、学生ともそれぞれ2割前後あった。「大いに」違うという人は、社会人では1割に満たないが、学生では2割弱あった。方言の違いを感じるのは、その人の地理的な移動に起因するとすれば、学生の方がよく動いているということであろうか。男女の違いを見ると、女性の方が「違いが少ない」という方に傾いていた。上の「移動」という観点で見ると、女性の方が動きが少ないということだろうか。この点は、さらに詳しい情報を得た上でなければ確実なことは言えない。

(iv) 地方に行って話が通じなかったことは
 「ない」と答えた人は、社会人で218人中78.9 %, 学生で105人中74.5 %であった。「ある」という答が、社会人で18.3 %, 学生で24.5 %であった。学生の方がわずかに方言で苦労した割合が多いと言えようか。日本での調査を行っていないので比較できないが、ドイツ語圏内の方言差も相当なものであるから、2割前後の人が話が通じなかった経験を持っているのは、興味ある結果である。

筆者の経験でも、南ドイツ Füssen の居酒屋で、となり合わせに座った地元の老人たちと少しも話が通じなくて、反対側の北ドイツハンブルクから来たという若者に助けを求めたところ、その若者も「私にもちっとも分からない」という答が返ってきたことがあった。こちらは一応標準ドイツ語風に話し、通じたのだが、向こうの言うことが分からないわけである。

疑問文の「話が通じる」という動詞は、sich verständigen を用いた。再帰動詞であるから、「互いに分かり合う」という意味である。こちらの言うことが向こうに通じなかったのか、向こうの言うことがこちらに分からなかったのかは不明である。

(3) „Sie“ と „du“ との使い分け

ドイツ語には, „Sie“ と „du“ という二つの人称代名詞があり, 敬語の一種として使い分けられている。このことに対する意識を聞いた。「ドイツ語には Sie と du の二つがある。しかし, 英語には you という形一つしかない。このことについてどう思うか」という質問である。この質問は国語研究所が日本国内で行ってきたいくつかの社会調査でも, 英語の you 1 形に対する日本語の人称代名詞の多様性という観点からとりあげてあり, 国立国語研究所 (1981) にもその結果についての言及がある (276 ページ)。

表 2-29 „Sie“ と „du“ の使い分けは [複数回答]

		2 形併用 が よ い	一方のみがよい		どちらで も よ い	無回答・ そ の 他	人 数
			Sieにする	duにする			
社 会 人	全 体	55.5	2.8	28.4	12.4	0.9	218
	男	57.0	0.9	24.3	15.9	1.9	107
	女	54.1	4.5	32.4	9.0	—	111
	若	47.7	1.1	38.6	11.4	1.2	88
	中	47.7	2.3	29.5	18.2	2.3	44
	壮	67.7	4.7	17.4	10.5	—	86
学 生	全 体	48.6	—	31.4	16.2	3.8	105
	男	53.3	—	35.6	8.9	2.2	45
	女	45.0	—	28.3	21.7	4.0	60

結果を表 2-29 に示す。これによると, 2 形併用を是認する割合は半分をやや超えたところと言えよう。日本では「人称代名詞使い分け賛成」が 4 分の 3 を占める (前掲書 276 ページ) ことと比較すると, 日本の方が現状肯定型と言えようか。もちろん, 日本語の人称代名詞の多様性とドイツ語の Sie と du の併存とを同じレベルで云々することはできないが, 興味ある結果ではある。

「一方のみがよい」とした人に対して, さらに, 「それでは, Sie か du か」という質問を重ねた。ここに示した数字は, 全数に対するそれぞれの割合であるが, 「1 形がよい」という人だけの割合で見ると, du が圧倒的に多いと言えよう。

とくに、学生では、「Sie だけがよい」という人は全く見られない。

「どちらでもよい」は、ドイツ語で mir egal(私にとって同じ)としたものであるが、「2形」対「1形」についてどちらでもよいのか、Sie 対 du について中立なのかが分からない設問となってしまった。このカテゴリーは意味を求めることはできない。

(4) ドイツ語はどの分野で国際的に重要か

「ドイツ語はどの専門分野で国際的に重要だと思うか」という質問をした。「国際的」は international という語を用いたが、この語を聞いたとき、どのくらいの世界を思い浮かべるかは不明である。調査してみなければ分からないことであるが、日本人ならば、「国際的」というと、まず、欧米を思い出すのではないだろうか。ドイツ人の場合、逆に、極東を思い出すとは思えない。ヨーロッパ世界内の数か国という可能性は否定できまい。南ドイツのバーデンバーデンから放送されているラジオ局は、番組の切れ目ごとに internationale Sendung (国際放送)という標語をくりかえし、「この放送の聞こえる範囲は南西ドイツ、スイス、オーストリア・チロル地方」と毎日宣伝していた。車で数時間の範囲でも international なのである。

ともあれ、上の質問に対する結果を表 2-30 に示す。

表 2-30 ドイツ語はどの分野で重要か

[複数回答]

		政治・ 経 済	哲学・ 文 芸	自然科学 ・ 数 学	工業・ 技 術	医 学	その他	無回答	人 数
社 会 人	全 体	38.1	58.3	17.0	39.0	15.1	6.0	7.3	218
	男 女	33.6	57.9	18.7	37.4	12.1	10.3	7.5	107
		42.3	58.6	15.3	40.5	18.0	1.8	7.2	111
	若 中 壮	42.0	56.8	14.8	33.0	15.9	3.4	8.0	88
		43.2	61.4	13.6	40.9	4.5	4.5	9.1	44
		31.4	58.1	20.9	44.2	19.8	9.3	5.8	86
学 生	全 体	34.3	77.1	11.4	26.7	7.6	5.7	3.8	105
	男 女	44.4	80.0	11.1	31.1	8.9	4.4	2.2	45
		26.7	75.0	11.7	23.3	6.7	6.7	5.0	60

選択肢は表に示したものと同じで、5項目と「その他」とした。複数回答がかなりあったため、合計パーセンテージは100を超えている。

ドイツ語との結びつきが最も強いと考えられる分野は「哲学・文芸」である。社会人より学生の方が多くなっている点に注目したい。調査対象が主として文科系学生だったことによるのかもしれないが、かなりの高率である。つぎに重要と考えられている分野は、社会人では、「工業・技術」と「政治・経済」とが同程度となっているのに対して、学生では、「政治・経済」の方が高くなっている。やはり、被調査者の専攻分野との関連を考えるべきであろう。社会人の「工業・技術」と「政治・経済」とを年齢別に見ると、若い世代は「政治・経済」の方に向き、上の世代は「工業・技術」の方に向いている。戦後の経済復興を工業生産を以て支えてきた世代と、ドイツが西側世界で政治的に大きな発言力を持ってきた現代を生きる若者との意識の違いなのであろうか。

「自然科学・数学」「医学」の分野での期待度は低い。日本などでは、いまだに「ドイツ医学」に対する信仰にも似た期待感があるようであるが、彼等自身は、それほど期待していないということであろう。とくに、学生の支持が非常に少ない。調査したいくつかの大学のうちのひとつは、医学部で有名なハイデルベルク大学であったにもかかわらず、支持率は高くない。ドイツ医学が下火と感じられているのであろうか、それとも、研究は大いに発展するが、英語などの言語が共通語になると考えられているのであろうか。

2.3. 在日外国人の日本人 および日本語との接触

2.3.1. 日本人との接触度

この節の調査目的は、英語を母語とする在日外国人が日本語をどのように、どの程度、学習し、どう使っているか、および、どの程度、日本人と接触しているかを調べることである。ここでは、在日外国人を、主として、社会人と学生に分けて考察するが、場合によって、性別の考察も加える。なお、被調査者の総数は 384 名、内訳は社会人 205 名、学生 179 名である。

(1) 日本語の学習経験

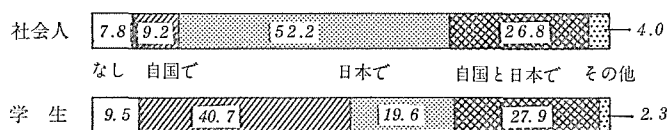


図 2-31 日本語の学習経験

社会人、学生ともに日本語の学習経験がないと答えたのは、10 %弱で、在日外国人全体から見るとやや少ないようにも思われるが、これは、この調査が日本語教育機関を通して被調査者を集めた結果であろう。ただし、ごく短期間の滞日者を除けば、最近の外国人の日本語学習熱から考えて、在日外国人全体を調べても、日本語学習歴のない者は、20 %まではいかないだろうと思われる。学習歴なしが、社会人よりも学生に多いという、常識的な予測とは異なる結果が出ているが、わずかの差であるし、学習歴なしの総数が多いわけではないので、これだけではなんともいえない。

この図で、社会人と学生でもっとも異なるのは、来日前に自国で日本語を学習したことがあるかどうかの差である。来日前に自国で学習した者と自国およ

び日本で学習した者を加えた数字で比較してみると、36.1 %対 68.7 %となり、学生のほうが自国で日本語を学習したと答えた率が圧倒的に多い。これは、学生のほうが原則として本人の希望で来るので、来日前に準備をする余裕があり、社会人は仕事の関係で日本に派遣されることが多く準備の余裕がないことの表れであろう。

(2) 日本語学習の教師

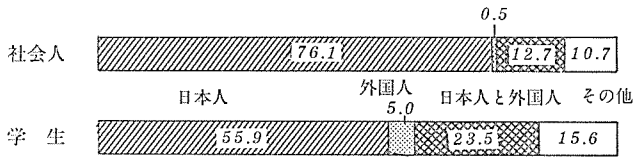


図 2-32 日本語学習の教師

日本語を学習した際の教師は、大半が日本人であったという結果が出ている。これは、日本語教育の現状を反映したもので、外国においても外国人教師がごくわずかであることの結果である。日本における英語教育の教師がほとんど日本人であるのと比較すると、日本語がまだ国際語からはほど遠いことがよくわかる。なお、学生のほうが外国人教師に教わる率が高いのは、「日本語の学習経験」の項の自国で学習した者の率が高いことに平行しているためであろう。

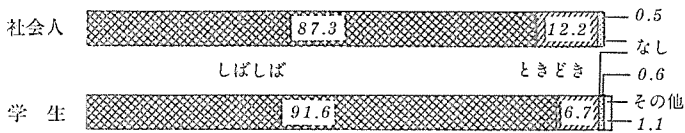


図 2-33 日本人との接触 (1)

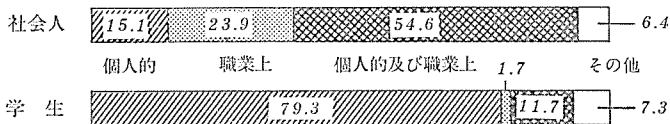


図 2-34 日本人との接触 (2)

(3) 日本人との接触

学生の「個人的なつきあい」の項には、学生同士のつきあいを含むので、社会人と学生の差は当然の結果である。図2-33のなかで、日本人と接触がないと答えた者は、人数からいえば、社会人1人、学生1人の計2人である。図2-34の社会人のなかで、個人的なつきあいしかないと答えた者を男女の性別で見ると、11.7%対20.0%で女性のほうが多い。これは、女性が家庭にいて仕事を持たない率が高いからだとも考えられるが、在日外国人女性の就職率を勘案しなければ、明確なことはいえないであろう。

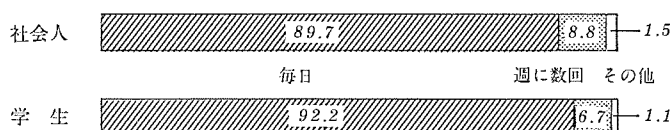


図2-35 日本人とことばをかわす頻度

図からわかるように、日本人とことばをかわす率は、総体的にいて学生のほうがわずかに高い。また、社会人では、女性より男性のほうがやや日本人とことばをかわす率が高い（毎日とはことばをかわさないと答えた者の数は、男性6.6%に対して女性15.3%）という結果が出ているが、これも女性が家庭にすることが多いことの反映であろうか。

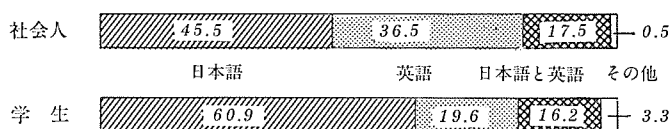


図2-36 そのとき何語を使うか

日本人と話すときに日本語だけを使う率は、社会人より学生のほうが高く、逆に英語だけを使う率は、学生より社会人のほうが高い。これは、ほぼ予測された常識的な結果であるが、(1)に述べた日本語の学習率が社会人と学生であり変わらない（日本語を学習したことがないと答えた者の比率は、社会人、学生それぞれ7.8%、9.5%で、むしろ学生のほうが高い）ことを考えると、社会人は日本語を学習しても使用する機会が少ないという傾向にあるようだ。

2.3.2. 外国人の日本語観

この項では、日本語が外国人にどのような面でむずかしい、あるいはやさしいと考えられているかを調査した結果を考察する。

(1) 外国人にとって日本語はむずかしいか

まず、最初にいわれる四技能、すなわち「話す」「聞く」「読む」「書く」の全体について見てみよう。

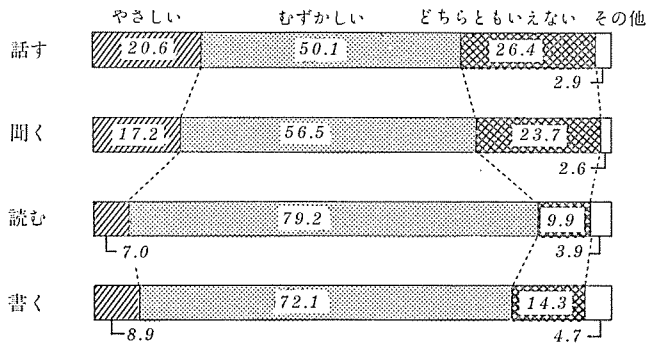


図2-37 外国人にとって日本語はむずかしいか (1)

特徴的なのは、「話す」「聞く」の話しことばの面よりも、「読む」「書く」の書きことばの面のほうがむずかしいとされている点である。一般に、日本語は多くの外国語にくらべて総体的にはやさしい言語だ(野元, 1978; 水谷, 1978)が、例外的に文字、表記に関する部分のみが他の言語に比してむずかしいといわれている。むずかしさの原因は、おもにつぎの4点であろう。

- 3種類の文字(ひらがな, かたかな, 漢字)が常時, 使われていること。
- 漢字の字数が非常に多く, 外国人学習者にとっては, 事実上, 無限に近いこと。
- 語によって, 2種類, 場合によっては, 3種類の文字(かき/カキ/柿など)を使って書き表せること。そのため, どの種類の文字を選択するか

がむずかしいこと。

d. 文章を書く際に、一般的にはわかち書きをしないこと。

このうち、a.とc.は、日本語以外の他の言語にほとんど見られない特徴である。

外国人学習者にとって、日本語の文字に関してもっともむずかしいのは、c.の点のようである。c.は、文字だけに関してばかりでなく、むしろ、日本語学習全体のなかでの最大の難関になっているらしい。日本語の学習歴が長く、すべての面で日本語をマスターしたと考えられる外国人に、「自分が日本語をものにしたと感ずるようになったのは、どういうときだったか」と質問すると、c.の点について自信ができたときだと答える人が多い。また、学習者のなかには、話すことについてはほぼ問題がないが、書く能力が極端におちる者がかなりいる。

d.も、初期の学習者にとっては、読みの面でむずかしいと感ずる原因になるう。

「読む」と「書く」を比較すると、「読む」のほうがむずかしいという、常識とは反する結果がでている。わずかな差なので、意味があるかどうか不明であるが、もし、説明をつけるとすれば、今回の被調査者が初心者が多く、書きのむずかしさが問題になるレベルまで達していなかったということであろうか。

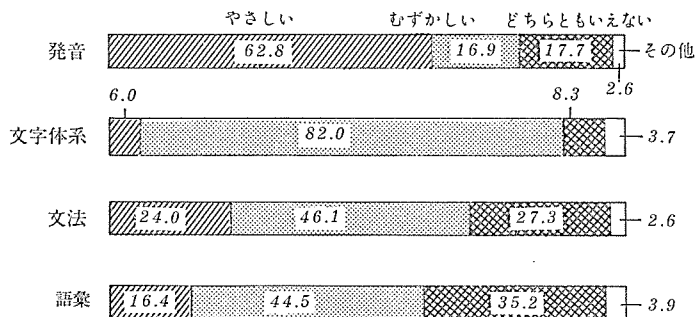


図2-38 外国人にとって日本語はむずかしいか (2)

発音については、60%以上の者がやさしいと答えている。発音 pronunciation がむずかしいかと聞かれた場合、被調査者にとってすぐに理解されるのは、個々

の音のことであったとすれば、たしかに日本語の音はやさしい。しかし、モーラの感覚、アクセントなどの問題に関しては、日本語は、とくに英語を母語とする者にとっては、さほどやさしくないはずである。

文字体系については、「読む」「書く」とほとんど同じ数字が出ている。

文法がむずかしいと答えた者は、50%以下である。発音の結果とあわせて、日本語の音体系、文法体系は、やさしいという考え方が実証されたことになると見られる。

語彙についても、文法とほぼ同様の結果となった。語彙あるいは語彙体系の難易度は、なかなか測りにくいから、たとえば、語彙のカバー率、すなわち頻度の高いほうから順に一定数の語をとった場合に、新聞など使われている総語彙の何%をカバーするかという点から、日本語と英語、フランス語などを比較すると、日本語がカバー率がもっとも低いということがわかっている（野元、1978）。カバー率が高ければ、覚えなければならない語彙の数が少なくてすむわけだから、カバー率が高いことがその言語の語彙体系がやさしいことだといえる。とすれば、日本語の語彙はむずかしいということになる。しかし、外国語学習者が感ずるむずかしさ、やさしさとカバー率がどれだけ関係しているかは、かなり疑問であろう。

語彙がやさしいと判断された背景には、文法のやさしさが影響している（たとえば、日本語の動詞には人称変化のパラダイムがない）可能性があるし、発音のやさしさが影響している可能性もある。いずれにせよ、語彙の難易度の問題は、今後検討が必要であろう。

今回の調査では、四技能、発音、文字、文法、語彙のほかに、日本語の特徴的な点のいくつかについて難易度を質問している。とりあげた項目は、肯定・否定の応答の区別、敬語の用法、二人称名詞の用法、男女の話し方の違いの4項目である。

日本語は、否定疑問に対する応答詞の用法が、英語などと異なるとされている。たとえば、「行かないんですか」に対する答は、日本語では、「はい、行きません」か「いいえ、行きます」であるのに対し、英語では、“No, I won't”か

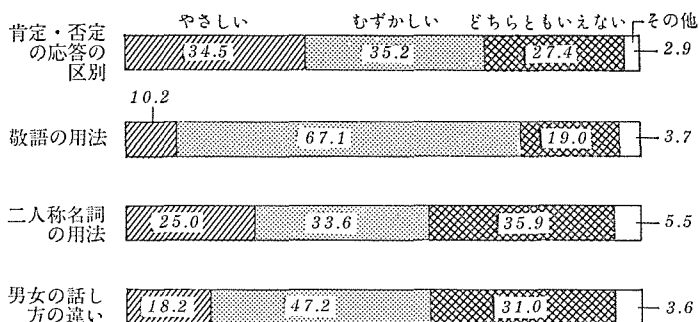


図 2-39 外国人にとって日本語はむずかしいか (3)

“Yes, I will”である。また、

「山田さん、今晚、いっしょに食事しないか」

「はい、今日はちょっと先約があって……」

などのように、拒否する場合であっても、「はい」という返事をすることがある。この種の「はい」は、正確には質問に対する返事ではなく、あいての問いかけに応答する用意があることを示すサインであって、もし英語に訳すならば、“well”などに相当する。外国人が日本人の“yes”“no”がはっきりしないというのは、否定疑問に対する応答詞の用法に迷うからではない。実際には、日本人も否定疑問に対して、否定で答えるときに常に「はい」を使うわけではないし、また、外国人が英語式に“no”で答えても、日本人に理解ができないことはなく、コミュニケーション上の障害が生ずることも少ない。むしろ、外国人にとってむずかしいのは、例にあげたような、あいての問いかけに応答する用意があることを示すサインとしての「はい」の用法である。

肯定、否定の応答の区別に関する質問に対しては、図 2-39 のような数字が出ている。

この回答で見るかぎり、「やさしい」「むずかしい」「どちらともいえない」がほぼ均等で、かならずしもむずかしいという意見ではないようだが、質問のしかたによっては、「むずかしい」という答が多くなることも考えられる。

敬語の問題も、外国人が日本語を学ぶ際の難関の一つであるが、これについては、70% 近くの者が「むずかしい」と答えている（図 2-39 参照）。この数字

を予想どおりと見るか、予想より低いと見るかは、判断のわかれるところであろう。筆者は、予想より低いと考えるが、こうした結果が出たのは、日本語のように、形式として敬語表現が固定している言語と、英語のように、敬語表現はあっても形式として、固定していない言語では、むしろ形式として固定していない言語のほうがむずかしい面があることの反映であろうか。

日本語の二人称名詞および「あなた」に相当する語には、「先生」などをはじめとしていろいろなものがあり、しかも、もっとも基本的なものと考えられる「あなた」は、用法がかなり限られている。これに関する結果は、図2-39のとおりで、「むずかしい」という答は、あまり多くなかった。

男女の話し方の違いについては、約半数の者が「むずかしい」と答えている(図2-39参照)。これに関して興味深いのは、性別では女性のほうが、「むずかしい」と答えた者の率がやや高い(20%対16%)ことである。日本語を教えるときの一般的なスピーチスタイルは、「です・ます体」であり、普通体も最近では、かなり教えるようになってきているが、いわゆる女性ことばはほとんど教えていない。女性の日本語学習者は、日本人女性のことばに魅力を感じるのであろうか。

なお、以上のほかにその他の日本語に関してむずかしいと感ずる点を自由に記入してもらったが、そのなかでは、次のような項目が目立った。

1. 方言の違い
2. 主語や文末の省略などによる表現のあいまいさ
3. スピーチレベルの違いとその適切な用法

方言の違いについては、今回の調査の対象として関西地区の外国人が多かったために、目立ったものであるが、イントネーションのむずかしさなどをとくにとりあげた者が多かった。外国語の学習者が、学習していることばをあいまいだと感ずるのは一般的な傾向であるが、日本語の場合とはくに主語、文末の省略、コンテキストに依存する表現が多いなどの例をあげて、わかりにくいと指摘する者があった。スピーチレベルの問題については、敬語、男女差とも関係するが、シチュエーションによってこまかくレベルの調整をしなければならぬことが困難の理由のようだ。また、この点については、日本語教育の場で

教わるレベルと日常生活でのレベルとが違うという、日本語教育への不満が目立った。

(2) 在日外国人の読み・書き能力

被調査者の現在の文字の読み・書き能力に関して、質問した。

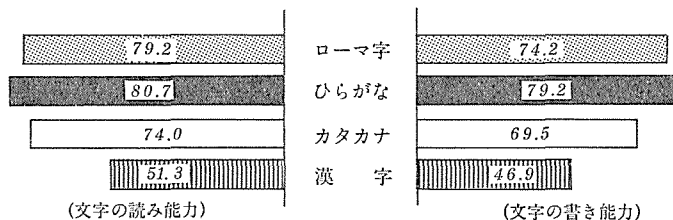


図2-40 在日外国人の文字の読み・書き能力

文字の読みについては、ローマ字が読めると回答した者が全体で約80%（社会人70%，学生89%）しかなかったことが特徴的であった。最近の日本語教育では、ローマ字を使用していない教科書を用いることが多くなったことの表れであろう。

全体にこの項目については、社会人と学生に落差があり、とくにひらがなに関して、読めると答えた者が、社会人71%に対して、学生では91%になっている。これは、社会人一般に会話の必要性を強く感じていて、読み・書きにあまり関心がないことを示している。

漢字については、学生、社会人ともに約半数が読めると答えている。先の日本語のむずかしさからもわかるように、漢字は日本語学習者にとっての大きな関門であるようだ。

文字の書きについても、読みとほぼ同様の結果が出ている。読みと書きを全体として比較してみると、書きのほうがやや低いが、ほぼ同様の数字が出ていて、読めればだいたい書けるということを示しているようだ。

(3) どの程度、日本語がうまくなりたいか

この項目については、次のような選択肢を用いて質問した。結果とともに示

す。

1. 日本人と同じ日本語能力
2. 日常生活でのコミュニケーションが無理なくできる程度の日本語能力
3. 日常生活で必要な最低限のコミュニケーションができる程度の日本語能力
4. 日本の文化を知るために必要な程度の日本語能力
5. 専門分野の研究を遂行するのに十分な、主に読みを中心とした日本語能力

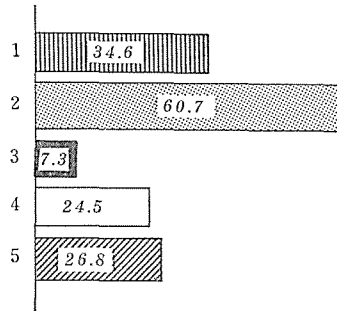


図 2-41 どの程度、日本語が
うまくなりたいか

なお、ここでは複数回答を許しているので、上にあげた数字は、その選択肢にチェックをつけた人数の、全体に対する%を示す。また、上記の選択肢のほかに「友達に自慢するなどの好奇心を満たせる程度の日本語能力」という選択肢も用意したが、この選択肢のみにチェックした者はいなかったこと、他の選択肢と複数回答した者も4名にすぎなかったことにより、ここでは省略した。

文字に関しては、漢字が読めるようになりたいという答が約75%、同じく書けるようになりたいという答が約60%であった。先の自己の日本語能力の評定の項で、漢字の読み書きができると答えた者の割合がともに50%程度だったのに比べ、希望する能力の面では、読みよりも書きのほうが低いという結果が出たことが注目される。

2.4. 在日外国人からみた

日本人・日本文化

この節では、欧米とは異なる日本文化、およびこれに伴う日本人の行動に対して、在日外国人がどうみているかを尋ねたいいくつかの項目について述べる。ただし、ここで扱う在日外国人は、1.3.で述べたように、日本語教育関係者および日本語教育機関に所属する留学生が大半であるため、以下の結果をもって在日外国人全般を云々しない点もあることに留意されたい。

2.4.1. 日本文化に対する好み

ここでは、日本を訪れた外国人が新しく経験する日本文化のうち、日本食、住居（宿）および歌舞伎・能などの伝統文化に対する好みを取り上げる。

（1）日本食が好きか

質問文：あなたは日本食が好きですか

選択肢：①非常に好き ②好きなほう ③きらいなほう ④好きでもきらいでもない

この質問に対する回答結果は表 2-42 に示すように、日本食が「①非常に好き」という回答は社会人の 57 %，学生の 69 % にのぼっている。——これに「②好きなほう」を加えると共に 90 % を超える。

「非常に好き」の割合を属性別にみると、性別では女のほうが、社会人・学生別では学生のほうが、それぞれ他よりも 1 割前後多くなっている。また、日本での生活期間別にみると、

表 2-42 日本食が好きか

		① 非常に 好き	② 好き なほう	④ どちら でもない	③ さ ら い な ほう	計
社 会 人	全 体	57.1	34.6	5.4	2.9	205
	男	50.0	40.0	6.7	3.3	120
	女	67.1	27.1	3.5	2.4	85
学 生	全 体	68.7	24.6	3.4	3.4	179
	男	62.7	28.9	3.6	4.8	83
	女	74.0	20.0	3.1	2.1	96

	0～0.5 年	0.5～1 年	1～5 年	5 年以上
社会人	45.2	54.5	56.6	65.6
学 生	66.1	67.7	72.3	

となっており、滞日年数が長くなるにつれて日本食が「非常に好き」の割合が上昇している。なお、年齢別（社会人）では、若年層 62.0%，中年層 51.4%，壮年層 57.7%で、一定の傾向はみられない。

（2）箸が使えるか

表 2-43 箸が使えるか

		① 使 え る	② あ ま り う ま く な い が 使 え る	③ へ た だ が で き る だ け 使 う	無 回 答	計
社 会 人	全 体	89.3	9.8	0.5	0.5	205
	男	90.8	8.3	0.8	—	120
	女	87.1	11.8	—	1.2	85
学 生	全 体	88.3	10.6	0.6	0.6	179
	男	90.4	8.4	—	1.2	83
	女	86.5	12.5	1.0	—	96

（注）選択肢④の「全く使えない」は各層とも皆無。

質問文：あなたは箸を使うことができますか

選択肢：①非常にうまく使える ②使えるが、あまりうまくない ③へただけど、できるだけ使っている ④全く使えない

結果は表2-43に示すように、「①非常にうまく使える」という回答が圧倒的に多く、どの層でも9割前後を占めている。最近、箸がうまく使えない日本人の増加が指摘されていることを考えると、在日外国人のこの数字は驚異的ともいえる。恐らく、この数字は箸使いの程度は別として、日本人から「箸の使い方がお上手ですね」という類いのことを言われた人の多さを示すものとみられる。

(3) 和式旅館か洋式ホテルか

質問文：日本で旅行をするとき、和式の旅館と洋式のホテルのいずれかを選ぶとしたらどちらにしますか

選択肢：①和式の旅館 ②洋式のホテル ③どちらでもよい

表2-44 和式旅館と洋式ホテルのいずれを選ぶか

		① 和 式 旅 館	② 洋 式 ホ テ ル	③ ど ち ら で も よ い	無 回 答	計
社会人	全 体	52.2	12.2	35.1	0.5	205
	男	51.7	15.0	33.3	—	120
	女	52.9	8.2	37.6	1.2	85
学 生	全 体	62.0	6.1	31.3	0.6	179
	男	59.0	6.0	33.7	1.2	83
	女	64.6	6.3	29.2	—	96

表2-44に示すように、「①和式旅館」を選ぶ人がどの層でも過半数を占めており、「③どちらでもよい」が3割前後でこれに続いている。

「和式旅館」を好む割合は、性別ではあまり差は認められないが、社会人と学生で比べると、学生のほうが男女とも1割程度多くなっている。年齢別（社会人）では、若年層63.3％、中年層45.9％、壮年層44.2％と、最も若い層は

他より「和式旅館」選択率が著しく高くなっている。また、滞日年数別では、

	0～0.5年	0.5～1年	1～5年	5年以上
社会人	77.4	42.4	51.8	41.8
学 生	76.3	60.0	46.8	

と、日本での生活期間の短いほど「和式旅館」が好まれる傾向が認められる。

以上の結果から、「和式旅館」に泊まりたいとする外国人は全般に多く、とくに若い層と滞日期間の短い者に好まれている——物珍しさという要因が多少関与しているとみられようか。

なお、日本旅館の選択傾向と(1)の日本食を好むかどうかとの間には、 $\chi^2=12.440$ (2×2 分割)と平行関係が認められている。

(4) 歌舞伎や能が好きか

質問文：歌舞伎や能のような日本の伝統芸能は好きですか

選択肢：①非常に好き ②好きなほう ③きらいなほう ④きらい ⑤好き

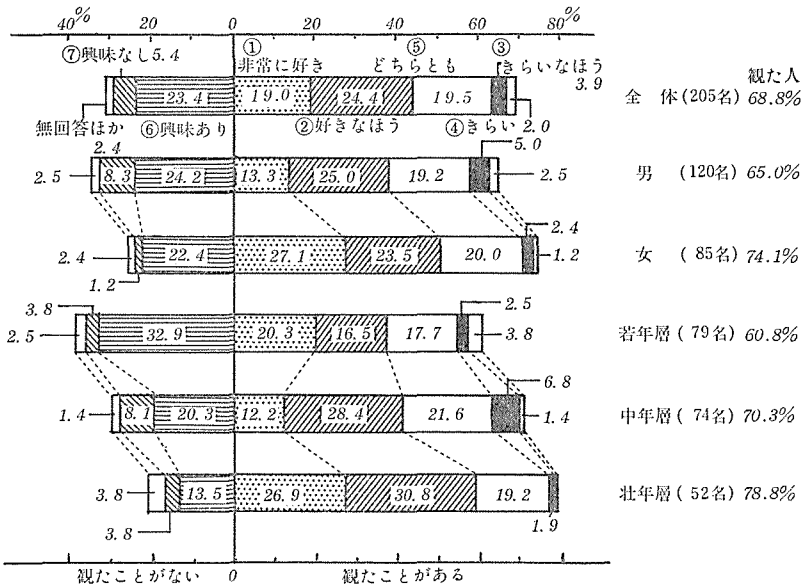


図2-45 歌舞伎や能が好きか (社会人)

でもきらいでもない ⑥まだ観たことはないが、興味はある ⑦観たこともないし、興味もない

図2-45は社会人の属性別の結果である。図では、右側に選択肢①～⑤の回答率、左側に⑥～⑦および「無回答ほか」の率を示してある。右側は各層での歌舞伎や能などを「観たことがある」人の割合、左側は「観たことがない」人の割合を示しているわけである。

社会人全体では、約7割がこれまでに能や歌舞伎を観た勘定になる。性別では、男は3分の2、女は4分の3と、女のほうが観劇経験者が多い。図では示さなかったが、学生の場合も、全体68.7%、男61.4%、女75.0%と、社会人とはほぼ同様の結果となっている。

年齢別では、若年層6割、中年層7割、壮年層8割と、年齢の上昇につれて約1割ずつ観劇経験者が増加している。また、滞日年数別では、

	0～0.5年	0.5～1年	1～5年	5年以上
社会人	51.6	60.6	69.9	81.8
学 生	57.6	73.8	76.6	

と、日本での生活期間に比例して観劇経験者の比率が上昇している。当然の結果といえよう。

なお、「①非常に好き」と「②好きなほう」とを合わせた「好き」群の割合の多少は、各層の観劇経験者率とほぼ平行関係になっている。

2.4.2. 日本人の習慣的行動に対する意見

日本人が何げなく、また当然のこととして行っている行動の中には、外国人（とりわけ欧米人）からみると奇態に思われるものも少なからずみられる。それらの行動については、従来から、外国人または日本人による指摘が随所でなされている。これらのうちには、実証的な裏づけのなされたものもあるが、個人的な印象に基づくものもある——印象といっても、的を得たものが少なくはないが。

ここでは、以下に示す三つの行動について、在日の外国人が実際にどのような

に感じているかを調べた結果について記す。取り上げた項目は比較的多くの人々から指摘されている，(1) 音をたててソバなどをすすする，(2) 話すとき視線を避ける，(3) イエス・ノーをはっきり言明しない，の三つの行動である。以下，順にみていくことにする。

(1) 音をたててソバをすすするのをどう思うか

質問文：ソバのようなものを食べるときに，すすする音をたてるという日本の習慣をどう思いますか

選択肢：①日本の習慣なので自分も同じようにする ②自分はしないが，日本人がそうしているからといって特別な態度をとるわけではない ③日本の習慣だということが理解できないわけではないが，そうしているのを見ると悪い印象を受けずにはいられない ④人がそうしているのを見ると悪い印象を受ける ⑤わからない

表 2-46 音をたててソバをすすする習慣について

		① 自分 すすす るも	② 特別 何 も 思 わ な い	③ 悪 印 象 を 受 け る さ る を え な い	④ 悪 印 象 を 受 け る	⑤ わ か ら な い 無 回 答	計
社 会 人	全 体	30.7	55.1	11.7	—	2.4	205
	男	36.7	52.5	9.2	—	1.7	120
	女	22.4	58.8	15.3	—	3.5	85
学 生	全 体	42.5	43.6	10.1	1.1	2.8	179
	男	50.6	30.8	6.0	2.4	1.2	83
	女	35.4	46.9	13.5	—	4.2	96

日本では音をたててソバをすすする行為は当然のことであり，むしろウマサの表現としてみられている。他方，欧米ではスープなどを音をたてて飲む（食べる）のは不作法とされている。このような食習慣をもつ欧米人が日本人の行為に接してどのように感じているかを尋ねたのが本項目である。

この行動に対する多数意見は，全体では「②自分はしないが日本人の行動に対しては特に何も思わない」であるが，属性ごとにみると若干様相が異なっ

いる(表2-46参照)。つまり、性別では男、社会人・学生別では学生は他より、「①自分もそうする」という回答率が高くなっている。——とくに男子学生では①と②の比率が逆転している。また、社会人を年齢別で比較すると、

	若年層	中年層	壮年層
①自分もそうする。	41.8	28.7	17.3
②特別何も思わない	45.6	59.5	63.5

と、年齢の若いほど「①自分もそうする」の割合が多くなっている(若年層と学生全体の数値は非常に類似している)。異文化・新文化への許容度・順応力は若い者ほど高いという一般傾向に合致しているといえよう。ちなみに、滞日年数別の結果では一定の傾向はみられなかった。

なお、この行動に対する「悪印象(③+④)」は、社会人・学生とも1割強を占めるに過ぎない。

(2) 話すとき視線を避けるのをどう思うか

質問文：日本人は話をするとき、一般に互いの視線が合うことを避けると言われていますが、あなたはこれをどう思いますか

選択肢：①話相手の目を見ないのは失礼だ ②失礼ではないが、話がしにくくなる ③特に意見はない

会話中に視線を避けようとする行為は、欧米社会では過度の劣等感・うしろめたさの表れとみなされることが多い。一方、日本でも過度の視線回避行動は欧米同様に解される面もあるが、むしろ相手の目をあまり見る行為は、相手の心の中を読み取ろうとすることで、不作法なことだという点に力点が置かれている。このことから、対話中のフィードバック(聞き手から話し手への)の主な手段の一つとして、欧米人が視線の交換を多用するのに対して、日本人は互いの視線を合わすことを避けて「うなずき」を多用する、という違いが生じることになる。そこで上記の質問を行った結果が表2-47である。

この表で気づくことは、日本人の会話中の視線回避行動に対しては、男女で感じ方が大きく異なることである。つまり、女のほうが「②話しにくい」という回答に傾いているのに対して、男は「③特に意見なし」と日本人の視線回避

表 2-47 話すとき視線を避けるのをどう思うか

		① 失 礼 だ	② 話 し に く い	③ 特 に 意 見 な し	無 回 答 そ の 他 ・	計
社 会 人	全 体	3.9	38.0	53.7	4.4	205
	男	4.2	27.5	64.2	4.2	120
	女	3.5	52.9	38.8	4.7	85
学 生	全 体	3.4	35.8	56.4	4.5	179
	男	6.0	21.7	66.3	6.0	83
	女	1.0	47.9	47.9	3.1	96

行動をさほど気にしていない人が過半数を占めていることである。この男女での差の一つの原因として、女に比べて男のほうが広い範囲の日本人と接触していることが考えられよう——滞日年数5年以上の層の「③特に意見なし」が62%と他より高率であることもこの裏づけの一種といえる。

なお、ここでも、前問同様、「①失礼だ」とする強い否定者の割合は全般的に著しく低くなっている。

(3) イエス・ノーを直接言わないことをどう思うか

質問文：日本人は一般に聞き手の依頼・願望・意見に直接反対の意を表しません。はっきりイエス・ノーとは答えずに反対意見を間接に表します。あなたはこのような間接的な表現にぶつかって困ったことがありますか

選択肢：①いつも肯定的な反応と否定的な反応との区別が難しいので困る ②ときどき区別しにくくて困る ③はっきりと区別することはできないが、困ることはない ④はっきりと区別できるので、全く困らない

最近の若い日本人で自分の考えを比較的直截に表現する人が増えていていると言われているが、それでも欧米人に比較するとイエス・ノーを明確に表明する習慣は少ない。イエス・ノーを明らかに言表するのは自己主張が強過ぎること

で、できるだけそれを押え相手の判断に委ねるのが日本人の美徳だとする風習があるからである。これは、イエス・ノーを明確に表現する言語体系もしくは言語行動をとる民族にとって不可解なこととして、日本人と欧米人との種々の交渉・折衝場面でよく問題になる行動の一つである。

表 2-48 イエス・ノーをはっきり言わないのは

		① いつも 困る	② ときどき 困る	③ 困ら ない	④ 全く 困ら ない	無 回 答 その他・	計
社 会 人	全 体	8.3	52.7	25.9	8.3	4.9	205
	男	5.0	55.8	25.0	11.7	2.5	120
	女	12.9	48.2	27.1	3.5	8.2	85
学 生	全 体	10.1	53.6	20.7	11.2	4.5	179
	男	6.0	51.8	25.3	9.6	7.2	83
	女	13.5	55.2	16.7	12.5	2.1	96

この点について調べた結果が表 2-48 である。

日本人のイエス・ノーを明示しない言動に対して、どの層も一様に約 6 割が「困る (①+②)」と答えている。

(4) 3 項目を通じて

以上の (1)～(3) で取り上げた各項目を、行動の表現形態と意思伝達機能

表 2-49 3 項目の比較

	表現形態	意思伝達	否定回答率
(1) ソバすすり	非言語的	なし	11.7 %
(2) 視線	非言語的	あり	42.0 %
(3) イエス・ノー	言語的	あり	61.0 %

(注)「否定回答率」は、社会人全体の数値で代表させた。ただし、各項目の否定回答の内容は、(1)は選択肢③+④、(2)と(3)は①+②とした。

の有無という面からみると、概略、表2-49の左側のように分類することができる。これに、在日外国人（社会人全体）の各項目での否定回答の割合を付加したものが表2-49の右側の数値である。

表2-49をみると、(1)の意思伝達をとくに目的としない非言語的行動から、(3)の意思伝達機能を有する言語的行動に向かって否定的回答率が上昇していることがわかる。これが、異文化接触上での一般的傾向とも考えられるが、何分例数が少な過ぎるので断言はしがたい。今後の検討課題といえようか。

2.4.3. 異文化への適応力

日本文化に対する好み、および欧米人とは異なる日本人の習慣的行動に関連して、「日本に永住したいか」と「異文化適応力意識」を尋ねている。以下、順に結果をみてみよう。

(1) 日本に永住したいか

質問文：もし可能ならば、あなたは日本に住み続けたいと思いますか

選択肢：①永住したいと思う ②永住しても悪くないと思う ③永住するつもりはないが、ときどき日本を訪れたいと思う ④日本には長期間住みたいとは思わない ⑤日本には二度と来たくないと思う ⑥わ

表2-50 可能なら日本に永住したいか（全体）

	社会人全体	学 生 全 体
① 永 住 し た い	6.3	2.2
② 永 住 し て も よ い	29.3	20.1
③ と き ど き 訪 れ た い	48.8	61.5
④ 長 く 住 む 気 は な い	3.9	5.6
⑤ 二 度 と 来 た く な い	1.0	1.1
⑥ わ か ら な い	7.3	7.8
⑦ 無 回 答 ・ そ の 他	3.4	1.7
人 数	205	179

からない

社会人・学生の全体の結果は表 2-50 のとおりである。

表 2-50 をみると、「日本での生活にいや気をもっている者(④+⑤)」は社会人・学生ともに僅か数%に過ぎず、大部分の人は日本での生活に対していい印象を抱いているように思われる。一方、より積極的に日本への「永住希望者(①+②)」の割合を比べると、社会人の 36 %に対して学生は 22 %とかなり低くなっている。この数字は社会人・学生ともに性別でほとんど差がないところからみて、職業あるいは年齢といったことに関係しているのかも知れない。

そこで、「永住希望者」を年齢別、滞日年数別にまとめてみると次のようになっている。

年齢別(社会人)では、若年層 27.8 %, 中年層 27.1 %, 高年層 59.6 %と、高年層の「永住希望者」が著しく他より高くなっている。

また、滞日年数別では、

	0～0.5 年	0.5～1 年	1～5 年	5 年以上
社会人	12.9	18.2	32.5	63.6
学 生	16.9	20.0		29.8

と、やはり滞日年数の長い者、とくに社会人で 5 年以上の滞在者の「永住希望」率が他を圧倒している。「住めば都」ということであろうか。

(2) 異文化に適應できるか

質問文：あなたは外国で生活しているとき異文化に適應しやすいほうですか

選択肢：①適應しやすい ②適應しやすいほう ③適應しようと試みるが難しい ④全く適應できない ⑤外国の文化には適應しようとは思わない ⑥わからない

異文化への適應力(の自己評価)の結果は表 2-51 のとおりである。

全体の数字は前項の「永住希望」と非常によく似ているが、前項とは異なつて職業・年齢・滞日年数といった要因はここではほとんど関与していないようである。

表 2-51 異文化に適応しやすいか

		① し や す い	② し や す い ほ う	③ 難 し い	④ 全 く し な い	⑤ 思 わ な い し よ う と	⑥ わ か ら な い	無 回 答	計
社会人	全 体	36.6	48.3	8.8	1.0	0.5	3.9	1.0	205
	男	35.8	48.3	9.2	0.8	0.8	4.2	0.8	120
	女	37.6	48.2	8.3	1.2	—	3.5	1.2	85
学 生	全 体	34.6	49.7	11.7	0.6	0.6	2.8	—	179
	男	31.3	57.8	9.6	—	—	1.2	—	83
	女	37.5	42.7	13.5	1.0	1.0	4.2	—	96

2.4.4. 日本人の性格

日本人は勤勉だとか礼儀正しいといったことがよく言われるが、在日外国人からみた日本人像をとらえるために以下の調査を行った。

質問文：あなたは日本人の性格をどう評価しますか。下に性格特徴のリストを示してあります。すべての性格特徴についてあてはまる回答にチェックして下さい。

性格特徴語：表 2-52 参照（左端の丸囲み数字は呈示順）。

選択肢：①はい ②いいえ ③どちらともいえない ④わからない（全項目共通）

表 2-52 は社会人全体の回答結果である。在日外国人の 7 割以上が認めた日本人の性格特徴語は、勤勉な、礼儀正しい、親切的な、自尊心のある、正直な、の 5 語である。日本人に関する各種のエッセイなどで述べられている事柄と大略一致した結果といえよう。

なお、⑬の Proud は、ここでは「自尊心のある」と仮訳したが、この語は「高慢な」「見識のある」とも訳すことができる。したがって、被調査者がどの意味を想定するかによって回答が異なると考えられる。そこで、日本語研究のために来日している 5 名のアメリカ人留学生（男 2，女 3）を対象に、この語

表 2-52 日本人の性格特徴（社会人）

性 格 特 徴 語		は い	いいえ	どちらとも いえなし
③ Diligent/industrious	勤勉な	84.6	1.0	14.4
⑤ Polite	礼儀正しい	76.1	4.5	19.4
① Kind	親切な	74.1	1.5	24.4
⑰ Proud	自尊心のある	73.1	2.5	24.4
② Honest	正直な	72.1	4.5	23.4
⑬ Shy	恥ずかしがりや	65.2	7.0	21.9
⑯ Protective	防衛的な	62.2	3.0	34.8
⑥ Persistent	粘り強い	52.7	11.9	35.3
④ Cheerful	朗らかな	46.8	10.9	42.3
⑫ Calm	静かな	44.8	11.9	43.3
⑮ Submissive	従順な	41.8	16.9	41.3
⑧ Creative	創造的な	40.8	22.4	36.8
⑱ Optimistic	楽観的な	33.3	16.9	49.8
⑭ Politically aware	政治関心のある	29.9	32.8	37.3
⑨ Conversant	親しみのある	29.4	24.9	45.8
⑮ Ascetic	禁欲的な	25.4	28.9	45.8
⑦ Logical	論理的な	19.9	32.3	47.8
⑳ Mercenary/calculating	打算的な	18.4	30.8	50.7
⑩ Aggressive	攻撃的な	18.4	43.8	37.8
⑪ Open minded	心の広い	10.0	48.3	29.4

（注）「どちらともいえない」には、「わからない」と無回答を含めてある。なお、この表では、全語に無回答であった4名を除いたため、母数は201名となっている。

の英語としてのイメージを尋ねてみた。結果は、+イメージ1名、 ϕ （中立）イメージ2名、-イメージ2名、と3分化している。結局のところ、被調査者がこの語のどの側面から回答したかははっきりしないといえる。意味の限定もしくは対立形容詞を添えるなど調査上の工夫が必要だったと反省される。

ちなみに、他の性格特徴語についても同様の小調査を行ったが、この Proud ほどイメージのゆれの大きいものはみられなかった。参考のために各語のイメージを示すと次のようになる。

○5名全員が+イメージとしたもの：① Kind ② Honest ④ Cheerful ⑤

Polite ⑪ Open minded ⑫ Calm ⑭ Politically aware の7語。全体的に、日本人に該当すると答えた割合の高いものが多く含まれている中で、⑪の非該当率の高さが注目される。

○5名中4名が+, 1名がφとしたもの: ③ Diligent ⑥ Persistent ⑧ Creative ⑨ Conversant (φとした1名も+に近いとしている) ⑰ Optimistic の5語。該当するという回答は、③は全語の最高の85%であるが、他は全体の中位に属している。

○3名が+, 2名がφとしたもの: ⑦ Logical。「どちらともいえない」が半数近くを占めている。

○5名全員がφとしたもの: ⑬ Shy。65%が日本人の性格特徴の一つとしている。

○4名がφ, 1名が-としたもの: ⑮ Ascetic。

○2名がφ, 3名が-としたもの: ⑩ Aggressive ⑯ Protective (一の1名はφ寄りとしている)の2語。⑯は該当するという回答が高く、⑩はその反対となっている。この2語はある意味では対置概念とも考えられよう。

○5名全員が-としたもの: ⑱ Submissive ⑳ Mercenary の2語。⑱は「従順な」と仮訳したが「服従的な」とすべきかも知れない。

閑話休題。次に、性別、年齢別また社会人・学生別の結果をみてみよう。

結論からいえば、この調査で取り上げた20の性格特徴語に対する回答分布状況は比較的安定しており、属性別で大きく異なるものは少ない。そこで、以下では、各属性別の集計結果表をいちいち掲げることはせずに、有意な差(χ^2 検定で5%水準以上)の認められた特徴語の結果だけを示すことにする。

まず、性差のみられた特徴語を示す。それは次の4語である(順序は全体の該当率の高い順、数字は上が男、下が女)。

		は	い	いいえ	どちらとも
③勤勉な	{	79.7 %	0.8 %	19.5 %	
		91.6	1.2	7.2	

④朗らかな	{	39.8	14.4	45.8
		56.6	6.0	37.3
⑬従順な	{	33.9	21.2	44.9
		53.0	10.8	36.1
⑮禁欲的な	{	16.1	35.6	48.3
		38.6	19.3	42.2

いずれも、女の方が、その語が日本人に該当するとする者の割合が多くなっている。

年齢別では、「⑧創造的な」1語で有意差が認められただけであった。この語は下に示すように、年齢の高い者ほど日本人の創造性を支持するという結果になっている。

	は	い	いいえ	どちらとも
若年層	27.8 %	32.9 %	39.2 %	
中年層	39.2	16.2	44.6	
壮年層	59.6	13.5	26.9	

また、社会人と学生との間に有意な差のあった特徴語とそれぞれの数値は次のとおりである（上段は社会人、下段は学生）。

	は	い	いいえ	どちらとも
⑥粘り強い	{	52.7 %	11.9 %	35.3 %
		42.4	16.9	40.7
⑮禁欲的な	{	25.4	28.9	45.8
		33.3	22.6	44.1
⑦論理的な	{	19.9	32.3	47.8
		26.0	16.9	57.1
⑳打算的な	{	18.4	30.8	50.7
		24.9	21.5	53.7

以上でみたように、日本人の性格特徴に対する在日外国人の認識はかなり一定しているといえる。

しかし、ここでいう「在日外国人」は欧米系（特にアメリカ）の英語話者であり、他地域・他言語話者からみた日本人像はこれとは異なることも予想される。この点を確認するために、中国語話者（留学生 42 人）の結果を参考までに示しておく。彼らと英語話者（留学生）との間で回答状況に差のあったものを示したのが図 2-53 である。20 語中 8 語（4 割）で有意差が認められているうえ、⑬ Shy（恥ずかしがりな）のように全く逆になったものさえみられている。当然のことながら、観察者の立場によって大きく異なっているわけである。

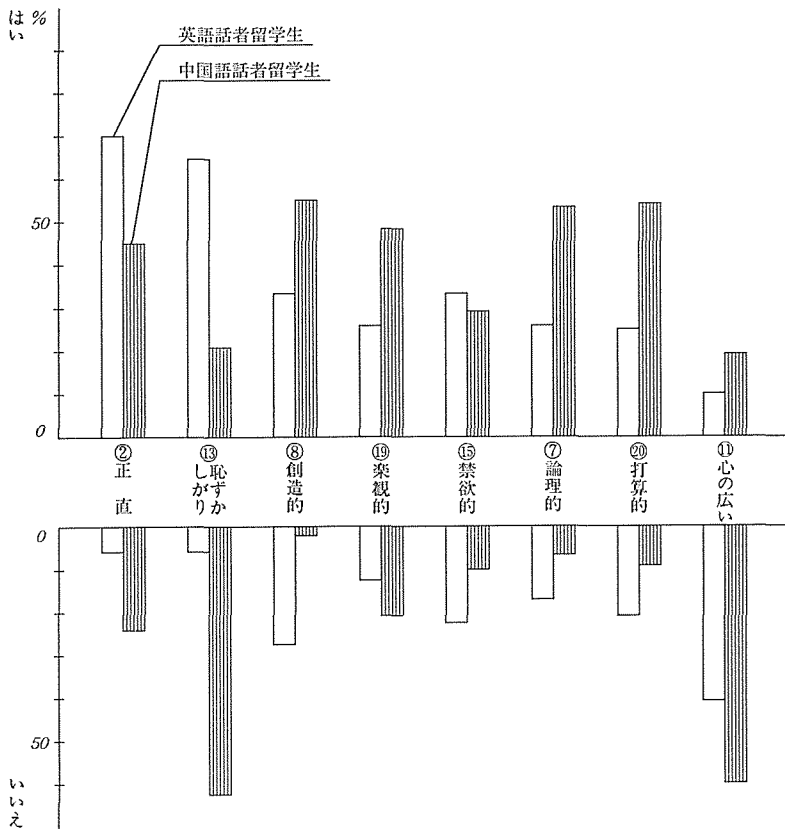


図 2-53 日本人の性格（中国・英語両話者の差）

3. あいさつ行動

3.1. 家庭でのあいさつ

家庭でのあいさつとして、つぎの8項目につき、あいさつをするかしないか、するならば、どのようなことばを用いるか、どのような随伴行動をとるか、ということ进行调查した。

- (1) 夕食を食べ始めるとき
- (2) 夕食を食べ終わったとき
- (3) 朝、起きたとき
- (4) 夜、寝るとき
- (5) 外出するとき
- (6) 帰宅したとき
- (7) 家族が外出するとき
- (8) 家族が帰宅したとき

(3) 以下については、特定の家族1名を想定してもらって、その人とのやりとりを回答してもらう、という形をとっている。

これらの調査項目は、一見して知られるように、コミュニケーション上、積極的に伝えるべき内容をもったものではない。むしろ、日常生活を営む上に、潤滑油の役割を果たしているものである。それだけに、様式化しているところが大きいと考えられる。しかしながら、家庭内でもなおそうした潤滑油が活用されているのか、様式が保たれているのか、あまり知られているところがない。本節は、この疑問に答えようとするものである。それゆえ、同様の項目を他の

人間関係について扱った、本章の他の節の結果を、対比的に参看する必要もある。なお、本節の調査は、次節「道でのあいさつ」のそれとともに

杉戸清樹 (1981) 「あいさつの言葉と身振り」 (文化庁『ことばシリーズ 14 あいさつと言葉』所収)

として、中間報告がなされている。

調査項目は、もとより、日本語・ドイツ語・英語各版をとおして概略同じである。しかし、質問の方法には小異がある。すなわち、各項目の初めに、日本語版・ドイツ語版では、そのあいさつをするかしないか、質問したが、英語版ではそれをしなかった。英語版では、各項目の初めには、日本語版・ドイツ語版にない、ことばがあるかないかという質問を、おいた。また、随伴行動のうち、立ってか座ってかという動作を、日本語版・英語版では質問したが、ドイツ語版では質問しなかった。随伴行動について、それが無いという選択肢を、ドイツ語版・英語版では設けたが、日本語版では設けなかった。また、つぎにみふりについて述べるところがあり、さらにあとに述べるところもある。こうした質問の小異は、回答に影響を及ぼしたと推量され、したがってその分析にも影響を及ぼすこととなるが、そのことについてはあとの適当な箇所述べる。

随伴行動のうちのみふりにかかわる選択肢は、つぎのとおりである。

○ふかふかとおじぎをする (上半身を深く前にたおす)

ich verbeuge mich tief deep bow from the waist up

○おじぎをする (上半身を軽く前にたおす)

ich verbeuge mich leicht slight bow from the waist up

○頭を軽く前にたおす

ich nicke mit dem Kopf slight nod of the head

○上半身は動かさず軽くひざだけを折る

ich mache einen Knicks curtsy

○あごをしゃくる

upward motion of the head raising the chin

○手をあげる

ich hebe leicht die Hand raise one hand

○手を振る

ich winke

wave

○握手をする

ich gebe ihm/ihr die Hand

shake hands

○（手を合わせる）

put hands together as though praying

○（十字を切る）

make a sign of the cross

○抱き合う

wir umarmen uns

hug

○キスをする

wir küssen uns

kiss

○（ウィンクをする）

wink

○床や畳などに正座しておじぎをする

bow while sitting Japanese style on the floor or tatami

○帽子をとる

ich ziehe den Hut

remove hat

○帽子に手をやる

touch the brim of the hat with one hand

日本語版のものを中心に、ドイツ語版のものおよび英語版のものを対照させてみたが、必ずしもかみあっていないところもあろう。また、各版のあいだに出入りがあって、すなわち、日本語版で括弧内のものを欠き、ドイツ語版で空白のものおよび「ふかぶかとおじぎをする」「帽子をとる」を欠き、英語版ですべてをそなえる。以上の選択肢に対しては、複数回答が可能である。

3.1.1. 日本人

諸項目の質問の順序は、日本語版においては、初めに列挙したときの番号で

示すならば、(1) … (4) (5) (7) (6) (8) である。この処置は、調査結果に影響しているとは考えられない。

日本人が、各項目について、そもそもの程度あいさつをするかということ、社会人・大学生および男・女という回答者のふたつの属性を軸として、図3-1に示す。項目(1)(2)、(3)(4)は、それぞれペアをなす内容であるので、図を重ねる。(5)(6)(7)(8)は、すべてが関係し合っているが、結果にしたがって、(5)(6)を重ね、また(7)(8)を重ねる。

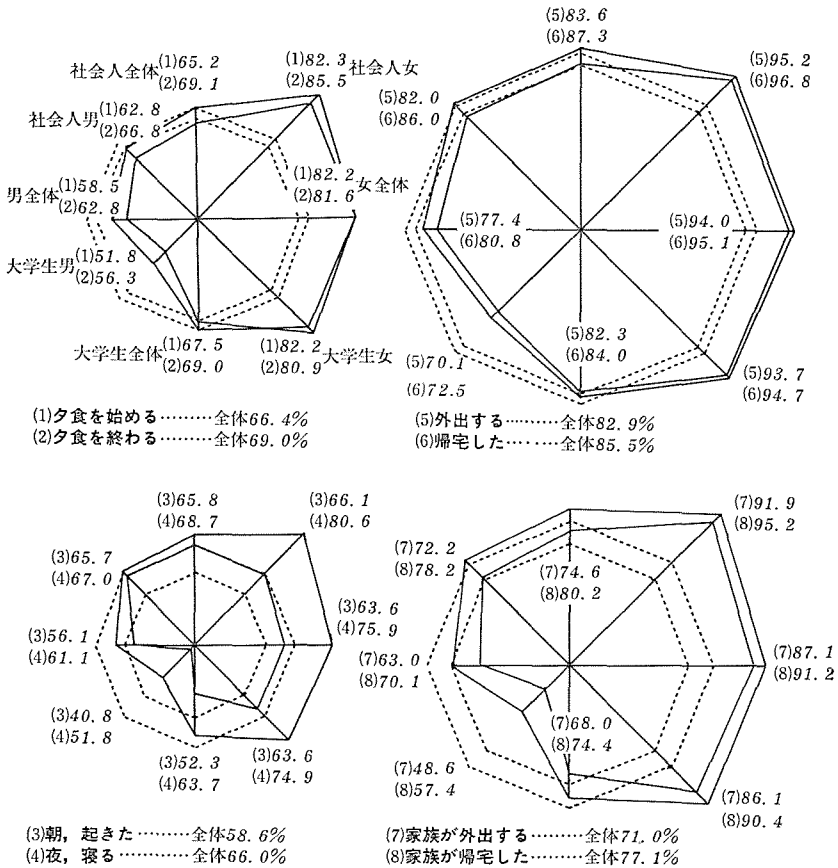


図3-1 家庭でのあいさつ（日本人）

あいさつをするという回答の、回答総数（無回答を含む）に対する百分率。

中心40.0%、破線は全体についての百分率。

総合的に見た場合、まず、共通のこととして、次を言うことができる。

(イ) 社会人が、大学生より、よくあいさつをする。

(ロ) 女が、男より、よくあいさつをする。

図の形は、したがって社会人女の配置された右上で外側に引き出され、大学生男の配置された左下で内側に押し込められた、というようなものになっている。

(ハ) 夕食・起臥・外出という行動の終わり（食べ終わった、寝る、帰宅した）に、その始めにより、よくあいさつをする。

図の形は、したがって、2項目ずつのペアにおいて、番号の大きい方（偶数番号）が、番号の小さい方（奇数番号）の一回り外側に、輪郭を見せる。(1)(2)において、大学生女が、またそれに影響された女全体が、この原則を崩してい

表3-2 相手とあいさつ（日本人）

あいさつの 相手として 想定した家族	回答者数	「あいさつをする」の百分率					
		(3) 朝 起きた	(4) 夜 寝る	(5) 外出 する	(6) 帰宅 した	(7) 家族が 外出 する	(8) 家族が 帰宅 した
配 偶 者	a. 147	59.2	63.9	93.2	91.2	74.8	85.0
	b. 18	77.8	83.3	94.4	100.0	94.4	100.0
	c. 3	33.3	100.0	100.0	100.0	66.7	100.0
	d. 2	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
子 供	a. 146	91.8	87.0	82.9	95.2	85.6	89.0
	b. 4	100.0	75.0	100.0	100.0	75.0	100.0
	c. 2	100.0	50.0	100.0	100.0	100.0	50.0
	d. 0						
母	a. 81	46.9	55.6	77.8	81.5	58.0	63.0
	b. 28	60.7	85.7	96.4	96.4	92.9	92.9
	c. 132	44.7	53.8	85.6	86.4	58.3	63.6
	d. 218	62.8	77.5	97.7	97.7	88.5	91.3
父	a. 47	48.9	48.9	68.1	68.1	54.4	63.8
	b. 7	42.9	57.1	100.0	100.0	100.0	100.0
	c. 91	46.2	58.2	69.2	70.3	52.7	62.6
	d. 32	84.4	81.3	96.9	96.9	87.5	93.8
兄 弟 姉 妹	a. 10	40.0	40.0	60.0	60.0	50.0	60.0
	b. 4	75.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	c. 41	14.6	34.1	24.4	34.1	12.2	29.3
	d. 45	44.4	55.6	73.3	77.8	71.1	82.2
そ の 他 無 記 入	a. 18	50.0	44.4	50.0	50.0	55.6	50.0
	b. 1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	c. 15	40.0	33.3	53.3	60.0	26.7	40.0
	d. 6	83.3	83.3	83.3	100.0	100.0	100.0

るが、その理由はわからない。

(イ)については、表3-2によって、次のこととの関連を考えておくべきであろう。表3-2は、(3)以下の項目について、あいさつの相手として想定した家族をひとつの軸とし、回答者の社会人・大学生および男・女の属性ごとに、その家族にあいさつする百分率を算出したものである。

(ニ) 配偶者・子供に、母・父により、よくあいさつをする。

あいさつの相手として、社会人が多く配偶者・子供を、大学生がほとんど母・父を、想定しているから、(イ)と(ニ)との関連が明らかである。また、これらの系として、

(ホ) 壮・中年層ないし既婚者が、若年層ないし未婚者より、よくあいさつをする。

ということが推測される。年齢を軸とした結果は実際そうなのであるが、ここでは立ち入らないこととする。

つぎに、項目のペアとペアとの対比によって、言うことのできることがある。

(ヘ) 外出・帰宅に関係するときに、夕食・起臥に関係するときより、よくあいさつをする。

(ト) 自分の外出・帰宅の宣言が、家族の外出・帰宅の送迎より、よくおこなわれる。

図の形は、したがって、(5)(6)が最も大きい。なお、(3)(4)が最も小さい。項目間の差がなにに由来しているのか、よくわからないが、外出・帰宅時のあいさつの方が、夕食・起臥のあいさつより、ともに潤滑油程度の内容であるとは言え、多少なりとも実質的な面をもっていて、それが関係しているであろうことは、想像にかたくない。

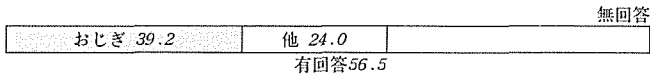
起臥・外出・帰宅のあいさつを、立ってするか座ってするかということは、つぎのとおりである。

	立って	座って
(3) 朝、起きた	78.4 %	5.4 %
(4) 夜、寝る	69.2	9.7
(5) 外出する	83.8	0.2

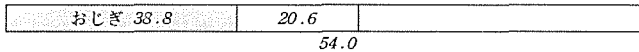
(6) 帰宅した	78.3	1.2
(7) 家族が外出する	66.9	8.1
(8) 家族が帰宅した	55.3	14.4

残余の数値は、ほとんど無回答であり、若干の不定を含むが、(8)においては不定3.2%である。あいさつがおおかた立ったままでおこなわれるということは、こうしたあいさつが、それ自体を目的としておこなわれるよりは、なにかのついでに、あるいはたまたま顔を合わせたからということで、おこなわれる、ということかもしれない。家族が帰宅したときのことについて、他の場合

(1) 夕食を始める



(2) 夕食を終わる



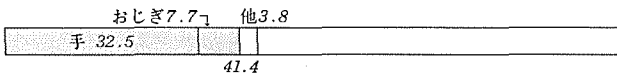
(3) 朝、起きた



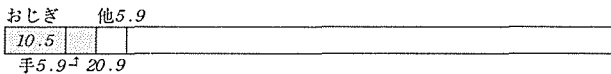
(4) 夜、寝る



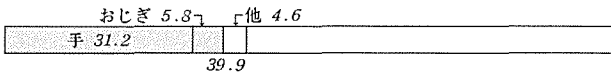
(5) 外出する



(6) 帰宅した



(7) 家族が外出する



(8) 家族が帰宅した

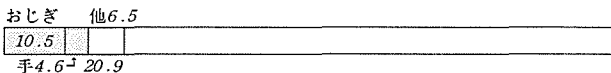


図3-3 家庭でのあいさつのみぶり（日本人）

あいさつをするとした回答に対する百分率。複数回答を加算。

より、無回答および座ってという回答が、多めであり、そのことも、以上のよう
に考えて理解することができると思われる。

随伴行動のうちのみぶりについて、すなわち立ってか座ってかの動作を除い
て、その回答の結果を図3-3に示す。みぶりの選択肢を、すぐつぎに言うよう
に適当にまとめたうえで、回答の多くを得たものから順に並べた。ただし、注
目に価するだけの多くの回答を得たものは、

○(ふかぶかと) おじぎをする。頭を軽く前にたおす。

○手をあげる。手を振る。

という、おじぎをする類と手を動かす類とのふたつである。おじぎの類に「頭
を軽く前にたおす」というのを含めたのは、適切を欠くかもしれないが、軽く
おじぎをしたのと、頭を前にたおしたのが、さほどあきらかには分かれな
いと考えて、このような処置とした。実際の回答者数は、「ふかぶかとおじぎをす
る」「(普通に) おじぎをする」「頭を軽く前にたおす」の三者の間で、大略0：
1：4の比となる。「あごをしゃくる」「握手をする」というものは、おじぎの
類、手の類に含めなかった。含めても、以下に述べることには影響しない。な
お、回答がふたつ以上あったものは、第2以下の回答を第1回答に加算した。

総体的に有回答の少ないことが、まず注目される。たかだか半数程度の回答
しか得られなかったことは、随伴行動が日常では自覚されず、反省しようとし
ても困難である、ということの意味するものと思われる。その少数の範囲にお
いてではあるが、次のような傾向はうかがうことができる。

(チ) 夕食のあいさつに、手をあげたり振ったりしない。

当然のこのように思えるが、それでは、夕食のあいさつとはどのようなも
のであるか、当の手の動きは一般になにを意味するか、とひとつ突っ込むと、
たちまち答えに窮することとなる。そのことには、いま、もとより立ち入るこ
とができない。

(リ) 起臥・帰宅と外出とは、異質のみぶりをともなう。すなわち、起臥・
帰宅でおじぎをする類が多く、外出で手を動かす類が多い。

このことの意味づけも、またさらに容易でないようである。なお、もともと
有回答が多くないのであるが、起臥・帰宅について特に大学生男が少なく、外

出で特に大学生女が少なかった。

(ヌ) 外出・帰宅のそれぞれにおいて、そうする側でもされる側でも、同様ののみふりをする。

あいさつのことばは、通常体であるか丁寧体ないし尊敬体であるかという単純な待遇形式の対立を抽象してしまえば、各項ごとにほとんど一様である。図3-4に、待遇形式の対立を抽象せずに示す。複数回答が可能であり、わずかながらあったので、第2以下の回答数を第1回答数に加算しておいた。

夕食を食べ始めるとき、および自分が帰宅したときの、あいさつのことばは、

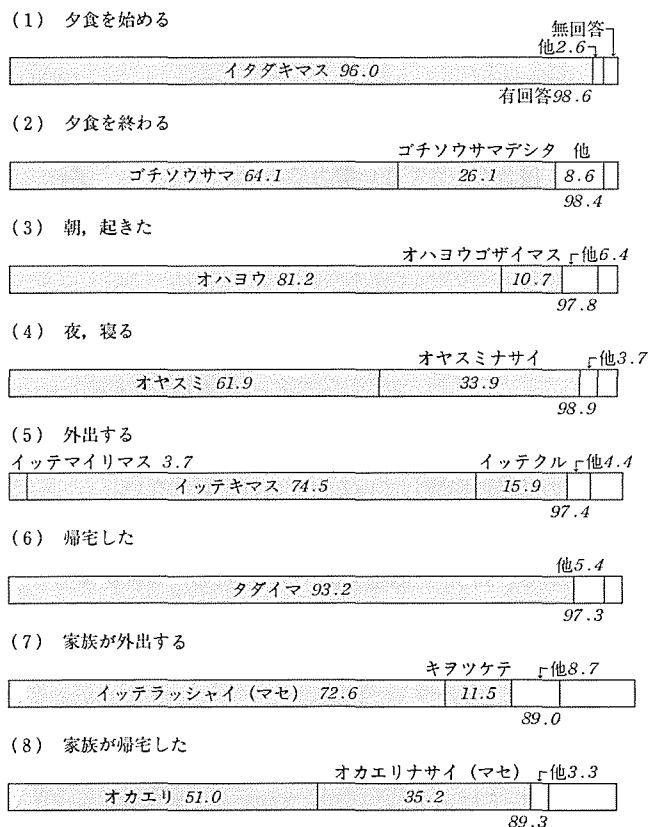


図3-4 家庭でのあいさつのことば (日本人)

あいさつをするとした回答に対する百分率。複数回答を加算。

単純な待遇形式の対立すら存在せず、一様性がきわめて大きくなっている。なお、本調査の他の種々の項目と比較して、この家庭でのあいさつのことばへの有回答率は、きわめて高いようである。このことは、ことばの一様性と無関係ではないように思われる。

(ル) 通常体と丁寧体ないし尊敬体とのあいだでは、一般に通常体の勢力の方が大きい。

しかしながら、自分が外出するときの「行ってきます」と「行ってくる」とは、勢力関係が逆である。「行ってくる」は、ぞんざいに過ぎるのであろうか、回答者はほとんど男であった。

以上に対する大きな例外として、家族が外出するときの自分のことばがある。そこでは、単純な待遇形式の対立によらない「いってらっしゃい(ませ)」と「気をつけて」とが現れ、勢力の大きい前者も、他の項目の最大勢力のものに比しては勢力が小さく、後者も小さくない勢力である。

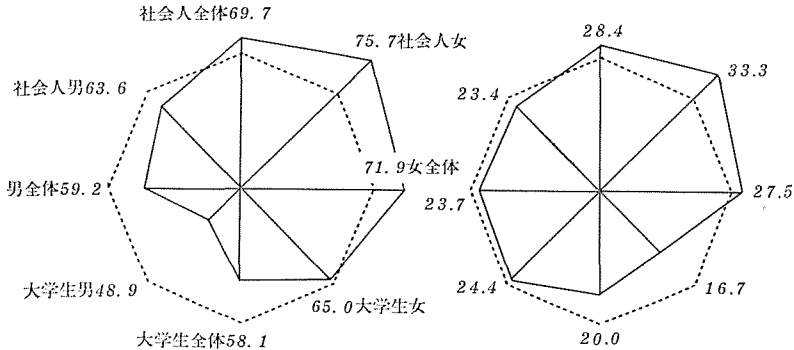
3.1.2. ドイツ人

前記諸項目の質問の順序は、ドイツ語版においては、(3)(4)(1)(2)(5)(7)(6)(8)であり、そのため、夕食の終始に関する(1)(2)にも特定の家族を想定したうえでの回答を得ている。順序の異同および家族の想定範囲が、回答の結果に影響しているようには思われない。

夕食の終始に関する項目を除き、各項目で、ほとんどの回答が、あいさつをするというものである。90%を上回っている。ただし、家族が帰宅したときにあいさつをするのは、女では90%を上回っているが、男で80%台に落ち、ためにまた全体でも90%をやや下回った。

それらにくらべると、夕食の項目(1)(2)では、あいさつをするという回答が目立って少ない。それを、回答者の社会人・大学生および男・女の属性ふたつを軸として、図3-5に示す。

あいさつをするかしないかと、あいさつの相手として想定した家族とに、どのような関係があるか、ということは、夕食に関する項目を除いて、ほとんど



(1) 夕食を始める………全体65.9% 中心40.0% (2) 夕食を終える………全体25.7% 中心0.0%

図3-5 家庭でのあいさつ（ドイツ人）

あいさつをするという回答の、回答総数（無回答を含む）に対する百分率。破線は全体についての百分率。

あいさつをするのであるから、あらためて考えるには及ばないであろう。ここでは、夕食に関する項目を含めて、述べることを省略する。

随伴行動のみぶりについて、図3-6に示す。回答の多くを得たものから順に並べた。複数回答が可能であり、第2以下の回答を第1回答に加算してある。

諸項目の対比によって、つぎを言うことができるであろう。

(イ) 夕食のあいさつとその他の項目のあいさつとは、みぶりについても異質である。

(イ a) 有回答が、夕食で少なく、他で多い。

(イ b) 回答の多かったみぶりの種類が、数で見ると、夕食で1であり、他で3程度である。

(イ c) 質で見ると、夕食で「うなづく (nicke mit dem Kopf)」であり、他で「キスをする」および「抱き合う」である。

ただし、(イ b)については、全体として有回答の少ないところに、多数の回答を得る選択肢がいくつも出るはずがないのであるから、むしろ(イ a)とつぎとの帰結であると言うべきであるかもしれない。

(ロ) 起臥・外出・帰宅の各項目いずれにおいても、際立って多くの回答を

(1) 夕食を始める

nicke mit dem Kopf 〔他

みぶりなしおよび無回答

20.2	15.5	
------	------	--

有回答34.3

(2) 夕食を終わる

n.K.

13.3	26.5	
------	------	--

37.3

(3) 朝, 起きた

küssen uns

umarmen uns

27.9	21.9	13.6	16.3	
------	------	------	------	--

nicke mit dem Kopf

64.8

(4) 夜, 寝る

n.K.

k.u. 40.1	15.7	10.3	18.9	
-----------	------	------	------	--

u.u.

66.7

(5) 外出する

winke

küssen uns 36.7	18.2	15.9	14.0	20.8	
-----------------	------	------	------	------	--

hebe leicht die Hand

umarmen uns

76.9

(6) 帰宅した

umarmen uns

gebe ihm/ihr die Hand

28.1	13.6	12.3	9.9	15.9	
------	------	------	-----	------	--

küssen uns

hebe leicht die Hand

61.9

(7) 家族が外出する

h. l. H.

k.u. 33.0	16.3	15.3	15.0	22.8	
-----------	------	------	------	------	--

w.

u.u.

75.9

(8) 家族が帰宅した

umarmen uns

nicke mit dem Kopf

30.9	16.1	13.3	11.9	11.9	
------	------	------	------	------	--

küssen uns

gebe ihm/ihr die Hand

65.3

図3-6 家庭でのあいさつのみぶり(ドイツ人)

あいさつをするとした回答に対する百分率。複数回答を加算。

得たひとつのみぶりというのは、存在しない。

夕食についても、この延長上にあると考えることができると思われる。

また、つぎを言ってよいであろう。

(ハ) 外出・帰宅のそれぞれにおいて、そうする側でもされる側でも、同様の
のみぶりをする。

外出と帰宅とを対立させるのは「手を振る」であって、外出については見られるとおりであり、帰宅については、他とした部分を詳細に見ても、ほとんど回答を得ていないのである。「握手をする」は、それと逆の、やはり特徴的であ

るみぶりであるようにも、見えるが、実は、外出においても多少は回答を得ていて、他としたうちに隠れている。

あいさつのことばは、実際のものに相当度の抽象をおこない、代表的な二、三の構成要素の組み合わせとして整理して、図3-7に示す。

(1) 夕食を始めることばの「guten Appetit (大きな食欲をー原義)」は、辞典によれば、食事を出す側でも出される側でも用いることのできるもの

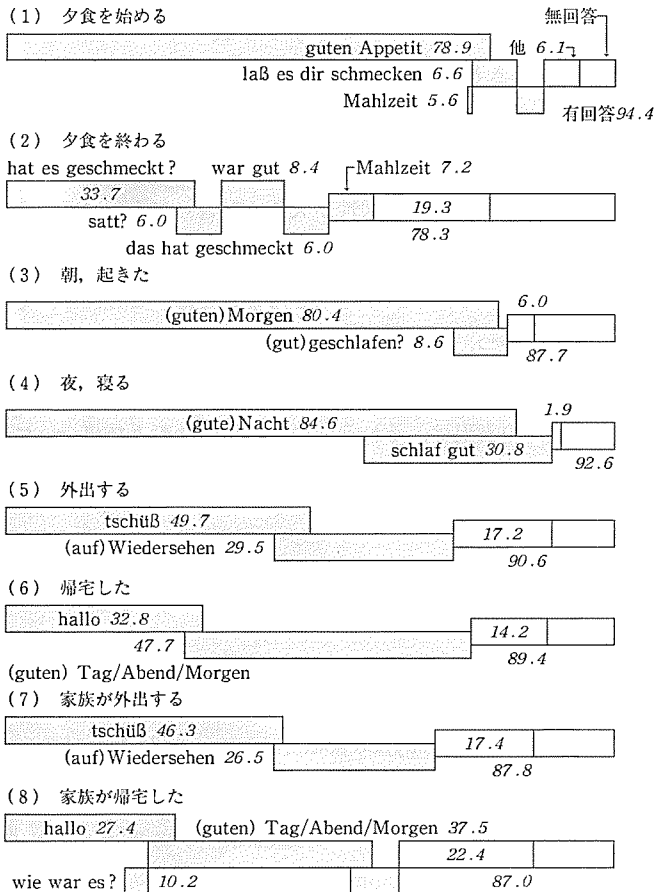


図3-7 家庭でのあいさつのことば (ドイツ人)

あいさつをするとしての回答に対する百分率。複数回答は第1回答のみを採った。縦の重なりは、連続して用いることを示す。「他」は、示したものの以外のことばのみから成っている。

であり、回答者の属性に特段の傾向が認められないから、実際にそうなのであろう。回答者がそれぞれどう思っていたかは、わからない。この表現は、辞典によれば、また、(2)夕食を終えるときの、食事を出した側でも出された側でも用いることのできる、ことばでありうるが、本調査ではそのような回答は見られなかった。「Mahlzeit (食事－原義)」もそのような用法をもつ表現であり、本調査でも夕食の始めと終わりとに回答を得たが、多くはなかった。(2)夕食を終えるときのことばは、その「Mahlzeit」を除いて、食事を出した側のものと出された側のものとに、分かれるようである。

(3)朝起きたときと(4)夜寝るときとのことばは、「Morgen, Nacht (朝、夜－原義)」および「(gut) geschlafen?, schlaf gut ((よく) 眠ったか、よく眠れ－原義)」の2対の表現によって構成されている。この2対による2項目の回答は、他の項目に比して、一様性が大きいと言ってよいであろう。

(5)自分が外出するときおよび(7)家族が外出するときと、(6)自分が帰宅したときおよび(8)家族が帰宅したときとは、ことばが、それぞれにおいて同様である。かつ、(5)(7)と(6)(8)とで対比的である。すなわち、「tschüß, hallo」の感動詞および「Wiedersehen, Tag/Abend/Morgen (再会、昼/夕/朝－原義)」の表現は、それぞれにおいて別れおよび出会いに対比的に対応している。「wie war es? (どうだった)」が、帰宅した家族に対してのみ特徴的に見えているのは、当然であろう。

3.1.3. 在日外国人

英語版の質問項目(7)(8)は、調査票作成の際の手違いにより、

(7') Does he/she say/do something to you before he/she leaves the house?

(8') Does he/she say/do something to you who are at home when he/she returns home?

となった。he/she は、回答者が想定したその家族である。すなわち、あいさつの、し手と受け手とが、日本語版・ドイツ語版と逆である。調査もこのままで

実施された。そのため、日本語版・ドイツ語版の結果と対照することはできないが、結果についてはここに触れることとする。

質問の順序は、(1) … (4) (5) (7') (6) (8')であった。あいさつの相手としての家族は、全項目について想定するようもめたが、それとあいさつとの関係については述べることを省略する。また、あいさつのことばも、英語で回答したものと日本語で回答したものとがあり、錯綜するので、述べることを省略する。そのことばは、日本での実生活をうつつしているものでもありえよ

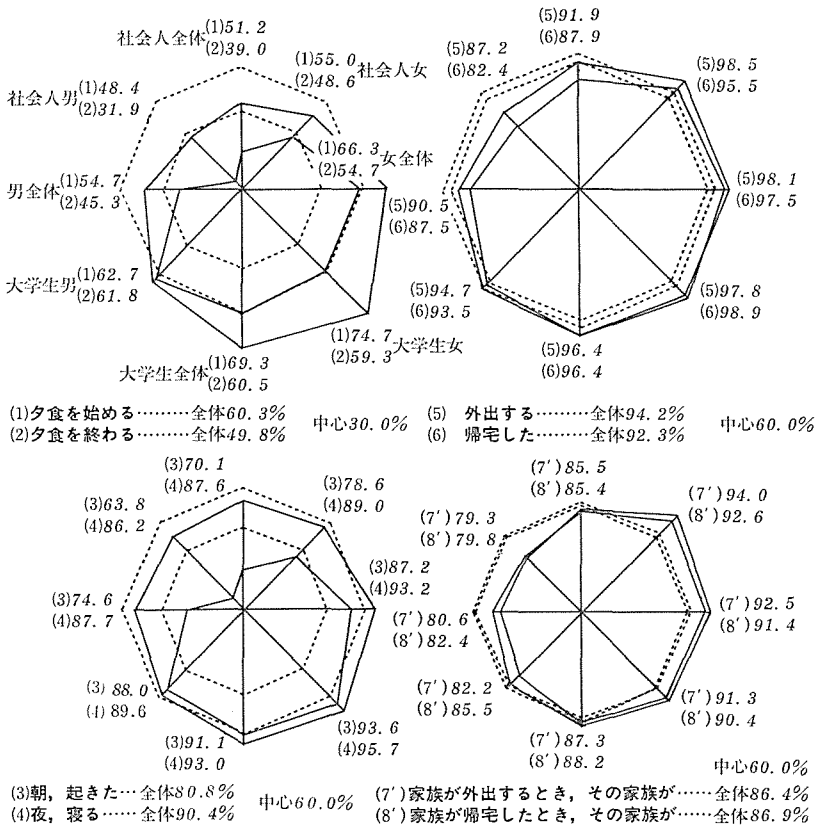


図3-8 家庭でのあいさつ (在日外国人)

ことばがあるという回答の、ことばがあるまたはことばがないという回答の和に対する百分率。
破線は全体についての百分率。

うし、またその理念でもありえようし、あるいはアメリカなど外国での実生活を回顧したものでもありえ、しかし、そのどれであるかはわからないのである。この問題は、もとより回答全体に通ずるものである。英語版調査の報告は、いきおい、特に大略に留めざるをえない。

在日外国人が、各項目について、どの程度あいさつをするかということを、社会人・大学生および男・女という回答者のふたつの属性を軸として、図3-8に示す。ただし、あいさつをするかしないかを質問せず、ことばがあるかないかを質問したので、それに対する有回答数を基準とし、ことばがあるとした回答の比率を示した。しかし、そのことばが英語であるか日本語であるかは、考慮していない。なお、内容がペアをなす項目について、図を重ねた。

つぎのようなことが知られる。

(イ) 男、とくに社会人男が、全般に、他の層より、あいさつをしない。

(ロ) 夕食の終始は、他の項目にくらべて、とくにあいさつをしない。

起臥・外出・帰宅のあいさつを、立ってするか座って(sits)するか、という動作についての質問は、有回答数が全回答者の半数に満たない程度であった。その質問に、立ってまたは座ってのいずれかを回答したもののうちでの、立ってを回答したものの百分率を示すならば、つぎのようである。残余の数値は座っての回答であり、不定または他の回答は、ごく少数あったが、計算上のどこにも顧みていない。

(3) 朝、起きた	65.3%
(4) 夜、寝る	58.4
(5) 外出する	92.7
(6) 帰宅した	80.8
(7') 家族が外出するとき、その家族が	96.2
(8') 家族が帰宅したとき、その家族が	83.0

みぶりにについての質問は、まずみぶりがあるかないかを問い、もしあるというのならば、ついでどのようなみぶりであるかを問うた。項目ごとに、みぶりがあるかないかの質問に対する有回答数を基準として、回答数の多かったものから順に、みぶりの種類の百分率を示すならば、図3-9のごとくである。複数

(1) 夕食を始める

nod of the head		他		みぶりなしおよび無回答	
21.4	13.7	24.8			
put hands together as though praying					
有回答42.9					

(2) 夕食を終わる

nod of the head					
15.3	6.4	12.2			
put hands together as though praying					
有回答29.8					

(3) 朝、起きた

nod of the head					
19.0	16.0	11.3	14.0		
kiss		hug		44.3	

(4) 夜、寝る

		nod of the head			
kiss	29.1	16.0	15.7	17.0	
		hug		54.6	

(5) 外出する

		nod of the head			
wave	31.0	kiss	26.8	11.4	11.1
				16.7	
				hug	
				67.6	

(6) 帰宅した

		nod of the head			
kiss	23.9	14.6	12.0	13.3	
		hug		38.2	

(7) 家族が外出するとき、その家族が

		nod of the head			
kiss	27.7	wave	24.3	12.7	10.3
				13.4	
				hug	
				61.3	

(8) 家族が帰宅したとき、その家族が

		nod of the head			
kiss	22.0	13.9	9.8	12.9	
		hug		38.6	

図3-9 家庭でのあいさつのみぶり (在日外国人)

みぶりがあるまたはないとした回答に対する百分率。複数回答を加算。

回答が可能であり、全回答を加算してある。

つぎのようなことが知られる。

(ハ) 全般に有回答が多くないが、外出については他より多く、夕食の終わりについて特に少ない。

(ニ) いずれの項目においても、際立って多くの回答を得たひとつのみぶりというものは、存在しない。

(ホ) 全般に「うなずく (nod of the head)」があり、起臥・外出・帰宅に

「キスをする」「抱き合う」が加わり、外出で「手を振る」がさらに加わる。(ホ)は、要するに、夕食・起臥・外出・帰宅のそれぞれ2項目ずつが、同様のみぶりによって類似する、ということである。ただし、就寝は起床より帰宅に似ている。また、夕食に加わっている「手を合わせる」は、そこでも少数であるが、そこによりよく見られるものである。なお、各項目とも、「(普通に)おじぎをする」が少数ずつながら見えていて、英語版調査の分析のむずかしさを感じさせられる。

英語版調査では、表情に関する調査をしている。特別な表情をしないか、または相手を見てにこりとするか、問うたものである。どの項目でも、全回答者の75%程度がいずれかを回答している。夕食の終始では、特別の表情をしないものとのにこりとするものとの比が、大略2:1であり、起臥・外出・帰宅では、逆に1:2である。いずれかの回答をしたのでないものは、おおかた無回答であり、不定の回答と他の表情の回答とがごく少数ずつある。ただし、夕食の始めと起床については、他の表情の回答が、やや多めであって、全回答者の6%前後である。

3.1.4. 対照

家庭での日本人のあいさつの特色は、ドイツ人ないし在日外国人などと比べて、どのようなものであるか、というかたちで、以上をまとめることとする。

あいさつをするかしないかということは、夕食・起臥に際して特徴的である。すなわち、夕食を終えるとき、日本人はよくあいさつをしていることになる。また、起きたとき、寝るときは、日本人はあいさつをあまりしていない。外出・帰宅に際してのあいさつは、日本人が他ほどによくおこなっているとは言えないのであるが、夕食・起臥に際してのものほどには、他とかけはなれていない。

日本人大学生男が、あいさつをするに全般的に消極的であることは、日本人のなかにおける特徴としてのみならず、ドイツ人・在日外国人などと比べても、著しい。

日本人のみぶりは、あまり自覚されていないが、おじぎをしたり手を動かし

たりするのが多いようである。キスをする，抱き合う，あるいは握手をする，といった，言わば身体の接触は，ほとんどおこなわれない。

日本の家庭でのあいさつは，様式という点では，いずれの項目においても，それぞれにことばの一様性がきわめて高いということが，日本人のあいさつのみぶりなどの様式とくらべても，ドイツ人のあいさつのことばの様式とくらべても，特徴的である。ふたつ以上の形式が存在するとしても，一般に通常体であるか丁寧体ないし尊敬体であるかにかかわるものであり，それも通常体が普通である。例外は，家族が外出するときに「行ってらっしゃい」に「気をつけて」が対立しうること，自分が外出するときに丁寧体「行ってきます」が通常体「行ってくる」よりはるかに多いことである。ドイツ語でこの一様性に匹敵しているのは，夕食の始めのものと起臥のものとのみである。

3.2. 道でのあいさつ

道でのあいさつとして、つぎの5項目につき、あいさつをするかしないか以下、家庭でのあいさつと同様のことを調査した。

- (1) 朝、近所の親しい人に会ったとき
- (2) 昼、近所の親しい人に会ったとき
- (3) 夕方、近所の親しい人に会ったとき
- (4) その日が誕生日の同性の知人に会ったとき
- (5) 家族に不幸があった知人に会ったとき

想定されるあいさつの相手は、見られるように、知人である。家庭でのあいさつが家族を相手とし、学校でのあいさつが先生・生徒を相手とするのとくらべて、場所のほかに、相手の違いがあるわけである。(1)は、本章のあとの節「公園でのあいさつ」において、さらに突っ込んで問われる。

日本語・ドイツ語・英語各版をとおして、調査の概略は同じい。(5)の「不幸」は、死を意味させたものであり、回答結果からみて、各語版とも、誤解されることはなかったと思われる。念のため、日本語版「家族に不幸があった」に対応する、ドイツ語・英語各版の表現を、示しておく。

(5) bei dem/der vor kurzem ein Familienmitglied gestorben ist

(5) whose family has just suffered some kind of tragedy

質問の方法には、各版のあいだで小異があり、前節「家庭でのあいさつ」に述べたところに準ずる。随伴行動のうちの動作としては、立ち止まってか歩きながらかを質問した。しかし、その動作の質問を、日本語版・英語版ではみぶりの質問と分離したが、ドイツ語版では区別しなかった。回答および分析への影響については、あとの適当な箇所述べる。

随伴行動のうちのみぶりにかかわる選択肢は、前節「家庭でのあいさつ」の初めに一覧したようなものである。ただし、それとくらべて、この日本語版はその括弧内のものおよび「正座しておじぎをする」を欠き、ドイツ語版は、空白のもの、および項目(1)(2)(3)で「抱き合う」「キスをする」を欠き、英語版はすべてをそなえる。要するに、ここの項目のあいだでも、「家庭でのあいさつ」のものとのあいだでも、各語版のあいだでも、小異がある。

3.2.1. 日本人

平生、近所の親しい人には、道で会えば、あいさつをしている。しないという回答も、大学生男を中心にまあるが、90%以上がするという回答である。知人に誕生日ないし不幸という特別の事情がある場合、その事情に対して必ずあいさつをするとは限らない。その場合にあいさつをするというものを、回答者の社会人・大学生および男・女の属性ふたつを軸として、図3-10に示す。

誕生日に対するあいさつは、女とくに大学生女が(女に)おこなうものであり、社会人男はほとんど関心を示さない。不幸に対するあいさつは、大学生よ

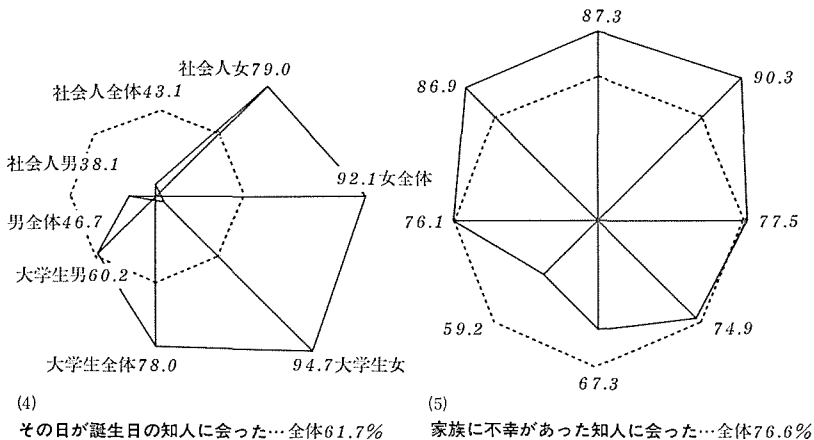


図3-10 道でのあいさつ (日本人)

あいさつをするという回答の、回答総数(無回答を含む)に対する百分率。
中心40.0%, 破線は全体についての百分率。

りは社会人においておこなわれるものである。

平生のあいさつと、誕生日ないし不幸という特別の事情に対するあいさつとの、へだたりは、あいさつの内容についてもあきらかに現れている。

随伴行動のうち、あいさつをするに際して立ち止まるか立ち止まらないかという動作は、あいさつをすると回答したものに対する百分率で示すならば、つぎのとおりである。

	立ち止まる	立ち止まらない
(1) 朝、近所の親しい人に会った	32.1 %	61.6 %
(2) 昼、近所の親しい人に会った	32.2	59.0
(3) 夕方、近所の親しい人に会った	30.7	57.4
(4) その日が誕生日の人に会った	86.7	5.2
(5) 家族に不幸があった知人に会った	84.7	3.9

残余の数値は主として無回答であり、なお不定とするものがごく少数ある。社会人が大学生より、また女が男より、立ち止まる傾向が全般的に見られるが、大勢は動かない。平生のあいさつであるか特別のあいさつであるかということによって、どちらかと言えば立ち止まらないのと、ほとんど立ち止まるのとの、違いが出るわけである。

他の随伴行動すなわちみぶりは、

○(ふかふかと) おじぎをする。

○頭を軽く前にたおす。

また、

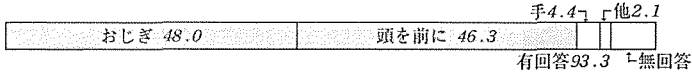
○手をあげる。手を振る。

○握手をする。

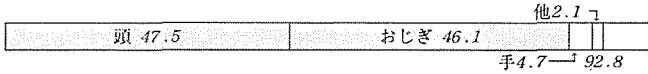
という回答が多く、それを主として、あいさつをするという回答に対する比率を、図3-11に示す。複数回答が可能であり、それがわずかながらあったので、加算してある。

前節「家庭でのあいさつ」にも触れたが、おじぎをすることと頭を前にたおすこととは、実際の動作としては、必ずしもあきらかに分かれまいであろう。しかし、その2類の実際の回答者数は、(1)(2)(3)それぞれにおいて同程

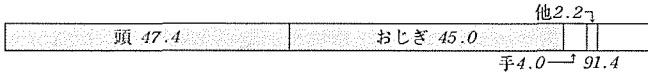
(1) 朝、近所の親しい人に会った



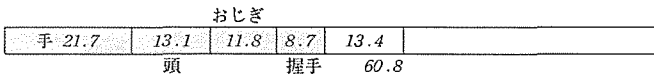
(2) 昼、近所の親しい人に会った



(3) 夕方、近所の親しい人に会った



(4) その日が誕生日の知人に会った



(5) 家族に不幸があった知人に会った

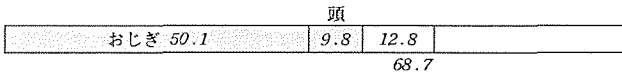


図 3-11 道でのあいさつのみふり (日本人)

あいさつをするとした回答に対する百分率。複数回答を加算。

度に多く、かつそれによって回答の大半を占めたので、分けて示してみた。(1)と(2)(3)とで、おじぎの類と頭の類とが逆転しているが、主として社会人男のわずかな動きによってそういう結果となった。3項目をとおして、男は頭の類、女はおじぎの類が、それぞれ優勢であり、大学生全体としてもおじぎの類が優勢である。なお、また、おじぎの類において、「ふかぶかとおじぎをする」というのは、ほとんどない。(1)(2)(3)は、実質的には同質であるとみなしてよいであろう。

みふりに対する有回答の率は、家庭でのあいさつのものにくらべて、はるかに高い。平生のあいさつ(1)(2)(3)は、情報に乏しい、潤滑油のようなものであると考えられ、それゆえに立ち止まりもしないと考えられるのである。情報に乏しい点、家庭でのあいさつに共通するが、それと異なってよく回答すなわち反省することができるということは、なにを意味するのであろうか。ここでは、そのことを、ひとつの問題として残しておきたい。

そのような平生のあいさつ(1)(2)(3)に対して、特別のあいさつ(4)(5)は異質である。端的には、有回答の率の多少によって、それが知られる。

ただし、(4)誕生日と(5)不幸とも異質である。順序が逆になるが、まず(5)家族に不幸があった知人へのあいさつについて。これは、平生のあいさつに近い面ももつが、頭の類の回答の少ないことでそれと異なる。おじぎの類と頭の類との関連はいまも触れたが、頭の類の少ないのに対応して、実は、「ふかぶかとおじぎをする」という回答も多い。すなわち、おじぎの類をわけると、ふかぶかとおじぎをする 21.9%，(普通に)おじぎをする 28.2%である。以上の(5)不幸についてのあいさつおよび平生のあいさつ(1)(2)(3)に対して、(4)その日が誕生日の知人へのあいさつは、手・握手の類が勢力を得ていることによって、特異である。もっとも、社会人と大学生とでも異なっていて、それを分けるならばつぎのようである。

	手	頭	おじぎ	握手	他	有回答
社会人	15.9%	21.4	21.8	11.8	6.8	71.8
大学生	24.5	9.2	7.0	7.2	16.6	55.5

おじぎは、おおかた、普通のおじぎである。ところで、疑問がひとつ感じられる。上述のように、この誕生日に対するあいさつは、ほとんど立ち止まっておこなわれる。それで、手をあげる、手を振るみぶりがおこなわれるというのは、どういうことであろうか。あるいは、歩きながらそのようなみぶりをして近づき、立ち止まってことばを言う、というのであろうか。

あいさつのことばについても、平生のあいさつ(1)(2)(3)と特別のあいさつ(4)(5)とは異質である。図3-12に示す。複数の回答は、(1)(2)(3)では第2以下の回答も加算したが(4)(5)では第1回答のみを採った。

平生のあいさつ(1)(2)(3)は、感動詞と言ってよい簡単なことばが用いられ、それぞれにおいて一様である。(3)夕方のあいさつについて、「今晩は」と「今日は」との違いを問うことは、意味のないことであろう。(1)朝のあいさつについて、前節「家庭でのあいさつ」の起床とくらべて、丁寧体と通常体との地位が逆転していることは、予想されることとは言え、注意してもよいかもしれない。

特別のあいさつ(4)(5)はことばが複雑であり、図も複雑になった。図の、上下で重なっている部分は、ことばも組み合わせざっていることを示す。(4)誕

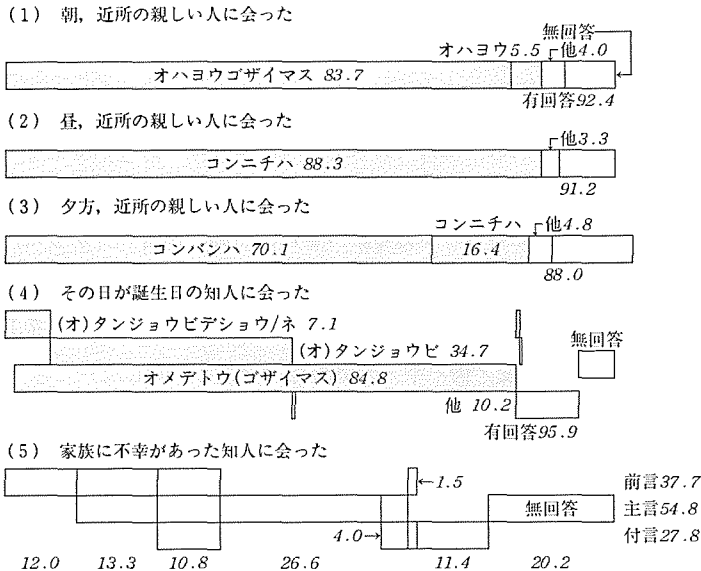


図3-12 道でのあいさつのことば（日本人）

あいさつをするとした回答に対する百分率。複数回答は、(1)～(3)で加算し、(4)(5)で第1回答のみを採った。(4)(5)の縦の重なりは、連続して用いるものである。

生日についてのあいさつにおいては、「誕生日」の類と「おめでとう」の類が、あいさつのことばを構成するおもなものである。「誕生日」の類は言わないこともある。念のため、そのような構成要素の組み合わせについて、回答の多かったものをあげておくと、つぎのようである。

- 「誕生日」の類なし) おめでとう (ございます)。 44.7%
- (お) 誕生日おめでとう (ございます)。 34.4%
- (お) 誕生日ね/でしょう おめでとう (ございます)。 5.3%

(5) 不幸についてのあいさつのことばは、それを構成するものを3種類にわけることができる。

- あいさつを切り出すもの

このたびは (どうも/まことに)。など

- あいさつの本体として弔意をあらわすもの

残念/大変/御不幸/お気の毒(なこと)でした。とんだことでした。 御愁傷さまでした。 御冥福(を)お祈りします。おくやみ申し上げます。

など

○元気づけを言い添えるもの

頑張って／元気を出して（下さい）。 気を落とさないで。など

図では、この3種類を前言・主言・付言として、ことばの具体的な形よりは種類によって、回答の実態を示した。種類によって示さざるをえないほどに、回答はバラエティに富んでいるのである。つぎに、一応、回答の多かった、具体的なものを、あげておく。ただし、少しはまとめる。

○このたびは どうも／誠に。 どうも／誠に このたびは。 7.3%

○このたびは 残念／大変／御不幸／お気の毒（なこと）でした。

このたびはとんだことでした。 4.8%

○このたびは御愁傷さまでした。 4.0%

○残念／大変／御不幸／お気の毒（なこと）でした。

とんだことでした。 18.0%

○御愁傷さまでした。 5.0%

○頑張って／元気を出して（下さい）。 気を落とさないで。 9.2%

以上の、日本人の、道で知人に会ったときのあいさつの様式は、要するならば、つぎのごとくである。すなわち、平生は、簡単なことばで、とにかくあいさつをかわす。立ち止まるようなものではなく、頭または上半身を軽く前にたおす。家族に不幸があった知人には、立ち止まって「このたびは残念なことでした」というようなことばを言い、多くおじぎをする。誕生日の知人には、立ち止まって「誕生日おめでとう」と言うが、随伴行動は、以上のものにくらべるならば、安定していない。

3.2.2. ドイツ人

知人に会えば、必ずそれなりのあいさつをするというところである。誕生日に対してのあいさつと、不幸に対してのあいさつとを、社会人・大学生および男・女のふたつの属性を軸として、図3-13に示しておく。

あいさつの内容は、しかし、平生のものと、誕生日ないし不幸という特別の

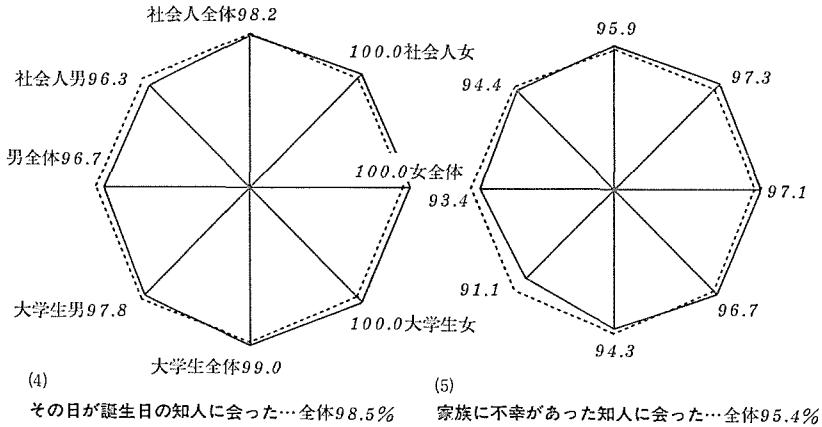


図3-13 道でのあいさつ（ドイツ人）

あいさつをするという回答の、回答総数（無回答を含む）に対する百分率。
中心60.0%、破線は全体についての百分率。

事情に対するものとで、質を異にする。

随伴行動のうち、あいさつをするに際して立ち止まるかいは、あいさつをすると回答したものに対する百分率で示すならば、つぎのとおりである。

	立ち止まる	立ち止まらない
(1) 朝、近所の親しい人に会った	41.6 %	10.5 %
(2) 昼、近所の親しい人に会った	43.3	11.6
(3) 夕方、近所の親しい人に会った	41.7	11.9
(4) その日が誕生日の知人に会った	61.6	0.3
(5) 家族に不幸があった知人に会った	57.8	2.6

残余の数値は主として無回答であり、なお不定とするものがごく少数ある。その数値が大きいように思われるが、他の随伴行動と分離しなかったためであろうと思われる。あるいは、随伴行動はいくつでも回答しうるのであるから、随伴行動として重視されていないということであるかもしれない。属性による回答の傾向は、その無回答に女が男より多めであるというほか、際立った点はない。

みぶりは、

○うなづく (nicke mit dem Kopf) ○握手する ○手を振る

という回答が多く、それを主として、あいさつをするという回答に対する比率を、図3-14に示す。20%程度の回答者が複数回答をおこなっているので、それを加算してある。

(1) 朝、近所の親しい人に会った

nicke mit dem Kopf	hebe leicht die Hand	他	keineおよび無回答
36.8	30.2	17.1	22.9
gebe ihm/ihr die Hand		有回答82.5	

(2) 昼、近所の親しい人に会った

h. l. H.				
n.K. 36.7	g.i.H. 30.4	14.7	19.4	
79.6				

(3) 夕方、近所の親しい人に会った

h. l. H.				
n.K. 35.7	g.i.H. 27.6	15.0	19.1	
78.4				

(4) その日が誕生日の知人に会った

gebe ihm/ihr die Hand			他	無回答
87.7			28.9	
有回答合計94.3				

(5) 家族に不幸があった知人に会った

g.i.H. 74.7		34.1	
88.6			

図3-14 道でのあいさつのみぶり (ドイツ人)

あいさつをするとした回答に対する百分率。複数回答を加算。

全体として、家庭でのあいさつのものに比べ、一様に有回答の率が高い。しかしながら、その内容は、やはり、平生のあいさつ(1)(2)(3)と特別のあいさつ(4)(5)とが対立する。すなわち、(1)(2)(3)においては、上記3類のみぶりが並行しておこなわれ、(4)(5)においては、握手をするというもののみが多くおこなわれる。この内容は、(1)(2)(3)の社会人男において、「握手をする」が「うなづく」を上回るという特異性をもつほか、属性による特段のかたよりを見せていない。なお、いずれの項目についても他として処理したが、社会人男壮年層では、その20%程度がつねに脱帽を回答していて、脱帽はその層にのみ見られるみぶりであり、言い添えておく。

あいさつのことばについても、平生のあいさつ(1)(2)(3)と特別のあいさつ(4)(5)とが異質である。図3-15に示す。構成要素に分けて、つな

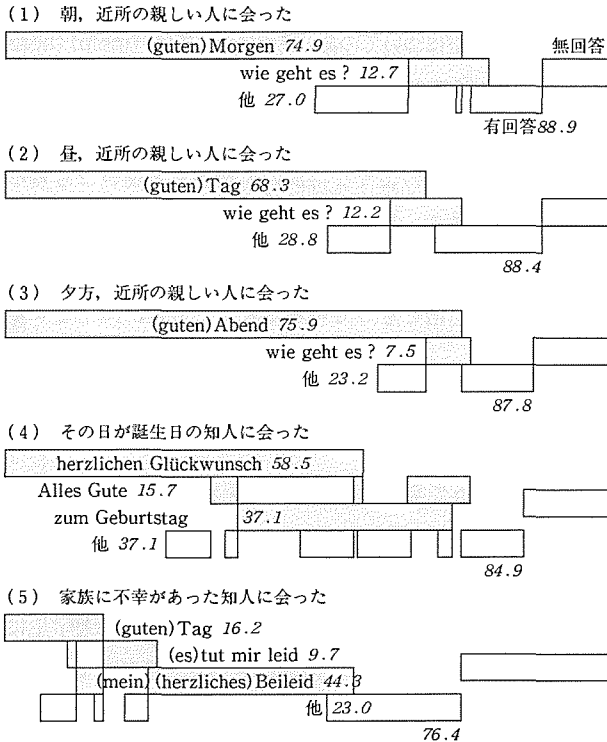


図3-15 道でのあいさつのことば(ドイツ人)

あいさつをするとした回答に対する百分率。複数回答は第1回答のみを採った。

がっているものは縦に重ねてある。複数回答は第1回答のみを採った。

平生のあいさつ(1)(2)(3)は、要するに「(guten) Morgen/Tag/Abend (お早う/今日は/今晚は)」という簡単なものの類であり、それになにかが付随することもある。ただし、(1)朝のあいさつ「(guten) Morgen」には、わずかながらあった「(guten) Tag」の回答を含め、他の項目でも同様の処理をした。付随するもので最も多かったのは、「wie geht es ? (いかがか)」の類であり、これは単独ではほとんど用いないようである。

特別のあいさつ(4)(5)は、やはり感動詞と言ってよいようなものであるが、度意なり弔意なりの多少とも実質をもったことばが、用いられている。すなわち、(4)誕生日についてのあいさつにおいては「herzlichen Glückwunsch

（心からのおいおいを）」の類であり、これには「zum Geburtstag（誕生日に）」の類がよく付随する。（5）不幸についてのあいさつにおいては「（mein）（herzliches）Beileid（おくやみを）」の類である。

以上の、ドイツ人の、道で知人に会ったときのあいさつの様式は、つぎのごとくである。誕生日ないし不幸のような特別の事情がある場合はもちろん、平生でも立ち止まるくらいである。そうして、平生ならば、簡単なことばを言い、うなずくなり、握手をするなり、手を振るなりする。特別の事情があるならば、それについて自分も同様の感情をもっていることを一言し、握手をする。

3.2.3. 在日外国人

平生、近所の親しい人に道で会えば、あいさつをする。大学生男は80％程度であるが、そのほかの層は90％以上が、あいさつの内容を回答している。知人が誕生日であれば、それよりもなおよくあいさつをする。しかし、知人が家族に不幸のあったばあい、それについてあいさつをすることは、大学生において少なくなる。図3-16に、誕生日についてのあいさつと、不幸についてのあいさ

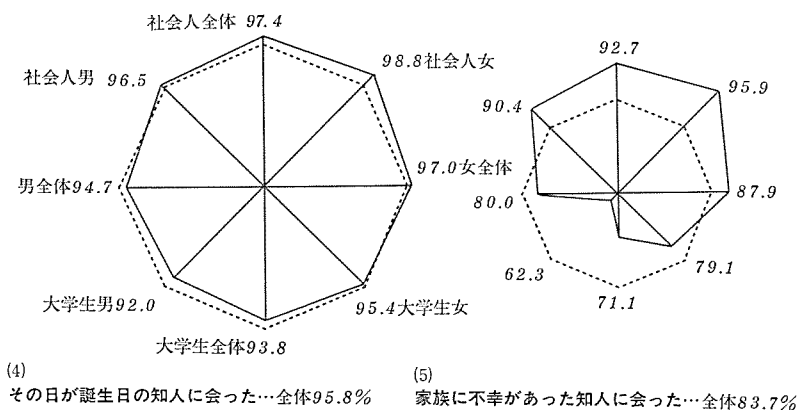


図3-16 道でのあいさつ（在日外国人）

ことばがあるという回答の、ことばがあるまたはないという回答の和に対する百分率。
中心60.0%, 破線は全体についての百分率。

つとを、示す。数値は、あいさつにことばがあるかないかという質問に対する有回答数を基準とした、ことばがあるという回答数の百分率である。しかし、そのことばは、日本語もあり英語もあり、日本での実生活であるのか、日本での理念であるのか、あるいは外国での実生活を回顧したのであるか、わからないところがあるのである。

随伴行動のうち、あいさつをするに際して立ち止まるとしたものを、その質問に肯否いずれかで回答したものに対する百分率で、つぎに示す。無回答および不定は計算から除いてあるから、残余の数値が立ち止まらないとしたものである。

(1) 朝、近所の親しい人に会った	31.6 %
(2) 昼、近所の親しい人に会った	35.6
(3) 夕方、近所の親しい人に会った	36.0
(4) その日が誕生日の知人に会った	94.4
(5) 家族に不幸があった知人に会った	94.2

平生のあいさつ(1)(2)(3)と特別のあいさつ(4)(5)とは、異質であると言ってよいであろう。

みぶりにについての質問は、まずみぶりがあるかないかを問い、もしあるというのなら、ついでどのようなみぶりであるかを問うた。項目ごとに、みぶりがあるかないかの質問に対する有回答を基準として、回答の多かったものから順にみぶりの種類の百分率を示すならば、図3-17のごとくである。

全体として、家庭でのあいさつにくらべ、一様に有回答の率が高い。その内容は、平生のあいさつ(1)(2)(3)においては、

- うなずく (slight nod of the head)
- おじぎをする (deep/slight bow from the waist up)
- 手を振る

が多く、(1)(2)(3)は同質のものであると考えられる。特別のあいさつ(4)(5)においては、(1)(2)(3)とくらべて、「手を振る」が減り、代わりに、

- 握手をする
- 抱き合う

(1) 朝, 近所の親しい人に会った

(1) 朝, 近所の親しい人に会った		みぶりなしおよび無回答		
		wave		他
nod of the head	46.2	37.4	18.7	13.5
bow from the waist up		有回答85.7		

(2) 昼, 近所の親しい人に会った

n.h.	46.7	b.w.u.	33.3	w.	18.2	15.5	
82.7							

(3) 夕方, 近所の親しい人に会った

n.h.	45.5	b.w.u.	34.8	w.	15.2	13.4	
80.7							

(4) その日が誕生日の知人に会った

bow from the waist up		hug			
26.6	21.1	14.6	13.6	23.2	
shake hands		nod of the head		70.6	

(5) 家族に不幸があった知人に会った

s.h.						
b.w.u.	32.7	13.2	9.9	8.1	15.8	
h.		n.h.		61.8		

図3-17 道でのあいさつのみぶり(在日外国人)

みぶりがあるまたはないとした回答に対する百分率。複数回答を加算。

が勢力を得ている。(4)(5)は,(1)(2)(3)に対して,やはり異質であると言ってよいであろう。

英語版では,表情に関する質問をしている。特別な表情をしないか,または相手を見てにこりとするか,問うたものである。平生のあいさつ(1)(2)(3)および(4)誕生日についてのあいさつでは,全回答者の80%内外がにこりすると回答し,残り10%内外ずつが特別な表情をしないと回答したか無回答であるかである。(5)不幸についてのあいさつは特異であって,質問の選択肢にない別の表情を記した回答が最も多い。

- 別の表情をする 34.6%
- 特別な表情をしない 29.2
- にこりとする 10.4
- 無回答その他 25.0

この結果は,ある程度まで予想しうるであろう。しかし,別の表情がどのようなものであるかということには,立ち入らないこととする。

3.2.4. 対照

道で知人に会ったときの日本人のあいさつの特色は、ドイツ人ないし在日外国人とくらべてどのようなものであるか、というかたちで、以上をまとめることとする。

平生のあいさつと、誕生日ないし不幸という特別の事情に対するあいさつとが、種々の点で異なり、そのことは、日本人においてのみならず、ドイツ人ないし在日外国人においてもそうである。

平生のあいさつをよくおこなっていて、そのことも、日本人のみのことではないが、その随伴行動は、ドイツ人とくらべて対照的である。日本人は、あまり立ち止まらずに、軽くおじぎをするなり頭を前にたおすなりする。ドイツ人は、よく立ち止まって、握手をすることもある。しかし、あいさつのことばは、日本人も簡単であり、ドイツ人も簡単である。

日本人は、誕生日のあいさつをすることに、あまり熱心でないようである。特に社会人男においてそうである。このことは、今回は調査しなかったが、自分の誕生日を公言したり他人の誕生日を知っていたりしないという、あいさつ以前の問題に、よっていると思われる。あいさつをすること自体が各層にひろがっていない、すなわち一般化していない、そのためか、みぶりも一様化していない。以上のことは、日本人の他の項目のあいさつとくらべても知られるのであるが、ドイツ人の、ほとんどあいさつをしてみぶりも握手で様式化していることとくらべて、一層あきらかになるのである。ただし、あいさつのことばは、「(誕生日) おめでとう」に様式化されているようである。

不幸に対するあいさつは、日本人は主として社会人がおこなうもののようにある。大学生男は、他の層のひととくらべてあいさつをあまりおこなわないようであるが、ドイツ人の大学生男とくらべても、とくにこのあいさつにおいて、おこなわないことが際だっている。大学生女も、そこまで際だっていないにしても、ドイツ人にくらべればへだたりがある。また、あいさつをおこなうにしても、一様ではない。みぶりは、おじぎをすることが多いようであるが、とら

えにくいところもあり，ことばは，ともかく弔意が相手に伝わればよいようであり，いく種類かの表現が用意されている。ドイツ人が，握手をして「Beileid」と述べるという，一応の様式をもっているのとは，異なる。

誕生日ないし不幸という事情に対する，日本人のあいさつは，以上を要するに，もし一様性ということが様式の完成であるのならば，様式として完成していないのではなかろうかということである。

3.3. 公園でのあいさつ

前節までは、家庭内および路上で行われる種々のあいさつ行動について述べてきた。ここでは、「公園で」というごく限られた場面でのあいさつ行動を、出会ってから別れるまでの一連の流れのなかで見ていくことにする。

3.3.1. 日本人

「日曜日の朝、公園を散歩していると、近所の同年輩の親しい人に出会いました」という場面設定で始まり、出会ったときのあいさつ、話題、目線の位置、別れるときのあいさつの順に質問項目が続いている。以下で、調査の項目順に結果を見ていくことにしよう。

(1) 出会ったときのあいさつ

表3-18 出会ったときのことば（日本人）

		オハヨウ ゴザイマス	オハヨウ	コンニチハ	感動詞	その他	無回答	計
社 会 人	全 体	37.2	31.9	9.2	9.6	2.3	9.8	511
	男	36.5	29.8	9.8	10.7	2.2	10.9	449
	女	44.9	46.8	4.8	1.6	3.2	1.6	62
	若	16.9	48.2	13.3	10.8	2.6	8.2	195
	中	46.0	23.0	7.5	10.2	2.1	11.2	187
	壮	55.0	20.2	5.4	7.0	2.3	10.1	129
学 生	全 体	8.3	54.5	8.5	16.7	3.4	8.5	587
	男	5.3	33.1	8.8	33.5	3.9	15.5	284
	女	11.2	74.6	8.3	1.0	3.0	2.0	303

社会人・学生とも 97 %前後と、ほとんどの人が「あいさつをする」と答えている。残りの 3 %前後の回答のうち、「あいさつをしない」と答えた人は社会人 10 名、学生 14 名で、女子学生 1 名を除くとすべて男性であった。

具体的なことばの分布は表 3-18 のようになっている。「オハヨウゴザイマス」と「オハヨウ」で 60 %を超える回答を得ている。社会人の年齢別構成を見ると、「オハヨウゴザイマス」は壮年層に多く、「オハヨウ」は逆に若年層に多くになっている。年齢が高くなるにつれて「オハヨウゴザイマス」が多くなっているのがはっきりと現れている。これら二つの語形については社会人、学生とも女性の方が多くなっている。とくに女子学生は 75 %が「オハヨウ」を選択しているのが目立つ。「感動詞」は「ヤア」や「オス」などをまとめたものである。この項目は社会人、学生とも男性に片寄っている。

表 3-19 出会ったときの動作（日本人）

		立 ち 止 ま る	立 ち 止 ま ら な い	そ の 他 回 答	計
社 会 人	全 体	59.1	31.5	9.4	511
	男	56.3	33.6	10.0	449
	女	79.0	16.1	4.8	62
学 生	全 体	64.2	27.6	8.2	587
	男	48.9	35.9	15.1	284
	女	78.5	19.8	1.7	303

表 3-19 は動作を示している。60 %前後が立ち止まって、30 %前後が立ち止まらずにあいさつをしている。社会人、学生とも「立ち止まる」は女性に、「立ち止まらない」は男性に多くなっている点が目立っている。

次にみぶりを見てみよう。選択肢は前節と同様であるが、再掲すると次のようである（「別れるとき」の選択肢も同様）。

1. 深々とおじぎをする（上半身を深く前にたおす）
2. おじぎをする（上半身を軽く前にたおす）
3. 会釈する（頭を軽く前にたおす）
4. 上半身は動かさずひざだけを折る
5. あごをしゃくる
6. 手をあげる
7. 手を振る
8. 握手する

9. 抱き合う
10. キスをする
11. 帽子をとる
12. 帽子に手をやる

これらのみぶりのうち、比較的度数の多かったものについて比率を見ると表

表3-20 出会ったときのみぶり（日本人） [複数回答]

		おじぎをする	会釈する	手をあげる	手を振る	その他	計
社会人	全体	20.4	48.1	21.1	3.5	2.5	511
	男	20.7	48.6	21.2	2.7	2.7	449
	女	17.7	45.2	21.0	9.7	1.6	62
	若	8.7	43.0	33.3	7.7	3.6	195
	中	23.5	50.3	15.0	1.6	1.1	187
	壮	33.3	52.7	11.6	—	3.1	129
学生	全体	8.5	28.8	34.6	21.0	2.6	587
	男	7.7	21.8	48.9	10.2	3.2	284
	女	9.2	35.3	21.1	31.0	2.0	303

(注) この設問では、みぶりについては三つまでの複数回答を認めている。この表はそれらを合わせて作成してある。

3-20 のようになる。表中の「おじぎをする」は「深々とおじぎをする」と「おじぎをする」を合わせて扱っている。表を見ると社会人では「会釈する」が一番多く、「手をあげる」「おじぎをする」が続いて多くなっている。学生では「手をあげる」が一番多く、次いで「会釈する」「手を振る」の順になっている。このように、社会人と学生ではみぶりに差があるようである。社会人を年齢別に見ると、「おじぎをする」「会釈する」は年齢が高くなるにつれて多くなり、逆に「手をあげる」「手を振る」は若くなるにつれて多くなっている。社会人と学生とのこの差は年齢による差とも考えられよう。学生については「手をあげる」と「手を振る」の男女構成が逆になっているのが目立つが、社会人ではあまり差が見られない。

(2) 話題

“とくに用事がないとして、何か話題をみつけて話をしますか”という問いに対する回答は以下のものであった。

	する	しない	無回答	計
社会人	350(68.5)	156(30.5)	5(1.0)	511
男	300(66.8)	144(32.1)	5(1.1)	449
女	50(80.6)	12(19.4)	—	62
学生	427(72.2)	157(26.7)	3(0.5)	587
男	191(67.3)	90(31.7)	3(1.1)	284
女	236(77.9)	67(22.1)	—	303

以上のように、70 %前後が何か話題をみつけて話をすると答え、30 %前後がしないと答えている。社会人、学生とも女性の「する」が多くなっている。

次にどのような話題を選ぶのかを見てみよう。選択肢は、

1. 天気 2. 仕事 3. 健康 4. スポーツ 5. 政治 6. その他

の6項目で、複数回答が認められている。度数の少なかった「政治」（社会人4人、学生1人）を除き、「その他」の中で頻度の高かった「近況」を独立させた上で、「話をする」と答えた人（社会人350人、学生427人）について集計したものが表3-21である。また、学生については「仕事」と「勉強」の区別がつきにくかったので同じカテゴリーとしてまとめている。社会人を見ると、「天気」が一番多く、「仕事・勉強」「健康」「スポーツ」などが20 %台で続いている。

表3-21 話題（日本人）

〔複数回答〕

		天 気	仕事・勉強	健 康	スポーツ	近 況	そ の 他	計
社 会 人	全 体	59.4	28.3	24.0	23.1	3.1	13.7	350
	男	59.0	29.7	24.0	25.7	2.0	13.0	300
	女	62.0	20.0	24.0	8.0	10.0	18.0	50
	若	35.8	38.7	21.2	27.7	6.6	19.7	137
	中 壮	69.6 81.8	24.8 17.0	20.8 33.0	24.8 13.6	— 2.3	10.4 9.1	125 88
学 生	全 体	32.1	34.2	15.0	14.8	15.7	23.9	427
	男	26.2	28.3	10.5	24.6	13.1	27.2	191
	女	36.9	39.0	18.6	6.8	17.8	21.2	236

「天気」「健康」は年齢が高くなるにつれて多くなり、「仕事・勉強」「スポーツ」などの話題は若い方に多くなっている。学生では「仕事・勉強」「天気」が多く、「健康」「スポーツ」「近況」などが前者の約半分の比率となっている。「スポーツ」は社会人、学生を問わず、男性に話題にされることが多いようである。「その他」の内訳は多岐にわたっているが、その主なものは以下に示すようなものである。これらは社会人、学生を合わせても 10 人程度、あるいはそれ以下の頻度であった。

「娯楽・趣味」「家族のこと」「世間話」「最近の出来事」「日常生活」「共通の話題」「異性」「その日の予定」etc……。

(3) 目線の位置

これは、“その人と話をしている間、どこを見て話しますか”という設問で、面と向かったときの目線の位置を尋ねたものである。表 3-22 を見ると、社会人では 80.2%，学生で 75.8%と、大多数の人が相手の「目」を見ると回答している。男性に比べ、女性の比率の高さが目立っている。「目・口以外」とは、相手の目、口以外の部位という意味である。「顔」や「胸」などが主なものであるが、目と口の両方を答えた人も「顔」と同義と考えてこのカテゴリーで集計してある。「相手以外を見る」などは「その他」に含めた。

表 3-22 相手のどこを見るか（日本人）

		目	口	目・口以外	その他 無回答	計
社会人	全体	80.2	6.3	5.7	7.8	511
	男	78.8	6.7	6.2	8.2	449
	女	90.3	3.2	1.6	4.8	62
	若	81.0	6.7	5.6	6.7	195
	中	79.1	5.3	5.3	10.2	187
	壮	80.6	7.0	6.2	6.2	129
学生	全体	75.8	7.0	8.9	8.3	587
	男	67.6	9.5	11.3	11.6	284
	女	83.5	4.6	6.6	5.3	303

(4) 別れるときのあいさつ

社会人の89.4%, 学生の97.1%があいさつをすると答えている。しないと答えたのはほとんど男であることは「出会ったとき」と同じ傾向である。

表3-23 別れるときのことば(日本人)

		サヨウナラ	シツレイシマス	デハ・マタ	バイバイ	ドウモ	その他	無回答	計
社会人	全体	22.1	12.7	36.4	0.8	4.5	9.0	14.5	511
	男	19.6	13.1	37.4	0.4	5.1	8.0	16.3	449
	女	40.3	9.7	29.0	3.2	—	16.0	1.6	62
	若	28.2	3.1	42.6	2.1	1.5	8.2	14.4	195
	中	18.7	15.0	38.5	—	7.0	5.3	15.5	187
	壮	17.8	24.0	24.0	—	5.4	15.5	13.2	129
学生	全体	25.7	1.2	25.9	33.0	0.2	9.5	4.4	587
	男	19.7	1.4	33.5	25.7	—	12.3	7.4	284
	女	31.4	1.0	18.8	39.9	0.3	6.9	1.7	303

表3-23はそのときのことばを示したものである。社会人は「デハ・マタ」「サヨウナラ」「シツレイシマス」の順になっている。「デハ・マタ」は「デハ」や「マタ」も含めて集計した。学生を見ると、「バイバイ」が一番多く、次いで「デハ・マタ」「サヨウナラ」が同じ位の比率で続いている。社会人、学生に共通して、「サヨウナラ」は女性に、「デハ・マタ」は男性に多くなっている。「バイバイ」は、社会人にはほとんど見られない語形であるが、学生の比率を見ると女

表3-24 別れるときのみぶり(日本人)

〔複数回答〕

		おじぎをする	会釈する	手をあげる	手を振る	その他	計
社会人	全体	9.4	37.0	24.3	13.1	1.4	511
	男	9.6	36.5	26.3	9.4	1.6	449
	女	8.1	40.3	9.7	40.3	—	62
	若	3.6	27.2	28.7	25.6	0.5	195
	中	11.2	41.2	24.6	8.0	0.5	187
	壮	15.5	45.7	17.1	1.6	3.9	129
学生	全体	4.3	10.9	25.0	52.4	1.4	587
	男	3.9	9.9	42.3	29.6	2.5	284
	女	4.6	11.9	8.9	73.9	0.3	303

性に多くなっている。年齢別に見ると、「シツレイシマス」は年齢が高くなるにつれて多くなっている。「サヨウナラ」「デハ・マタ」は逆の傾向を示している。

そのときのみぶりは表 3-24 に示した通りである。社会人では「会釈する」が一番多く、「手をあげる」が続いている。学生では、「手を振る」が断然多く、次いで「手をあげる」となっている。「会釈する」は 10 % 程度となり、社会人との差はかなり大きくなっている。各みぶりの性別構成を見てみると、「おじぎをする」「会釈する」などは男女ともほぼ同程度に現れているが、「手をあげる」「手を振る」は構成が極端に違っている。「手をあげる」は男性に、「手を振る」は女性に多く見られる。

3.3.2. ドイツ人

場面設定は日本人調査のものと同じであるが、近所の親しい人を Herr Müller と男性に特定した点が異なっている。質問文は次のようである。

„Wenn Sie am Sonntagmorgen im Park spazierengehen, treffen Sie einen vertrauten Nachbarn (Herrn Müller), der in Ihrem Alter ist.“

(1) 出会ったときのあいさつ

„Mit welchen Worten grüßen Sie ihn?“ (どんなことばであいさつしま

表 3-25 出会ったときのことば (ドイツ人)

		Guten Morgen	Guten Tag	Morgen	Tag	Hallo	その他	無回答	計
社会人	全体	63.3	5.0	3.2	2.8	12.8	9.2	3.7	218
	男	61.7	4.7	6.5	1.9	8.4	11.2	5.6	107
	女	64.9	5.4	—	3.6	17.1	7.2	1.8	111
	若	53.4	3.4	3.4	2.3	23.9	11.4	2.3	88
	中	56.8	6.8	4.5	4.5	9.1	13.6	4.5	44
	壮	76.7	5.8	2.3	2.3	3.5	4.7	4.7	86
学生	全体	49.5	4.8	5.7	3.8	29.5	6.7	—	105
	男	46.7	6.7	4.4	6.7	28.9	6.7	—	45
	女	51.7	3.3	6.7	1.7	30.0	6.7	—	60

すか)という設問に対して、150 通りの語形による回答を得た。これらの回答を分類して集計したものが表 3-25 である。例えば, Guten Morgen というカテゴリーに分類した具体的な表現形式の例を二, 三あげると次のようなものである。

Guten Morgen! (おはようございます)

Guten Morgen, Herr Müller! (おはようございます, ミューラーさん)

Guten Morgen, Herr Müller, wie geht es Ihnen? (おはようございます, ミューラーさん, ごきげんいかがですか)

„Guten Morgen“ や „Hallo“ が多くなっている。„Guten Morgen“ は社会人に, „Hallo“ は学生に多く見られるが, 社会人の年齢別構成を見れば明らかに, これらの差は年齢によるものと考えられる。つまり, „Guten Morgen“ は年齢が高くなるにつれ, „Hallo“ は若くなるにつれて, 好んで使われる語形といえそうである。

次にみぶりを見てみよう。みぶりの選択肢は次のようなものが用意された。

Ich gebe ihm die Hand. (握手する)

Ich nicke mit dem Kopf. (会釈するまたはあごをしゃくる)^(注)

Ich verbeuge mich. (おじぎをする)

Ich ziehe den Hut. (帽子をとる)

Sonstige. (その他)

以上のみぶりのうち, 「おじぎをする」は社会人, 学生ともにほとんど現れな

表 3-26 出会ったときのみぶり (ドイツ人) (複数回答)

		握手する	会釈する	帽子をとる	その他	計
社 会 人	全 体	45.0	46.3	6.4	6.4	218
	男	46.7	48.6	12.1	7.5	107
	女	43.2	44.1	0.9	5.4	111
	若	43.2	47.7	—	5.7	88
	中	50.0	38.6	6.8	6.8	44
	壮	44.2	48.8	12.8	7.0	86
学 生	全 体	43.8	58.1	—	4.8	105
	男	57.8	46.7	—	6.7	45
	女	33.0	66.7	—	3.3	60

かったので「その他」に含めて集計した。その結果が表 3-26 である。社会人では「握手する」と「会釈する」がほとんど同じ比率になっているが、学生では「会釈する」がやや多くなっている。学生の間では「握手する」は男性に、「会釈する」は女性に多くなっているが、社会人にはこの傾向が見られない。

(注) „Ich nicke mit dem kopf “というみぶりは、
我々の観察では「会釈する」というあごを引く行動を意味する
とともに、「あごをつき出す」行動、あるいは「あごをしゃくる」
という行動も含まれるようである。しかし、「あごをしゃくる」
という表現は日本では人をこばかにしたような印象があるため、
ここではこの行動を「会釈する」というみぶりで代表させるこ
とにする。

(2) 話題

日本語版の調査票同様、特に話題が無いときに、何か話題を見つけて話をす
るかどうかが、またもしするとしたらどのような話題を選ぶかを尋ねた項目であ
る。質問文は以下のようである。

„Wenn nichts Besonderes vorliegt, suchen Sie dann etwas, worüber Sie
mit ihm sprechen können?“

これに対する回答は以下の通りである。

	Ja (する)	Nein (しない)	無回答	計
社会人	133(61.5)	80(36.7)	5(2.3)	218
男	58(54.2)	47(43.9)	2(1.9)	107
女	75(67.6)	33(29.7)	3(2.7)	111
学 生	63(60.0)	41(39.0)	1(1.1)	105
男	27(60.0)	18(40.0)	—	45
女	36(60.0)	23(38.3)	1(1.7)	60

ほぼ 6 割が何か話題を見つけて話をすると回答し、4 割弱が話をしないと回
答している。社会人にだけ男女差が現れている。

次に „Ja“ と答えた人について、どのような話題を選ぶかをまとめてみよう。

表3-27 話題（ドイツ人）

〔複数回答〕

		天 気	健 康	仕事・勉強	スポーツ	政 治 時事問題	そ の 他	計
社 会 人	全 体	48.9	22.6	2.3	8.3	5.3	37.6	133
	男	46.6	25.9	1.7	12.1	10.3	37.9	58
	女	50.7	20.0	2.7	5.3	1.3	37.3	75
	若	45.3	9.4	3.8	7.5	3.8	43.4	53
	中	48.0	32.0	—	8.0	—	36.0	25
学 生	壮	52.7	30.9	1.8	9.1	9.1	32.7	55
	全 体	41.3	15.9	11.1	6.3	6.3	58.7	63
	男	37.0	18.5	11.1	14.8	11.1	55.6	27
	女	44.4	13.9	11.1	—	2.8	61.0	36

調査票には, „Wetter (天気)“ „Gesundheit (健康)“ „Sonstige (その他)“ の三つの選択肢が用意されていた。「その他」は記述式であるが, その中で比較的多かった回答を選び出して集計したものが表3-27である。「天気」「健康」などは老若男女を問わず無難な話題といえよう。しかし, 「スポーツ」や「政治・時事問題」はやや男性好みの話題といえそうである。「その他」の中には, 表に示した „Beruf (仕事)“ „Studium (勉強)“ „Sport (スポーツ)“ „Politik (政治)“ „Aktualität (時事問題)“ の他, „Hobby (趣味)“ „Familie / Kinder (家族／子供)“ をはじめ多くの回答があった。また, 「その他」に回答しただけで無記入のものが, 社会人に25人(18.8%), 学生に10人(15.9%)程いた。

(3) 目線の位置

„Worauf richten Sie Ihren Blick, während Sie mit ihm reden? (彼と話をする間, 目線をどこに向けますか)“ という設問に対し, „Nicht auf ihn(彼を見ない)“ を選択した人は社会人1人, 学生3人だけであった。„Auf ihn(彼を見る)“ と答えた人は彼のどこを見て話をするのだろうか。それを示す選択肢は次の通りである。

Ich sehe ihm in die Augen. (目を見る)

Ich sehe ihm auf den Mund. (口を見る)

表3-28 相手のどこを見るか（ドイツ人）

		目	口	目・口以外	その他の回答	計
社会人	全体	71.6	3.2	19.3	6.0	218
	男	72.0	1.9	19.6	6.5	107
	女	71.2	4.5	18.9	5.4	111
	若	71.6	3.4	19.3	5.7	88
	中	75.0	2.3	13.6	9.1	44
	壮	69.8	3.5	22.1	4.7	86
学生	全体	68.6	3.8	24.8	2.9	105
	男	62.2	2.2	33.1	2.2	45
	女	73.3	5.0	18.3	3.3	60

Ich sehe ihn an, aber nicht in seine Augen oder auf seinen Mund.（目や口以外を見る）

これに対する集計結果が表3-28である。「目」が圧倒的に多くなっている。社会人には男女差は見られないが、学生では、男子の「目・口以外」の率が高くなっている。

（4）別れるときのあいさつ

何と言って別れるかを尋ねた項目である。ドイツ語の質問文は以下に示す通りである。

„Mit Welchen Worten verabschieden Sie sich von ihm?“

結果は表3-29のようになった。はっきりとした対応はつけにくいだが、„Auf Wiedersehen“ „Wiedersehen“ „Tschüß“などは日本では、「さようなら」や「バイバイ」などに相当する語形、„Also“は「それでは」といったところであろう。

„Auf Wiedersehen“と„Tschüß“に目を向けてみると、社会人、学生ともに、これら二つの語形で約7割を占めている。社会人には„Auf Wiedersehen“が多く、学生には„Tschüß“が多くなっているが、これは社会人の年齢別構成からも分かるように、„Auf Wiedersehen“は年齢が高くなるにつれて多くなり、„Tschüß“は若い方に多くなっているためであろう。

表3-29 別れるときのことば（ドイツ人）

		Auf Wiedersehen	Wiedersehen	Tschüß	Also	その他	無回答	計
社会人	全体	57.8	6.0	13.8	3.2	13.8	5.5	218
	男	60.7	7.5	10.3	2.8	11.2	7.5	107
	女	55.0	4.5	17.1	3.6	16.2	3.6	111
	若中	45.5	9.1	23.9	4.5	12.5	4.5	88
	壮	56.8	—	15.9	2.3	18.2	6.8	44
学生	全体	70.9	5.8	2.3	2.3	12.8	5.8	86
	男	37.1	9.5	33.3	7.6	11.4	1.0	105
	女	33.3	11.1	28.9	11.1	13.3	2.2	45
		40.0	8.3	36.7	5.0	10.0	—	60

表3-30 別れるときのみぶり（ドイツ人）〔複数回答〕

		握手する	会釈する	帽子をとる	その他	計
社会人	全体	49.5	43.1	6.0	7.8	218
	男	50.5	44.9	11.2	9.3	107
	女	48.6	41.4	0.9	6.3	111
	若中	43.2	48.9	—	9.1	88
	壮	59.1	34.1	6.8	9.1	44
学生	全体	51.2	41.9	11.6	5.8	86
	男	41.9	49.5	1.0	16.2	105
	女	48.9	48.9	2.2	17.8	45
		36.7	50.0	—	15.0	60

次にみぶりを見てみよう。質問文および選択肢は、『出会ったとき』と全く同じである。「握手する」「会釈する」が社会人、学生ともに40％台となり、『出会ったとき』のみぶりの分布と大きな違いは見られない(表3-30)。しかし、学生の性別構成を見ると、男性は「握手する」が、女性は「会釈する」が若干少なくなっている。その分、「その他」の率が高くなっている。

3.3.3. 在日外国人

まず、調査票の場面設定の部分を見てみよう。

“SPEECH SITUATION : Casual Meeting at the park”

Suppose it is a Sunday morning, you are out for a walk and you meet a good friend of about the same age whom you meet regularly.

以上のように、日本人調査では「近所の人」となっていた部分が、在日外国人調査では、「よく会う人」となっている。

さて、日本人調査の場合、日本に住んでいる日本人に対しての調査であった。この点ではドイツ人調査も同様、ドイツに居住するドイツ人に対しての調査であった。しかし、在日外国人調査の対象は、日本に居る外国人（ここで扱うのは母国語が英語である人に限定）である。日本人およびドイツ人に対する調査では、想定した相手（公園で出会った人）はほとんど同国人であろう。しかし、在日外国人は相手に同国人以外を想定する可能性がある。そこで、この英語版の調査票では、公園でのあいさつに関する各設問に先立って、何国人を想定したかを尋ねた。質問文と選択肢は次のようである。

質問文：What country is the person you are thinking of from ?

選択肢：We are of the same nationality (同国人)

Japanese (日本人)

Other (その他)

これに対して得られた回答は以下のようであった。「同国人」と「日本人」の比率がほぼ同程度となっている。

	同国人	日本人	その他・無回答	計
社会人	87(42.4)	97(47.3)	21(10.2)	205
学 生	87(48.6)	81(45.3)	11(6.1)	179

(1) 出会ったときのあいさつ

(i) ことば

社会人、学生ともに96%以上の人がかことばであいさつをすると答えている。「しない」と答えた人は学生に1人、あとは無回答であった。反応語形を整理集計すると表3-31のようになる。日本語による語形で多かったものは「オハヨウ」「オハヨウゴザイマス」「コンニチハ」などである。表では「オハヨウ」と

表3-31 出会ったときのことば（在日外国人）

		オハヨウ (ゴザイマス)	コンニチハ	Hi	Hallo	Good morning	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	全 体	13.7	7.8	16.6	11.2	15.1	14.1	21.5	205
	男	14.2	7.5	11.7	12.5	13.3	15.0	25.8	120
	女	12.9	8.2	23.5	9.4	17.6	12.9	15.3	85
	若	12.7	11.4	21.5	6.3	12.7	20.3	15.2	79
	中	14.9	6.8	16.2	12.2	18.9	12.2	18.9	74
	壮	13.5	3.2	9.6	17.3	13.5	7.7	34.6	52
学 生	全 体	23.5	8.4	21.8	10.1	3.9	15.6	16.8	179
	男	18.1	10.8	16.9	12.0	3.9	21.7	16.9	83
	女	28.1	6.3	26.0	8.3	4.2	10.4	16.7	96

「オハヨウゴザイマス」を合わせて集計してある。また，“OHAYOO” “KONNICHIIWA”などのローマ字による反応も「オハヨウ」「コンニチハ」などの日本文による反応と同じカテゴリーとして扱った。英語による反応文の中で，“Hi”の中には“Hey”を，“Good morning”の中には“morning”を含めて集計してある。

この反応語形を日本語、英語という観点で再分類し、想定した人とのクロス集計としてまとめたものが表3-32である。学生の日本語回答が多いのは、日本語を学習している人が社会人に比べて多いからであろうか。さらに、同国人を想定した人は英語の回答を、日本人を想定した人は日本語の回答をする傾向が強く現れている。しかし、社会人では学生に比べて、日本人を想定した人の日

表3-32 想定した人と、出会ったときのことば（在日外国人）

		英語回答	日本語回答	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	同 国 人	79.3	1.1	3.4	16.1	87
	日 本 人	17.5	51.5	6.2	24.7	97
	その他・無回答	66.7	—	4.8	28.6	21
	全 体	48.8	24.9	4.9	21.5	205
学 生	同 国 人	75.9	5.7	3.4	14.9	87
	日 本 人	6.2	79.0	1.2	13.6	81
	その他・無回答	27.3	9.1	9.1	54.5	11
	全 体	41.3	39.1	2.8	16.8	179

本語回答が少なく、英語回答が若干多くなっている。

(ii) 表情 (Facial Expression)

あいさつをするときの顔の表情を尋ねたものであるが、これは在日外国人調査にだけ取り入れられた項目である。選択肢は、

No particular change of expression. (特に表情を変えない)

Look at him / her and smile. (その人を見てほほえむ)

の二つが用意されたが、「その人を見てほほえむ」が社会人、学生とも 93 % を超え、「表情を変えない」は社会人 4 名、学生 2 名 (ともに男性) であった。

(iii) 動作 (Movement)

あいさつをするときに立ち止まるか否かを尋ねたものである。選択肢は、

Stop walking and stand in place. (立ち止まる)

Continue to walk. (歩き続ける = 立ち止まらない)

「立ち止まる」という回答は、

社会人 182(88.8) [男 101(84.2) 女 81(95.3)]

学 生 152(84.9) [男 66(79.5) 女 86(89.6)]

となり、社会人、学生とも女性の「立ち止まる」の割合が多くなっている。

(iv) みぶり (Gesture)

みぶりは 3 個までの複数回答を認めてある。選択肢は前節と同じであるが、比較的度数の高かったものを示すと以下の通りである。

Deep (Slight) bow from the waist up. (おじぎをする)

Slight nod of the head. (会釈する、頭を軽く前にたおす)

Upward motion of the head raising the chin. (あごをしゃくる)

Raise one hand. (手をあげる)

Wave. (手を振る)

Shake hands. (握手する)

みぶりをするか否かについては以下のような結果を得た。

	Y E S	N O	無回答	計
社会人	150(73.2)	37(18.0)	18(8.8)	205
学 生	126(70.4)	30(16.8)	23(12.8)	179

表3-33 出会ったときのみぶり (在日外国人)

〔複数回答〕

		おじぎをする	会釈する	あごをしゃく	手をあげる	手を振る	握手する	その他	計
社会人	全体	17.1	18.5	4.9	14.6	20.5	14.6	12.2	205
	男	18.3	20.0	4.2	13.3	18.3	20.8	13.3	120
	女	15.3	16.5	5.9	16.5	23.5	5.9	10.6	85
	若	12.7	21.5	8.9	17.7	22.8	6.3	15.2	79
	中	14.9	20.3	2.7	14.9	16.2	14.9	6.8	74
学生	壮	26.9	11.5	1.9	9.6	23.1	26.9	15.4	52
	全体	9.5	21.2	5.6	16.2	26.3	3.9	10.6	179
	男	9.6	24.1	9.6	14.5	18.1	7.2	6.0	83
	女	9.4	18.8	2.1	17.7	33.3	1.0	14.6	96

社会人、学生との間に大きな差は見られず、また、性差、年齢差もほとんど見られなかった。次に、具体的なみぶりを見てみると、表3-33のようになる。「手を振る」「会釈する」などが多くなっている。「おじぎをする」「握手する」などは社会人の方が学生より多くなっている。これらは年齢による差の現れであろう。

想定した相手によって、みぶりに差があるであろうか。表3-34は想定した人とみぶりのクロス集計表である。社会人、学生ともに、「おじぎをする」「会釈する」などは日本人を想定した人の比率が高くなっている。逆に、「手をあげる」「手を振る」などは同国人を想定した人のほうが比率が高くなっている。在日

表3-34 想定した人と、出会ったときのみぶり (在日外国人)

〔複数回答〕

		おじぎをする	会釈する	あごをしゃく	手をあげる	手を振る	握手する	その他	計
社会人	同国人	4.6	11.5	4.6	18.4	31.0	17.2	14.9	87
	日本人	30.9	24.7	5.2	11.3	14.4	13.4	11.3	97
	その他・無回答	4.8	19.0	4.8	14.3	4.8	9.5	4.8	21
	全体	17.1	18.5	4.9	14.6	20.5	14.6	12.2	205
学生	同国人	2.3	2.3	9.2	24.1	31.0	4.6	14.9	87
	日本人	18.5	43.2	2.5	9.9	22.0	3.7	7.4	81
	その他・無回答	—	9.1	—	—	18.2	—	—	11
	全体	9.5	21.2	5.6	16.2	26.3	3.9	10.6	179

外国人にとって、「おじぎをする」や「会釈する」といったみぶりは日本人的な行動と考えられているのであろうか。

(2) 話題

特に話すことがないときに、何か話題を見つけて話をするか否かを尋ねたこの問いの質問文は次のようなものである。

“If you have no particular purpose for speaking to him, do you introduce some topic of interest in order to make conversation?”

この問いに対する回答は以下の通りである。

	YES	NO	無回答	計
社会人	181(88.3)	17(8.3)	7(3.4)	205
学 生	163(91.2)	10(5.6)	6(3.4)	179

社会人、学生ともに9割前後が話をするかと答えている。男女、年齢による違いはほとんどない。次に、話をするかと答えた人について、話題の分布を見てみよう(表3-35)。選択肢は、“Weather(天気)” “Work(仕事)” “Health(健康)” “Sports(スポーツ)” “Politics(政治)”の五つが用意されたが、日本人調査、ドイツ人調査と同じく、“Study(勉強)”と“Work”を同じカテゴリーとして集計した。“Work / Study”は性、年齢に関係なくよく話題にされるが、“Weather”や“Health”はどちらかというと女性および年齢が高くなる程好

表3-35 話題(在日外国人)

[複数回答]

		天 気	仕事・勉強	健 康	スポーツ	政 治	その他	計
社 会 人	全 体	58.6	48.6	36.5	21.0	12.2	39.8	181
	男	53.9	49.0	27.5	28.4	11.8	32.4	102
	女	64.6	48.1	48.1	11.4	12.7	49.4	79
	若	47.2	44.4	26.4	18.1	15.3	51.4	72
	中	64.1	54.7	40.6	23.4	9.4	37.5	64
	壮	68.9	46.7	46.7	22.2	11.1	24.4	45
学 生	全 体	41.1	56.4	25.8	17.2	11.0	33.1	163
	男	39.0	58.4	22.1	23.4	15.6	35.1	77
	女	43.0	54.7	29.1	11.6	7.0	31.4	86

んで話題にするようである。“Sports”は男性好みの話題といえそうである。

(3) 目線の位置

話をしている間、相手のどこを見るかを尋ねた項目である。質問文と選択肢は以下の通りである。

“Where do you look when speaking with this person?”

1. His / her eyes. (目)
2. His / her mouth. (口)
3. Another part of his / her body other than his / her eyes or mouth.
(目や口以外の相手の体)
4. I try not to look at him / her. (相手を見ないようにする)

表3-36 相手のどこを見るか (在日外国人)

		目	口	目・口 以外	その他 無回答	計
社会人	全 体	79.2	3.9	9.3	7.8	205
	男	74.2	4.2	9.2	12.5	120
	女	85.9	3.5	9.4	1.2	85
	若	74.7	7.6	11.4	6.3	79
	中	78.4	2.7	9.5	9.5	74
学生	壮	86.5	—	5.8	7.7	52
	全 体	79.9	5.0	4.5	10.6	179
	男	83.1	6.0	3.6	8.4	83
	女	77.1	4.2	5.2	14.6	96

集計結果は表3-36の通りである。社会人、学生ともに8割が「目」と答えている。

(4) 別れるときのあいさつ

(i) ことば

社会人、学生とも96%の人があいさつをするという回答をしている。語形を整理・集計すると表3-37のようになる。社会人と学生は良く似た分布をしている。社会人の“bye / byebye” “See you later” に若干男女差が見られる。次

表 3-37 別れるときのことば (在日外国人)

		サヨウナラ	デハマタ	Good bye	bye(bye)	See you later	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	全 体	9.8	13.7	17.1	13.7	16.1	11.7	18.0	205
	男	9.2	15.0	16.7	6.7	18.3	11.7	22.5	120
	女	10.6	11.8	17.6	23.5	12.9	11.8	11.8	85
	若	7.6	19.0	13.9	17.7	20.3	10.1	11.4	79
	中	8.1	13.5	17.6	9.5	18.9	14.9	17.6	74
	壮	15.4	5.8	21.2	13.5	5.8	9.6	28.8	52
学 生	全 体	7.3	17.3	14.5	15.1	15.1	11.2	19.6	179
	男	6.0	18.1	15.7	15.7	16.9	9.6	18.1	83
	女	8.3	16.7	13.5	14.6	13.5	12.5	20.8	96

表 3-38 想定した人と、別れるときのことば (在日外国人)

		英語回答	日本語回答	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	同 国 人	83.9	1.2	1.1	13.8	87
	日 本 人	25.8	54.6	—	19.6	97
	その他・無回答	66.7	—	4.8	28.6	21
	全 体	54.6	26.3	1.0	18.0	205
学 生	同 国 人	81.6	2.5	2.3	13.8	87
	日 本 人	21.0	55.6	2.5	21.0	81
	その他・無回答	36.4	9.1	—	54.5	11
	全 体	51.4	26.8	2.2	19.6	179

に、得られた反応語形を、英語による回答か日本語による回答かで再分類し、想定した人とのクロス集計を見てみよう(表 3-38)。出会ったときと同様に、同国人を想定した人は英語回答、日本人を想定した人は日本語回答という傾向が強くでている。しかし、出会ったときと比べると、学生の日本語回答が減り、日本人に対する英語回答が増えている点が目立つ。

(ii) 表情

選択肢は出会ったときのもと同じである。「その人を見てほほえむ」は、社会人 88 %, 学生 84 %, 「表情を変えない」は、社会人 6 %, 学生 14 % となっている。出会ったときと比べて、「ほほえむ」の率が若干少なくなっている。「表情を変えない」が男性に多いのは、出会ったときと同様である。

(iii) みぶり

みぶりをするか否かは以下の通りである。

	YES	NO	無回答	計
社会人	160(78.0)	28(13.7)	17(8.3)	205
学 生	140(78.2)	24(13.4)	15(8.4)	179

みぶりの選択肢は、出会ったときと同様である。表 3-39 を見ると、出会った

表 3-39 別れるときのみぶり (在日外国人)

〔複数回答〕

		おじぎ をする	会釈する	あごを しゃく	手をあげる	手を振る	握手する	その他	計
社 会 人	全 体	17.6	15.1	2.0	11.2	43.9	8.8	7.8	205
	男 女	19.2	19.2	3.3	9.2	39.2	14.2	5.8	120
		15.3	9.4	—	14.1	50.6	1.2	10.6	85
	若 中 壮	8.9	21.5	2.5	11.4	50.6	3.8	10.1	79
		21.6	12.2	1.4	9.5	41.9	9.5	4.1	74
		25.0	9.6	1.9	13.5	36.5	15.4	9.6	52
学 生	全 体	8.4	17.3	4.5	10.6	50.3	3.4	14.0	179
	男 女	8.4	18.1	6.0	13.3	43.4	7.2	8.4	83
		8.3	16.7	3.1	8.3	56.3	—	18.9	96

ときに比べて、「手を振る」が圧倒的に多くなっている。このみぶりは特に女性に多く、また若いほど多くなっている。「おじぎをする」や「握手する」などは、出会ったときと同じく、年齢が高いほど多くなる傾向が見られる。また、「握手する」が男性に多いのも出会ったときと同じである。

表 3-40 想定した人と、別れるときのみぶり (在日外国人)

〔複数回答〕

		おじぎ をする	会釈する	あごを しゃく	手をあげる	手を振る	握手する	その他	計
社 会 人	同 国 人	2.3	11.5	2.3	9.2	56.3	8.0	10.3	87
	日 本 人	33.0	21.6	2.1	13.4	35.1	10.3	5.2	97
	その他・無回答	9.5	—	—	9.5	33.3	4.8	9.5	21
	全 体	17.6	15.1	2.0	11.2	43.9	8.8	7.8	205
学 生	同 国 人	—	6.9	4.6	9.2	59.8	3.4	19.5	87
	日 本 人	18.5	29.6	3.7	13.6	45.7	3.7	9.9	81
	その他・無回答	—	9.1	9.1	—	9.1	—	—	11
	全 体	8.4	17.3	4.5	10.6	50.3	3.4	14.0	179

次に、想定した相手とのクロス集計(表 3-40)を見てみよう。「おじぎをする」や「会釈する」は日本人を想定した人の方に多く、「手を振る」は同国人を想定した人に多くなっている。これは、出会ったときと全く同じ傾向を示している。

3.3.4. まとめ

「公園でのあいさつ」の流れは以上で見てきたとおりであるが、他の場面でのあいさつ行動との比較、および、日本人、ドイツ人、在日外国人に対する調査結果について、若干の比較対照を行うことにする。

この調査では、「公園でのあいさつ」のほかに、「道でのあいさつ」についていくつかの場面を設定して調査が成されている(詳しくは3.2.を参照のこと)。その中で、「朝、近所の親しい人に会ったときのあいさつ」と本節で取り上げた「公園でのあいさつ」を比べてみよう。

動作については、「道で」の場合、立ち止まってあいさつをするのは、日本人も、在日外国人も3割強程度であった。しかし、「公園で」では、日本人の6割、在日外国人の8割強が立ち止まると回答し、差が著しくなっている。

みぶりにについては以下に示すような結果であった。

		おじぎ	会 釈	手をあげる／振る	握 手
日本人	道で	48 %	46 %	4 %	—
	公園で	14 %	38 %	41 %	—
ドイツ人	道で	—	37 %	17 %	30 %
	公園で	—	50 %	—	45 %
在日外国人	道で	37 %	46 %	19 %	—
	公園で	14 %	20 %	39 %	10 %

日本人、在日外国人は、「道で」に比べて「公園で」の場合、「おじぎをする」「会釈する」が減り、「手をあげる／手を振る」が増えている。これに対してドイツ人はこの二つのみぶりに関して全く逆の傾向を示している点が注目されよう。このように、ともに「朝、近所の親しい人に会ったとき」のあいさつでありながら、「道で」と「公園で」とは、日本人、ドイツ人、在日外国人を問わず、

かなり違ったあいさつ行動として意識されている点が興味深いことである。

次に、「公園でのあいさつ」について、日本人、ドイツ人、在日外国人の間での比較を試みてみよう。

「出会ったとき」のみぶりは、「道で」との比較で見たとおりである。一言追加すると、日本人の場合、これらのみぶりに年齢差が見られるが、ドイツ人、在日外国人にはほとんど見られない。また、「握手する」がドイツ人と在日外国人に見られるが、男性に多く見られるみぶりである。

「特に用事がないときに、何か話題を見つけて話をする」と回答した人の比率は、ドイツ人（6割）、日本人（7割）、在日外国人（9割）の順になっている。特に在日外国人の比率の高さが目立っている。話題については、日本人、ドイツ人は「天気」、在日外国人は「天気」と「仕事・勉強」が多くなっている。「天気」や「健康」などが年齢の高いほうに好まれ、「スポーツ」が男性に好まれる傾向はすべてに共通している。日本人にはほとんど現れなかった「政治・時事問題」がドイツ人、在日外国人に若干現れている。

目線の位置は、日本人、ドイツ人、在日外国人とも7割ないし8割が「目」と回答している。これらの国ではほとんど差がないようである。

「別れるとき」のみぶりを見てみよう。日本人は「手を振る」「手をあげる」「会釈する」などの比率が高くなっているのに対し、ドイツ人は「会釈する」と「握手する」が、在日外国人は「手を振る」が多くなっている。さらに、日本人と在日外国人の場合は「おじぎをする」は年齢の高いほう、「手を振る」は若いほうの比率が高くなっている点が共通している。

最後に、「公園でのあいさつ」全体を通した印象を述べると、日本人、ドイツ人、在日外国人とも、男性よりは女性のほうが、また、若いほうよりも年齢の高いほうが、若干ではあるが、より丁寧なあいさつ行動に回答が傾いているように思われる。また、日本人と在日外国人が比較的に似た回答の分布をしているが、日本での調査であること、日本人を想定した回答が多く含まれていること、日本または日本人に関心の強い被調査者が多く含まれている点などが影響しているとも考えられる。さらに、調査法に関する問題点もいくつか目につくが、6章で一括して示すことにし、ここでは省略する。

3.4. 学校でのあいさつ

この節では「家庭」「道」「公園」などの日常生活の各場面でのあいさつ行動にひき続いて、学校生活というやや特殊な生活場面でのあいさつ行動を問題とする。

本調査は、被調査者のかつて経験した学校生活でのあいさつ行動を反省するという形でたずねるもので、そのような学校生活で想定される各種のあいさつ行動場面のうち、

1. 朝、校門に入ろうとするとき
2. 学校の廊下ですれちがうとき
3. 授業が始まるとき
4. 授業が終わったとき
5. 授業中、先生から出された問題に答えようとするとき

この五つのあいさつ行動場面を取り上げ、次の二つの立場でのあいさつ行動を調査した。

1. (先生に対する) 生徒 (Schüler) の立場としての被調査者自身の行動
2. 生徒の立場としての被調査者の眼から観察された 1. の行動に対応する先生 (Lehrer) の行動

この二つである。

ところで、被調査者が自分自身の学校生活としてどのレベルの学校を想定したかが問題である。日本語版の場合、「高等学校や中学校」とある程度の限定があるのに対して、ドイツ語版では、「あなたの最終の学校時代」となっており、回答にあたって何を想定したか甚だあいまいである。ドイツの学校制度の複雑さを考えれば一層そうであるが、回答が „Schüler“ (生徒) の立場として答

えるようになっているので少なくとも大学生活ではなく、またおそらく国民学校でもあるまい。従って、これは日本の中等学校（中学・高校）にはほぼ相当するものと見ておいてよいであろう。

以上が調査の概要であるが、このような調査結果に基づいて、

1. まず各場面について日本人の行動を記述する
2. 次に、1.と対比しつつドイツ人の行動について記述する
3. さらに、可能であれば、1., 2.の比較を通して日本人の行動様式の特徴を明らかにする

ことにしたい。しかし、資料も少なく、日本語版・ドイツ語版の質問もかなり異なっているので記述にあたって日・独の無理な比較は避けることにしたい。

各場面での、生徒および先生のあいさつ行動の分析・記述にあたっては、これを、

1. どのような定型的あいさつことば（表現）が用いられたか
2. この時の「動作」はどうか——立ち止まってか否か、立ってか座ってか
3. その際どのような「みぶり」を伴ったか

などの観点から眺め、同時にそれぞれについて、被調査者の職業差・年齢差・性差による変異を検討する。

なお、この整理・分析にあたっては、次の点に留意した。

1. 先生のあいさつ行動については、これが、被調査者である生徒の眼を通して観察されたものであること、また、その際生徒が想起した教師がこの生徒と如何なる関係にあり（たとえば親疎関係）、如何なる属性を持っているか（男女・年齢など）、が不明であるため、分析にあたって主に年齢差のみを問題とした。
2. 日本の社会人の性差については、被調査者の男女の比率が、499 人対 62 人とその差があまりに大きいため、この観点からの分析は特に必要のない限り除外した。
3. 日・独調査の質問方式は場面によってかなり異なる場合がある。これらの整理にあたっては、比較をなるべく同じものさしで行いうるよう配慮した。これらについては、必要に応じて、各場面での分析に際して触れる

ことにする。

4. 本節で挙げる調査結果のパーセントは、日・独ともに無回答者をも含む全被調査者数を分母とした数値である。

3.4.1. 校門でのあいさつ

「朝、校門を入ろうとするときに、先生に会った生徒はどんなあいさつをしましたか。また先生から生徒へはどんなあいさつがありましたか」というのが日本語版の質問である。

この設問は日・独で少し異なるが、その違いはドイツ人のところで触れる。

以下、この場面について、生徒 (Schüler) の場合と先生 (Lehrer) の場合とに分け、それぞれ日本人、ドイツ人について分析することにする。

(1) 日本人・生徒

(i) あいさつことば

「オハヨウゴザイマス」が圧倒的で 90 % 以上を占める。社会人 90.0 %, 学生 93.5 % と非常に定型性が高い。これは年齢に関係なくそうであるが、この形式の使用は女性において男性よりはるかに高い率を占める。ちなみに数字をあげれば、社会人で男性 88.9 % に対して女性 98.4 %, 学生で男 88.9 % に対して女 97.7 % である。

(ii) 動作

この場面の「動作」について、「立ち止まる」か「立ち止まらない」か、をたずねたものである。この結果は表 3-41 のようになる。

全体的に「立ち止まらない」の比率が多いものの、社会人と学生との間で大きな差が見られる。ここで、社会人について年齢差を見ると、この率は、壮・中・若年層の順に次第に増える傾向があり、学生の 80.2 % に至っている。そして、「立ち止まる」の率は全くその逆の傾向を示しており、両者は相補う分布をなす。従って社会人と学生との差は年齢差と解釈することができ、若年層になるに従って「立ち止まらない」傾向にあるということができよう。これは時代

表3-41 校門での動作（日本人・生徒）

		立止まる	立ち止まらない	無回答	計
社会人	全体	35.2	59.7	5.1	511
	男	35.6	59.0	5.3	449
	女	32.3	64.5	3.2	62
	若中	21.6	70.3	4.1	195
	壮	31.6	61.0	7.5	187
学生	全体	55.0	41.9	3.1	129
	男	16.5	80.2	3.3	587
	女	15.5	79.2	5.3	284
		17.5	81.2	1.3	303

差と考えてよいかも知れない。

この差は壮年層と中年層の間に線が引けそうである。

なおこれについては、このような年齢差に加えてわずかなではあるが、性差が見られるようである。

女性は男性に比して「立ち止まらない」率がやや多い傾向にあるようである。

(iii) みぶり

この際の「みぶり」については、次の選択肢から選ぶようになっている。

1. 深々とおじぎをする（上半身を深く前にたおす）
2. おじぎをする（上半身を軽く前にたおす）
3. 会釈する（頭を軽く前にたおす）
4. 上半身は動かさず軽くひざだけを折る
5. あごをしゃくる
6. 手をあげる
7. 手を振る
8. 握手をする
9. 抱き合う
10. キスをする
11. 帽子をとる
12. 帽子に手をやる

の選択肢から一つまたはそれ以上（三つ以内）を選択するようになっている。

この結果を見ると、このときの「みぶり」は「おじぎ」と「会釈」とに集中し、その他に「深々とおじぎ」「帽子をとる」などが続く。

今、「おじぎ」と「会釈」についてその属性別に整理するならば表3-42（複数回答を含める。計は回答総数）のごとくである。

表 3-42 校門でのみぶり（日本人・生徒）〔複数回答〕

		お じ ぎ	会 釈	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	全 体	49.7	35.0	13.2	8.0	541
	男	49.4	34.7	13.8	8.2	477
	女	51.6	37.1	8.1	6.5	64
	若	45.6	43.6	8.7	8.2	207
	中	54.0	34.2	9.5	8.0	198
	壮	49.6	23.3	24.9	7.8	136
学 生	全 体	47.4	47.9	7.0	3.4	620
	男	41.9	50.7	8.9	5.6	304
	女	52.5	45.2	5.3	1.3	316

これによれば、生徒のみぶりは、「おじぎ」あるいは「会釈」が一般的であるが、若年層になるに従って「会釈」の率が増える傾向にあるということが出来る。なお、「おじぎ」について若干ではあるが性差が見られ、この割合は女性についてより高い傾向がある。

（2）ドイツ人・生徒

この記述に入る前に、ドイツ語版調査票の日本語版とのちがいについて触れておく。

ドイツ語版の場合、日本語版と少し質問が異なり、「学校の建物(Schulgebäude)の入り口で先生に会ったとき生徒は先生にどのようにあいさつしたか、そして先生はどのようにあいさつしたか」とたずねる。すなわち設問において日本語版で限定されていた「朝」という時間的限定がない。

また、その選択肢についても日本語版で分けられている「動作」と「みぶり」の区別がなく、共に „Gebärden“（動作・みぶり）として以下の形で並べられ、複数回答がいくつでも可能なようになっている。

1. Sie bleiben stehen. (立ち止まる)
2. Sie bleiben nicht stehen. (立ち止まらない)
3. Sie verbeugen sich leicht. (軽くおじぎ)
4. Sie machen einen Knicks. (ひざを曲げる)

5. Sie nicken mit dem Kopf. (あごをしゃくる)
6. Sie geben ihm(ihr) die Hand. (握手する)
7. Sie heben leicht die Hand. (軽く手をあげる)
8. Sie winken. (手を振る)
9. Sie ziehen den Hut. (帽子をとる)
10. Keine. (何もしない)
11. その他

1., 2. は日本語版の「動作」に対応するもので、それ以外が「みぶり」に対応するものであるが、注意すべきは 10. Keine(何もしない)である。このように日・独の質問方式が微妙に異なるため、日・独の行動は単純に比較できない。この点に留意しながら、以下日本語版に倣って「あいさつことば」「動作」「みぶり」について記述する。

(i) あいさつことば

まずこの分析にあたって次のことをことわっておく。日本語版ではこれを社会人と学生に分けて整理したが、ドイツの場合には全般的に学生と社会人との間にほとんど有意差が見られず、全体の被調査者数も少ないので、これを分けず全体としてその年齢差・男女差のみを見ることにする（以下ドイツ人のあいさつことばについては、この方式に従う）。

ドイツ人のあいさつ行動で用いられる言語形式は一般に日本人の場合より複雑で、異なり形式の多いのが特徴である。ちなみに、この場面では 53 の形式を数えた。しかしこれらを分類するならば次のように大きく二つの類型にわけることが可能であり、その意味では日本人の場合と同じく定型性が高いものといえよう。

すなわち、(a) Guten Morgen(オハヨウ, オハヨウゴザイマス), Guten Tag(コンニチハ), その口語形 Morgen, Tag, さらに南部方言的とされる Grüß Gott(コンニチハ)の類, (b) 次にこれらの形に加えて先生への呼称である Herr / Frau / Fräulein(氏・嬢)+名前(Vorname 名~Name 姓); Herr+Lehrer(先生), Herr+Studienart(先生), Herr+Professor(教授)などを伴う類に大きく分けられる。前者はもっとも一般的なあいさつ形式とされ、後者は話者

の相手に対する積極的な働きかけがあり、より丁寧かつ親密な形とされる（シュルテペルクム氏の教示による）。

ここで、この場面での両者の使用率を見ると、(a) 52.6%，(b) 42.7%となっている（無回答 2.2%）。そしてこれらの使用における、男女差・年齢差はほとんど見られないといってよい。ただこれら以外の形式で眼につくのは、Heil Hitler!、Heil Hitler、Herr Lehrer! の形の出現である。これは、第三帝国時代（1933-45）に限って使われたという。

(ii) 動作

上述の選択肢のうち、1. 立ち止まる、2. 立ち止まらない、に回答したもののについてまとめてみると表 3-43 のようになる（この表の「1., 2.以外」は、上の選択肢のうち、1., 2.以外のみふりを選んだものである）。これについては 1., 2.を全く選択しなかったものが過半数を占め、かつ 10. Keine(何もしない)を選択したものもあるため、これらの率がかなり下がっているが、全体的な傾向として「立ち止まらない」ものと見てよいと思われる。この傾向は若年層に至るに従って一般的となり学生の場合に連なるように見える。これは時代差によるものと考えられ、壮年層と中年層の間に一線を引くことができるようである。

表 3-43 校門での動作（ドイツ人・生徒）

ドイツ人におけるこのような傾向は、「立ち止まる」の比率に大きな差があるものの、日本人の場合とほぼ同じであるといえようか。

(iii) みぶり

これについての選択肢は先に掲げた通りであるが、これらのうち 1.および 2.を選んだものの以外を見るならば、「あご

しゃくり」に回答が集中し、これに次いで「何もしない」「軽くおじぎ」などが続く。今これらを中心に整理してみると表 3-44 のごとくである（この表の「動

		1. 立ち止まる	2. 立ち止まらない	1., 2.以外	計
社会人	全体	6.9	28.0	65.2	218
	男	7.5	31.8	60.7	107
	女	6.3	24.3	69.4	111
	若中壮	3.4 4.5 11.6	28.4 40.9 20.9	68.1 54.5 67.4	88 44 86
学生	全体	1.9	48.6	49.6	105
	男 女	2.2 1.7	46.7 50.0	51.1 48.3	45 60

表3-44 校門でのみぶり（ドイツ人・生徒） [複数回答]

		軽くおじぎ	あごしゃくり	何もしない	その他	動作	計
社 会 人	全 体	9.6	49.1	14.2	12.9	21.1	233
	男	11.2	43.9	15.9	13.0	23.4	115
	女	8.1	54.1	12.6	12.7	18.9	118
	若	3.4	59.1	15.9	6.8	15.9	89
	中	9.1	40.9	13.6	11.4	29.5	46
	壮	16.3	43.0	12.8	19.8	22.1	98
学 生	全 体	1.9	67.6	17.1	13.4	9.5	115
	男	4.4	64.4	11.1	13.3	13.3	48
	女	—	70.0	21.7	13.3	6.7	67

作」は、1., 2.の選択肢を選んだ回答数とする)。これによれば、「あごしゃくり」は社会人若年層において急に増え学生に至る。これに反して「軽くおじぎ」は壮年層に多く、中・若年層で急に減り、学生に至ってほとんどなくなる。

ここで先の動作と、みぶりとの相関についていえば、「立ち止まらない」という動作と「あごしゃくり」との相関が非常に高いことに気がつく。ドイツ人の場合、「立ち止まらない」で「あごをしゃくる」というのがこの場面での一般的な様式であろう。

(3) 日本人・先生

上述の生徒のあいさつ行動に対応する先生のあいさつ行動について見る。

(i) あいさつことば

「オハヨウ」が圧倒的で80%以上を占めている(社会人85.1%, 学生82.8%)。これも生徒の「オハヨウゴザイマス」と同じく非常に定型性が高いものといえよう。ここで「オハヨウ」の前に応答詞の「ヤア」「ハイ」などが予想されるが、この率は意外に低く3%を超えない。これは実際にはあったとしてもこの質問に答える被調査者の意識に応答形が上らなかったためとも考えられる。

(ii) 動作

これは生徒の場合と異なり、圧倒的に「立ち止まらない」傾向にあるようである(社会人84.7%, 学生89.6%)。従って、ここでは生徒の場合のような「止

まる」と「止まらない」との年齢による差も見られない。

(iii) みぶり

生徒の場合より無回答の割合が増すものの、これも生徒の場合と同じく「会釈」と「おじぎ」に回答が集中している。〔() 内は生徒の場合〕

	会 釈	お じ ぎ
社会人	61.1(35.0)	11.2(49.7)
学 生	55.5(47.9)	6.8(47.4)

そして、生徒の場合と異なり、「おじぎ」に比して「会釈」の割合がはるかに高く、年齢差もない。一般的に「会釈」が多いといってよいであろう。なお、これらのみぶりに次いで、先生の場合にはこれらのみぶり以外に「手をあげる」が加わることで(社会人 9.2 %, 学生 8.2 %), これもこの場面での特徴とすることができようか。生徒のみぶりには見られなかったことである。

(4) ドイツ人・先生

(i) あいさつことば——異なり形式 49

ここでもドイツ人・生徒の場合と同じく、あいさつ形式を大きく 2 類に分けて考えることができる。〔() 内は生徒の場合〕

- (a) Guten Morgen, Guten Tag, Grüß Gott ; Morgen, Tag の類
..... 73.4 % (52.6)
- (b) (a) の形式+呼称〔Vorname (名), Name (姓) など〕の類
..... 13.6 % (42.7)
- (c) その他, Heil Hitler など 6.2 % (2.5)
- 無回答 6.8 %

となっており、(a) と (b) との関係は生徒の場合と同じであるが、生徒の場合より (b) 類が減り (a) 類に集中する。(a) が一般的な形式といってよいであろう。

(ii) 動作

この場合もドイツ人・生徒の場合と同じ方式で「動作」と「みぶり」に分けて整理すると、生徒の場合とはほぼ同ような傾向を示す。〔() 内は生徒の場合〕

	立ち止まらない	立ち止まる
社会人	30.7(28.0)	6.4(6.9)
学 生	45.7(48.6)	1.9(1.9)

なおこれら以外の選択肢を選んだものの割合も生徒の場合とはほぼ同率である。

従って、先生の動作は一般的に「立ち止まらない」ものと見てよい。そしてこれは、年齢が下がるに従ってより一般的な傾向になるようである。

ここでドイツ人・先生の動作と日本人・先生の動作とを比べて見ると、日本人の場合に見られた生徒の立場と先生の立場での大きな差はドイツ人の場合ほとんどなく、生徒・先生ともに「立ち止まらない」のが一般的といってよい。

(iii) みぶり

これも生徒の場合と同じように整理すると、「あごしゃくり」に集中し、これに次いで「何もしない」「帽子をとる」などが続く。〔（ ）内は生徒の場合〕

	あごしゃくり	何もしない
社会人	43.6(49.1)	19.7(14.2)
学 生	61.0(67.6)	19.0(17.1)

そして社会人と学生との差は、生徒の場合と同様年齢差と見做すことができ、壮年層 37.2%，中年層 38.6%，若年層 52.3%と若年層で急増し、学生の 61.0%に至る。

動作とみぶりの相関についても生徒の場合と同様で、「立ち止まらない」という動作と「あごしゃくり」の相関が非常に高い。

3.4.2. 廊下でのあいさつ

「学校の廊下ですれちがうとき、先生と生徒はどんなあいさつをしましたか」という設問である。これに対する回答の方式は、日・独ともに先の「校門」での場合と同じである。

(1) 日本人・生徒

(i) あいさつことば

これに対しては、無回答の割合が非常に高く、次いで「決まったことばなし」と答えたものが多い。そしてこの二つの回答が合わせて80%以上を超え、「オハヨウ」「オハヨウゴザイマス」などの形式を答えたものは合わせて10%程度に止まる。

	無回答	決まったことばなし	オハヨウゴザイマスなど	計
社会人	46.8	41.1	12.1	511
学 生	46.2	45.5	8.5	587

これは学校の廊下という場面で先生にどのような条件のもとに会ったか——たとえば直前に先生に会っているか否か、会ったのがその日初めてか、何度も会っているか、など——が問題となる。しかるにこの設問ではこのような条件の規定がない。無回答の割合の多さは、これにも起因するものであろうか。なおこれについては、年齢差・性差は見られない。

(ii) 動作

生徒の動作は、先の「校門」での生徒の場合とほぼ同様の傾向を示している(表3-41を参照)。すなわち、全般的に「立ち止まらない」が大半を占めるが、社会人65.9%、学生82.3%と、社会人と学生との間に差が見られ、これも年齢差と考えられる。

「立ち止まらない」は社会人の壮年層で48.1%、中年層で69.5%、若年層で74.4%となっており、そして学生の82.3%に至る。すなわち、壮年層から中年層にかけて急増する。そして「立ち止まる」は全くその逆の傾向を示す。

また、性差についても「校門」での場合と同様に女性において「立ち止まらない」割合がやや多い傾向が見られる。

(iii) みぶり

この場面での生徒のみぶりは、「校門」での場合と同じく、「会釈」と「おじぎ」に集中する。〔()内は校門での場合〕

	会 釈	お じ ぎ
社会人	57.5(35.0)	25.8(49.7)
学 生	62.5(47.9)	27.4(47.4)

しかし全般的に言えば、「校門」での生徒の場合と少し異なり「おじぎ」に対する「会釈」の割合が多い。そしてこれもわずかであるが年齢差が見られる。すなわち「会釈」は、社会人壮年層 49.6 %, 中年層 59.4 %, 若年層 61.0 %, そして学生 62.5 % となっており、壮年層から中年層にかけて急にその割合が増えるのが特徴である。

なお、「おじぎ」についていえば年齢層別にほとんどその割合は変わらないが、若干性差が見られ、女性がおじぎをする率が高いといえよう（社会人男 24.7 %, 女 33.9 % ; 学生男 22.5 %, 女 32.0 %）。これは「校門」での傾向とも一致する。

(2) ドイツ人・生徒

(i) あいさつことば——異なり形式 49

この場合も「校門」でのあいさつことばとほぼ同じタイプの形式が回答された。これも、〔 () 内は校門での場合〕

(a) Guten Morgen / Tag, Grüß Gott などの類 62.2 % (52.6)

(b) (a) + 呼称の類 19.5 % (42.7)

(c) その他 2.8 % (2.5)

無回答 15.5 %

のごとく大きく (a) (b) の 2 類に分けられる。そしてこれらの使用における年齢差・性差がほとんど見られないのも「校門」での場合と同様である。ただここでは「校門」での場合に比べて (b) 類の使用率が減っている (42.7 % → 19.5 %)。この場面では一般的に (a) 類を用いるのが普通であるといえよう。

このようなドイツ人・生徒の行動を日本人の場合と比べて見るならば、この場合も生徒が先生に会う条件が不明であるので注意を要するが、日本人・生徒の場合と大きく異なるのはドイツ人の場合、無回答の割合が非常に低く、かつ定型的なあいさつことばを用いる割合が非常に高いといえることができる。

(ii) 動作

この場面での生徒の動作は「校門」での場合とほとんど同じ傾向を示す（表 3-43 参照）。しかし、「立ち止まらない」が圧倒的であって（社会人 33.5 %, 学

生 47.6 %), この割合は「校門」での場合より一層高く, 「立ち止まる」は 0 %に近い。また「校門」での場合に見られた年齢差も見られない。一般に「立ち止まらない」のが普通のようなのである。

日本人・生徒の場合はこの動作について年齢差が大きいのにに対してドイツ人の場合年齢に関係なく「立ち止まらない」のが特徴であろう。

(iii) みぶり

ここでも上述 (ii) 以外のみぶりについて見るなら, 「校門」での場合とほぼ同じ傾向を示す (表 3-44 を参照)。生徒のみぶりは「あごしゃくり」に集中, 「何もしない」などがこれに次ぐ。〔 () 内は生徒の場合〕

	あごしゃくり	何もしない
社会人	45.0(49.1)	21.1(14.2)
学 生	76.2(67.6)	13.3(17.1)

そしてここでも社会人と学生との差は年齢差と見ることができ, 「あごしゃくり」は社会人壮年層 34.9 %, 中年層 38.6 %, 若年層 58.0 %そして学生の 76.2 %に続き, 中年層から若年層に至る間で急増する。そして「軽くおじぎ」はその逆で壮・中年層から若年層に至る間で激減し学生に至るのである。

また, 性差についても「校門」での場合と同じ傾向が見られ, 「あごしゃくり」が女性に多い (社会人 男 39.3 %, 女 50.5 %; 学生男 68.9 %, 女 81.7 %)。

(3) 日本人・先生

(i) あいさつことば

これも日本人・生徒の場合とほとんど同じ傾向を示している。

〔 () 内は生徒の場合〕

	無回答	決まったことばなし	オハヨウゴザイマスなど
社会人	48.9(46.8)	39.3(41.1)	11.6(12.1)
学 生	48.9(46.2)	43.6(45.5)	7.8(8.5)

そして年齢差・性差はほとんど見られない。

(ii) 動作

先生の動作は、「校門」での先生の動作とほぼ同じ傾向を示し「立ち止まらない」が年齢差に関係なく圧倒的である（社会人 80.2%，学生 82.3%）。そしてこの先生の動作は、この場面での生徒の場合と異なり年齢差がない点でも「校門」での場合とよく似ている。

先生の動作は「立ち止まらない」のが一般的と考えてよい。

(iii) みぶり

「校門」での先生のみぶりとほとんど同じ傾向を示す。〔（ ）内は校門での場合〕

	会 釈	おじぎ
社会人	63.8(61.1)	7.4(11.2)
学 生	56.9(55.5)	6.8(6.8)

(4) ドイツ人・先生

(i) あいさつことば——異なり形式 43

これも「校門」での先生の場合などと同じく 2 類に分けられ、

(a) Guten Morgen などの類	67.2%(73.4)
(b) (a)+呼称の類	8.4%(13.6)
(c) その他	4.0%(6.2)
無回答	20.4%

のような結果を示している。（ ）内の数字は「校門」での場合である。

この場合も「校門」での先生の場合とほとんど同じ傾向を示し、(a) 類が一般的で年齢差もほとんど見られない。

なお、日本人の先生の行動がこのようなドイツ人の先生の行動と異なり、ほとんど定型的あいさつことばを用いないのは、この場面での特徴であろう。

(ii) 動作

この場面での先生の動作は生徒の場合とほぼ同じ傾向を示す。

〔（ ）内は生徒の場合〕

	立ち止まる	立ち止まらない
社会人	1.4(0.9)	33.5(33.5)
学 生	1.0(1.0)	44.8(47.6)

と「立ち止まらない」が圧倒的である。この場合も年齢差はほとんど見られない。また、この場面での先生の動作を「校門」での場合と比べてみると、これもほとんど同じ傾向を示すものの、「立ち止まらない」が圧倒的であって、「止まる」が0%に近づいているのに気がつく。

(iii) みぶり

先生のみぶりは「校門」での先生の場合とほぼ同じ傾向を示す。すなわち「あごしゃくり」に集中、次いで「何もしない」などが続く。〔（ ）内は「校門」での場合〕

	あごしゃくり	何もしない
社会人	42.2(43.6)	23.4(19.7)
学 生	67.6(61.0)	17.1(19.0)

そしてこの場合もこのみぶりに年齢差があり、社会人壮年層 33.7%，中年層 38.6%，若年層 52.3%，そして学生 67.6%と、若年層において急増するのを見取することができる。

動作とみぶりとの相関についても同じく「立ち止まらない」と「あごしゃくり」の相関が高い。

3.4.3. 授業開始のあいさつ

「授業が始まるとき、先生と生徒は何か決まったあいさつをしましたか」というのが日本語版の設問である。これは日本語版・ドイツ語版ほとんど共通で問題がないが、その回答形式は日・独でかなり異なった方式を採っている。

日本語版では、決まったあいさつ行動が存在することを前提として、(i) あいさつことば、(ii) 動作、(iii) みぶり、についてたずねる。このうち (ii) の動作については「立って」か「座ったままで」かを選択するものである。(i) と (iii) については、まずあいさつことばあるいはみぶりの有・無を確認し、「有」であればそれぞれの形式を回答する方式を採る。

しかるにドイツ語版では、決まったあいさつ行動の存在を前提とせず、まずこの有・無をたずね、「有」と答えたものについてさらにその (i) あいさつことばと (ii) „Gebärden“ (動作・みぶり) をたずねる。(ii) について日本

語版のごとく「動作」と「みぶり」を分けず、これらを選択肢として並列しているのは先の「校門」「廊下」での場合と同様である。

このような質問・回答形式の違いから日・独のパラレルな比較が困難であることはいうまでもない。以下このような前提のもとに話を進めることにする。

(1) 日本人・生徒

(i) あいさつことば

まずこの場面でのあいさつことばの有・無について見ると、表 3-45 のように

表 3-45 授業開始・あいさつことばの有無
(日本人・生徒)

		無	有	無 回 答	計
社 会 人	全 体	67.7	26.0	6.3	511
	男	67.3	26.3	6.5	449
	女	71.0	24.2	4.8	62
	若	72.3	22.1	5.6	195
	中	68.4	23.5	8.0	187
学 生	壮	59.7	35.7	4.7	129
	全 体	83.8	12.9	3.2	587
	男	83.5	12.7	3.9	284
	女	84.2	13.2	2.6	303

なる。全体的に「無」が一般的傾向として窺える。しかしこれは社会人と学生の間でかなり割合が異なっている。ここで社会人の年齢について見ると、壮年層から中・若年層になるに従ってその割合が増し、学生に至るのに気がつく。そして「有」は全くその逆の傾向を示す。従ってこれも年齢差と解釈することができ、

若年層に至るに従ってあいさつことばがなくなるのが一般的傾向といえよう。なおこの時代差は壮年層から中年層の間に大きな差があると考えられる。

性差については何らの有意差も認められない。

次にあいさつことばが「有」と答えたものについて見る。この場合「有」の率は全般的に非常に少ないのでパーセントをあげて普遍化するのには問題があるが、「起立・礼」と「オハヨウゴザイマス」、およびこれらを組み合わせたものが大半である。このうち「起立・礼」という号令があいさつことばであるかどうかは問題として、これが若年層で極端に少なくなるのが特徴といえよう。なおこれは壮年層に偏る。

(ii) 動作

「立って」が一般的である。

	立って	座って	無回答	計
社会人	71.2	16.4	12.3	511
学 生	72.1	19.4	8.3	587

これについては年齢差は認められない。

(iii) みぶり

まず「みぶり」の有・無についていえば、

	無	有	無回答	計
社会人	11.7	75.1	13.1	511
学 生	10.7	81.3	8.0	587

のような結果であり、「有」が一般的なようである。年齢差は認められない。

次にこの際の「みぶり」について見ると、社会人・学生ともに「おじぎ」が過半数を占め、次いで「会釈」「深々とおじぎ」がほぼ同率で続く。そしてこれらには年齢差はほとんどない。〔複数回答〕

	おじぎ	会釈	深々とおじぎ
社会人	54.8	10.8	10.0
学 生	57.9	13.8	11.6

なおこの数値は、みぶりの有・無にかかわらず全ての被調査者数を分母にして回答数を割ったもので、「有」と答えた者のみを分母にしたものでないことをことわっておく（以下この方式に従う）。

(2) ドイツ人・生徒

ドイツ語版では先に述べたごとく、まずこの場面でのあいさつ行動の有・無をたずねている。この結果を集計すると表3-46のようになる。

これによれば、一般的に何らかの決まったあいさつ行動のあったことが知られるが、社会人と学生との間に微妙な差異が見られる。「有」は学生において少なく、「無」は逆に増えている。ここで社会人の年齢差を見るに、「有」は壮・中年層において多く若年層に少ない。学生はさらにその割合が少ない。そして

表3-46 授業開始・あいさつ行動
の有無（ドイツ人・生徒）

		有	無	無回答	計
社会人	全体	80.3	16.5	3.2	218
	男	77.6	17.8	4.7	107
	女	82.9	15.3	1.8	111
	若	77.3	20.5	2.3	88
	中	84.1	13.6	2.3	44
学生	壮	81.4	14.0	4.7	86
	全体	72.4	26.7	1.0	105
	男	75.6	24.4	—	45
	女	70.0	28.3	1.7	60

「無」はこれと全く逆の傾向を示す。従ってこれも年齢差によるものと考えることができ、この場面でのあいさつ行動はわずかではあるが次第に少なくなる傾向にあるといえよう。

性差については数値が微妙に異なるものの有意差があるとはまではいえない。

以下、あいさつ行動がある

場合について（i）あいさつことば、（ii）動作・みぶり、について述べる。なお、ここで挙げる数値は、日本語版の場合と同じく無回答者も含む全ての回答者数を分母とするものとする（以下これに倣う）。

（i）あいさつことば——異なり形式 35

この場面での生徒のあいさつことばも「校門」および「廊下」での場合と同じく、大きく2類に分けることができる。〔（ ）内は廊下での場合〕

- （a）Guten Morgen 類 50.1 % (62.2)
 （b）（a）＋呼称の類 12.1 % (19.5)
 （c）その他 1.9 % (2.8)
 無回答＋「無」 35.9 %

この結果は「廊下」での生徒のあいさつことばにおける傾向とほとんど一致する。すなわち先生への呼称を伴わない定型的表現が一般的である。しかしてここで気になるのは、「廊下」での場合も同じであるが、壮年層において（a）類の使用が若・中年層に比して低いことである（壮年層 37.2 %, 中年層 60.4 %, 若年層 53.4 %）。これが如何なる理由によるものか目下不明である。

（ii）動作・みぶり

これは Gebärden（動作・みぶり）が「有」と答えたものについて、日本語版と異なる次の選択肢から選ぶようになっている。

1. Sie stehen auf. (立ち上がる)
2. Sie stehen auf und verbeugen sich leicht. (立ち上がって軽くおじぎ)
3. Sie bleiben sitzen. (座ったままで)
4. Sie bleiben sitzen und verbeugen sich leicht. (座ったまま軽くおじぎ)
5. Sie (die Mädchen) machen einen Knicks. (ひざを曲げて — 女性)
6. Sie nicken mit dem Kopf. (あごしゃくり)
7. Keine. (何もしない)
8. その他

この選択肢は、先の「校門」「廊下」での場合と異なり「動作」と「みぶり」が組み合わさった2.や4.のようなものがあるので、「動作」と「みぶり」を日本語版のように分けて分析することができない。従ってここではこれらを分けないで整理する。その回答は「立ち上がる」と「座ったままで」に集中し、これに「何もしない」がわずかな割合で続く。

この結果によれば、かなり大きな年齢差・性差があることがわかる（表3-47参照）。すなわち、「立ち上がる」（立ち上がるだけ）は社会人壮年層から中・若年層に移るに従って下がり、さらに学生になると急に減少する。そして「座ったまま」は全くその逆の傾向を示す。

また性差についていえば、女性は「座ったまま」が多く、男性は逆に「立ち上がる」が多い。

表3-47 授業開始の動作（ドイツ人・生徒）〔複数回答〕

		1.立ち上がる	2.座ったまま	3.何もしない	1,2,3以外	無回答	計
社会人	全 体	54.6	20.6	6.0	6.5	20.6	236
	男	60.7	13.1	4.0	6.5	23.4	116
	女	48.6	27.9	7.2	6.3	18.0	120
	若	37.5	33.0	8.0	6.8	23.9	96
	中	50.0	27.3	9.1	4.6	15.9	47
学 生	壮	74.4	4.7	2.3	7.0	19.8	93
	全 体	14.3	48.6	9.5	12.4	29.5	120
	男	22.2	40.0	11.1	11.1	24.4	49
	女	8.3	55.0	8.3	13.4	33.3	71

(3) 日本人・先生

(i) あいさつことば

この有・無についていえば、日本人・生徒の場合とほぼ同様の結果を示す（表 3-45 参照）。〔（ ）内は生徒の場合〕

	無	有
社会人	69.5(67.7)	22.3(26.0)
学 生	76.1(83.8)	19.8(12.9)

すなわち、一般にあいさつことば「無」の占める率が多いが、これも年齢差が見られ、若年層になるに従ってこの傾向が増大する。そしてその変化は壮年層から中・若年層に至る間にあるといえよう。

そしてこの場合のあいさつことばについていえばほとんど用いないが、「オハヨウ」「オハヨウゴザイマス」「ハジメヨウカ」がわずかに見られる程度である。

(ii) 動作

「立って」が社会人（84.1 %）、学生（89.8 %）ともに一般的である。

(iii) みぶり

まず「みぶり」の有・無についていえば「有」が一般的である（社会人 74.0 %、学生 78.7 %）。年齢差は見られない。

その際の「みぶり」は生徒の場合と同様に、「おじぎ」と「会釈」に集中する。

〔（ ）内は生徒の場合〕

	おじぎ	会 釈
社会人	38.4(54.8)	32.7(10.8)
学 生	43.4(57.9)	33.4(13.8)

ここで生徒の場合と異なるのは、「おじぎ」の割合が減り、それに反して「会釈」の割合が増えることである。そして生徒の場合に見られた「深々とおじぎ」がほとんど無くなることである。

(4) ドイツ人・先生

この場面での先生のあいさつ行動の有・無についていえば、社会人 83.5 %、

学生 85.7 % と「有」が圧倒的である。そして生徒の場合に見られた年齢差がここでは見られない。

(i) あいさつことば ― 異なり形式 53

「校門」「廊下」での生徒の場合と同じく大きく 2 類に分けられる。

(a) Guten Morgen 類 60.9 %

(b) (a) + 呼称の類 6.8 %

そして (a) 類は壮年層から中・若年層にかけて増える傾向が窺える。しかしこの他にわずかであるが、(a) 類の定型的表現に加えて、

Bitte Platz nehmen! (どうぞ おかけ下さい)

Setzen! (座りなさい)

Bitte setzt euch! (みなさんどうぞお座りなさい)

などの表現がつけ加えられるものがある。

なお、この場面でのあいさつことばについて日・独を比較すれば、日本人の場合教師はほとんどことばを使わないのに対して、ドイツ人はことばをよく用いるといえることができる。

(ii) 動作・みぶり

この場面での先生の動作・みぶり (Gebärden) の選択肢は生徒の場合と異なり、次のようになっている。

1. Er(sie) verbeugt sich leicht. (軽くおじぎ)
2. Er(sie) nickt mit dem Kopf. (あごをしゃくる)
3. Er(sie) hebt leicht die Hand. (手を軽くあげる)
4. Er(sie) winkt. (手を振る)
5. Er(sie) gibt die Hand. (握手する)
6. Keine. (何もしない)
7. その他

この結果は「あごしゃくり」「何もしない」に集中、これも年齢差があり、これらはわずかにではあるがともに若年層になるに従って増える傾向にある (表 3-48 参照)。

表3-48 授業開始のみぶり（ドイツ人・先生）〔複数回答〕

		1. あごしゃくり	2.何もしない	1,2以外	無回答	計
社会人	全 体	29.4	26.6	19.4	25.2	224
	若	29.5	31.8	11.4	27.3	90
	中	40.9	31.8	22.7	9.1	44
	壮	23.3	18.6	23.3	31.4	90
学生	全 体	34.3	39.0	9.6	21.9	110

3.4.4. 授業終了のあいさつ

「授業が終わったとき先生と生徒は何かあいさつをしましたか」に対する結果である。

この設問および回答方式は日・独それぞれ「授業開始」の場面と同じである。

(1) 日本人・生徒

(i) あいさつことば

この場面でのあいさつことばの有・無は、「授業開始」の生徒の場合とほとんど同じ傾向を示す（表3-45 参照）。〔（ ）内は授業開始の場合〕

	無	有
社会人	75.5(67.7)	18.4(26.0)
学 生	84.3(83.8)	11.4(12.9)

すなわち、「無い」が一般的傾向であるが、やや時代差があり、壮年層から中・若年層および学生にかけてこの傾向が一層顕著になる。

そしてこれには性差は認められない。

なお、この場合のあいさつことばについては、非常にわずかであるが「起立・礼」と「アリガトウゴザイマシタ」が見られる。「起立・礼」は社会人壮年層に集中し、「アリガトウゴザイマシタ」は若年層と学生に多い。

(ii) 動作

これも「授業開始」の生徒の場合とほとんど同じく「立って」が一般的であ

る。〔（ ）内は授業開始の場合〕

	立って	座って
社会人	66.1(71.2)	17.8(16.4)
学 生	66.3(72.1)	24.0(19.4)

(iii) みぶり

これについても「授業開始」の生徒の場合とほぼ同じで「有」が一般的である。〔（ ）内は授業開始の場合〕

	無	有
社会人	12.7(11.7)	71.4(75.1)
学 生	12.8(10.7)	79.6(81.3)

次にこの場合の「みぶり」についていえば、これも「授業開始」の生徒の場合と同じ傾向である。〔（ ）内は授業開始の場合〕

	おじぎ	会 釈	深々とおじぎ
社会人	49.3(54.8)	13.5(10.8)	9.0(10.0)
学 生	54.9(57.9)	16.2(13.8)	10.1(11.6)

(2) ドイツ人・生徒

まずドイツ人・生徒のあいさつ行動の有・無についていえば、これもやや「有」の割合が減るものの、「授業開始」の生徒の場合とほぼ同様の傾向を示す。

〔（ ）内は授業開始の場合〕

	有	無
社会人	77.1(80.3)	19.3(16.5)
学 生	53.3(72.4)	46.7(26.7)

(i) あいさつことば — 異なり形式 28

この場合も表現形式はこれまでと異なるものの、(a)別れの定型的表現である Auf Wiedersehen!, Tschüß! (サヨウナラ) の類 (45.8%) と、(b)これらに加えて呼称の類(4.3%)の2類に分けることができ、(a)類が圧倒的であるということができる。そして、「授業開始」の生徒の場合と同じく、壮年層における(a)類のパーセントが他より低いのに気がつく。なお、この場面では

これらに続く形式として、非常にわずかであるが、(c)類、すなわち(a)類+ bis morgen (明日マデ)、bis nächste Woche (来週マデ)などの形が表れてくる(1.9%)。

(ii) 動作・みぶり

これもその割合にかなりのちがいがああるものの、「授業開始」の生徒の場合とほぼ同じ傾向を示す(表3-47参照)。このことは年齢差・性差についてもいうことができる。〔()内は授業開始の場合〕

	立って	座ったまま
社会人	40.8(54.6)	21.1(20.6)
学 生	7.6(14.3)	27.6(48.6)

(3) 日本人・先生

(i) あいさつことば

この有・無は「授業開始」の先生の場合とほとんど同じ傾向を示し、一般に「無」が多い。〔()内は授業開始の場合〕

	無	有
社会人	68.9(69.5)	22.7(22.3)
学 生	75.6(76.1)	19.8(12.9)

そしてこの場合のあいさつことばは、これも非常に割合は少ないが、「(デハ) 終ワリマス」「(デハ) 終ワル」「(デハ) コレマデ」などの形が見られる。

(ii) 動作

「立って」が社会人(81.6)%, 学生(86.7%)ともに一般的で、これも「授業開始」の先生の場合と同じ。

(iii) みぶり

みぶりの有・無についても「授業開始」の先生の場合とほぼ同じで「有」が一般的である(社会人72.4%, 学生77.5%)。

この場合の「みぶり」も「授業開始」の先生の場合と同じ傾向を示す。

〔()内は授業開始の場合〕

	おじぎ	会 釈
社会人	36.4(38.4)	33.9(32.7)
学 生	41.6(43.4)	33.9(33.4)

(4) ドイツ人・先生

(i) あいさつことば — 異なり形式 79

これもドイツ人・生徒の場合とほとんど同類のあいさつことば (a) (b) 類が表れているが、ここでは表現形式の多様性が注目される。〔 () 内は生徒の場合〕

(a) Auf Wiedersehen!類 43.7 % (45.8)

(b) (a) + 呼称の類 4.4 % (4.3)

これが生徒の場合と異なるのは、(c) 類すなわち、(a) 類に加えてあるいは単独で Bis morgen!, Also bis morgen!, Bis zur nächsten Stunde! (次ノ時間マデ) などがかなりの割合を占めること、そしてその他に Schluß für heute! (今日ハ終ワリ) などの (d) 類も散見することである。

(c) 類 15.9 %

(d) 類 9.2 %

無回答 30.0 %

(ii) 動作・みぶり

これは、「授業開始」の先生の場合 (表 3-48) と同じく、「あごしゃくり」と「何もしない」に回答が集中する。そしてこの場合には、「あごしゃくり」については何もいえないが、「何もしない」が少しずつ増えてくる傾向が見られる。

	あごしゃくり	何もしない	
社会人	31.7(29.4)	21.6(26.6)	
学 生	27.6(34.3)	36.2(39.0)	〔 () 内は授業開始の場合〕

3.4.5. 質問に答える生徒は？

「授業中、先生から出された問題に答える生徒は、どんな意志表示の行動をしましたか」という設問であり、まず生徒の意志表示の「ことば」「みぶり」(腕

や手の状態)についてたずね、これに関連してその際の生徒の「動作」および「態度」についてたずねるものである。

(1) 日本人

(i) 意志表示のことば

無回答の割合が多く、その割合は社会人と学生と異なるものの、「ハ(一)イ」が一般的で、その他の形はほとんど表れない。

	無回答	ハ(一)イ	その他	計
社会人	26.4	69.7	3.9	511
学 生	50.6	41.1	1.3	587

なおこの場合の社会人と学生との差は年齢差と必ずしもいうことができない。また性差は全く認められない。

(ii) みぶり

これについては、これを「腕」と「手、指」の状態に分けてたずねている。

まず「腕」については次の選択肢をあげる。

1. まっすぐのばしてあげる
2. ひじを曲げ体の横であげる
3. ひじを机につけてあげる

この結果は表 3-49 のごとくである。

これについては年齢差が大きく、また性差も認められる。すなわち、「まっす

表 3-49 質問に答える、腕 (日本人)

		の ば す	ひじまげ	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	全 体	67.7	24.7	2.2	5.5	511
	男	69.7	22.9	1.8	5.6	449
	女	53.2	37.1	4.9	4.8	62
	若	52.8	37.9	3.1	6.2	195
	中	71.7	21.4	2.7	4.3	187
	壮	84.5	9.3	—	6.2	129
学 生	全 体	25.2	61.7	5.5	7.7	587
	男	28.5	55.6	5.3	10.6	284
	女	22.1	67.3	5.6	5.0	303

ぐのぼす」が社会人壮年層においては大きな割合を占めるが、これが若年層に至るに従って漸減し、学生に至ると非常に少なくなる。そして「ひじを曲げて体の横であげる」は全くこれと逆の傾向を示す。また性差についていえば「まっすぐのぼす」が男性に多く、「ひじ曲げ……」はその逆に女性に多いということができる。

次に「手・指」の状態については、次の選択肢をあげる。

1. 全部の指をのぼす
2. 人指し指のみのぼし、他は曲げる
3. 全部の指を曲げ、こぶしをつくる
4. 指をならす
5. 手のひらを振る

この結果は「全部の指をのぼす」に集中し他はほとんどない。すなわち、社会人 86.5%，学生 76.7%とこれが圧倒的である。

(iii) 動作

この際、「立って」か「座ったままで」かを問うものである。これも社会人・学生を問わず「立って」が圧倒的である（社会人 96.1%，学生 89.9%）。これには年齢差・性差はほとんど認められない。

(iv) 先生に対して答えるとき、生徒が腕を組んでいる態度の是非を問うもの

1. ごく普通にすることだったし、してもおかしくなかった
2. ぶしつけなこと、してはいけないこととされていた

の選択肢から選ぶようになっている。

この結果は次ページの表 3-50 に示すごとくである。これによれば、生徒のこのような態度は一般に「ぶしつけ」なことと考えられているといつてよい。これも年齢差・性差が見られる。すなわち、「ぶしつけ」は社会人壮年層で 90%を超えるが若年層に至るに従って漸減し、学生の 70%台に至る。そして「おかしくない」はこれと全く逆の傾向を示している。性差については、一般に女性がこれを「ぶしつけ」とする割合が高い。

(v) 先生に対して答えるとき、生徒が鼻や口に手をあてている態度の是非について問うもの

この設問はそれ自体日本人に対するものとしては不自然な感じがしないでもないが、結果は以下のごとくで、社会人と学生とで差が非常に大きい。

〔（ ）内は腕組みの場合〕

	おかしくない	ぶしつけ
社会人	21.7(7.0)	74.8(89.6)
学 生	50.1(20.3)	45.0(75.3)

これも社会人壮年層で 84.5 % を占めた「ぶしつけ」が中・若年層で漸減し（それぞれ 74.9 %, 68.2 % ）、そして学生の 45.0 % に至る。そして「おかしくない」は全くその逆の傾向を示す。従って、これも年齢差と解釈することができよう。

表 3-50 質問に答える、腕組み（日本人）

		おかしくない	ぶしつけ	無 回 答	計
社 会 人	全 体	7.0	89.6	3.3	511
	男	6.7	90.2	3.1	449
	女	9.7	85.5	4.8	62
	若	10.8	85.1	4.1	195
	中	6.4	92.0	1.2	187
学 生	壮	2.3	93.0	4.7	129
	全 体	20.3	75.3	4.4	587
	男	27.8	68.0	4.3	284
	女	13.2	82.2	4.5	303

（2）ドイツ人

質問及び選択肢は日本語版とほとんど同じであるが、日本語版の (iv) (v) の設問がドイツ語版では一つになっている。

（i）意志表示のことば

これに関してはほとんどが無回答で、これが 94.7 % を占める。従ってこれについては

きまったことばはほとんどないものと見てよいであろう。

この点日本人の場合と大きく異なっているように見える。

（ii）みぶり — 腕と手

まず「腕」(Arm) についていえば表 3-51 のようになっている（複数回答）。これは年齢差がかなり大きく、壮・中年層では「手を上にのぼす」が過半数以上を占めるが若年層に至ると急に減り学生に至る。そして「ひじを曲げて体の横であげる」および「ひじを机につけてあげる」は全くその逆の傾向を示す。

若年層では「ひじを曲げて体の横であげる」が多く、壮・中年層では「手を上にのぼしてあげる」が多いといえよう。

表 3-51 質問に答える, 腕 (ドイツ人) [複数回答]

		手のばし	ひじ曲げ	ひじ机上に	無 回 答	計
社 会 人	全 体	56.4	26.6	13.8	12.8	239
	男	51.4	30.8	14.0	14.0	118
	女	61.3	22.5	13.5	11.7	121
	若	45.5	38.6	17.0	12.5	100
	中	68.2	20.5	13.6	6.8	48
	壮	61.6	17.4	10.5	16.3	91
学 生	全 体	33.3	61.9	31.4	1.0	134
	男	37.8	53.3	42.2	2.2	61
	女	30.0	68.3	23.3	—	73

次に手 (Hand) についてであるが, これは日本語版にあった「手のひらを振る」という選択肢がないが, その他は日本語版に同じである。

これは次の三つに回答がまたがり, 「こぶし」はないが, 年齢差が大きい (複数回答)。

	全ての指のばし	人指し指のばし	指ならし	計
社会人	14.7	63.3	25.7	253
学 生	38.1	50.5	24.8	130

このうち「指をならす」は社会人・学生ともに 25 %前後と変わらず年齢差も見られないが, 「全ての指のばし」と「人指し指のばし」には年齢差がある。すなわち, 「人指し指のばし」は壮年層から若年層, そして学生に至るに従って次第に減る傾向が窺えるが, 「全ての指のばし」はその逆に次第に増える傾向を示すのである。

また, 「人指し指のばし」は一般に男性にやや多い傾向がある。

(iii) 動作

この場合の動作は次ページの表 3-52 のごとくである。これも年齢差が非常に大きい。壮年層においては「立って」が圧倒的であるが中・若年層において次第に減り, 学生においてはこれが極端に少なくなる。そして「座ったまま」はその逆で学生においてはこれが圧倒的である。

なお, わずかにではあるが性差が見られ, 女性に「座ったまま」がやや多い

傾向にある。

表 3-52 質問に答える，動作（ドイツ人）

		立 っ て	座 っ た ま ま	無 回 答	計
社 会 人	全 体	50.5	44.0	5.6	218
	男	53.3	39.3	7.4	107
	女	47.7	48.6	3.6	111
	若	27.3	68.2	4.6	88
	中	43.2	52.3	4.6	44
学 生	壮	77.9	15.1	7.0	86
	全 体	5.7	94.3	—	105
	男	8.9	91.1	—	45
	女	3.3	96.7	—	60

表 3-53 質問に答える，腕組みなど（ドイツ人）

		おかしくない	ふしつけ	無 回 答	計
社 会 人	全 体	26.1	66.6	6.9	218
	男	23.4	70.1	6.5	107
	女	28.8	64.0	7.2	111
	若	38.6	54.6	6.8	88
	中	36.4	61.3	2.3	44
学 生	壮	8.1	82.5	9.3	86
	全 体	51.4	36.2	12.4	105
	男	44.4	42.2	13.3	45
	女	56.7	31.7	11.6	60

一般に「ふしつけ……」は男性に多いようである。

このような傾向がほとんど日本人の場合と同じであるのは興味深い。

3.4.6. 終わりに——比較

今まで学校生活各場面でのあいさつ行動について，日・独それぞれ記述してきたが，これらの行動は日・独ともに年齢差がかなり大きい。ことに生徒の動作・みぶりについてそうである。

(iv) 日本語版と少し設問が異なり，日本語版(iv)と(v)とを一緒にして「先生に答えるようとするとき，生徒が腕を組んだり手を鼻や口にあてたりしていることがどうであるか」をたずねている。

この結果は表 3-53 のごとくである。これもかなりの年齢差がある。

壮年層では「ふしつけ，してはいけないこととされている」が圧倒的であるが中・若年層になるに従って減り学生に至る。これに対して，「自然，おかしくない」はその逆の傾向を示し，中・若年層から学生にかけて次第に増える傾向が顕著である。

また性差についていえば，

これは時代差と考えるとよいものかもしれないがなお仔細な検討を必要とする。しかし全体の印象として日・独のこれらの動作・みぶりは一般に简单化・非丁寧化しているように見える。

この章を終えるにあたって日・独それぞれのあいさつ行動の一般的傾向を大雑把にまとめてこれを比較して見ることにする。なお、「質問に答える生徒」の行動についてはあいさつ行動とはいいがたいのでここでは問題としない。

(i) まずあいさつことばについていえば、ドイツ人の場合「校門」「廊下」「授業開始」「授業終了」の全場面を通じて一日の時間に応じた出会いおよび別れの定型的あいさつ表現——Guten Morgen!, Guten Tag!, Auf Wiedersehen!——を用いるのが一般的かつ定型性が高いが、日本人の場合、一日の最初の出会いともいうべき「朝、校門」での場面においてのみ定型的あいさつ表現——「オハヨウゴザイマス」(生徒>先生), 「オハヨウ」(先生>生徒)——が用いられ、その他の場面ではほとんどこれらが用いられなくなり、定型性も低い傾向にある。この点があいさつことばにおける日・独の大きなちがいであろう。

(ii) 次に「動作」についていえばおおよそ次のことがいえそうである。

① 「校門」「廊下」の場面での生徒の先生に対する動作は、日・独ともに「立ち止まらない」のが一般的であり、そしてこれが「立ち止まる」に比して次第に増える傾向にあるようである。この傾向は日本人においてことに顕著である。

② これらの場面における先生の動作は、年齢差(時代差)に関係なく日・独ともに「立ち止まらない」のが一般的である。

③ 「授業開始」および「授業終了」時の生徒の動作は、「立って」が日・独ともに多く年齢差が少ないが、ドイツ人の場合「立って」が次第に減り「座ったまま」でが増える傾向が顕著である。

④ これらの場面での先生の動作は、日本人の場合「立って」が圧倒的であり、年齢差(時代差)はほとんど見られない。ドイツ人の場合これに答える選択肢がないので何ともいえない。

(iii) 最後に(i)(ii)に伴う「みぶり」についていえば、

① 「校門」「廊下」での先生に対する生徒のみぶりは、ドイツ人の場合いずれの場面でも「あごをしゃくる」に集中し次いで「何もしない」が多く、しか

も前者が増える傾向が顕著であるが、日本人の場合はともに「おじぎをする」と「会釈する」に集中するものの場面差があり、「校門」では「おじぎ」，「廊下」では「会釈」が多い。しかし両場面ともに次第に「会釈」が増えてゆく傾向が看取される。

② これらの場面での先生のみぶりは、ドイツ人の場合は場面差なく「あごしゃくり」が一般的で「何もしない」がこれに次ぐが、日本人の場合は場面差・年齢差がほとんどなく「会釈」に集中し「おじぎ」は少ない。なおドイツ人の場合「何もしない」が次第に増える傾向が見られる。

③ 「授業開始」および「授業終了」時の先生に対する生徒のみぶりは、日本人の場合「おじぎをする」が過半を占めほとんど年齢差（時代差）は見られない。ドイツ人の場合選択肢が異なるので不明。

④ これらの場面での先生のみぶりは、ドイツ人の場合年齢差に関係なく「あごをしゃくる」が多く「何もしない」がこれに次ぐが、やや「何もしない」が増える傾向を見せるのに対し、日本人の場合年齢差に関係なく「おじぎ」と「会釈」とに集中する。

以上が日本人とドイツ人の学校生活でのあいさつ行動の一般的傾向である。

このような結果は被調査者のかつての生徒としての、または生徒の立場として見た先生のあいさつ行動についての反省に基づくもので、現在の実態についていうには、現在の生徒および先生の行動についての観察調査が必要であることは論を俟たない。

なおここでは分析にあたってあいさつ行動を便宜上ことば、動作、みぶりの三つに分けたが、実態をよりよく把握するためには相互の相関を見なければならぬ。また行動の時代差についていうためにはもう少し肌理の細かい年齢との相関を考えなければならない。しかし、この調査結果の量と質はこのような分析に堪えられるものではない。今回の分析はこの程度に止めておくことにする。

4. 買物・道聞き

4.1. 駅の売店で

物を買うときの言語行動を調べるために、ここでは、その典型的な例として、駅の売店で新聞、雑誌、たばこなどを買う行動を対象に調査を行った。

質問表のなかで想定した行動の流れは、次の4項目である。

1. 客は、駅の売店で物を買うときまずどうするか
2. 客は、金を払うときどうするか
3. 店員は、金を受け取ったとき、あるいは、つりを渡すときどうするか
4. 客は、買物がすんで売店を離れるときどうするか

調査の対象として、駅の売店を選んだのは、日独ではほぼ共通の場面が想定できることが主たる理由であったが、実際にドイツの売店、いわゆるキオスクと日本のそれとを比較すると、日常生活のなかでしめる位置に関して、いささか異なる面のあることがわかった。

とくに注意しなければならないのは、新聞の流通機構の違いが「売店」の機能の違いに影響をあたえているということである。日本では、通常の新聞は宅配がふつうなので、駅の売店で買われる新聞の大半は、スポーツ紙などの特殊な新聞である。それに対して、ドイツでは、宅配のシステムが少ないので、一般紙もキオスクなどで買うことが多い。そのため、ドイツでは、駅だけでなく町中にもキオスクがあって、そこで新聞が買えるようになっている。おそらく、このことは、日本とドイツにおける女性が売店で新聞を買う率の差として表れるはずであるが、残念ながら、のちに述べるように、日本の調査では、売店で

なにを買うかが調査項目として入っているが、ドイツの調査では、キオスクで新聞を買う場合にあなたはどうかという調査のしかたになっているので、この点については、はっきりした結果を示すことができない。

なお、ドイツの調査では、「キオスクで新聞を買う場合」という前提で質問をしているため、駅のキオスクだけでなく、町中のキオスクも含まれている。それゆえ、本節の表題としては、「売店で」あるいは、「キオスクで」が正しいが、わかりやすさのためと、日本語では「キオスク」が特殊な売店を指すことばであるために、それを避けて、「駅の売店で」とした。

以下の分析のポイントは、売店で物を買う際の言語行動において、ことばを発するか否かという点にしばった。これは、ドイツの調査では、そうした行動の際に使われる言語形式が質問項目のなかに入っていないので、言語形式に関する日独の比較ができないためである。売店で物を買うなどのごく簡単な言語行動においても、「丁寧さ」の違いが文化によって表れることは、しばしば指摘されることである。典型的な例としては、同じ英語を使うイギリスとアメリカで、売店などの店員に対することばが違い、イギリス人がアメリカの売店で物を買うと、ことばが丁寧過ぎるためにかえっていやな顔をされることがあるという。こうした「丁寧さ」の比較は、社会言語学の観点からは非常に興味のあることであるが、今回は、ドイツ語の言語形式がデータとして得られなかったことと、もし得られたとしても両語に共通の「丁寧さ」の基準がたてにくいなどの理由で、考察できなかったことは、残念であった。

(0) 駅の売店で何を買うか

先にも触れたように、この質問項目はドイツでの調査にはない。

日本人と在日外国人との差でもっとも特徴的なのは、雑誌を買う率の差であるが、これは、外国人にとって日本の雑誌があまり興味のあるものとは考えられないので、当然の結果であろう。新聞を買う率が外国人のほうが高いという数字が出ているのも、やはり雑誌をあまり読まないことの結果であろう。

「その他」に含まれる回答のうちで、日本人に多かったものは、飲み物、ティッシュ・ペーパーなど、外国人に多かったものは、チョコレート、チューイ

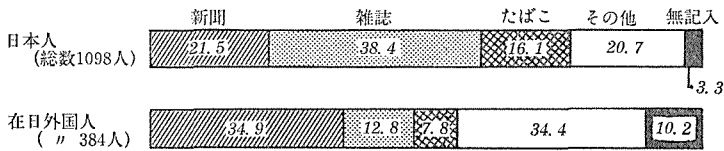


図4-1 駅の売店で何を買うか

ンガムなど、両者に共通に多かったのは、あめであった。

男性と女性で回答に大きな差が出たのは、新聞とたばこであった。たばこについては、男女の喫煙率に差があるので当然として、新聞に関しては、日本の社会人で、33%対5%、学生で22%対8%(ともに全回答数に対する%, 以下同)と圧倒的に男性の買う率が高い。逆に、社会人の女性が買う率が高いのは雑誌で、57%と学生の女性に比べても高い数字を示している。おそらく、女性週刊誌の購買層が社会人女性に集中しているということであろう。なお、外国人に関しては、こうした男女差はほとんどない(男女約37%対31%)。

(1) なにがほしいかを店員に伝えるときどうするか

選択肢：1. 買いたいものを自分で取って黙って示す

2. 自分で取り、「すみません」「これ」ぐらいは言って示す

3. 店員にほしいものを告げ、取ってもらう

4. 店員にほしいものを告げ、自分で取る

なお、ドイツにおける調査では、この項目の選択肢の4.が欠けているが、ここでは、それを0として扱った。また、本節の以下の記述では、回答のうち「無記入」および複数回答を無効回答とし、分析の対象としなかった。有効回答数は、各図表にそれぞれ示した。

ここで目立つのは、ドイツ人が店員にほしいものの名前(ここでは、新聞の名)を告げて取ってもらうと答えた率が高いことである。キオスクの構造上、取ってもらわなければならないということも考えられるが、選択肢1.の「黙って取る」の比率も日本人より高いことを見ると、かならずしも、それだけの理

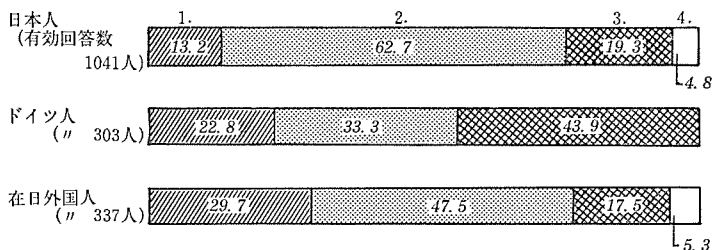


図4-2 何がほしいかを店員に伝えるときどうするか

由とも言えない。

この項目については、男女差、社会人と学生の差はほとんどなく、日本人の場合にのみ男性より女性のほうが「黙って取る」の比率が低い(約17%対3%)点が特徴的である。ことばを発するか否かについては、本節の終わりに一括して扱うので、くわしくはそこを参照されたい。

(2) お金を払うときどうするか

選択肢：1. なんにも言わずにお金だけだす

2. 「はい」くらいは言ってお金を渡す

3. 金額を言ってお金渡す

この項目については、とくに取り上げるべき点はない。在日外国人の「黙ってお金を渡す」の率が高いのは、日本語能力の問題があるので当然であろう。

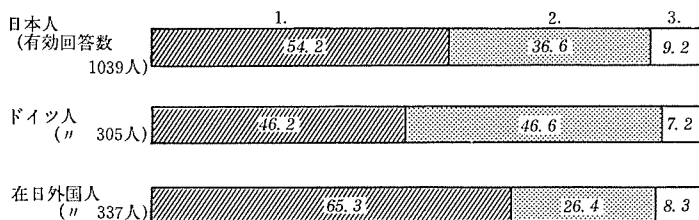


図4-3 お金を払うときどうするか

(3) 店員はどういう売り方をするか

- 選択肢：1. 黙ってお金を受け取る。おつりがあっても、黙ってわたす
 2. 「ありがとう」くらいは言う
 3. 新聞名などを確認したり、金額を言ったり、はっきりことばを発する

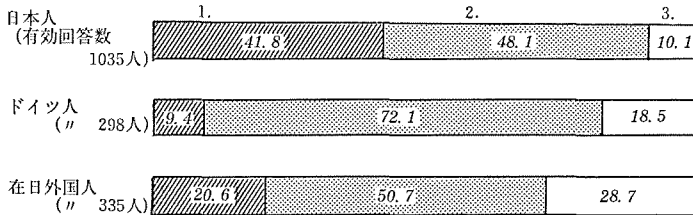


図4-4 店員はどういう売り方をするか

売店の店員の反応に関しては、日独で非常にはっきりした差が生じている。

(2) と関連して見ると、日本では黙って金を出すと、だいたいの場合、店員も黙って受け取るだけなのに対して、ドイツでは黙って金を出してもほとんどの場合、なんらかのことばを発してくれるという結果が出ている。ただし、日本の店員も外国人に対しては、日本人に対するよりもややことばを発する率が高いというのも興味深いことである。

一般に日本人の女性は男性よりも売店での買物行動でことばを発する率が高いが、女性に対しても、店員はあまりことばを発しないようである(「黙って受け取るだけ」と答えた者の率は男女それぞれ約42%、33%)。

(4) 買い終えて売店を離れるときどうするか

- 選択肢：1. 黙って離れる。つりがあっても黙ってもらう
 2. 「どうも」「ありがとう」くらいは言う

この項目についても、(3)と同様に日独で決定的な差がある。店員が何もいわないから、客も何もいわないのか、あるいは逆か、どちらに原因があるのかは、ここでは問わないが、ドイツ人に比べて日本人が「ありがとう」のたぐい

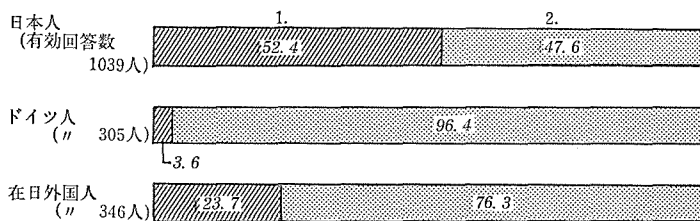


図4-5 買い終えて売店を離れるときどうするか

のことはこうした場面では使わないということは明らかである。もちろん、今回の調査では売店で買物行動については動作に関する質問をしていないので、頭を下げるなどの行動でそれを示しているのだという可能性も否定できない。

ドイツ人で興味深いのは、ほしいものを示したり(質問1)、代金を渡したり(質問2)するときには、ことばを発しないことが多いのに、買物を終えたあとの挨拶はほとんど欠かさないという点である。われわれがヨーロッパに行つて気が付くことのひとつは、店に入つて買物をしたあと、店を出るときにかならずなんらかの挨拶をすることである。日本人には、ものを買つて店員から「ありがとうございました」と言われても、それに答える習慣がないし、また、そのための適切な表現もない。おそらく、日本人の(4)に対する回答がドイツ人とまったく異なるのは、こうした言語行動が固定化しているかどうかの違いに起因しているのであろう。

最後に本節のまとめとして、買い手側の質問項目(質問1, 2, 4)全体について、ことばを発するか否かを男女別、社会人と学生の別の二つの観点から考察する。

(5) ことばを発するかどうか(男女別)

この図4-6からは、日本人、ドイツ人、在日外国人のどれをとっても、一般に男性よりも女性のほうがこうした買物場面ではことばを発する率が高いことがわかる。ただし、ドイツ人では、この差はわずかであつて、日本人がその差

はもっとも大きい。在日外国人は、ドイツ人と日本人のほぼ中間に位置する。

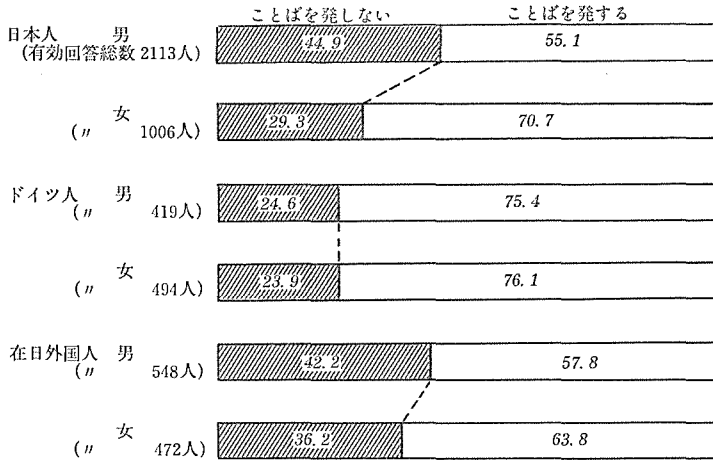


図4-6 ことばを発するかどうか (男女別)

(6) ことばを発するかどうか (社会人・学生別)

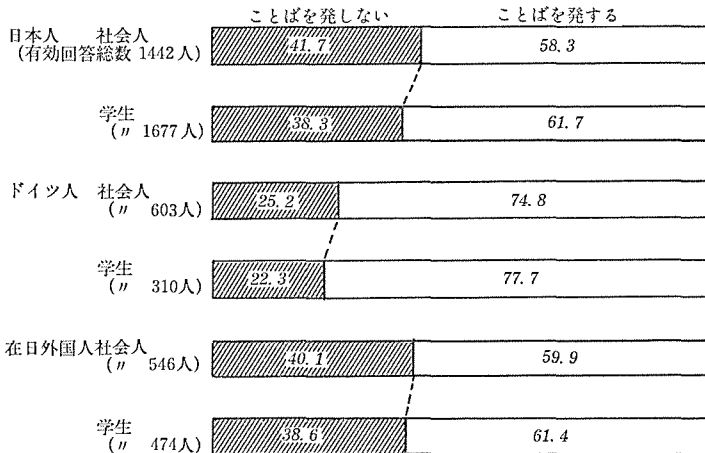


図4-7 ことばを発するかどうか (社会人・学生別)

売店での買物行動に関しては、全体の傾向として学生のほうが社会人よりことばを発する率が高いという結果が出た。学生のほうが年齢の上で社会人より若いと考えれば、年をとるにつれて、ややことばが少なくなるということになる。もちろん、この差はごくわずかなので断定的なことはなにも言えないが、日本人、ドイツ人、在日外国人のすべてにほぼ同様の比率で差が生じたことは、興味のあることである。

こうした場面でことばを発することを「丁寧さ」と単純に結び付けることは危険であるが、もしそれが可能だとすれば、学生たちは社会人より丁寧であるという、むしろ意外な結論が導き出される。この結論が妥当なものであるかどうか、今後なんらかの形で調査を試みたいものである。

4.2. 万年筆買い

ここでの主題は、引き続き“買物”行動であるが、“デパート”での“万年筆買い”を取り上げている。つまり、あるデパートで万年筆を買うという一連の行動を主題にし、その買物行動をいくつかの小行動に区切りながら、順にきいている。質問表では、全体を次のように導入している。

デパートで万年筆を買うとします。もしその場で選んで買うとしたらどんな買い方をしますか。

各質問は、買い手の側に立って展開しているが、買う側の行動を取り上げるだけでなく、買い手の目に映った（意識された）売り手の行動にも及んでいる。買物行動は、当然のことであるが買い手の行動と売り手の行動の交差に成立する。

買物行動での重要な要素は、4.1.でも述べたように買い手、売り手の行動が成立するための場面と売り買いされる品物である。ここでは、まず、“デパート”という場面が日本とドイツで同じような形態で存在しているかどうか、あるいは、日本人、ドイツ人、在日外国人の生活に同じような機能を果たしているかどうかが問題になる。次に、買物行動の対象となる“万年筆”が日本人、ドイツ人、在日外国人にどのようなものであるか（疎遠なもの、高価なもの、など）が問題になる。

以上のことは、この万年筆買いという行動を考察するための前提となる。質問表でも、日本人用のもの、在日外国人用のものでは想定したデパート（及びその所在地）、想定した金額を質問に先立って記入するように求めているが、ここではその問題に立ち入らず、以下質問順にその集計結果を見ていきたい。

各質問の集計結果の紹介は、おおよそ次のような枠組で進めていく。まず、

日本人、ドイツ人、在日外国人の全体的傾向のおおまかな比較検討を行う。次に、日、独、在日外国人、それぞれに基づいて、それぞれが示す問題点を社会人対学生、男性対女性、年齢の相違などの観点からいくらかくわしく検討する。その場合、すでに言及しているデータは参考にすることもある。最後に、必要に応じて、日、独、在日外国人の全体的傾向の比較の補足説明をする。なお、4.2.1.～4.2.3.は、(1)の部分は日向、(2)の部分は杉戸が分担して執筆した。

4.2.1. 万年筆のケースに近づいたら

(1) 行動の選択

デパートで万年筆を買うとする、というのが前提であった。最初の行動は、デパートの万年筆売り場にやってきて、陳列ケースに近づきながらの行動である。質問及び選択肢は、次のようになっている。

万年筆が並んでいるケースに近づいたら、

1. まずこちらから店員を呼び、相談する

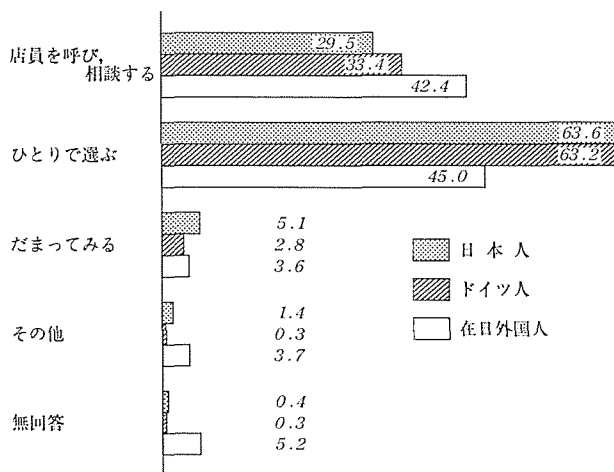


図4-8 万年筆が並んでいるケースに近づいたら

2. 店員に話しかけられれば答えるが、こちらから呼んだりもしないで品物をながめて、できるだけひとりで選ぶ
3. 店員が話しかけてきてもできるだけ避け、だまって品物を見ようとする

まず、全体の比較図は図4-8のとおりである。日、独、在日外国人、全体を通しての傾向として、「ひとりで選ぶ」>「店員を呼び、相談する」>「だまって見る」の順を指摘できるが、「だまって見る」が日本人の場合も含めて全体の中で極端に少ない。それぞれの選択肢を見てみると、「店員を呼び、相談する」が、日<独<在日外国人の順になり、「ひとりで選ぶ」が日>独>在日外国人、と逆の順になる。

多少細かにその両項目を比べてみると、「店員を呼ぶ」と「ひとりで」では、日本人の場合後者が2倍以上、ドイツ人の場合2倍近くになるが、在日外国人の場合は後者が前者より多いとはいえ、その差はわずかである、ということがわかる。つまり、日本人、ドイツ人は、店員を呼び、相談するよりも、ひとりで選ぶ傾向が強いのに、在日外国人はその時しだいで自由に態度を決めるといえそうである。ただ、これには当然、在日外国人の環境の問題も関係するので、単純には比較できないところもある。

「だまって見る」に目を移すと、日>在日外国人>独の順になり、前二者とは違った様子を見せる。ドイツ人の場合、ひとりで選ぶ傾向が店員を呼んだりする傾向より2倍近く高いとはいえ、店員に話しかけられて対応しないということは極端に少ないのである。それに比べ、そういうあいまいな態度を示す率は日本人の方が高い。在日外国人も、日本人ほどコミュニケーションを避けようとしませんが、ドイツ人よりは多少店員に対応しない率が高い。「店員を呼ぶ」「ひとりで選ぶ」の差異が少なかったように、ここでも極端ではない。

次に日本人、ドイツ人、在日外国人、それぞれの内容をもう少し細かに見てみよう。まず、日本人であるが、表4-9は社会人と学生、男性と女性を比べたものである。これを見ると、ひとりで選び、店員を呼ばない傾向は、学生が社会人に比べ顕著であり、女性が男性に比べ顕著である。ただし、ここで面白いことは「呼ぶ」をさらにくわしく見てみると学生内のデータでは、男性27.8%、

表 4-9 万年筆が並んでいるケースに近づいたら（日本人）

	店員を呼ぶ	ひとりで	だまって	そ の 他	無 回 答	計
全 体	29.5	63.6	5.1	1.4	0.4	1098
社会人	34.8	57.7	4.7	2.0	0.8	511
学 生	24.9	68.7	5.5	1.0	—	587
男	31.4	60.7	5.5	1.9	0.5	733
女	25.8	69.3	4.4	0.5	—	365

女性 22.1 % であり、この 22.1 % という数字はどれよりも低めであるが、社会人内のデータでは、男性 33.6 %、女性 43.5 % であり、43.5 % という数字はどれよりも高めである。日本女性は年齢による買物行動の変化が大きいということか。

社会人の年齢による傾向には顕著な違いは見られないが、「呼ぶ」は壮年層が高く (37.2 %), 「ひとりで」は若年層が高い (60.0 %) ということは指摘できる。ただし後者は、学生の「ひとりで」(68.7 %) より低い。

「だまって見る」は、社会人対学生では社会人 4.7 %, 学生 5.5 % であり、男性対女性では男性 5.5 %, 女性 4.4 % である。

表 4-10 万年筆が並んでいるケースに近づいたら（ドイツ人）

	店員を呼ぶ	ひとりで	だまって	そ の 他	無 回 答	計
全 体	33.4	63.2	2.8	0.3	0.3	323
社会人	35.3	61.5	2.8	—	0.5	218
学 生	29.5	66.7	2.9	1.0	—	105
男	35.5	61.1	2.6	—	0.7	152
女	31.6	64.9	2.9	0.6	—	171

表 4-10 は、ドイツ人の場合の同種のデータである。ドイツ人の場合も日本人と同様にひとりで選び、店員を呼ばない傾向は、学生の方が社会人より高く、また女性の方が男性より高いといえる。ただ、その違いの大きさは日本人ほどではない。もう一つ、この項目では男女差よりも社会人対学生による差の方が大きいこ

とに気付く。

ただし、学生のデータで男女差を見てみると、女性がひとりで選び、店員を呼ばない割合がずっと高くなり、社会人のデータでは学生の男女差ほどのひらきはないが、この傾向が逆になっている。やはり、ドイツでも女性の年齢差による買物行動の変化は大きいということだろうか。

社会人内の年齢差を見てみると、壮年層は「呼ぶ」が高く（43.0%）, 「ひとりで」は若年層が高い（64.8%）。

「だまって」については全体で9人であるからそれ以上の検討を加えないが、上のような要因による大きな変化はなさそうである。

在日外国人の場合は、すでにふれたように日、独と違った様子を見せる。まず、社会人对学生については「呼ぶ」が42.9%対41.9%、「ひとりで」が42.4%対48.0%で、「呼ぶ」にはほとんどひらきがないが、「ひとりで」は社会人より学生の方が高くなる。次に男性対女性については、「呼ぶ」が41.9%対43.1%、「ひとりで」が45.9%対44.2%で男女のひらきはドイツ人の場合よりさらに少なく、わずかながら女性の方が男性よりひとりで選ばず、店員を呼ぶ傾向を見せている。これは、日、独とは逆の傾向である。

この原因は、学生内の女性にある。女子学生は男子学生より「ひとりで」でなく、「呼ぶ」率がずっと高いのである。ただし社会人内の男女差を見ると逆の傾向を示している。つまり店員とコミュニケーションしようとする姿勢については、女子学生の場合に強く、社会人女性ではそれが弱まるわけで、これは、日、独の女性の傾向と逆になるわけであるが、ただ、「呼ぶ」の率はもともと全体に高いので、この点を忘れて比較するのは妥当でない。

年齢差については、社会人の場合年齢が高くなるにつれ「呼ぶ」率が高くなり、「ひとりで」の率が低くなる。この傾向は、日、独と同様のものである。

「だまって」は全体で14人であるから、それ以上の検討は加えない。

以上、最初の質問の結果を見てみたが、日本人とドイツ人の場合、陳列ケースに近づいての店員に対応する行動として「呼ぶ」「ひとりで」では似たような行動の傾向を見せ、「だまって」ではかなり違う行動をとる、ということになる。また、日本人の場合、社会人对学生、男性対女性、年齢差といった要因による

行動の選択の幅は大きい、ドイツ人の場合は日本人ほどの大きな変化を示さない、ということになる。

在日外国人の場合は、「呼ぶ」「ひとりで」といった要因にあまり左右されることもなく、つまりそのひらきもあまり大きくなく、「だまって」では日、独の中間といったぐあいである。また、社会人対学生、男女などの要因が日、独とは違った影響を与えたりするようである。ただ、すでにふれたとおり、在日外国人は、日、独の場合に比べ環境が特殊であることを注意に入れておく必要がある。

(2) 用いられる言語形式

前掲の選択肢のうち「1. まずこちらから店員を呼び、相談する」を選んだ回答者に対して、「何と言って店員を呼びますか」という追加質問をした。以下、この追加質問に回答された言語形式について、日・独・在日外国人の順に見ていく。

ここで回答を求めた言語形式は、質問文からわかるように、

イ. 店員を呼ぶ (独; die Verkäuferin rufen <女店員ヲ呼ブ>、

英; call a salesperson <店員ヲ呼ブ>)

ロ. 相談する (独; sagen was ich will <自分ガ何ヲ望ムカ告ゲル>、

英; get advice <助言ヲ求メル>)

という2種類の発話行為に用いられる言語形式である。この2種類が、買物場面の進展の中でイ→ロの順に起きるはずの発話行為であることを考慮に入れて質問したのである。以下で回答を見ていく際にも、この2種類(2段階)を区別する視点に立つこととする。

(i) 日本人

日本人の回答について、まず、店員を呼ぶための言語形式が含まれているかどうかをまとめると表4-11になる。社会人、学生とも全体として9割(選択肢「1. 店員を呼ぶ」を選んだ回答者を全体とする割合。以下同様)が、店員を呼ぶための何らかの語形を含んだ回答をした。性別では、社会人、学生とも女性の方でこの割合が高めであり、年齢層では壮<中<若の順に少しずつ高くな

る。

用いられた呼びかけ形式を分類したのが表4-12である。「ちょっと」「すみません」「お願いします」及びこれらの結合した形式が現れた。これらのうち、「すみません」を含む形式が最も多く、それは、社会人より学生で多く、また若い人ほど多く使われている（社会人全体68.6％，若85.0％，中65.1％，壮50.0％，学生全体80.3％）。

「お願いします」を含む形式は、「すみません」と背中合わせで社

表4-11 店員への呼びかけの有無（日本人）

		呼びかけあり	呼びかけなし	計
社会人	全体	89.3	10.7	178
	男女	80.8	19.2	151
	若中	100.0	—	27
	壮	98.5	1.5	67
学生	全体	85.7	14.3	63
	男女	81.2	18.8	48
	全体	89.8	10.2	147
学生	男女	87.5	12.5	80
	男女	92.5	7.5	67

表4-12 店員を呼ぶための言語形式（日本人）

		ちょっと	すみません(が)	ちょっと お願いします	すみません(が)	すみません(が) お願いします	お願いします	その他	呼びかけなし	計
社会人	全体	5.6	17.4	2.8	51.2	2.8	7.3	2.2	10.7	178
	男女	6.6	19.2	3.3	48.3	0.7	6.6	2.6	12.6	151
	若中	—	7.4	—	66.7	14.8	11.1	—	—	27
	壮	1.5	14.9	1.5	70.1	4.5	4.5	1.5	1.5	67
学生	全体	6.3	17.5	1.6	47.6	1.6	9.5	1.6	14.3	63
	男女	10.4	20.8	6.3	29.2	2.1	8.3	4.2	18.8	48
	全体	2.7	15.0	1.4	65.3	3.4	0.7	1.4	10.2	147
学生	男女	3.8	21.3	1.3	60.0	1.3	—	—	12.5	80
	男女	1.5	7.5	1.5	71.6	6.0	1.5	3.0	7.5	67

会人の方が、そのうちでも高年層の方が少しずつ多めである。また、「お願いします」は女性の方によく使われる傾向も見られる。「お願いします」を含む形式の割合を合計すると次のようになる。

社会人 学 生		
男	10.6	2.5
女	25.9	9.0

次に、店員に「相談する」発話行為の言語形式を見る。回答のうち、この段階の発話形式を何らかの形で答えたものと、この段階の発話まで記さなかった

表 4-13 店員に「相談する」段階を答えたか
(日本人)

		回 答 あ り	回 答 な し	計
社 会 人	全 体	45.5	54.5	178
	男 女	46.4	53.6	151
		40.7	59.3	27
	若 中 壮	37.3	62.7	67
		47.6	52.4	63
		54.2	45.8	48
学 生	全 体	44.9	55.1	147
	男 女	38.7	61.3	80
		52.2	47.8	67

ものとを区別すると、表 4-13 のようになる。社会人・学生とも 5 割弱がこの段階の発話を含んだ回答をした。この有答者は、社会人の壮年層や学生の女性で他より多めである。

また、さきに見た「呼びかけ」の有無とこの「相談する」の有無とを重ねて集計すると表 4-14 が得られる。5 割強が「呼びかけ」段階だけを答え、「相談」だけは 1 割前後、両段階とも回答したのが 3

表 4-14 「呼びかけ」の有無と「相談」の有無 (日本人)

		「呼 び か け」 の み	「相 談」 の み	両 者 あ り	両 者 と も な し	計
社 会 人	全 体	53.9	10.1	35.4	0.6	178
	男 女	53.0	11.9	34.4	0.7	151
		59.3	—	40.7	—	27
	若 中 壮	61.2	—	37.3	1.5	67
		52.4	14.3	33.3	—	63
		45.8	18.8	35.4	—	48
学 生	全 体	52.4	7.5	37.4	2.7	147
	男 女	56.3	7.5	31.3	5.0	80
		47.8	7.5	44.8	—	67

～4割という割合である。表4-14に見られる数値については次のことに留意しつつ考えるべきである。「呼びかけ」「相談」という二つの段階のどれとどれを答えたかについては、回答者が質問の要求をどうとらえたかによる程度が高い。特に「呼びかけ」だけを回答するにとどまった回答者は、これだけが質問されていると解釈した結果、そこまでにとどめた可能性が高い。「すみません」「お願いします」などと店員を呼んだあと、「万年筆が欲しい」という希望や要求を、言語形式はどういうものを選ぶにしろ何も言わないで買物が進展することはなからうからである。

しかし、他方「相談」だけを回答した人については、「すみません」や「お願いします」を言わないで、はじめから「相談する」段階に入るという買物をするタイプと解釈しうる可能性が残っている。「すみません」や「お願いします」は、前述では便宜上「呼びかけ」という名前で呼んだが、これらは、店員が離れた所にいたり別の仕事をしていたりした時にその注意をひくために用いられて初めて「呼びかけ」となる。「すみません」は、しかしそうした用法だけでなく、この場面では「相談する」発話を始めるための、いわば前置きとしての用法ももつ形式である。表4-12で「すみませんが」という形式が最も多く現れていたが、この「が」のついた場合は、特に前置きとして用いられた可能性が高い。もちろん、ただ店員を呼ぶだけでも「すみませんが」の形をとることもありうる。自記式アンケートという調査の形式の制約もあって、ひとつひとつの「すみません」や「お願いします」を「呼びかけ」と「前置き」のいずれかに特定することは困難だが、以上のことを考慮に入れば、表4-14の『「相談」のみ』に該当する回答者には、前置きなしで単刀直入に「相談する」段階に入る人が含まれている場合が多いと見てよからう。このタイプの人が社会人の女性や若年層に皆無であるという点に注目しておきたい。

「相談する」発話として回答に現れた語形は多岐にわたる。文末表現などに注目して待遇表現の観点から分類することをはじめとして種々の分析が考えられるが、ここでは、買物の進展という冒頭の観点到即して考えるため、店員への相談が客自身の品定め以前に始まるか、それよりあとに始まるかを推測しうる分析を試みた。「相談する」発話の中には何らかの形で万年筆に言及する部分

が含まれていると考え、その言及が、ただ一般的な（不定の）万年筆についてされているか、特定の万年筆を指示する形でされているかを区別しようとするのである。前者の場合は、たとえば「万年筆が欲しいんですが」などの形をとるが、ここでは客はまだどれといって買いたい万年筆を決めておらず、いわばその売り場への来意を告げるだけの発話をしたと解釈できる。これに対して、後者の場合は、「この万年筆を出して見せて下さい」「あれを試させて下さい」などのように、万年筆が「こ・そ・あ」の指示詞で特定されて言及される場合であり、この発話の時点で客はすでに一応の品定めをしていると考えられる。このような二つの場合を対比することにより、店員への相談を、品定め以前に始めるタイプと自分ひとりで一応の品定めをしたのちに始めるタイプとが区別できると考えた。

この立場から集計したのが表4-15である。表のうち、「特定した申し出」の分類には、「この万年筆を……」「あの万年筆を……」「これ／あれを……」を含む回答がまとめてあり、「不特定の申し出」にはこうした指示詞なしの回答をまとめた。表からは、不特定の申し出が社会人より学生に多く、その中でも女子学生に多いことがわかる。他方、特定した申し出は学生で少ない。年齢では高年齢層に特定した申し出が増える傾向がある。つまり、前述の仮定に即して考え

表4-15 「相談」の内容—特定・不特定—(日本人)

		不 申 し 出	特 定 し た 申 し 出	そ の 他	「相 談」 なし	計
社 会 人	全 体	23.0	19.7	2.8	54.5	178
	男	23.8	19.2	3.3	53.6	151
	女	18.5	22.2	—	59.3	27
	若	22.4	13.5	1.5	62.7	67
	中	27.0	19.0	1.6	52.4	63
学 生	壮	18.8	29.2	6.3	45.8	48
	全 体	34.7	8.9	1.4	55.1	147
	男	28.8	10.1	—	61.3	80
	女	41.8	7.5	3.0	47.8	67

れば、学生、とりわけ女子学生には、自分であらかじめ品定めをすることなく、とにかく「万年筆が欲しくてここに来ている」という来意を告げるタイプが多く、逆に社会人、とくに壮年層では、一応の下見をしてどの品物をという目星をつけたあとで初めて「これを」「あれを」と申し出るタイプが多いという分布になっているのである。

以上は、「呼びかけ」と「相談する（申し出）」という二つの段階を区別して回答を見たのだが、両者の結びつきの姿の主なものを以下に列挙する。社会人か学生かのうち5人以上の回答があった結びつきだけを多い順に掲げる。

呼びかけ 部 分	相 談 部 分	社 会 人 全体（男 女）	学 生 全体（男 女）
すみません(が)	ナシ	24.7 (24.5 25.9)	35.4 (36.3 34.3)
すみません(が)	不特定	14.6 (13.9 18.5)	23.1 (18.8 28.4)
ちょっとすみません(が)	ナシ	15.2 (16.6 7.4)	12.2 (16.3 7.5)
すみません(が)	特定	11.2 (9.3 22.2)	6.1 (5.0 7.5)
ナ シ	不特定	5.1 (6.0 -)	5.4 (5.0 6.0)
お願い(致)します	ナシ	6.2 (5.3 11.1)	0.7 (- 1.5)
すみませんがお願いします	ナシ	2.8 (0.7 14.8)	2.7 (1.3 4.5)
ちょっとお願いします(が)	ナシ	2.8 (3.3 -)	1.4 (1.3 1.5)
ちょっと	特定	2.8 (3.3 -)	0.7 (1.3 -)
回答者数		178 (151 27)	147 (80 67)

(ii) ドイツ人

ドイツ人の回答に現れた言語形式は、細かな差異まで区別すると97種類にのぼる。前述の選択肢「1. 女店員を呼び、希望を述べる（ドイツ語版）」を選んだ108人のうち1人が語形を答えていないので、107人が97種類の語形で答えたことになり、語形の異なり数は多いといえる。

まず店員への「呼びかけ」の部分を見る。店員の注意をひく機能を果たしうる言語表現としては、大別して次の5種類があげられる。

1. Fräulein! <オ嬢サン>, Shönes Fräulein! <美シイオ嬢サン> など、文字

- このうち、5.の Bitte! は、前に日本人の「すみません」などについて述べたのと同様に、記入された文字面からだけでは、それが発話の冒頭で呼びかけ的に用いられたものか、それとも依頼・要求の発話の中で丁寧さを添えるために副詞的に用いられたものかを特定するのが困難な場合が多いので、ここでは除外する（すべて後者の、副詞あつかいとした）。

Hallo,	Fräulein,	könnten Sie mir behilflich sein?
2	1	4

Entschuldigung, könnten Sie mir wohl einmal helfen ?
3 4

そこで、各回答者の反応文に 1.～4.のどれが含まれているかに注目して項目ごとに集計してみると、表 4-16 が得られる。属性別の回答者数が少ないので注意すべき数値ではあるが、それでも、全体の約 4 分の 1 が 1.～4.のどれをも含まない回答をしたこと、4 割強が「もちかけ」表現を含めていること、1.の Fräulein 類が社会人の壮年男性に多いこと、3.の Entschuldigung 類が学生に多いこと、

表 4-16 「呼びかけ」の有無と種類(ドイツ人)

		1. Fräulein 類を含む	2. Hallo, Guten Tag 類を含む	3. Entschul- digung類 を含む	4. 「もちかけ」 表現を含む	1.～4. なし	回 答 者 数
社 会 人	全 体	27.6	30.3	7.9	40.8	27.6	76
	男	45.7	42.9	2.9	28.6	22.9	35
	女	12.2	19.5	12.2	51.2	31.7	41
	若 中	17.9	25.0	14.3	46.4	25.0	28
	壮	16.7	58.3	16.7	41.7	16.7	12
学 生	全 体	38.9	25.0	—	36.1	33.3	36
	男	9.7	22.6	35.5	45.2	25.8	31
	女	10.5	21.1	31.6	42.1	26.3	19
	男	8.3	25.0	41.7	50.0	25.0	12

(注) 1 回答が複数を含む場合があるので%は100を超える。

の4点は指摘できよう。

次に、1.～4.の表現のうち、実質的意味のうすい1.～3.を狭義の〈呼びかけ〉としてまとめ、これと、いくらか実質的意味の備わった4.の〈もちかけ〉、及び最も実質的な「万年筆が欲しい」という要求・希望の表現の、3種類の表現を区別し、回答者がどれとどれを（あるいはどれだけを）答えたかを集計した。

表 4-17 「呼びかけ」「もちかけ」「要求・希望」の有無(ドイツ人)

		〈狭義の 呼びかけ〉 のみ	〈もちかけ〉 のみ	〈要求・ 希望〉 のみ	〈呼び かけ〉 + 〈もち かけ〉 + 〈要求・ 希望〉 のみ	〈呼び かけ〉 + 〈要求・ 希望〉 のみ	〈もち かけ〉 + 〈要求・ 希望〉 のみ	3 種 類 並 存	そ の 他	計
社 会 人	全 体	17.1	15.8	27.6	18.4	14.5	6.6	—	—	76
	男	25.7	8.6	22.9	14.3	22.9	5.7	—	—	35
	女	9.8	22.0	31.7	22.0	7.3	7.3	—	—	41
学 生	全 体	—	9.7	19.4	29.0	29.0	—	6.5	6.5	31
	男	—	10.5	21.1	26.3	31.6	—	5.3	5.3	19
	女	—	8.3	16.7	33.3	25.0	—	8.3	8.3	12

表4-17からは、〈呼びかけ〉だけ、〈もちかけ〉だけを答えたのが社会人（前者が男、後者が女）に目立つこと、〈呼びかけ〉と〈もちかけ〉、〈呼びかけ〉と〈要求・希望〉を合わせて回答したのが学生に目立つこと、及び、この二つを欠く〈要求・希望〉だけが社会人でも学生でも2～3割いたことがわかる。この点は、のちに日・独の結果を対比する際に留意されるところである。

「自分の希望を述べる」部分について、上で〈要求・希望〉の表現と呼んだ回答を見る。〈呼びかけ〉や〈もちかけ〉と共に起したもの（社会人16人、学生11人）、〈要求・希望〉だけのもの（社会人21人、学生6人）を合計しても全部で54人（社会人37人、学生17人）にとどまり、語形回答者の約半数、全体の回答者の約6分の1である。属性別に集計することは控え、ここでは表現のバラエティを見ることにする。

〈要求・希望〉という名称を与えたことからわかるように、ここに現れた表現は、一人称構文をとるものと二人称構文をとるもの（及び両者の並存したもの）に二大別できる。

Ich〈私〉を主語とする一人称構文だけで回答した人は全体で29人いた。直訳的には〈私ハ万年筆ガ欲シイ（見タイ、試シタイ）〉という意味を表す表現になるが、希望を表す助動詞ないし動詞に注目すると、

hätte gern（9例）

Ich hätte gern einen Füllfederhalter.

〈私ハ万年筆ガ欲シイノデス〉

Ich hätte gern einen Füllfederhalter angesehen.

〈私ハ万年筆ガ見タイノデス〉

Ich hätte gern dieses oder jenes.

〈私ハコレカアレカガ欲シイノデス〉

など。

möchte（9例）

Ich möchte diesen Füllfederhalter kaufen.

〈私ハコノ万年筆ヲ購入シタイノデス〉

Ich möchte einen Füllfederhalter.

〈私ハ万年筆ガ欲シイノデス〉

Ich möchte bitte einen Füllfederhalter.

〈同上。ただし bitte あり。〉

など。

möchte gern (3 例)

Ich möchte gern einen Füllfederhalter kaufen.

〈同上。ただし gern 《喜ンデ》 あり。〉

könnte, kann (各 1 例)

Könnte ich bitte einmal die Füllfederhalter ausprobieren ?

〈一度ソノ万年筆ヲ吟味デキルデショウカ。 bitte あり。〉

Kann Ich bitte diese Füllfederhalter ansehen ?

〈コノ万年筆ヲ見ルコトガデキマスカ。 bitte あり。〉

suche, mich interessiere für など主動詞のみ (計 6 例)

Ich suche einen Füllfederhalter.

〈私ハ万年筆ヲ探シテイル〉

Ich interessiere mich für diesen Füllfederhalter.

〈私ハコノ万年筆ニ関心ヲ持ッテイル〉

29 例中, 22 例が hätte, möchte, könnte など丁寧さを添える接続法形式の(助)動詞による表現である。

一方, Sie〈あなた〉を主語とする二人称構文だけの回答は 13 例あった。基本的には疑問文(丁寧な場合に依頼文)による回答である。

würden (6 例)

Würden Sie mir bitte diesen Füller zeigen ?

〈コノ万年筆ヲドウゾ見セテ下サイマセンカ〉

Würden Sie mir bitte diesen da zeigen ?

〈ドウゾコレヲ見セテ下サイマセンカ〉

など。

könnten (3 例)

Könnten Sie mir bitte die Füllfederhalter zeigen ?

〈ドウゾソノ万年筆ヲ見セテイタダケマセンカ〉

など。

können (1例)

Können Sie mir die Füller zeigen?

〈ソノ万年筆ヲ見セテモラエマスカ〉

zeigen 主動詞のみ (3例)

Zeigen Sie mir bitte diesen Füllhalter!

〈コノ万年筆ヲドウゾ見セテ下サイ〉

二人称構文でも, würden, könnten という接続法形式を含むものが13例中9例ある。

一人称構文と二人称構文とが並存した回答(11例)においても, 一人称文部分は möchte (7例), hätte gern (1例) など接続法によるものが多く, 主動詞の直説法(3例)だけより優勢であり, また二人称文部分でも, würden (2例), könnten (3例) の接続法構文のほか, können (5例) という直説法助動詞をとるものが多く, 直説法の主動詞(1例)だけの文は少ない。このように, 一人称構文で〈希望〉を表すにしろ, 二人称構文で〈要求〉〈依頼〉を表すにしろ, 助動詞を用いた表現, それも接続法形式を選んだ丁寧な発話の回答が多い。なお, 全54例中, 以上の他に1例だけ, 複文の一人称文が現れた。構文上, 相当丁寧な表現といえるものである。

Darf ich Sie bitten, mir den Füllfederhalter zu zeigen?

〈私ニソノ万年筆ヲ見セテイタダクヨウ, オ願イシテヨロシイデショウカ〉

表現の丁寧さに関する要素としては, bitte〈ドウゾ〉も注目すべきであるが, 特に二人称構文では6割強(24例中15例)に用いられている。一人称構文では40例中7例と少ないが, 希望を述べる表現において bitte と同じ構文的位置に現れる gern〈喜んで=～デキルト嬉シイ〉が14例用いられていることを合わせて見るべきだろう。同じ Ich möchte……という文でも, この gern がある場合とない場合のあることを考えると, あるいは, gern の有無が表現の丁寧さに関連する(gern のある方がより丁寧)という事情をくみとることができるかもしれない。gern については確言を留保するとしても, 以上見たように, 回答に現れ

た〈要求・希望〉の表現には丁寧なものが多いと指摘してよいと考えられる。

いまひとつ、日本人の回答について試みた、要求や希望が特定の万年筆を指してなされているか、不特定の万年筆についてなされているか、という観点から整理すると表4-18のようになつた。不特定の要求・希望を

表4-18 「要求・希望」の種類—特定・不特定—
(ドイツ人)

回答した人、つまり「万年筆が欲しい」と売り場への来意を告げることから発話を始めるタイプと考えられる人は3～4割、これに対して「この／その／あの万年筆が見たい」という品物を特定した要求・希望を回答した人は1割強～2割弱という割合である。表中の数値からは「不特定」が男性や壮年層に多めであることなどが読めるが、いずれも回答者数が少ないので安定したものとは言い難い。

		不特定の 要求・希望	特定した 要求・希望	な 要求・希望 し	回 答 者 数
社 会 人	全 体	31.6	17.1	51.3	76
	男 女	40.0	11.4	48.6	35
		24.4	22.0	53.6	41
	若 中 壮	21.4	28.6	50.0	28
		33.3	—	66.7	12
学 生	全 体	38.9	13.9	47.2	36
		41.9	12.9	45.2	31
	男 女	47.4	10.5	42.1	19
		33.3	16.7	50.0	12

(iii) 在日外国人

在日外国人の回答者には、第1章で示したとおり、職業・在日経験・国内での生活環境などの点で様々な人が含まれている。とりわけ、期間の長短こそあれ、日本という外国で、外国人として暮す生活での言語行動様式が調査対象となっている点には、他の日・独の調査結果とただちに対照することを控えるべき事情が存在する。ここでの在日外国人の調査結果、特に今あつかおうとするように具体的な言語形式を問う項目については、外国語としての日本語を日本語教育や社会言語学の別の領域の問題点としてあらためて分析されるべきものであると考える。こうした理由から、在日外国人から得た万年筆買いの言語形式については、回答を全体的に概観するにとどめ、詳しい集計・分析はここでは施さないことを断っておく。

万年筆の陳列棚に近づいた場面について、在日外国人で選択肢「1. 店員を

呼び、助言を求める」を選んだ人は163人いた。そこでの語形を問う追加質問には、これ以外の選択肢を選んだ人も少し答えており、語形有答者は177人になった。回答語形を回答者全体の度数順に列挙すると次のようになる。

すみません類 (すみません, すみませんが, すみませんですが, ちょっとすみませんなど) ……	111 (62.7)
すみません類+要求表現 ……	17 (9.6)
お願いします ……	11 (6.2)
ちょっと ……	5 (2.8)
ちょっといかがいます ……	5 (2.8)
ごめん下さい ……	5 (2.8)
要求表現 ……	3 (1.7)
失礼ですが ……	2 (1.1)
もしもし ……	2 (1.1)
ちょっといいですか, あのね, どうぞ ……	各1 (各0.6)
Excuse me. Could I please see that pen. }	各1 (各0.6)
その他 (「指差しだけ」「視線合わせ」 「いろいろ」) ……	各1 (各0.6)

まず注意されるのは、前述の日・独に比べて要求表現の度数が小さいことである。日・独で4～5割の回答があったものが、ここでは1割どまりである。このことの原因を、追加質問の質問文が“What do you say to get his / her attention?”となっていたことに帰すわけにはいかない。日本語版では「何と言って呼びますか」、ドイツ語版では, „Mit welchen Worten rufen Sie die Verkäuferin?“〈ドンナ言葉デ女店員ヲ呼ビマスカ〉となっただけであるのに「相談」や「要求」の表現の回答が前述の割合まで見られたのである。回答一覧に見るように、回答は大多数が日本語(ローマ字書きも含む)で寄せられたが、おそらくは外国語で回答する困難さが、回答を手短かに済ませようとする当然の意識を回答者に持たせたことと推測できる。少なからずあった誤字・脱字なども集計ではできるだけ救うように扱った。また、「どうぞ」「失礼ですが」など、外国人としてはやむをえない、やや場面から外れた回答も含まれて

いた。いずれも、前に述べたように、得られた結果は別の立場・観点から分析すべきものと考えさせる所以のことがらであると思われる。もちろん、その際にも、「すみません」類の比率が日本人のそれ（表4-12 参照）に類似していることなどは注目できる結果であろう。以下、万年筆買いの各小場面でも同様の事情があるが繰り返さない。

(iv) 日・独を対照して

「呼びかけ」の部分については、その有無がまず注意される。この部分に該当する（ドイツでは〈もちかけ〉も含む）表現のない回答者は、下のような割合になり、日本人の方が少ない。前述（日本人の項）の仮定にたてば、呼びかけ、前置き、〈もちかけ〉などを発することなく、単刀直入に「相談」「要求・希望」の発話に入る人がドイツ人の方に多めであるといえることになる。

	社会人	学 生
日 本 人	10.7	10.2
ドイツ人	27.6	25.8

「呼びかけ」の発話の内容は、いうまでもなく日・独でかなり異なっている。Fräulein という文字通りの呼びかけや、Guten Tag などのあいさつ表現に直接該当するものは、日本人の回答には見られなかった。また、〈もちかけ〉と呼んだ表現、日本語に直訳すれば〈少シ助ケテモラエマセンカ〉〈チョットお願いシテヨロシイデスカ〉などの表現に該当するものもないというべきだろう。回答の「お願いします」は近い意味を含んではいるが、これはどちらかといえば相手の注意をひくための表現という性格が強いと思われ、ドイツ語の〈もちかけ〉が狭義の〈呼びかけ〉（前述）と並存する（つまり単なる〈呼びかけ〉でない）ことを考えれば、両者は別種の表現だろう。もちろん、ふだん日本でこの〈もちかけ〉にあたる内容の表現が全く聞かれないというわけではなく、たとえば「ちょっといいですか」「相談にのってもらえませんか」などはしばしば観察されるところではある。しかしながら、日本人の回答の中にそうしたものは現れないし、なによりも、ドイツ語においては〈もちかけ〉が定型性の高い表現として位置を占め、今回の回答にも繰り返し同種の形式で現れたことは、日本語側の事情と対照的である。

「相談」「要求・希望」の部分については万年筆についての「特定した」表現と「不特定の」表現との対比を指摘したい。前掲の表4-15, 表4-18から下に示すような対比が得られる。わずかな差ではあるが, 「不特定」の回答がドイツ人に多めである。繰り返すが, 自分で一応の品定めをしてから「相談」や「要求・希望」を発するのでなく, まずは「万年筆が欲しくてここに来た」という来意を告げるタイプがドイツの方で多めだということになる。

	特 定	不特定
日 本 人	19.7 (8.9)	23.0 (34.7)
ドイツ人	17.1 (12.9)	31.6 (41.9)

(括弧外が社会人, 内が学生)

また, そこで用いられる言語形式が丁寧なものであること(日本人については触れなかったが, おおむね「～して下さい」「～して下さいますか」の程度の表現である)は, 万年筆買いという言語行動のもつ待遇表現行動としての位置が日・独で大きくは変わらないものであることを示唆していよう。もちろん, 異なる言語間で個々の言語表現の丁寧さを比較対照することは困難な作業であり, 回答に現れた語形をこの立場で分析するのは別の課題である。

以上, 言語行動様式の観点から注目される日・独の対比点のみ指摘した。

4.2.2. 万年筆のケースに近づくと店員は

(1) 行動の選択

万年筆のショーケースに近づいて, 今度は店員がどのような行動をとられるかというのが次の質問である。質問及び選択肢は, 下記のとおりである。

万年筆のショーケースに客が近づくと店員はどうすることが多いと思いますか。

1. すぐに客に話しかけてくることが多い
2. 客から呼ばれるまで話しかけてこない店員が多い

全体の比較図は図4-19のとおりであるが, ここでは, ドイツ人, 在日外国人がかなりの共通性を示し, 日本人が違った傾向を見せる。「話しかけてくる」が

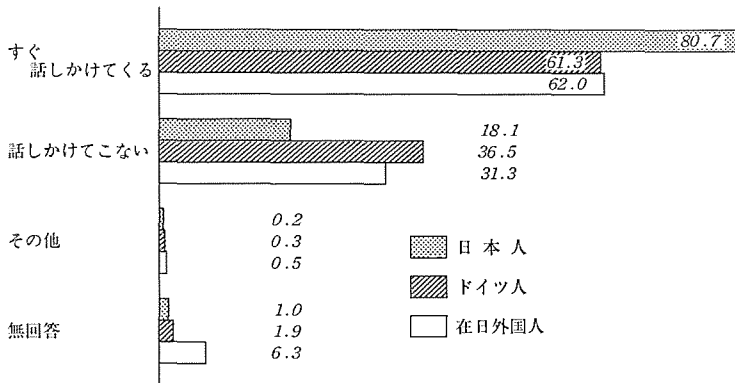


図4-19 万年筆のケースに近づくとき店員は

「話しかけてこない」よりずっと比率が高いのは、全体に共通ではあるが、ドイツ人、在日外国人では、前者が後者の（およそ）2倍であるのに対し、日本人の場合は4倍以上になる。

「話しかけてくる」こと自体では、日本人がドイツ人、在日外国人より20%近くも高く、「話しかけてこない」こと自体では、日本人はドイツ人、在日外国人の（およそ）半分で18.1%である。総じて日本人の場合、ドイツ人、在日外国人よりも、ショーケースに近づけば店員が話しかけてこないことは少なく、話しかけてくることが多いと思っている。

次に日本人の場合を見てみよう。表4-20は社会人と学生の比較、及び男性と

表4-20 万年筆のケースに近づくとき店員は（日本人）

	話しかけてくる	話しかけてこない	その他	無回答	計
全 体	80.7	18.1	0.2	1.0	1098
社会人	76.1	21.7	0.2	2.0	511
学 生	84.7	15.0	0.2	0.2	587
男	77.5	21.0	0.1	1.4	733
女	87.0	12.3	0.3	0.3	365

女性の比較である。これを見ると、「話しかけてくる」と思う割合は社会人より学生が高く（8.6％のひらき）、男性より女性が高い（9.5％のひらき）。これと同様に「話しかけてこない」と思う割合は社会人が学生より高く（6.7％のひらき）、男性が女性より高い（8.7％）。

社会人のデータでは、男女差はそれほど大きくない。「話しかけてくる」については男性社会人が75.7％、女性社会人が79.0％、「話しかけてこない」については前者が22.0％、後者が19.4％である。それに対し、学生のデータでは男女差は大きい。「話しかけてくる」については男子学生が80.3％、女子学生が88.8％、「話しかけてこない」については前者が19.4％、後者が10.9％である。つまり、全体を通して「話しかけてこない」店員は少なく、「話しかけてくる」店員が多いと思っているのは、女子学生に顕著であるということになる。

社会人内の年齢差では、若年層＞中年層＞壮年層の順で「話しかけてこない」店員は少なく（若年層14.4％、中年層24.1％、壮年層29.5％）、「話しかけてくる」店員は多い（若年層84.6％、中年層73.3％、壮年層67.4％）と思っているようである。

ドイツ人の場合の社会人对学生、男性对女性の比較差は、次の表4-21である。全体の印象としてまず言えることは、社会人であるか学生であるか、男性であるか女性であるかといった要因でほとんど違いを見せないことである。目につく違いといえば「話しかけてくる」で社会人＜学生（ひらきは3.7％）であること、「話しかけてこない」で男性＜女性（ひらきは3.1％）であることである。ただ後者は日本人のデータとは違った傾向を見せている。そこで細かに見てみる

表4-21 万年筆のケースに近づく店員は（ドイツ人）

	話しかけてくる	話しかけてこない	そ の 他	無 回 答	計
全 体	61.3	36.5	0.3	1.9	323
社会人	60.1	36.7	0.5	2.8	218
学 生	63.8	36.2	—	—	105
男	61.1	34.9	0.7	3.3	152
女	61.4	38.0	—	0.6	171

と、社会人内の男女では男性 35.5 %, 女性 37.8 %, 学生内の男女では男性 33.3 %, 女性 38.3 % であり、「話しかけてこない」という傾向は社会人、学生の別を問わず、女性に高めである。興味ある結果である。

社会人内の年齢差では、日本人の場合と同じように若年層>中年層>壮年層の順で「話しかけてこない」店員は少なく（若年層 34.1 %, 中年層 36.4 %, 壮年層 39.5 %）, 「話しかけてくる」店員は多い（若年層 63.6 %, 中年層 61.5 %, 壮年層 55.8 %）という結果であるが、年齢差によるひらきは日本人ほど大きくない。

在日外国人の全体的傾向は、この質問の場合ドイツ人とかなり共通性を示すと前に述べたが、社会人对学生、男性対女性というふうに比べてみるとかなりの違いがあるのが目につく。まず社会人对学生では、「話しかけてくる」が 57.6 % 対 67.0 %, 「話しかけてこない」が 35.1 % 対 26.8 % である。男性対女性では、「話しかけてくる」が 56.7 % 対 68.0 %, 「話しかけてこない」が 34.5 % 対 27.6 % である。「話しかけてくる」店員が多いと思っているのは社会人より学生であり、男性より女性である、という傾向は日本人の場合と同様のものである。学生内の男女差を見ても、「話しかけてくる」は男子学生 61.4 %, 女子学生 71.9 % といった数値を示している。

社会人の年齢差については、傾向としては日、独と同じように「話しかけてくる」は若年層に高く、「話しかけてこない」は壮年層に高い、という結果である。

(2) 用いられる言語形式

この場面では選択肢「1. すぐに客に話しかけてくることが多い」(独; *Meistens spricht sie mich sogleich an.* <女店員ハタイテイスグニ話シカケテクル>, 英; *He / She immediately addresses the customer.*) を選択した回答者に、「何と言って話しかけてくることが多いですか」(独; *Mit welchen Worten?* <ドナ言葉デ?>, 英; *What does he / she say?*) という追加質問をした。客としての立場から見た店員の言語行動を答えてもらう質問である。

日・独の回答を見ると、大きく、

イ. 客を迎え入れる言語行動（以下、「迎え入れ」と呼ぶ）

ロ. 客の用向きを質問する言語行動（以下、「質問」と呼ぶ）

の2種類（2段階）の発話行為の言語表現にまとめることができる。

（i）日本人

「迎え入れ」の言語表現について集計すると表4-22のようになる。何らかの

表4-22 客の「迎え入れ」表現（日本人）

		「いらつしやい ませ」あり	呼びかけ あり	その他の 迎え入れ	迎え入れ 表現なし	計
社 会 人	全 体	39.3	0.3	0.5	59.9	389
	男	41.2	0.3	0.6	57.9	340
	女	26.5	—	—	73.5	49
	若	41.2	—	—	58.8	165
	中	39.4	0.7	0.7	59.1	137
	壮	35.6	—	1.1	63.2	87
学 生	全 体	38.6	0.4	0.4	60.6	497
	男	44.1	0.4	0.4	55.1	227
	女	34.1	0.4	0.4	65.2	270

表4-23 客の「迎え入れ」と「質問」の有無（日本人）

		「迎え入れ」 のみ	「質問」のみ	両者 あり	両者 なし	計
社 会 人	全 体	27.8	49.6	12.3	10.3	389
	男	30.3	46.5	11.8	11.5	340
	女	10.2	71.4	16.3	2.0	49
	若	25.5	50.3	15.8	9.7	165
	中	30.0	47.4	11.0	11.7	137
	壮	28.7	51.7	8.0	11.5	87
学 生	全 体	19.7	50.7	19.7	9.9	497
	男	30.0	38.8	15.0	16.3	227
	女	11.1	60.7	23.7	4.4	270

語形で「迎え入れ」にあたる発話を回答した人は、社会人、学生とも約4割である。男性は女性より多めに「迎え入れ」のことばを意識しているようである。逆に「迎え入れ」の発話を回答の中に含めなかった人は女性の方が多めである。

「迎え入れ」にあたる言語形式の最も代表的なものは「いらっしゃいませ」である。「迎え入れ」の回答のほぼ全部がこの語形であり、極めて定型性の高い表現形式といってよい。「呼びかけ」にまとめたものは大部分が「お客様」であるが、これも含めて「いらっしゃいませ」以外は非常に少ない。

次に「迎え入れ」と「質問」の二つの有無を重ねて集計した表4-23を示す。両表現ともない人（つまり語形無回答者）が約1割いる。「迎え入れだけ」が社会人で3割弱、学生で2割弱、「質問だけ」が約半数、両者とも回答した人が1～2割いた。性別に見ると、男性に「迎え入れだけ」が目立ち、女性では「質問だけ」が6～7割を占めて多い。

「質問」を表す回答は、構文的に話題の部分と述語の部分に分割して集計した表で示す。表4-24が話題部分、表4-25が述語部分の集計である。それぞれの見出しは代表語形であり、たとえば表4-24の「どれ」には「どれ」「どちら」などが、「どんな物」には「どういった物」「どんなお品」などがまとめてあり、表4-25の「ですか／にしますか」には「でしょうか」「にいたしましょうか」

表4-24 「質問」の話題部分（日本人）

		どんな物	万年筆	どれ／何	贈り物	ご予算は	これ／それ	お気に入りの物	その他	なし	計
社会人	全体	18.8	12.3	11.3	4.6	5.7	1.3	1.3	3.6	41.1	389
	男	14.7	12.9	11.2	4.4	6.5	1.5	1.2	3.2	44.4	340
	女	46.9	8.2	12.2	6.1	—	—	2.0	6.1	18.4	49
	若中	29.1	12.7	9.1	4.8	3.6	1.8	1.2	2.4	35.2	165
	壮	12.4	10.9	13.9	2.9	7.3	1.5	0.7	4.4	46.0	137
		9.2	13.8	11.5	6.9	6.9	—	2.3	4.6	44.8	87
学生	全体	27.0	13.1	11.5	7.0	2.6	1.6	1.0	2.4	33.8	497
	男	13.2	14.5	14.5	2.2	2.2	2.2	0.4	1.8	48.9	227
	女	38.5	11.9	8.9	11.1	3.0	1.1	0.4	3.0	21.1	270

表4-25 「質問」の述語部分（日本人）

		ですか／ にしますか	をお探 しです か	いかが ですか	が御 入用 です か	をお見 せし ましょ うか	そ の 他	な し	計
社 会 人	全 体	24.7	18.5	3.1	3.1	2.6	7.1	40.4	389
	男	25.3	14.1	2.9	3.5	2.6	7.1	44.4	340
	女	20.4	49.0	4.1	—	2.0	12.2	12.2	49
	若	21.8	26.1	2.4	4.2	1.2	7.9	36.4	165
	中	25.5	13.9	3.6	1.5	4.4	7.3	43.8	137
	壮	28.7	11.5	3.4	3.4	2.3	8.0	42.5	87
学 生	全 体	24.9	24.9	3.8	2.4	2.2	11.7	30.0	497
	男	24.7	13.7	3.1	2.6	1.8	7.9	46.3	227
	女	25.2	34.4	4.4	2.2	2.6	14.8	16.3	270

など、また「いかがですか」には「いかがでしょうか」などをまとめている。

「質問」の話題部分では「どんな物」「どれ（何）」「万年筆」、述語部分では「ですか／にしますか」「をお探しですか」が度数の多かったものである。そのうち、「どんな物」と「をお探しですか」が女性で目立って多い。

「迎え入れ」と「質問」との結びつきのうち回答の多いものを列挙する。

迎え入れ	質 問		社会人		学 生	
	話題部分	述語部分	全体(男	女)	全体(男	女)
いらっしゃいませ	ナ シ	ナ シ	27.5(30.0	10.2)	19.7(30.0	11.1)
ナ シ	どんな物	をお探しですか	11.1(7.6	34.7)	12.7(6.2	18.1)
ナ シ	贈り物	ですか	4.6(4.4	6.1)	5.8(2.2	8.9)
ナ シ	ど れ	にしますか	5.7(6.2	2.0)	4.4(6.2	3.0)
ナ シ	万年筆	ですか	5.4(5.6	4.1)	4.8(6.2	3.7)
ナ シ	どんな物	その他(よろしいか?等)	3.1(2.6	6.1)	5.8(4.0	7.4)
いらっしゃいませ	どんな物	をお探しですか	1.8(1.5	4.1)	5.2(1.3	8.5)
いらっしゃいませ	万年筆	ですか	3.3(3.5	2.0)	3.4(4.8	2.2)
ナ シ	ナ シ	いかがですか	1.8(1.5	4.1)	2.8(1.8	3.7)
ナ シ	万年筆	をお探しですか	1.8(1.8	2.0)	3.2(2.2	4.1)

以上のほか、社会人、学生のいずれかで5人以上の回答があった結びつきに次のものがある。

何をお探しですか	計 13 例
ご予算はいくら位ですか	11 例
いらっしゃいます。どれにしますか	11 例
いらっしゃいます。どんな物がよろしいか	11 例
どんな物が御入用ですか	9 例
何が御入用ですか	6 例
ご予算は (いくら位)	6 例
ご予算はいくら位の物をお探しですか	5 例
いらっしゃいます。贈り物ですか	5 例

表4-24, 25 で女性に目立った「どんな物」と「をお探しですか」の結びついた「どんな物をお探しですか」は、「迎え入れ」の有無を無視すれば、社会人女性で4割弱、女子学生で3割弱という割合になり、異なり語形の多い中できわだった集中をみせている。これに対して、男性では特定の語形への目立った集中はみられない。

上掲の回答一覧を見ると、大きくわけて2種類の発話が回答されていることがわかる。ひとつは、客が陳列棚の前に近づいただけでまだ何もことばを発しないか、あるいは客が「ちょっとすみません」「お願いします」程度の発話（前の設問で「呼びかけ」と呼んだ種類の発話）をした段階で店員の行う発話である。典型的なものとして「いらっしゃいます。万年筆ですか?」「万年筆をお探しですか?」などがあげられる。この種類の発話形式を仮に「初接触」の発話と呼ぶ。

他のひとつは、買物がもう一段階進展して、客から「万年筆が欲しいのだが」という一般的（品物について不特定）な希望や来意が告げられたとき、ないし、さらに進んで「この万年筆を見せて欲しい」という品物を特定した申し出があったときに、店員の発する表現である。たとえば「どんな物にしますか?」「贈り物ですか?」「ご予算はいくら位のものをお探しでしょうか?」などは不特定

の申し出に対する応答であり、「これですか?」「どれでしょうか?」「これにしますか?」などは品物を特定した申し出へのうけこたえである。この種のものをまとめて「応答」と呼び、「不特定への応答」と「特定への応答」の2類を区別することにしよう。

もちろん、回答の文面からだけでは、個々の回答をこれらのどれと特定するのが困難な場合が多い。特に「不特定への応答」と解釈できる回答には、たとえば「贈り物ですか?」「ご予算はいくら位のものをお探してでしょうか?」などのように、実際には「初接触」の発話として発せられる場面を想定しうるものが多く、一律に分類することは難しい。ただ、「特定への応答」は他とかなり明確に区別できるものが多い。

調査の意図は、設問文からもわかるように、「初接触」の発話形式を回答してもらうところにあった。回答も、この意図に沿って「初接触」（ないし「初接触」としても運用されうる「不特定への応答」）が大多数を占め、「特定への応答」と解釈すべき例は割合としては1割に満たない少数だけにとどまった。語形の質問に先立つ選択肢で、「2. 客から呼ばれるまで話しかけてこない店員が多い」を選んだ人は、全体の2割弱（表4-20）とドイツ人・在日外国人より少なかったが、このことと考えあわせれば、日本人の意識する店員は、まずとにかく「迎え入れ」を行い、「質問」をするにしても「初接触」の立場からか、あるいはせいぜい「不特定への応答」としての発話から始めるタイプがその典型であるようである。

(ii) ドイツ人

異なり形式は50種類あった。前述の選択肢で「1. すぐ話しかけてくる」を選んだ198人のうち1人が語形に無回答なので、197人で50種類を数えたことになる。4.2.1.の場面で客が店員を呼ぶ表現の異なり数が107人で97種類だったのより、回答者あたりの異なり数は小さく、同じ語形へ集中した場合のことが知られる。全体で5人以上の人の回答が集中した語形は次の7種類であった。

Kann ich Ihnen helfen?

〈私ハアナタヲオ助ケデキマスカ〉 80人

Kann ich Ihnen behilflich sein ?

〈私ハアナタノオ役ニタテマスカ〉 34 人

Was darf es sein ?

〈慣用句。何ニイタシマシヨウ〉 6 人

Was wünschen Sie bitte ?

〈何ガオ望ミデシヨウ。bitte あり〉 6 人

Was wünschen Sie ?

〈同上。bitte なし〉 5 人

Sie wünschen, bitte ?

〈ゴ希望デスカ。bitte あり〉 5 人

Sie wünschen ?

〈同上。bitte なし〉 5 人

日本人の回答については、「迎え入れ」にあたる発話として「いらっしゃいませ」「お客様」をまとめ、これに続く「質問」（「初接触」「応答」）と区別した。ドイツ人の場合、文句なく「迎え入れ」と呼べる表現は „Guten Tag.“ である。社会人 5 人（男 3 人，女 2 人），学生 5 人（男 2 人，女 3 人）がこのあいさつ表現を前置きにつけた回答をした。もうひとつ，発話の冒頭に現れた „Bitte“ 〈ハイ／ドウゾ／何か？ などにあたる〉も「迎え入れ」にあたる。社会人 7 人（男 4 人，女 3 人），学生 3 人（男 2 人，女 1 人）がこれをつけて答えた。ただし，bitte に関しては発話の冒頭に現れたからといって必ずしも上の意味で用いられているとは限らず，単に 〈ドウカ〉 という副詞として用いられた可能性も残っている。

この二つを除いた回答語形の，どの範囲を「迎え入れ」にまとめるべきかについてはやや問題が複雑である。たとえば，上掲リストで 80 人が回答した „Kann ich Ihnen helfen?“ は，形の上では疑問形であるから，「質問」（日本人で施した下位分類で言えば「初接触」）に分類することも理由のないことではない。しかしながら，この表現は，話し相手の希望に応えるべく身構えて，「何かお手伝いしましょうか」と申し出る場合，単に店員から客だけでなく，一般の人同士

の間でもしばしば用いられる慣用的な表現であって、内容的には日本語の「いらっしゃいませ」に対応させうる「迎え入れ」と考える方が適当な表現である。日本語については「いらっしゃいませ」という「迎え入れ」と、それに続く「万年筆ですか？」などの「初接触」の「質問」を区別したが、ドイツ語ではこの „Kann ich Ihnen helfen?“ のように「迎え入れ」と「初接触」の意味を両方とも備えた表現が多い。上掲の高頻度の7種類がすべてそうであるのをはじめとして、筆者によれば、50種類中48種類までが「迎え入れ」＋「初接触」の機能をもつ。これらの形式を網羅的に掲げる余裕はないので、のちにいくつかの分類をして示すにとどめるが、次の2点は、筆者が「迎え入れ」＋「初接触」という解釈をした際の判断の条件に考えたところでもあり、また、ここで得られた回答の大多数が備えた特徴でもあるので、指摘しておきたいことがらである。第1は、「初接触」の意味あいをもつといっても、日本語でみられた「万年筆ですか?」「万年筆をお探しですか?」のように「万年筆」にあたる要素が明示的に含まれてはいないものばかりであるという点である。この点は発話の「迎え入れ」としての性格の現れであると考えられる。第2は、これらの表現が、店員が客を迎える際、ないし、一般的に話し相手の意向に沿うべく準備ができていることを申し出る際に用いられる慣用性をもつ表現である、という点である。このうち第2の慣用性という点については、外国語人である筆者にとって、個々の表現すべてにわたって慣用性を検討することは困難であるが、共同研究者のドイツ人・シュルテペルクム氏によれば、慣用性にも程度の差があるものの、一応すべて当該の場面で店員のよく使う表現であるとのことである。

50種類のうち他の2種類は「質問」（日本語について施した下位区分でいえば「応答」）と考えた。次のものである。

Suchen Sie etwas bestimmtes ?

〈何カ特定ノ品ヲ探シテイマスカ〉 …………… 社会人女性 2人

Moment, ich zeige Ihnen den Füllfederhalter.

〈少シオ待チヲ。ソノ万年筆ヲオ見セシマス〉 … 社会人女性 1人

このうち前者は、具体的場面としては客が何もことばを発しない段階で、つまり「迎え入れ」＋「初接触」の意味あいでも、用いられうる形式といえる。

ここでは „etwas bestimmtes“ 〈何カ特定ノ品〉の存在を理由に、「万年筆が欲しいのですが」という不特定の申し出に対する応答と考えた。後者は、定冠詞をつけた形で「万年筆」に言及しているので、「それを見せて欲しい」という品物を特定した申し出に対する応答と解釈すべきだろう。「応答」に該当する回答が、この2例だけだったことに注目したい。

上で「迎え入れ」＋「初接触」と解釈した回答の形式を整理しておく。これに属する48種類の回答は、まず、大別して一人称構文、二人称構文、及びesを主語とする非人称構文に分類できる。すでに掲げたものの以外で主な例を挙げると次のようなものである。

〔一人称構文〕

Kann ich Sie beraten ?

〈私ハアナタニ助言デキマスカ〉

Darf ich Ihnen helfen ?

〈私ハアナタヲオ助ケシテヨロシイカ〉

Wie kann ich Ihnen dienen ?

〈ドノヨウニ（スレバ）私ハアナタニゴ奉仕デキマスカ〉

〔二人称構文〕

Was möchten Sie gerne haben ?

〈アナタハ何ヲオ持チニナリタイデスカ〉

Wünschen Sie etwas ?

〈アナタハナニカゴ希望デスカ〉

〔es・非人称構文〕

Was soll es sein ?

〈何ガアルベキカ。＝慣用表現：何ニイタシマシヨウ〉

これらの回答出現状況を表4-26に示す。全体的には一人称構文が多く、社会人の7割、学生の8割である。いずれも女性が男性より高い比率を示している。これに対して二人称構文は全体では1割5分程度で、社会人・学生とも男性の方が多くこちらを回答した。非人称構文は社会人が学生より多めで、特に壮年層で他より高率である。

表 4-26 「迎え入れ」 + 「初接触」の構文（ドイツ人）

		一 人 称	二 人 称	非 人 称 (es)	そ の 他	計
社 会 人	全 体	70.2	15.3	9.2	5.3	131
	男	62.5	20.4	9.4	7.8	64
	女	77.6	10.4	9.0	3.0	67
	若 中	78.6	12.5	3.6	5.4	56
	壮	74.1	18.5	7.4	—	27
学 生	全 体	58.3	16.7	16.7	8.3	48
	男	80.3	15.2	3.0	1.5	66
	女	70.0	23.3	3.3	3.3	30
		88.9	8.3	2.8	—	36

一人称構文に用いられた助動詞は、kann と darf の 2 種類であるが、前者が圧倒的に多い。kann も darf も丁寧さを添える機能をもつ。

	社会人	学 生
kann	92.3	96.2
darf	6.6	3.8
助動詞なし	1.1	—
計	91 人	53 人

（百分率は、一人称構文回答）
を 100 とする。以下同じ。）

また、一人称構文の主動詞は、

	社会人	学 生
helfen <助ケル>	57.1	67.9
sein <be 動詞>	31.9	28.3
dienen <奉仕スル>	5.5	3.8
zeigen <見セル>	3.3	—
tun <為ル>	1.1	—
beraten <助言スル>	1.1	—
計	91 人	53 人

のように現れており、helfen, sein で約 9 割を占める。助動詞との組合せでは、

Kann ich Ihnen helfen ?

Kann ich Ihnen behilflich sein? (いずれも前出)

の形を基本として、これに „Guten Tag“ や „Bitte“ (文頭), „bitte“ (文中) の付加した回答が多かったことがわかる。

他方、二人称構文で現れた主動詞は、

	社会人	学 生
wünschen <希望スル>	18	7
suchen <試ス>	2	0
haben <持つ=選ブ, 買ウ>	0	2
möchten <望ム>	0	1
計	20 人	10 人

のように, wünschen に集中している。もちろん Sie (あなた) 構文であり, du (おまえ) 構文は現れない。客と店員の間の心的距離を反映したあらたまった表現ばかりである。

(iii) 在日外国人

選択肢 1. を選んだ 238 人のうち, 語形の有効回答があったのは 195 人 (81.9%) にとどまる。“I can't recall how they say.” <店員ガドウ言ウカ思イ出セナイ>など DK 回答を明示的に記入した人が 9 人いたほか, 無答が目立った。有効回答の内訳は以下のようである。

いらっしゃいませ	78.4
いらっしゃいませ。いかがですか	2.6
はい	2.6
いらっしゃいませ。どうぞごらん下さい	1.0
キャン・アイ・ヘルプ・ユー (ローマ字表記)	0.5
お待たせいたしました	0.5
質問表現	6.7
英語による回答	5.1
その他	2.6
計	195 人

このうち質問表現には、

「万年筆ですか?」「お客様ですか?」「何かお探しですか?」「何をお探し
ですか?」「これはいかがですか」

などが現れ、また、英語による回答には、

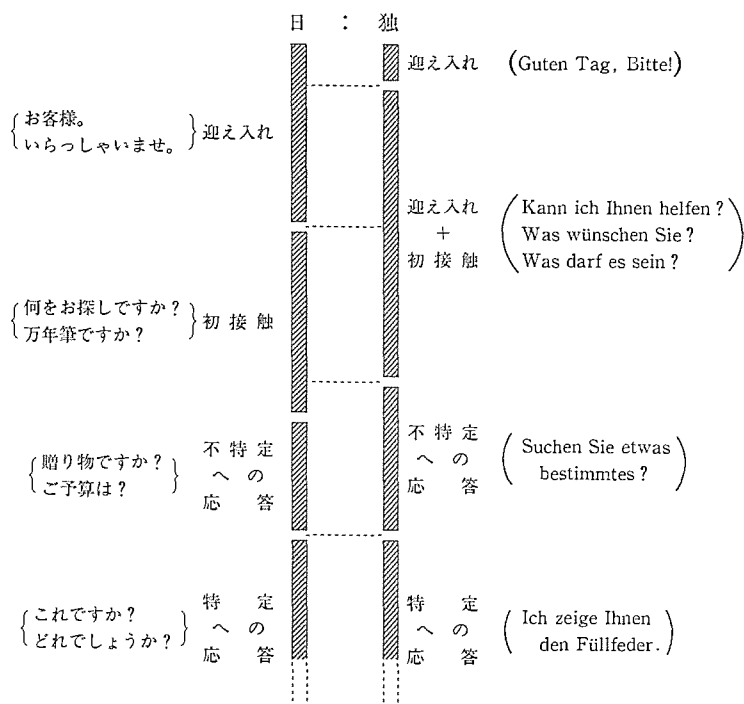
Welcome., May I help you?, Can I help you?,
Can I show you anything?

などが見られた。

注目すべきは、「いらっしゃいませ」という「迎え入れ」の表現が、日本の店
員の発する定型表現としてかなり高い比率で在日外国人に意識されていること
である。

(iv) 日・独を対照して


ここでは、「迎え入れ」「質問」(その下位区分として考えた「初接触」「応答」)
という発話行為について、日・独の対照をしておきたい。日本人、ドイツ人の
回答をみた時に述べたところを概略図示すれば下のようになろう。



図の上から下へ買物が進展していく流れを想定してみると、日・独の間で、特に「迎え入れ」と「初接触」の二つの関係にズレがあると思われる。文字通り「迎え入れ」と呼べるのは日本語の「お客さま」、ドイツ語の „Guten Tag.“, „Bitte!“ であろう。この発話で客を呼びとめ、客に正対するわけだ。「いらっしゃいませ」も同様の機能をもっているので「迎え入れ」と呼ぶべきだが、ドイツ語の „Kann ich Ihnen helfen?“ その他が定型化した表現とはいえ実質的な意味（「オ助ケデキマスカ」という原義の名残り）をなお保つのは異なり、意味的には形態化したきまり文句である。逆に „Kann ich Ihnen helfen?“ は、客から発せられる „Können Sie mir helfen?“ という「もちかけ」表現に呼応した定型表現という性格を重視すれば「迎え入れ」と呼びうるが、前述の実質的な「質問」としての意味あいからは、日本語の「万年筆ですか?」「何をお探しですか?」などが受けもつ「初接触」と呼んだ領域まで覆っていると考えられる。

また、図では日本の「初接触」の方がドイツのそれより下方に長いが、これは買物の目的物「万年筆」が明示的に登場する分だけ日本の「初接触」の方が買物の段階としては先に進んでいると考えられたからである。ドイツの方は「オ助ケデキマスカ」と一般的に問うにとどまる範囲が「初接触」の発話である。ただ、万年筆売場へ来た客に「万年筆ですか?」と問うことに、どこまで実質的な意味を認めるかは問題であって、これも意味的には形態化した定型表現であると考えすることは可能である。そう考えれば、図で日・独の「初接触」の下端はそうすることになる。

ここで述べたところは、ドイツ語を外国語として見る筆者の立場からの限りのものであり、特に „Kann ich Ihnen helfen?“ にどこまで原義の名残りを感ずるかで別の考えもあり得ることは断っておく。ただ、4.2.1.の場面で客から発せられる „Können Sie mir helfen?“ という「もちかけ」表現がドイツで優勢だったこと、本節での „Kann ich Ihnen helfen?“ がその「もちかけ」に対応する表現であること、そして、日本人の意識からしてこの両ドイツ表現形式が日本語の「すみません」「お願いします」とも、「いらっしゃいませ」「何をお探しですか?」ともズレたところに位置するものだという筆者の考えを付け加

えて述べておきたい。とりわけ、筆者の日本人としての意識では „Könnten Sie mir helfen?“ という「もちかけ」は素直に発しにくい表現であり、そこに、日・独の間の発話行為のズレがあるのではないかと考える契機がある。なお、前掲の図の  の長さは、調査結果の回答比率と無関係のものである。

4.2.3. ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは

(1) 行動の選択

前問では、万年筆のショーケースに近づいたときの店員の対応をきいた。その場合、一般的に一番回答が多いだろうと予想される店員の話しかけに、ここでは客がどんな反応を示すかをきいている。

ショーケースに近づいたら店員が話しかけてきました。そんなときはどうしますか。

1. こちらの希望を言ったり、意見を求めたり、積極的に話す
2. 店員に答えはするが、自分で探すのでひとりにしておいてくれるように断る
3. だまってその店員から離れ、自分だけで品物を見てまわる

日、独、在日外国人の全体の比較図は、図 4-27 に示すとおりである。まず「話す」＞「断る」＞「だまって」が共通の傾向であるとは言えるが、各選択肢に目を向けていくと日、独、在日外国人、それぞれ違った様相を見せている。「話す」では、日、独が近い結果を見せ、在日外国人が異なり、「断る」では、独、在日外国人が近い結果を見せ、日が異なり、「だまって」では、日、在日外国人が近い結果を見せ、独が異なる、といったぐあいである。

「話す」は、ドイツ人が日本人より多少多いという違いはあるが、ともに 70 %を超え、店員の話しかけには積極的に対応するという結果を示している。ただ、表面上の数値以上に日、独の共通性や相違を読み込んでいこうとすると検討を要する点はいくつかある。ここでは「デパートで万年筆を買おうとする」というのが前提であった。この前提があるから「積極的に話す」という結果も出やすいわけで、前提が変わった場合、似たような結果が得られるかどうかは

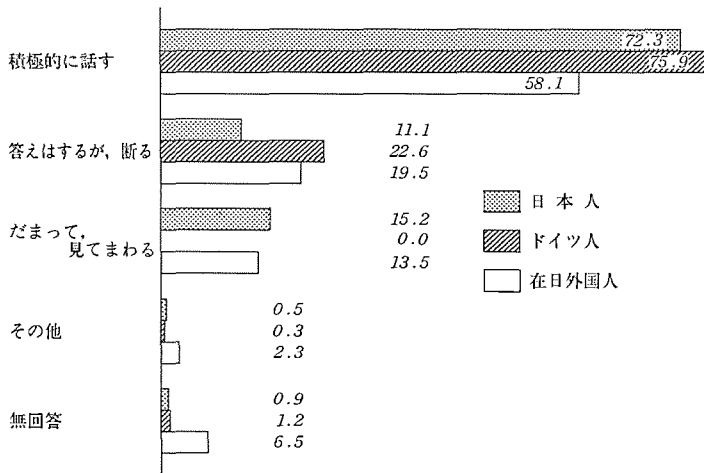


図4-27 ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは

わからない。つまり、「デパートにまんぜんと出かけ、気に入った万年筆があったらその場で買うようなことがあるか」といった場合である。これもさらに「買うあてもなくまんぜんとデパートへ行くようなことがあるか」、あるいは「買物に出るときは、買う物を決めてから出かけるか」といった前提が問題になる。

「積極的に話す」は、在日外国人の場合もけっこう高い数値を示すが、日本人、ドイツ人より10%以上も低い。使用言語の問題が影響を与えているかもしれない。

「断る」も「話す」と同様にドイツ人が一番高い。逆に、日本人は「話す」ではドイツ人に近い高さであるが、「断る」が最も低い。在日外国人も「断る」では、ドイツ人に近い方になる。「断る」対「話す」の割合は、ドイツ人が1:3.4、在日外国人が1:3.0、日本人が1:6.5で、日本人は「断る」のはどうも苦手で、「話す」ことになるといった感じである。

「だまって」は、ドイツ人の場合皆無という結果になった。店員が話しかけてきても応答せず、店員から離れ、こっそり自分だけで見てまわるようなことはない、ということである。裏返せば、「話す」にしろ「断る」にしろ、自分の行動ではっきり示すということになる。それぞれでドイツ人は一番高い数値を

表 4-28 ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは
(日本人)

	話す	断る	黙って	その他	無回答	計
全 体	72.3	11.1	15.2	0.5	0.9	1098
社会人	71.2	11.2	15.9	0.4	1.4	511
学 生	73.3	11.1	14.7	0.5	0.5	587
男	70.9	11.5	16.1	0.4	1.1	733
女	75.1	10.4	13.4	0.5	0.5	365

示していた。「だまって」が一番高いのは、日本人である。日本人は、買うことを決めている以上店員と話すこともするが、話しかけてきた店員から離れ、自分で見てまわることをする割合も高い。そしてすでにふれたとおり「断る」は、日、独、在日外国人の中で一番低い。在日外国人に「だまって」が多いのは、ドイツ人と比べた場合興味深い。やはり使用言語の影響があるのであろうか。

日本人内のデータを見てみる。表 4-28 の社会人对学生の比較では、今までのものと違って大きな相違は見せない。わずかに学生の方が社会人より「積極的に話す」(2.1%のひらき)ようであり、また「だまって」店員を避ける傾向が低い(1.2%のひらき)。表 4-28 の男性对女性の比較でも今までのものと違って違いは少ないが、女性は男性より「話す」ことに積極的であり(4.2%のひらき)、「だまって」店員から離れることは少ない(2.7%のひらき)。「断る」は、わずかに男性がうわまわる(1.1%のひらき)。

ただ、社会人内の男女差を見ると「話す」積極性は男性 69.5%，女性 83.9% といった違いを示している。学生内の男女差はほとんどない。

社会人内の年齢差については、「話す」が若年層>壮年層>中年層、「断る」が壮年層>中年層>若年層、「だまって」が中年層>若年層>壮年層の順である。年齢差はそれほどはっきり出ていない。

ドイツ人のデータで社会人对学生(表 4-29)の差を見ると、学生の方が多少社会人より店員とあれこれ話をし、店員の話しかけを断るようである。男性对女性では、男性の方が女性よりも店員とよく話をし(9.6%のひらき)、店員の話しかけを断らない(9.6%のひらき)。この男女の差は、かなり目立つもので

表 4-29 ケースに近づいたら店員が話しかけてきた。そんなときは
(ドイツ人)

	話 す	断 る	だまって	その他	無回答	計
全 体	75.9	22.6	—	0.3	1.2	323
社会人	75.7	22.0	—	0.5	1.8	218
学 生	76.2	23.8	—	—	—	105
男	80.9	17.1	—	0.7	1.3	152
女	71.3	27.5	—	—	1.2	171

ある。これは日本人の場合、それほどの男女差はなく、また傾向としては逆のものである。ドイツ人の場合、社会人内でも学生内でもこの差は、はっきりしている。「話す」は、社会人内男性 78.5 %、女性 73.0 %、学生内男性 86.7 %、女性 68.3 %であり、「断る」は、社会人内男性 18.7 %、女性 25.2 %、学生内男性 13.3 %、女性 31.7 %である。

いずれにしろ、つまり「話す」にしろ、「断る」にしろ、ドイツ人の場合は店員と一応コミュニケーションする。次の「だまって」は、コミュニケーションを避けるやり方だが、ここでのデータを見る限りドイツ人はこうした行動をとらないわけで、日本人との対照で興味深い。

社会人の年齢差については、特に大きな特徴は見出せなかった。「話す」は壮年層>若年層>中年層、「断る」は中年層>若年層>壮年層の順である。

在日外国人のデータを見てみると、「話す」については社会人对学生、男性対女性で全く同じとっていいほど差を示していない。「断る」では社会人 22.4 %、学生 16.2 %で社会人が高く、また男性 20.7 %、女性 18.2 %で男性の方が高い。「だまって」では社会人 10.7 %、学生 17.3 %で学生の方が高く、また男性 11.8 %、女性 15.5 %で女性の方が高い。

社会人の年齢差の点では、「話す」が壮年層>若年層>中年層、「断る」が若年層>中年層>壮年層、「だまって」が壮年層>中年層>若年層の順である。

(2) 用いられる言語形式

この場面では選択肢「2. 店員に答えはするが、自分で探すのでひとりにし

ておいてくれるように断る」を選んだ人に、「何と言って断りますか」と追加質問した。独； „Mit welchen Worten lehnen Sie ihre Hilfe ab?“ 〈何ト言ッテ女店員ノ助ケヲ断リマスカ〉, 英； “What do you say?” が各国語版の追加質問文である。

前述のように選択肢 2. を選んだ回答者は日本人 122 人, ドイツ人 73 人, 在日外国人 75 人と, 全体の 1～2 割にすぎない。属性別に見ると, たとえば日本人の社会人女性は 4 人だけ, ドイツ人の男子学生は 6 人だけなどと語形有回答数が少なくなる。以下, この場面の言語形式については, 性別・年齢別の集計は原則として示さず, 特に注意すべき特徴の見られる場合に限り触れることとする。

(i) 日本人

選択肢 2. を選んだ 122 人 (社会人 57 人, 学生 65 人) のうち, 語形の回答をした人は 106 人 (社会人 47 人, 学生 59 人) である。社会人の 17.5 % (10 人), 学生の 9.2 % (6 人) が無答だった。特に社会人の無回答率は小さくないものと注意される。

個々の回答に含まれる動作表現を, 主として述部の動詞に注目して分類すると次の 3 種類が目立つ。

	社会人	学 生
「見る」	66.0	44.1
「自分で選ぶ」	12.8	13.6
「考える」	6.4	6.8

(数値は語形有回答者 (上述) を 100 とする%)

「見る」という動作を含むものが多いが, 「見せてもらっていますから」「もう少し見せて下さい」「見るだけですので結構です」など丁寧なものから, 「ちょっと見たいから」「ちょっと見てるだけだから」などぞんざいな形式まで幅広く現れた。客が店員に呼びかける段階 (4.2.1.) ではおおむね丁寧な表現ばかりだったのとは別の状況になる。これは「自分で選ぶ」「考える」についても同様である。この 3 種類以外には「ちょっと」「うん」だけの短い発話のほか, 「ま

だ決めていない」「決めたら呼ぶ」「少し待って欲しい」「あとにして欲しい」などの意味を表す回答が見られた。

ここでの回答の特徴として、発話表現の最後まできちんと言い終わらないタイプの多いことが注目される。「見てただけだから……」「一人で見たいので……」のように「から」「ので」までを言いさしてそこでやめる発話がこれである。具体的な言語形式の記入された回答をこの観点から分けると、

「から」「ので」までの言いさし 37 例

発話の末尾まできちんと言いきる 55 例

のようになり、約4割が言いさしのタイプの回答である。また、具体的な言語形式でなく、発話態度について説明的な回答を寄せた人(10人)の反応にも同様のタイプを見ることができる。次のようなものである。

- 特に断りはしないが、言葉を少なくして消極的な印象を与えるようにする。
- 明確には答えない。
- 消極的に答えて自分で選ぼうとする。

こうしたタイプの回答は、店員から話しかけられて答えるとしても、基本的にはコミュニケーションすることについて消極的な態度をもちながら答える(言いさしもそう解釈できよう)場合が回答に現れたものと考えられる。選択肢の選択で「3. だまってその店員から離れ、自分だけで見てまわる」を選んだ人が15%強いたが、上記のタイプの回答は、消極性という点でこの選択肢の行動と質的に同じ性格をもつものと言っていいだろう。動作・みぶりを意識して、「ニコニコしているだけ」「ハアとあいまいにニヤニヤして、そのあとだまって見続ける」「会釈するだけ」と回答した人も各1人いたが同様である。選択肢2.を選びながら、追加質問には「サッと逃げる」と記入した人(1人)もいた。選択肢3.の行動そのものである。

いまひとつ、断りを言う前置きとして、「ありがとう」「すみません」の表現をした人が各2人と少ないことを指摘しておきたい。

「ありがとう。いま見せてもらっていますから」

「ありがとう。もう少し見せて下さい」

「すみませんが、少し考えて買いたいと思うので一人にして下さい」

「すみませんが、しばらく自分で探しますから」の4例である。店員からのことばを一旦受けとめる表現としての「ありがとう」類が日本人にこのように少なかったのは、特にドイツ人（後述）と対照的なものである。

(ii) ドイツ人

語形有回答者は70人（社会人25人、学生45人）である。選択肢2.を選んだうち、語形無回答者は4人（社会人・学生各2人）で5.4%と日本人のこの比率より小さい。また、回答形式の異なり数は67種類であり、同一の形式への集中度が小さい。3種類に2人ずつの重なりが見られただけである。

ドイツ語の回答形式の第1の特徴は、感謝表現を含む場合が多いという点にある。次の6通りが現れた。

	社会人	学 生
Danke.	44.4	44.0
Vielen Dank.	11.1	8.0
Nein, Danke.	6.7	12.0
Danke schön.	2.2	4.0
Vielen Dank für Ihre Hilfe.	2.2	—
Herzlichen Dank.	2.2	—
感謝表現あり	68.8	68.0
感謝表現なし	31.2	32.0
計	45 人	25 人

社会人・学生とも7割弱が何らかの感謝表現を含んだ回答をしている。この率に性差は見られないが、年齢で若（55.0%・11人）＜中（77.8%・7人）≒壮（81.3%・13人）と、若い層に少ないという傾向が回答数の少ない集計ではあるが指摘できそうである。この感謝表現は、発話の冒頭にも末尾にも現れるが、冒頭の方が多い。

Vielen Dank, ich möchte mich nur umsehen.

〈大変アリガトウ。タダ見テマワッテイタイダケデス〉

Ich möchte mich erst einmal umsehen, danke.

〈初メニ一度見テマワリタイノデス。アリガトウ〉

感謝表現以外の部分で、「見ただけ」「ひとりで選ぶ」など断りの表現をするわけだが、構文的には圧倒的に一人称構文が多く(66 種類)、二人称構文は次の 1 例(1 人)だけである。

Vielen Dank. Bitte lassen Sie mich allein auswählen !

〈大変アリガトウ。ドウゾ独リデ選バセテ下サイ〉

一人称構文で用いられた主動詞は、

umsehen 〈見テマワル、探ス〉 19 例

umschauen 〈見マワス、探ス〉 14 例

finden 〈見ツケル〉 9 例

schauen 〈見ル、吟味スル〉 7 例

のほか、aussuchen 〈選ビ出ス、クマナク探ス〉、wählen 〈選ブ〉、ansehen 〈見ル〉、anschauen 〈ナガメル、熟視スル〉(各々 3 例～1 例)など、「見る」「探す」の意味をもつ動詞が多い。それ以外には、

Ich weiß noch nicht, welchen ich nehme!

〈ドレヲ選ンデイイカ、マダワカリマセン〉(同類 3 例)

Vielen Dank, ich komme alleine zurecht!

〈大変アリガトウ。独リデナントカナリマス〉(同類 3 例)

Danke, bin ich noch am Suchen.

〈アリガトウ。マダ探シテイマス〉(同類 2 例)

などが見られた。

また、一人称構文に助動詞の用いられる場合(全体の 65.7 %, 46 人)のうち、接続法形式によるものが大半を占め、丁寧な発話の多いこともわかる。möchte (全体の 57.1 %, 40 人)、könnte (1.4 %, 1 人)などである。

ドイツ人の回答のもう一つの特徴として、少なくとも記入された文面の限りでは、言いさし・くちごもりと解される例が 1 例しかなかったことである。この 1 例は、

Danke, ich möchte mich nur etwas umschauen oder……

〈アリガトウ、何トナク見テマワルカ何カシタイダケデス……〉

と、自分の行動をややぼかした表現である。他はすべて文末まで回答されていた。もちろん、実際に発話される際の調子はわからないし、また „etwas“ 〈何カ、何ヤラ、何トナク〉というぼかしの機能をもつ語を含んだものは他にも多いから、その点は差し引いて考えるべきだが、文字の上ではきちんとした発話になりうる回答が圧倒的に多いことは注意しておきたい。日本人との対照で話題にする。

(iii) 在日外国人

選択肢2.を選んだ75人のうち、語形回答者は61人である。

多かったのは、

「待って下さい」…………… 13人

「見ているだけです」…………… 12人

「ちょっと見せて下さい」…………… 6人

などであり、このほかには、「ちょっと考えています」(2人)、「けっこうです／いいです」(3人)、「あとで呼びます」(1人)などが現れた。また、英語による回答として

Just a minute! 〈チョット待ッテ〉

I'm just looking. 〈見テルダケデス〉

I want to look first. 〈マズ見タイノデス〉

などが計7例数えられた。

日本語としては、やや場面に不似合いと思われる、「大丈夫」「どうも」「すみません」「こんにちは」が回答されたこと、及び『日本語が理解できない／話せない』旨を言う」という回答が4例あったことは、外国に暮す人達の回答として別に考えるべきだろう。また、言語形式がなく「笑う(微笑する)」というだけの回答(2例)も在日外国人としてはしかたのない行動かもしれない。日本人であれば、選択肢「3. だまってその店員から離れ、自分だけで品物を見てまわる」のタイプの行動に分類したいものである。なお、感謝表現と呼べるものは見られなかった。

(iv) 日・独を対照して

第1に、感謝の意味を表す前置き表現の有無を指摘したい。ドイツでは有効回答の7割近くが „Danke“ などの表現を含んでいたのに対し、日本人では「ありがとう」2例と「すみません」2例が該当するだけであり、きわめて対照的である。このことは、買物の進展の仕方に差異があるというのとらえ方はすべきでなく、店員から（ないし一般的に他人から）の好意ある申し出をことばの上でまずどう受けるかという言語行動様式における差異ととらえるべきだと考える。いうまでもなく、このような場面で日本人が「ありがとう」ないし「どうも」くらいの受けの表現をすることは、現実には十分ありそうなことである。しかし、今回の調査結果からは、そうした言語行動様式を意識的・反省的にとらえている日本人はほとんどいないことがわかる。一方のドイツでは、ここで „Danke“ 等の感謝表現を発するのが、かなり定着した定型となっているといっているといえる。

第2に、文末まではっきり言い終わるタイプの多いドイツ人と、言いさして口ごもるタイプの多い日本人との対照も注目すべきである。選択肢を選ぶ設問の結果からは、ドイツ人には、店員に積極的に話しか、断るかの2タイプしかないこと、日本人にはだまって離れる人が少しはいることが指摘されたが、記入された語形回答からも、ドイツ人は断るならきちんと最後まで言い切る形で断るという行動様式をとるのに対し、日本人には、断るとはいえ口ごもりながらあまり積極的な言語行動に訴えない断り方をする人が半数近くいるという対比が得られるのである。日本人で語形の追加質問に答えるべくして無回答だった人が2割近くいてドイツ人より高率だったことも、あるいは、はっきりとは断らない行動様式の延長線上に現れた結果なのかもしれない。

日・独それぞれの行動様式に規範性があるとするならば、ドイツ人から見て日本人は「折角声をかけているのに、お礼のことばも言わず、何やらはっきりしない態度をとる」と映ろうし、逆に日本人からドイツ人を見れば「いんぎんにお礼は言うけれど、はっきりと断るものだ」という印象に結びつく、そのような差異が日・独の間には見られるのである。このことは、具体的な語形の選択以前の、どんな言語行動の種類を選ぶかというレベルでの差異であり、文字通り、言語行動様式の対照研究の対象とすべき問題なのである。

4.2.4. これはと思う万年筆がみつかったら

あれこれ万年筆を選んで気に入った万年筆がみつかったとき、どう行動するかというのが次の質問である。

これはと思う万年筆がみつかったら、ペン先の太さ、インクの入れ方、など使い方を聞きますか。

1. 得心のいくまで店員に聞く
2. いちおう聞いておく
3. あとで説明書を読めばわかることだから聞かない

この質問については、ドイツ人の質問選択肢に2.の「いちおう聞いておく」がない。そこで日本人、在日外国人の場合は1.2.を合わせて「聞く」に一括し、全体の比較図とする。日本人、在日外国人についてはその内訳を入れた図を別に示す。

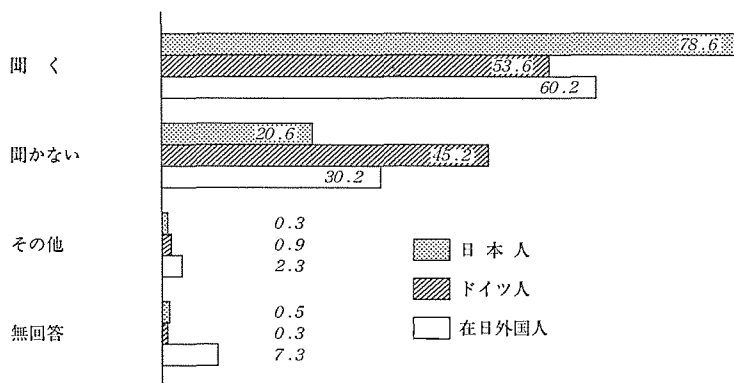


図4-30 これはと思う万年筆がみつかったら、使い方を聞くか(1)

全体の比較は図4-30である。「聞く」、「聞かない」の差についてはドイツ人のひらき(8.4%)が一番少なく、「聞く」か、「聞かない」かの二者択一的行動を示している。在日外国人の二者のひらきは30.0%、日本人は58.0%で「聞

かない」より「聞く」がずっと大きくくなっている。ただし、同じ「聞く」にしてもここで「得心のいくまで」と「いちおう」の区別をしていないことは大きな問題となるところであるが、とにかく、「聞く」は日本人に高く、次いで在日外国人、ドイツ人の順になる。「聞かない」はドイツ人が高く、次いで在日外国人、日本人の順になる。それぞれの違いもかなり大きい。「いちおう聞く」の選択肢がドイツ人の場合あったら、どんな結果を示したか興味のあるところである。

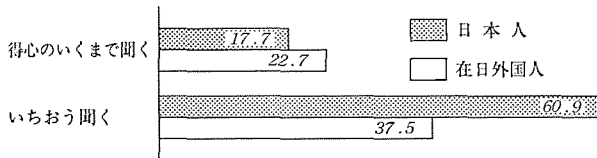


図4-31 これはと思う万年筆がみつかったら、使い方を聞くか(2)

図4-31は、日本人、在日外国人の「聞く」を「得心のいくまで」と「いちおう」に分類して図にしたものである。これを見ると日本人の場合、同じ「聞く」であっても「いちおう聞く」という行動に出ることが圧倒的に高いことがわかる。「いちおう」という姿勢は、「得心のいくまで」の3.4倍にもなるし、「聞かない」の約3倍である。また、「得心のいくまで聞く」は「聞かない」より低い結果になっている。「いちおう」という行動は、日本人の行動を考えるにあたって興味深い視点を提供しているといえよう。

在日外国人の行動が「いちおう」>「聞かない」>「得心のいくまで」という順であることは、日本人の場合と変わらない。ただ、それぞれのひらきは、「いちおう」と「聞かない」が7.3%、「聞かない」と「得心」が7.5%といったぐあいである。また、「いちおう」が一番高いといっても、日本人とくらべるとずっと低いことになる。逆に、「得心」では5%のひらきで在日外国人の方が日本人より高くなる。行動が一方に片寄らないといった感じの結果である。

日本人の結果については、表4-32に示したとおりである。「得心」「いちおう」

表 4-32 これはと思う万年筆がみつかったら、使い方を聞くか（日本人）

	得心のいくまで	いちおう聞く	聞かない	そ の 他	無 回 答	計
全 体	17.7	60.9	20.6	0.3	0.5	1098
社会人	20.0	63.8	15.1	—	1.2	511
学 生	15.7	58.4	25.4	0.5	—	587
男	17.5	59.2	22.4	0.1	0.8	733
女	18.1	64.4	17.0	0.3	—	365

を含め「聞く」は、学生より社会人に高く、男性より女性に高い。したがって「聞かない」は、学生より社会人が低く、男性より女性が低い、というのが一般的傾向である。

社会人の場合、「聞く」については「得心」が4.3％のひらきで、「いちおう」が5.4％のひらきで学生より「聞く」姿勢を示す。したがって「聞かない」は10.3％のひらきで、学生の方が社会人より高くなる。

また、女性の場合、「聞く」については「得心」では男性とほとんど変わらない（0.6％のひらき）が、「いちおう」では5.2％のひらきで男性より「聞く」行動をとる。したがって「聞かない」は5.4％のひらきで、女性の方が男性より低くなる。

男女差を社会人内に見てみると、「得心」が男性19.4％、女性24.2％、「いちおう」が男性62.8％、女性71.0％、「聞かない」が男性16.5％、女性4.8％である。また、学生内の男女差は、「得心」が男性14.4％、女性16.8％、「いちおう」が男性53.5％、女性63.0％、「聞かない」が男性31.7％、女性19.5％であり、男女差は全体の傾向である。

日本人の場合、社会人か学生か、男性か女性かといった要因が、ここでの質問にもかなり関係していることがわかる。

社会人の場合の年齢差については、「得心」が壮年層に一番低く、「いちおう」が壮年層に一番高くなっている。また「聞かない」もわずかながら壮年層が一番低い。

ドイツ人の結果は、表 4-33 に示したが、ここでは参考のために日本人の「得

表4-33 これはと思う万年筆がみつかったら、使い方を聞くか(ドイツ人)

	聞 く	(日本人の場合)	聞 かない	そ の 他	無 回 答	計
全 体	53.6	(78.6)	45.2	0.9	0.3	323
社会人	54.6	(83.8)	44.5	0.5	0.5	218
学 生	51.4	(74.1)	46.7	1.9	—	105
男	48.0	(76.7)	50.0	1.3	0.7	152
女	58.0	(82.5)	40.9	0.6	—	171

心」と「いちおう」を含めた「聞く」を括弧内に入れておいた。社会人对学生では、社会人の方が学生より「聞く」行動を取り(3.2%のひらき)、「聞かない」行動を取らない(2.2%のひらき)が、このひらきは日本人の場合と比べるとずっと少ない。「得心」「いちおう」を含めての日本人の「聞く」では、社会人と学生のひらきは9.7%にもなるし、先にふれた「聞かない」ではひらきが10.3%である。

しかし、男性対女性では「聞く」「聞かない」の違いがかなり大きい。女性は男性より10%高く「聞く」し、男性は女性より9.1%高く「聞かない」ということになる。これは女性の方がコミュニケーションティブであるということだが、このドイツ人男女差は、ドイツ人学生のデータを見ると全くといっていいほど現れていず、したがって、ドイツ人社会人内の男女差ということになる。社会人内の男女差は、「聞く」では男性46.7%、女性62.2%、「聞かない」では男性51.4%、女性37.8%である。先に男女差もほかの要因と同じように日本人の行動選択に影響を与えると述べたが、このように特定ののではない。「得心」「いちおう」を含めての「聞く」についての日本人全体の男女差は、女性が高く、ひらきは5.8%で、すでに述べた「聞かない」は男性が高く、ひらきは5.4%である。

ただし、ドイツ人と日本人の場合では「聞く」の内容が重なりあっていないこと、また「聞かない」については日本人全体をドイツ人全体と比べると半分以下であること、などの要因があり、それを無視して簡単に比べることができないのはいうまでもない。

ドイツ人社会人の年齢差については、ほとんど変化を見せない。

在日外国人については、まず社会人对学生の場合、「得心」「いちおう」を含めた「聞く」と「聞かない」を見てみると、「聞く」は社会人 58.6 %，学生 62.0 %，「聞かない」は社会人 31.8 %，学生 28.5 %である。この数値を見る限り、日、独の社会人对学生とは別の傾向を示している。「聞く」については、「得心」が社会人 25.9 %，学生 19.0 %，「いちおう」が社会人 32.7 %，学生 43.0 %であり、これも日本人とは違った様子を見せている。

在日外国人の男女差については、「聞く」は男性 59.7 %，女性 60.8 %，「聞かない」は男性 31.0 %，女性 29.3 %である。このデータによれば、あまり男女差はないということになる。「聞く」の「得心」「いちおう」を見ると、「得心」が男性 22.2 %，女性 23.2 %，「いちおう」が男性 31.0 %，女性 29.3 %であり、ここにもあまり差はないということになる。

年齢差の点では、「得心」で壮年層が高く、「いちおう」で中年層が高く、「聞かない」で若年層が高いといった結果になっている。

4.2.5. 万年筆を試すことはできるか

今度は、実際に万年筆にさわったり、試し書きなどしたりできるかという質問である。

万年筆を手にとって、手ざわり、書きあじを試すことはできますか。

1. だいたいどの店でも試させてくれる
2. ほとんど試させてくれない店が多い

図 4-34 が日、独、在日外国人の全体の比較である。「試させてくれる」という回答が「試させてくれない」に比べ、日、独、在日外国人に共通して圧倒的に高い。「試させてくれる」では日>独>在日外国人の順になり、在日外国人が、日、独に比べるとかなり低い、この調査項目では在日外国人の無回答が 20 %を超えているので、それが影響していることも考えられる。「試させてくれない」では日<在日外国人<独の順であり、極端に違った結果とはなっていない。

日、独の「試せる」のひらき 4.7 %は、「試せない」のひらき 4.8 %に対応し

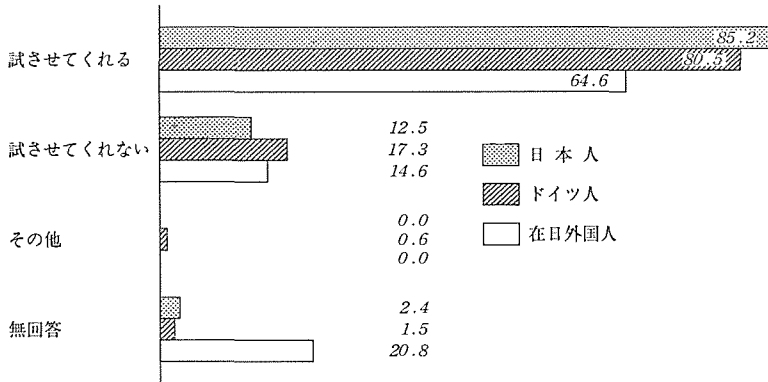


図 4-34 万年筆を試すことはできるか

ている。日本の方がドイツより試し書きのできる店が多いというわけだが、これは当然「試せる」店の方が圧倒的に多いということを前提にした話である。「試せる」「試せない」を比率で示してみると、日本人の場合 6.8 : 1、ドイツ人の場合 4.7 : 1、在日外国人の場合 4.4 : 1 というふうになる。ただ、在日外国人については、上でふれたように無回答の比重が大きいのでそれを無視するわけにはいかないだろう。

日本人内のデータに目を向けてみると、表 4-35 のような社会人と学生の違いがある。「試せる」と思う社会人は学生より 3.3 % 高く、「試せない」と思う学生は社会人より 5.8 % も高い。日本人における社会人对学生の相違は、ここに

表 4-35 万年筆を試すことはできるか (日本人)

	試 せ る	試 せ ない	そ の 他	無 回 答	計
全 体	85.2	12.5	—	2.4	1098
社会人	86.9	9.4	—	3.7	511
学 生	83.6	15.2	—	1.2	587
男	85.7	11.3	—	3.0	733
女	84.1	14.8	—	1.1	365

も出ている。男女差では、「試せる」で差が少なく、1.6%のひらきしかないが、「試せない」では3.5%のひらきで女性が高くなっている。やはり性差による相違がここにもあると考えた方がよさそうである。

社会人内の年齢差を見てみると、壮年層に「試せる」が高く、「試せない」が低いという結果になっている。

表4-36 万年筆を試すことはできるか（ドイツ人）

	試 せ る	試 せ ない	そ の 他	無 回 答	計
全 体	80.5	17.3	0.6	1.5	323
社会人 学 生	81.7	16.5	—	1.8	218
	78.1	19.0	1.9	1.0	105
男	79.6	17.8	1.3	1.3	152
女	81.3	17.0	—	1.8	171

ドイツ人の場合は表4-36である。「試せる」では社会人の方が学生より3.6%高く、「試せない」では学生の方が社会人より2.5%高い。日本人の場合と同様の傾向ではあるが、その差異は、特に「試せない」の項目で日本人の社会人对学生より少ない。男女の比較では社会人对学生の差に比べるとあまり差は目立たない。「試せる」では1.7%のひらきで女性の方が男性より高く、「試せない」では0.8%のひらきで男性の方が女性より高い。ほとんど男女差はないと考えられるが、上の傾向は日本人の場合と逆のものである。

社会人の年齢差については、特に特徴的なことはなさそうである。

在日外国人の場合はどうであろうか。やはり社会人对学生では「試せる」が社会人60.5%、学生69.3%、「試せない」が社会人13.7%、学生15.6%で社会人の方が学生より「試せる」と考えているようである。男性対女性では「試せる」が男性63.5%、女性65.7%、「試せない」が男性16.7%、女性12.2%で女性の方が男性より「試せる」と考えている。この傾向は日本人の場合とは逆で、ドイツ人の場合と同じであるが、男女差はドイツ人よりもはっきりしている。社会人の年齢差については、特に特徴的なことはない。

ここで「試せない」場合には、次のように質問を追加している。

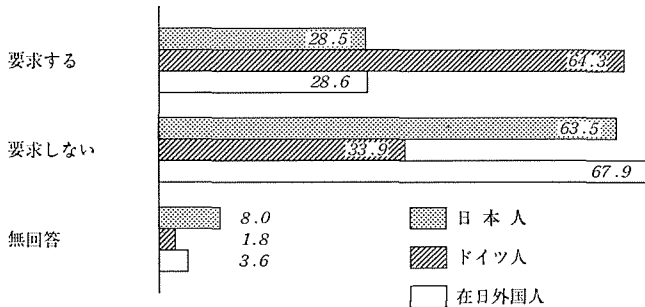
ほとんど試させてくれない店が多い。

→その場合、試させてくれと要求しますか。

1. 必要なことから要求する

2. 必要でもないし、商品に手を触れない方がよいので要求しない

この質問結果の日、独、在日外国人の比較図は図4-37に示したとおりである。



(総数：日本人 137 人、ドイツ人 56 人、在日外国人 56 人)

図4-37 試させてくれと要求するか

まず、日、独を比べてみると「要求する」「要求しない」で逆のような結果になっている。「要求しない」日本人は「要求する」日本人の2倍以上であるのに対し、ドイツ人の場合は「要求する」方が「要求しない」の2倍近くなのである。前提として万年筆の手ざわりや書き調子を試せる率は日本の方が高いとあったが、しかし「試せない」場合は、あっさりあきらめるといった傾向を日本人は示しているといっていだろう。逆にドイツ人の場合は、必要なことであれば、「要求する」という行動をとる可能性の方が高い。

次に在日外国人に目を向けてみると、日本人の場合に似た行動をとる傾向を示していることがわかる。ここには、そうした行動をとらざるをえない具体的な場面の問題と、使用言語の問題との二つが関係していると予想される。在日外国人に関しては、別のくわしい調査が望まれるところである。

日本人のデータを見てみると、「試せない」とした137人のうち社会人対学生では社会人48人、学生89人である。社会人で「要求する」は14人(29.2%)、

「要求しない」は28人(58.3%), 学生で「要求する」は25人(28.1%), 「要求しない」は59人(66.3%)であり、このデータを見る限り「要求しない」という消極的な行動の点で学生の方が社会人より8.0%も高くなっている。

男性対女性では、男性83人、女性54人となっている。男性83人のうち「要求する」は21人(25.3%), 「要求しない」は54人(65.1%), 女性54人のうち「要求する」は18人(33.3%), 「要求しない」は33人(61.1%)となる。かなりの差で女性の方が男性よりも積極的な行動に出るという結果になっているが、データ量が少ないことを無視して結論的なことをいうわけにいかないところである。

ドイツ人のデータでは「試せない」が全部で56人であるから、それ以上の分析はあまり意味がないかもしれないが、一応目を通してみると、社会人対学生では社会人36人、学生20人の内訳になる。社会人36人のうち「要求する」が22人(61.1%), 「要求しない」が13人(36.1%)である。学生20人のうち「要求する」が14人(70%), 「要求しない」が6人(30%)である。このデータをもとにする限り、「要求する」行動は学生の方が社会人より高く、日本人の場合とは別の傾向を示している。

男性対女性の内訳は、男性27人、女性29人である。男性27人のうち「要求する」は18人(66.7%), 「要求しない」は8人(29.6%)で、女性29人のうち「要求する」は18人(62.1%), 「要求しない」は11人(38.0%)である。男性の方が「要求する」行動に出る可能性が高いわけだが、これは日本人の男女差とは逆の傾向ということになる。

在日外国人のデータでも「試せない」全体で56人と数が少ないから、それ以上考察を加えても仕方がないかもしれないが、ざっと見てみると、社会人対学生では、それぞれ28人ずつになり、「要求する」「要求しない」もそれぞれ8人(28.6%), 19人(67.9%)と同数であり、このデータをもとにすれば、社会人と学生の差異はないということになる。

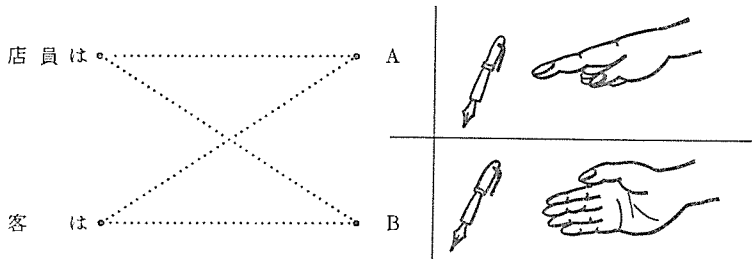
男性対女性については、男性34人、女性22人である。男性34人のうち「要求する」は9人(26.5%), 「要求しない」は23人(67.6%)であり、女性22人のうち「要求する」は7人(31.8%), 「要求しない」は15人(68.2%)で

ある。「要求する」という行動の可能性は女性の方が男性より高いという結果になっている。

4.2.6. 万年筆の指し示し方

ずっと客や店員の言語行動を追ってきた。ここでは質問の観点を変えて、客や店員が実際に万年筆をどんなふうに指し示すか、聞いている。

万年筆を手や指で指し示すとき、客と店員はそれぞれどんな手振りで示すことが多いですか。人とその手振りを点線で結んで下さい。



日、独、在日外国人の全体の比較図は図4-38である。「店員B、客A」という回答が圧倒的に多いが、その中でも日本人の場合はドイツ人、在日外国人よりずっと高い数値になっている。万年筆の指し示し方は「店員B、客A」という型であるとする日本人は90%近くであるから、その他の型はいわば例外的にありうる程度と解釈してもよさそうである。ドイツ人の70%近く、在日外国人の65%を超えるという回答も、日本人より低いとはいえ、やはり極めて高いものである。ここではドイツ人、在日外国人の無回答が多く、ドイツ人の場合12%以上、在日外国人の場合15%近くになっているが、このことを考慮に入れば、つまり、無回答をはずすと「店員B、客A」の割合はさらに高くなる。

「店員B、客A」型を別にすると、全体的に高いのは「店員A、客A」の型でドイツ人の場合9%を超える高さを示している。日本人、在日外国人の場合ドイツ人より低く、約その半分ではあるが、この型もあり得ることを示して

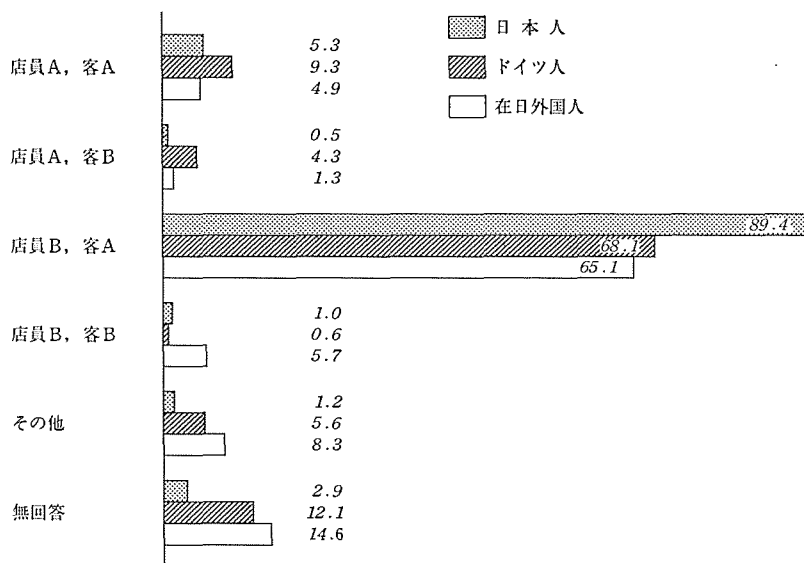


図4-38 万年筆をどう指すか

いる。「店員A, 客B」もドイツ人に高く、在日外国人、日本人に低い。日本人の場合、1%を下回るという結果になっている。「店員B, 客B」は在日外国人に高い。日本人にはこれを回答としたものが多少いるが、ドイツ人の場合はほとんど回答者なしになっている。以上は、繰り返すと「店員B, 客A」型が圧倒的に多いという前提に立っての話である。

日本人、ドイツ人、在日外国人別に多少の検討を加えてみる。

日本人の場合、「店員B, 客A」＞「店員A, 客A」＞「店員B, 客B」＞「店員A, 客B」の順である。「店員B, 客A」型についていえば、社会人対学生では社会人86.7%, 学生91.8%, 男性対女性では男性86.9%, 女性94.5%という結果になっている。型どおりであるとする傾向は学生の方が社会人より高く、女性の方が男性より高いということである。

「店員A, 客A」型については全体が55人でしかないが, 社会人<学生であり, 男性>女性である。「店員B, 客B」型は全体で11人とさらに少なく, あまり何かをいえない。「店員A, 客B」型は, 全部で5人しかいないから, むしろ無視した方がよいであろう。

以上, 日本人の場合はすでに述べたとおり「店員B, 客A」型が圧倒的で, 「店員A, 客A」もあり得る程度というふうに考えてよいようである。ただ「店員B, 客A」型とする傾向には社会人对学生差, 男女差も反映しているようである。社会人の年齢差から見ると, 「店員B, 客A」型は若年層 93.8% > 中年層 84.0% > 壮年層 79.8% という結果を示している。

ドイツ人の場合は, 「店員B, 客A」>「店員A, 客A」>「店員A, 客B」>「店員B, 客B」の順である。「店員B, 客A」型を見ると社会人对学生では社会人 62.4%, 学生 80.0%, 男性対女性では男性 67.8%, 女性 68.4% で, 学生の方が社会人より, 女性の方が男性よりこの型であるとする傾向が強い。この傾向は日本人の場合と同じであるが, ドイツ人の場合の方が男女差はずっと少ない。「店員A, 客A」型は全体で30人, 「店員A, 客B」型は14人, 「店員B, 客B」型は2人なのでこれ以上の分析は加えない。社会人の年齢差による違いは, 特に見られない。

在日外国人の場合は, 「店員B, 客A」>「店員B, 客B」>「店員A, 客A」>「店員B, 客A」の順となる。「店員B, 客A」型を見ると社会人对学生では社会人 61.5%, 学生 69.3%, 男性対女性では男性 60.6%, 女性 70.2% であり, この違いは傾向としては日本人と同じものである。「店員B, 客B」型は全体で22人, 「店員A, 客A」型は19人, 「店員B, 客A」型は5人であるからそれ以上の分析はできない。

総じて, 日本人, ドイツ人, 在日外国人を問わず, デパートなどで物を示す際の示し方が客, 店員を問わず一応型として決まっていると考えてよからう。この問題自体をさらに調査することにも興味はあるし, また, ほかの諸外国ではそれがどうなっているか, 調査することも興味のあるところである。

4.2.7. 買う万年筆が決まったとき、店員にどう話すか

品定めを終え、これと決めた万年筆を買いたい旨を店員に申し出る段階の、客の言語行動である。この場面については、行動の種類を選択肢としては掲げず、そこで発する言語表現の形式だけを次のように質問した。

買う万年筆が決まったとき、店員にふつうどう言いますか。そのときのこ
とばを記入して下さい。

(i) 日本人

日本人の場合、前置きとでも呼ぶべき「すみません」「じゃあ」「では」などの形式で始まる回答が、特に学生を中心にみられた。表4-39に、前置き部分についての集計を示す。表中、「すみません」には、「すみません」と一度言い切った次に続くものと「すみませんが」と接続助詞を介して次に続くものとをまとめてある。また「じゃあ／では」と「すみません」の併用の項には、「じゃあ、すみません」「ではすみません」という順のものと「すみませんが、じゃあ」という順のものをまとめてある。社会人では4%前後ずつ、学生では10%強ずつが、「すみません」「じゃあ／では」を前置きにした回答を記入した。社会人、

表4-39 購入希望申し出の前置き（日本人）

		すみ ま せ ん	じ ゃ あ ／ で は	す じ ゃ あ ま あ ／ せ ／ ん で は 併 用	あ の	前 置 き な し	計
社 会 人	全 体	4.7	3.5	0.4	—	91.4	511
	男 女	3.8	2.7	0.4	—	93.1	449
		11.3	9.7	—	—	79.0	62
	若 中 壮	10.3	5.1	0.5	—	84.1	195
		1.6	2.7	—	—	95.7	187
		0.8	2.3	0.8	—	96.2	129
学 生	全 体	12.9	11.9	0.3	2.0	72.9	587
	男 女	10.6	11.6	—	2.1	75.7	284
		15.2	12.2	0.7	2.0	69.9	303

学生とも、また両形式とも、女性の方が少しずつ高い比率で前置きのある回答をしている。この種の前置きが、買物の進展の中でどのような機能をもつものなのかは、記入された文面からだけでは十分検討することが困難ではある。ただ、「じゃあ」「では」という前置きについては、購入希望を申し出るこの段階以前の、客と店員との会話ないし客自身の品定め過程をうけて、それをまとめて次の希望表現・要求表現につないでいく機能をもつ発話だといっていだろう。つまり、この「じゃあ」「では」を含んだ回答は、回答としては、買物の進展をより意識的にふまえた回答とうけとれる。一方、「すみません」は、これに続く希望・要求に直接結びつく前置きなのか、それとも別の仕事をしていたり離れた所にいる店員に呼びかけるためのものなのか、などいくつかの解釈のありうる表現であって、調査票の回答文面からだけでは明確なことは言い難い。

希望・要求の表現を分類すると表4-40のようになる。表は、回答のうち動詞に注目した集計である。目的語部分が「これ」「この万年筆」などの形式で品物を特定する表現になっていることはいうまでもないので省略する。

最も頻度の高かったものは「下さい」である。属性別に見ても概ね5割強がこの形式を用いている。次いで1割～1割5分の比率を占めたのが「する／決めた」である。具体的には「これにします」「これに決めました」の類の回答

表4-40 購入申し出の希望・要求表現（動詞）（日本人）

		下 さ い	す る ／ 決 め た	も ら う ／ い た だ く	お 願 い し ま す	ち や う だ い	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	全 体	53.8	12.7	6.8	4.9	0.2	4.1	17.4	511
	男 女	54.1	12.0	6.5	4.0	0.2	4.7	18.5	449
		51.6	17.7	9.7	11.3	—	—	9.7	62
	若 中 壮	53.3	12.3	6.2	6.7	—	5.1	16.4	195
		59.4	9.1	9.1	3.2	0.5	3.2	15.5	187
		46.5	18.6	4.7	4.7	—	3.9	21.7	129
学 生	全 体	52.5	14.7	5.1	9.9	0.5	3.7	13.6	587
	男 女	53.9	13.0	3.9	8.5	0.7	3.5	16.5	284
		51.2	16.2	6.3	11.2	0.3	4.0	10.9	303

である。この2種類に「もらう／いただく」「これもらうわ」「これをいただきます」等)と「お願いします」がそれぞれ5%前後加わる。いずれも、性差・年齢差は見られない。

これらを表現形式の上で分類し、一人称の希望を表すもの(「もらう」「いただく」「する」「決めた」の類)と、二人称への要求表現(「下さい」「お願いします」「ちょうだい」の類)とに区分すると、

	社会人	学 生
希望表現	19.5	19.8
要求表現	58.9	62.9

のような分布になり、約2割が希望表現、約6割が要求表現の形式をとっていることがわかる。

なお、「ちょうだい」「もらうわ」「これにするよ」など、丁寧形式の伴わないぞんざいな回答はきわめて少なかった。

以下に、前置き部分と希望・要求表現部分を合わせた回答形式のうち、社会人が学生かで10人以上の集中が見られたものを列挙しておく。

前置き	希望・要求	社会人		学 生	
		全体(男	女)	全体(男	女)
ナ シ	(これを)下さい	49.1(49.7	45.2)	36.6(39.8	33.7)
ナ シ	(これに)する/決めた	11.2(11.1	11.3)	9.7(8.8	10.6)
すみませんが	(これを)下さい	3.3(2.9	6.5)	8.8(7.0	10.2)
ナ シ	(これを)お願いします	4.1(3.8	6.5)	6.8(5.6	7.9)
ナ シ	(これを)もらう/いただく	6.5(6.5	6.5)	2.4(1.1	3.6)
(それ)じゃあ/では	(これを)下さい	1.2(1.3	—)	5.3(4.9	5.6)
(それ)じゃあ/では	(これに)する/決めた	1.4(0.9	4.8)	3.6(3.5	3.6)
(それ)じゃあ/では	(これを)もらう/いただく	0.4(—	3.2)	1.7(1.8	1.7)
回答者数		511(449	62)	587(284	303)

(ii) ドイツ人

全回答者 323 人中 9 人が無回答で、314 人が 169 種類の異なる表現形式を回答した。5 人以上の回答が集中した表現を列挙すると次のようなものである。

Den nehme ich.

〈ソレヲ私ハ取ル（選ブ）：倒置文〉 ……24 人（男 14 人 女 10 人）

Ich nehme diesen hier.

〈私ハココノコレヲ取ル（選ブ）〉 ……23 人（男 7 人 女 16 人）

Ich nehme diesen.

〈私ハコレヲ取ル（選ブ）〉 ……22 人（男 13 人 女 9 人）

Ich hätte gerne diesen Füllfederhalter.

〈私ハココノ万年筆ガ欲シイノデス〉 ……10 人（男 4 人 女 6 人）

Ich nehme den hier.

〈私ハココノソレヲ取ル（選ブ）〉 ……9 人（男 4 人 女 5 人）

Diesen nehme ich.

〈コレヲ私ハ取ル（選ブ）：倒置文〉 ……7 人（男 3 人 女 4 人）

Diesen, bitte!

〈コレヲ, ドウゾ〉 ……5 人（男 3 人 女 2 人）

日本語の「じゃあ／では」に該当すると考えられる表現としては、前にも述べたように多義的な *bitte* を除くと、*dann*〈ソレデハ〉, *so*〈(同)〉, *Ja, gut!*〈ハイ, 結構〉, *gut*〈結構〉, *O.K.*〈オーケー〉などが挙げられる。しかしながらこうした表現を含む回答は全体で 12 人（有回答者の 3.8 %）しかしておらず非常に少ない。また、*„Ich glaube, ……“* および *„Ich denke, ……“* とともに、「私ハ……ト思ウ」という複文構造の回答を全体で 15 人（4.8 %）が寄せているが、この表現は、字義どおりの意味としてでなく、具体的な発話として発せられたとき（たとえば *„Ich glaube, “* と言ったあとややポーズを置いて発話された場合など）は、次に続く希望表現（たとえば *„den nehme ich “* 〈ソレヲ私ハ取ル（選ブ）〉など）を言い始めるための前置き表現として、希望や要求を和らげるような機能をもつと考えられる。このような種類の前置き表現もあるにはあるが、出現度数は少ない。

希望・要求の表現は、圧倒的に *Ich* を主語とする一人称構文が多い。169 種類の表現のうち 134 種までがそうである。この構文での回答者は 270 人（86.0 %）で、男性 122 人（83.0 %）、女性 148 人（88.6 %）という内訳である。用いら

れた(助)動詞は möchte 79 人 (25.2%), hätte gern 41 人 (13.1%) が目立ち、助動詞なしが約半数 (147 人, 46.8%) を占める。基本的な構文のものをいくつか列挙すると以下のとおりである。

möchte

Ich möchte diesen Füllfederhalter nehmen.

〈私ハコノ万年筆ヲ取り(選ビ)タイデス〉

Ich möchte gerne diesen Füllfederhalter kaufen.

〈私ハコノ万年筆ヲ買イタイデス〉

Ich möchte ihn haben.

〈私ハソレヲ得(買イ)タイデス〉など。

hätte gerne

Ich hätte gerne diesen Füllfederhalter.

〈私ハコノ万年筆ガ欲シイデス〉

Ich hätte gerne diesen.

〈私ハコレガ欲シイデス〉など。

助動詞なし

Ich nehme diesen Füllfederhalter.

〈私ハコノ万年筆ヲ取り(選ビ)マス〉

Ich glaube, den nehme ich.

〈私ハソレヲ取ロ(選ボ)ウト思ウ〉

Den nehme ich!

〈ソレヲ私ハ選ブ: 倒置文〉など。

これらのほか,

Ich werde diesen hier nehmen.

〈私ハココノコレヲ取ル(選ブ)デアロウ〉

Ich würde diesen hier nehmen.

〈私ハココノコレヲ取ル(選ブ)デショウ〉

Kann ich den haben?

〈私ハソレヲ得ラレ(買エ)ルカ?〉

などが4例(würde)から1例(kann)現れた。

また、直接的に希望を表す以上の一人称構文表現のほかに、

Ich habe mich für diesen Füllfederhalter entschieden.

〈私ハコノ万年筆ニ決メタ〉

Ich habe mich für den entschlossen.

〈私ハソレニ決心シタ〉

という、品物を決めたことだけを告げる意味の回答も8人(2.5%)見られた。

これに対して、狭い意味で要求を表すと考えられるSieを主語とする二人称構文(命令文)は10人(3.2%)と非常に少なかった。次のような表現である。

Geben Sie mir bitte diesen Füllfederhalter!

〈ドウゾ私ニコノ万年筆ヲ下サイ〉

Packen Sie mir bitte diesen hier ein!

〈ドウゾ、私ニ、ココノコレヲ包ンデ下サイ〉など。

このうち5人は、たとえば、

Ich werde diesen hier nehmen. Würden Sie ihn mir bitte einpacken?

〈私ハココノコレヲ取ル(選ブ)デアロウ。ソレヲ私ニ包ンデ下サイ〉

のように、前記の一人称構文による希望表現に続けて二人称構文の要求表現を答えており、二人称構文だけで回答した人は残りの5人だけである。

もうひとつの表現類型として、三人称(事物)主語の構文による回答が8人(2.5%)からあった。

Wieviel kostet dieser Füllfederhalter ?

〈コノ万年筆ハイクラスルカ?〉

Dieser hier ist sehr gut.

〈ココノコレハ非常ニ良イ〉

Er entspricht meinen Wünschen.

〈ソレハ私ノ希望ニ一致シテイル〉

など、値段や品質について話題にしたものである。ただし、この三人称構文も8例中7例が一人称構文の表現と併記されたものであり、前述の二人称構文と同様、回答全体の中では劣勢のものである。

以上、大別して3種類の表現が、一人称構文表現に集中しつつ回答されたわけであるが、これらの分布に、社会人・学生による片寄りや性・年齢による差は見られなかった。

なお、3種類の表現を通じて、主語を形式上欠いた不完備文は28人(8.9%)の回答に現れたにとどまる。次のようなものである。

Bitte, diesen Füllfederhalter! <ドウゾ, コノ万年筆ヲ>

Bitte, den hier! <ドウゾ, ココノコレヲ>

Diesen. <コレヲ>

また、これ以外の完備文のうち、通常の語順(主語+助動詞+目的語+動詞など)以外の、倒置文は95人(30.3%)の回答に見られた。

Diesen Füllfederhalter möchte ich nehmen.

<コノ万年筆ヲ取り(選ビ)タイデス>

Den möchte ich kaufen.

<ソレヲ私ハ買イタイデス>

Den hätte ich gerne.

<ソレヲ私ハ欲シイデス>

など、目的語を文頭に位置させたものである。さらに、購入を決めた「万年筆」をどういう形で言及するかについて集計してみると次のような分布になった。

指示詞・定冠詞のついた Füllfederhalter (全形)	16.9
指示詞・定冠詞のついた Federhalter, Halter (略形)	5.4
定冠詞だけ (den, das など)	24.8
指示代名詞だけ (diesen など)	52.2
該当部分なし	0.7

計 314 人

定冠詞ないし指示代名詞だけで言及したものがあわせて8割弱いるが、文成分の簡略化(完全な省略ではない)という構文上のこの特徴は、一人称構文による回答の約半数を占めた助動詞なしの表現とともに、この場面での客の発話が、これ以前に比べてややぞんざいなものに傾いていることを表しているのか

もしれない。陳列棚に近づいたのち、店員に声をかけたり応えたりして買物を進める中で、店員との心的距離がちまるとすれば、冒頭は丁寧だったものがぞんざいな方向へ移ることは十分考えられる。ただ、文脈上、品定めで話題にしてきた「万年筆」をこの段階でも明示的に言及することは冗長であり、「これ」「それ」だけで用は足りることを考えれば、上述の指摘の根拠はやや薄らぐ。それでも、丁寧さを添える助動詞が総体的に減少しているという事実は残り、上述の不完備文の存在も同じ性格のことからと考えられる。倒置文が、主題の明示・強調という機能以外に、丁寧さに関する機能をもつものかどうかは、筆者には不明である。以上、いくつかの事実を示し、あるいは発話の丁寧さがこの場面に至って減じていると考える可能性のあることを、ひとつの仮説として指摘しておく。

この場面について、在日外国人に対しては、客がどう申し出るかでなく、店員がどう受けるかを尋ねている。「かしこまりました」など別の発話行為に関する表現が回答されているので、ここでは取りあげない。

(iii) 日・独を対照して

第1に注目すべき点は、希望表現と要求表現の現れが日・独でかなり異なる点である。話し手(客)が自らを主格扱いにし、「私はこれをもらう」「この万年筆に決めた」という意味を表す表現(少なくとも表層的な表現形式として)を回答した割合は、日本では約2割、ドイツでは8割強という対比が得られていた。これと背中合わせで、「これを下さい」「これをお願いします」など話し相手への要求表現(ドイツ語では形式上、命令表現)は、日本で約6割、ドイツで4%弱という対比も得られた。日・独相互の間には、直訳すればほぼ等価な内容を表し得る表現が、希望表現・要求表現の双方に備わっている。

「この万年筆を下さい」 ↔ „Geben Sie mir den Füllfederhalter.“

「これに決めた」 ↔ „Ich habe mich für diesen entschieden.“

それにも拘らず、両表現の回答での現れ方に上記のような片寄りが見られるのである。今示した四つの発話は、目的としては(Speech act 論の用語を借りれば illocutionary act<発話内行為>、ないしその結果する相手の反応まで含めれば perlocutionary act<発話媒介行為>としては)店員に当該の万年筆を包

装し代金を受け取ることを求める点で共通する。この目的を果たすべく発する発話の形式の選択が、日・独間で上記のような差異を見せるのである。筆者のごく限られた経験からしても、日本語人としての筆者は „Geben Sie mir…… “ „Packen Sie bitte…… “ 式のドイツ語表現の方が口をついて発しやすい。逆に、周囲の二、三のドイツ人の日本語では、「私はこれにします」「これがいいです」などのここでの希望表現の方が耳に残る。いずれも、今回の調査結果をもとに考えれば、それぞれの母語で優勢な表現類型を、相手の言語を使用する際にも、いわば“直訳的に” 運用したものである。ともに相手の言語社会では（繰り返すが、今回の調査結果の範囲では）少数派の表現を選んでいることになる。そして、少なくとも日本語において、このような場面で「これに決めました」式の希望表現で自らの状況・考え・判断だけしか言わない言語行動は、ここで対比されている要求表現を発する言語行動よりは、つっけんどんな、従ってぞんざいな言語行動と受けとられる程度の高いものであると筆者は考える。その意味で、一人称表現（希望表現）と二人称表現（要求表現）の出現率の前述のようなちがいは注意すべきであると思われる。ドイツ語内における両表現の差異は現在の筆者には不明確である。

第2は、ドイツ語で、希望表現の約4割が丁寧さを添えるべき助動詞をもたないこと、不完備文が少数ながら見られたこと、「万年筆」という文成分の簡略化が目立つことなどを理由に指摘した、表現のぞんざいさの点である。日本語では、「これを下さい」「これをお願いします」などの程度の丁寧さがこの場面でも保たれ、それは買物の初期の段階からおおむね一定しているといっていよい。ドイツ語でこの段階に至って丁寧さが減じるということが、前記で留保した点を考慮に入れても指摘できるとすれば、日・独の間で差異が見られることになる。買物の進展に伴って起る、客と店員との心的距離の変化が、日本では小さいのに対し、ドイツでは近くなるという方向である程度把握できるということである。この点はひとつの仮説として指摘しておきたい。

前置きと呼んだ部分が、日本人、特に学生で目立つのに対して、ドイツではそれほど多く現れなかったという点は、買物場面の進展や連続性を意識して回答したかどうかによる差異が現れたと解釈するにとどめたい。言い方をかえれ

ば、どの程度まで具体的な場面に即して回答がされたかの差異（前置き表現のある回答の方がより現実感があるといえよう）である。

4.2.8. 買った品物を受けとるとき、客は？

この場面でも、行動の種類を選択肢として掲げることはせず、用いる言語形式を問うた。さらに、その言語行動に随伴するみぶりもあわせてたずねた。質問文は以下のとおり。

買った品物を店員から渡してもらったとき、もしあなたが何か店員に言う
とすれば何と言いますか？ そのときのことばを記入して下さい。

・そのとき、あなたは何かみぶりをつけますか？

1. とくにみぶりはない

2. みぶりをつける → どんなみぶりですか。なるべく具体的に記入して
下さい

(1) 用いられる言語形式

(i) 日本人

ここでは感謝表現が現れる。回答を整理すると次ページの表4-41のようになる。表のうち、「ありがとう」「すみません」「お世話さま」とした項目には、これらに「～でございます」「～でした」「～です」などの助動詞のついた回答もそれぞれにまとめてある。「多要素」としたのは、表の項目が三つ以上併記された回答である。

最も多かったのが「どうも」である。これは社会人よりも学生で、また女性より男性で頻度が高い。次いで多いのが「ありがとう」で、こちらは社会人の方で「どうも」より多く優勢である。二つの結合した「どうもありがとう」は社会人・学生それぞれの全体では1割～1割5分だが性差が顕著で、女性の2～3割を占め、特に社会人女性では他の形式をしのいで最も多かった。男性では1割未満である。この3種類で回答者の7割強～8割強の多数をおおっている。

表4-41 品物をうけとる客の感謝表現（日本人）

		ど う も	あ り が と う	ど う も あ り が と う	す み ま せ ん	ど う も す み ま せ ん	お 世 話 さ ま	ど う も お 世 話 さ ま	多 要 素	そ の 他	無 回 答	計
社 会 人	全 体	30.1	33.3	11.0	2.0	2.0	2.0	2.3	0.4	3.7	13.3	511
	男	32.1	33.9	8.2	2.2	1.1	2.0	2.0	0.4	3.6	14.5	449
	女	16.1	29.0	30.6	—	8.1	1.6	4.8	—	4.8	4.8	62
	若	32.8	33.8	14.9	3.1	2.6	1.5	1.5	—	2.1	7.7	195
	中	32.1	34.8	8.0	1.1	2.1	1.6	3.7	—	2.7	13.9	187
	壮	23.3	30.2	9.3	1.6	0.8	3.1	1.6	1.6	7.8	20.9	129
学 生	全 体	45.5	22.8	15.3	2.0	1.7	0.3	0.2	0.3	3.4	8.3	587
	男	50.0	20.1	9.9	1.1	1.1	0.4	—	—	5.3	12.3	284
	女	41.3	25.4	20.5	3.0	2.3	0.3	0.3	0.7	1.7	4.6	303

「すみません」と「お世話さま」は、それぞれ単独の場合と「どうも」のついた場合とがあるが、その和でみても5％に足りない出現率である。それでも、社会人女性では、「どうもすみません」（8.1％）、「どうもお世話さま」（4.8％）と、社会人男性や学生に比べて「どうも」のついた形式が多いのが目立つ。

「どうも」という形式は、単独の場合と他形式についた場合を合算すれば、

社 会 人						学 生		
全体（男 女）〔若 中 壮〕						全体（男 女）		
45.4 (43.4 59.6) [51.8 45.9 35.0]						62.7 (61.0 64.4)		

という比率になる。最も少ない社会人男性でも43％、最も多い学生女性では64％と、概略半数が用いているわけである。年齢層別では壮<中<若というように、若いほど多く用いる傾向が指摘できる。ただし、前に見たとおり、男性は「どうも」だけを単独で用いる人が多いのに対し、女性には他の語形につけ加えて用いる人が多いというちがいがあことに注意すべきだろう。

(ii) ドイツ人

日本人の場合は感謝表現だけが回答されていたのに対し、ドイツ人では、感謝表現に加えて別の内容を表す表現の回答された場合があった。別の表現とし

て最も多いのは, „Auf Wiedersehen!“ 〈マタ会ウマデ=サヨウナラ〉のようないさつ形式である。その内容は後述するが, 感謝表現だけの場合と他の表現の加わった場合を大別すると表4-42のようになる。80%強が感謝表現だけ, 1割強が感謝表現と他表現の併記された回答であった。

表4-42 品物をうけとる客の表現 (ドイツ人)

	感謝表現だけ	他表現もあり	他表現だけ	計
全 体	84.2	15.2	0.6	303
男	87.8	10.8	1.4	139
女	81.1	18.9	—	164
若	83.0	16.5	0.5	182
中	85.4	14.6	—	41
壮	86.3	12.5	1.3	80

(社会人・学生をまとめた)

他表現における異なりも含めて, 有回答者303人(無答20人)が, 44種類の表現を回答した。万年筆買いの語形質問の中でも最も異なり数の小さい場面となった。

まず感謝表現から見る。頻度順にすべてを列挙すると次のようになる。

	全体 (男 女) [若 中 壮]
Danke.	57.4 (56.9 58.5) [54.1 68.3 60.8]
Vielen Dank.	17.5 (16.1 18.9) [19.3 19.5 12.7]
Danke schön.	14.5 (10.9 17.7) [19.3 7.3 7.6]
Danke sehr.	3.3 (5.1 1.8) [3.3 — 5.1]

【以下は実人数で示す】

Ich danke Ihnen. 等	5 (4 1) [1 1 3]
Vielen Dank für.....	5 (3 2) [2 0 3]
Recht vielen Dank.	2 (1 1) [1 0 1]
Schönen Dank.	2 (2 0) [1 0 1]
Danke für.....	2 (2 0) [0 0 2]
Danke auch.	1 (0 1) [1 0 0]
Besten Dank.	1 (1 0) [0 0 1]

Herzlichen Dank für... 1 (1 0) [0 1 0]

Haben Sie vielen Dank. 1 (1 0) [1 0 0]

感謝表現有回答者 301人 (137 164) [181 41 79]

全体で10人以上の回答があった上位4種は百分率で示し,他は実人数で示した。最も多かったのは,形式上最も簡略な „Danke.“ であった(6割弱)。名詞形 „Dank “ に vielen <多クノ>, recht vielen <実ニ多クノ>, schönen <良キ>, besten<最高ノ>などの形容詞を付加した表現がこれに次ぎ,動詞 „Danke “ に副詞 schön<良ク>, sehr<大層>, auch<マタ>が結合したものとほぼ並ぶ(ともに2割弱)。“Ich “ をきちんとつけた表現(5人, 1.7%)や „für…… “ で感謝対象を明言する表現(8人, 2.6%)は少数派であった。“für…… “ で導かれる内容は,

für Ihre Hilfe

<アナタノ援助ニ>

für Ihre freundliche Beratung und Bedienung

<アナタノ親切ナ助言ト奉仕ニ>

für die Bemühungen

<尽力ニ>

などである。以上からわかるように,懇切な感謝表現は少なく,簡略なものほど多いといってよい。それぞれの表現形式のもつ定型性の程度を知ることはここでは難しいが,必ずしも定型性の高いものが多く,低いものが少ないという比例関係にはないと考える。たとえば „Danke schön.“ と „Danke.“ の間に,定型性の程度において回答出現率ほどの差(57.4:14.5)があるとは思えないからである。前場面で購入決定の申し出をする際に考えられた,丁寧さの減少をここでも見るべきかもしれない。

感謝表現以外の表現として目立つのは,前述のように „Auf Wiedersehen.“ <マタ会ウマデ=サヨウナラ>というあいさつ表現である。これを含む回答は,

全体 (男 女) [若 中 壮]

41(13.5) 12(8.6) 29(17.7) 28(15.4) 5(12.2) 8(10.0)

のように現れており、全体では1割強で、そのうち女性の方が多く、若い人にいくらか多い傾向がある。うち1例は „Auf Wiedersehen.“ だけで感謝表現のない回答だった。

あいさつ表現以外の表現としては、

Danke, hoffentlich hält er lange.

〈アリガトウ、望ムラクハ万年筆が永持チスルトイイ〉

Danke, wie lange ist die Garantiezeit ?

〈アリガトウ、保証期間ハドレクライ?〉

Danke, packen Sie bitte in eine Tüte.

〈アリガトウ、紙袋ニ入レテ下サイ〉

等の、買った品物についての付加的な質問や要求などが合わせて2%弱(6人)回答されたにとどまる。このうち最初のもののような発話内容は、日本人にとっては耳慣れないものである。

(iii) 在日外国人

語形有回答人数は267人(69.5%)であった。回答された形式を日本人の場合と同様に分類すると表4-43のようになる。

表4-43 品物をうけとる客の感謝表現 (在日外国人)

あ り が と う	ど う も	あ り が と う ど う も	す み ま せ ん	す み ま せ ん ど う も	日 本 語 そ の 他	英 語 回 答	計
33.0	28.8	28.5	1.1	2.2	2.2	4.1	267

「ありがとう」(「～ございます」「～ございました」を含む)が最も多く約3分の1、これに次いで「どうも」「どうもありがとう」が3割弱ずつ現れた。日本人に比べて「どうもありがとう」の比率が高い点が注目されるが、この3種類で有回答者の9割近くを占める点は日本人と同様である。

「どうも」の使用率は、単独の場合と他形式との併用の場合を合わせて59.5

％になる。日本人の場合は52.4％(表4-41の無回答を除いて再計算した数値)であるから、在日外国人の方がやや多めといえる。

「ありがとう」の内訳は、「ありがとう」19.9％、「ありがとうございました」7.9％、「ありがとうございます」5.2％であり、これらに「どうも」の付加された回答はそれぞれ、16.1％、6.7％、5.6％のようになっていた。

なお、表中の「日本語その他」には「ハイ」「いいです」「かしこまりました」「どういたしまして」などが含まれており、「英語回答」(11人)の内訳は、

Thank you.	8人	Thank you very much.	1人
Thanks.	1人	You are welcome.	1人

であった。「かしこまりました」や“You are welcome.”などは、店員から客へのことばと考えられ、ここでは誤解による回答と思われる。

(iv) 日・独を対照して

ドイツでの回答は、万年筆買いの各小場面の中で異なり形式数が最も少ない44種類であった。特に、感謝表現だけに注目した場合、„Danke.“という形式に6割近い集中が見られたことをはじめとして、限られた種類の表現形式が繰り返し回答に現れていることが注目できる。このことは、「どうも」「ありがとう」「どうもありがとう」の3種類に全体の7割強、有回答者の86％が集中した日本人の回答状況についてもあてはまる。つまり客が店員にこの場面で何かを言うとするれば、限られた種類の、換言すれば定型性の高い形式を用いた感謝表現を少なくとも発話する、という点において日・独は共通性をもつことが指摘できる。この点を第1に指摘したい。

第2の点は、第1点で「何かを言うとするれば」という条件を付したことに關る。表4-41、表4-42から日・独の回答者のうち「無回答」を抽出すると(ドイツは全回答者から表4-42の数を引き)次のようになる。

	全体	(男	女)
日本人	10.7	(13.6	4.7)
ドイツ人	6.2	(8.6	4.1)

この数値を全面的に「この場面では何も言わない」人の割合と見なすことはもちろん無理であるが、それでも質問文から考えればある程度まで「無言」と

いう回答と積極的に読むことは可能であろう。その立場に仮に立つならば、上記の数値の日・独の差、およびそれぞれにおける性差は注目してよい。つまり、客として買った品物を店員から受けとる際に何も言わない人が、ドイツ人より日本人に、女性より男性に（日・独とも）それぞれ多いという解釈が可能性をもつのである。

第3の点は、第1点で「感謝表現を少なくとも発話する」と述べたことに関する。定型性の高い感謝表現を口にするのが日・独共通の言語行動様式であることは第1の指摘のとおりであるが、このこととならんで、日本人は概括すれば感謝表現しからない人が大半であるのに対し、ドイツ人にはそれ以外の表現、特に „Auf Wiedersehen.“ という字義上は再来を約す意味のあいさつ表現を付け加える人が無視できない程度（1割強）いるという対比は注意しなければならないだろう。回答形式の異なり数44のうち13と、約3分の1に現れる „Auf Wiedersehen.“ には、その点で定型性を認めてよいと思われる。筆者の経験でも、買物をすませて „Danke schön.“ と言ってもそれだけではなおその場面が完結していないという印象を受けたことが少なくない。おそらくは次の場面（4.2.9.）で見る店員の側の言語行動との関りの中で受けた印象であろうが、そのようなとき、場面を完結させる発話形式として „Auf Wiedersehen.“ の役割は大きいように思われる。日本においては、通い慣れた店でなければ「じゃまた」という意味のことは言いにくい。ドイツ語において、ここで現れる „Auf Wiedersehen.“ が原義をどこまで保つのかは知るべくもないが、あいさつ表現としてのこの発話形式の有無という日・独の対比をここでは指摘しておきたい。

（2）みぶり

品物を受けとる際の客のみぶりである。質問文（p.259 参照）のとおり、選択肢は掲げず、みぶりの有無とその種類をたずねた。

まず、みぶりの有無についての回答のうち「特にみぶりはつけない」と答えた人の比率を、日・独・在日外国人をまとめて表4-44に示す。ドイツ人、在日外国人については回答者全体だけの集計にとどめ、また三者とも年齢層別集計

表 4-44 客のみぶり「なし」の比率

			みぶりなし	回 答 総 数			みぶりなし	回 答 総 数
日 本 人	社 会 人	全 体	79.8	511	ド イ ツ 人	全 体	73.1	323
		男	81.1	449		男	73.7	152
		女	71.0	62		女	72.5	171
	学 生	全 体	68.5	587	在 日 外 国 人	全 体	30.7	384
		男	69.7	284		男	37.9	203
		女	67.3	303		女	22.7	181

は省略する。

日本人では、社会人の8割、学生の7割がみぶりなしと答えた。社会人男性がやや多めである。ドイツ人では全体、男女とも7割強で、ほぼ日本人と似ている。これに対して、在日外国人は全体で3割しかいず、特に女性では2割強まで減少しており注目される。日本人、ドイツ人はそれぞれの母国でのことを回答しているのに対し、在日外国人は外国人として日本で暮す際のことを回答しているわけで、性格の異なる数値であることをあらためて注意しておく。言語形式についての項目では、この点を考慮に入れて、在日外国人の回答はその概略を記すにとどめたが、みぶりについては少し詳しく日・独との対比もしながら見ていきたい。言語形式と異なって、少なくとも表面に現れる形としてはとらえやすく、“真似”やすいみぶりが、外国人にどう運用され、どう映っているか興味深いからである。以下、日・独・在日外国人の順に回答の概要を示し、そのうち三者を対照する。

(i) 日本人

自由記入によってだったので回答は多岐にわたる表現で寄せられたが、ここではドイツ人、在日外国人との対照も考慮して大きく3種類に区分した。『うなずき』と呼ぶものには「頭を軽く前に倒す」「首を前に曲げる」「うなずく」「アゴを引く」など、頭部だけが動くみぶりをまとめた。『おじぎ』には、「深々とおじぎする」「軽くおじぎする」「礼をする」「会釈する」「上体を前に倒す」「腰から曲げる」など、頭部だけでなく上体が何らかの程度動くみぶりをまとめた。うち

「会釈する」は『うなずき』か『おじぎ』か迷うところがあるが、上体の軽い前傾も添えられることが多いと考え『おじぎ』にした。第3の『ほほえみ』には「笑う」「ニコニコする」「ほほえむ」など文字どおりの笑いのほか、「にこやかな表情」など表情全体についての回答も含めた。

表4-45 客のみぶり(日本人)

		うなずき	おじぎ	ほほえみ	その他	有答者数
社会人	全体	61.8	32.4	—	5.9	68
	男	63.5	28.8	—	7.7	52
	女	56.3	43.8	—	—	16
学生	全体	58.4	35.1	3.9	2.6	154
	男	60.3	31.7	1.6	6.3	63
	女	57.1	37.4	5.5	—	91

表4-45は、みぶりをつけると答えた人でかつみぶりを記入した回答者数をもとにしてこの3種類のみぶり群の比率を示したものである。

社会人、学生とも約6割が「うなずき」、3割強が「おじぎ」で、この2群で大部分の回答者をおおう。「ほほえみ」は学生に少し現れただけである。男女の間で、「おじぎ」が女性に多めの傾向が見られるが、有回答人数も少ないので安定した性差かどうかはわからない。「その他」で目立つのは「手を少しあげる」「手を少し振る」「相撲力士の手刀(てがたな)のような手の動き」など手によるみぶりである。

(ii) ドイツ人

表4-46 客のみぶり(ドイツ人)

	うなずき	おじぎ	ほほえみ	うなずき +ほほえみ	その他	有答者数
全体	51.3	2.6	23.1	19.2	3.8	78
男	54.3	5.7	22.9	14.3	2.8	35
女	48.8	—	23.3	23.3	4.6	43

有回答人数が78人(24.1%)と少ない(表4-46参照)。その約半数が「うなずき」の類であった。„Kopf nicken“ „mit dem Kopf nicken“ „nicken“ <Kopf: 頭, nicken: うなづく>などの回答である。これと「ほほえみ」を併記した人が約2割いて、「うなずき」を含む回答は7割にのぼる。男性には「うなずき」だけ、女性には「ほほえみ」を加える人がそれぞれ多めである。「ほほえみ」だけは2割強、これと今あげた「うなずき」+「ほほえみ」を合わせると、4割前後が「ほほえみ」を含んだ回答をしていることになる。「おじぎ」(verbeugen)は全体の2.6%と少なく、女性には皆無である。

(iii) 在日外国人

有回答者数は193人(男88人,女105人)で全体の55.4%である。日・独に比べて二つ以上のみぶりを併記した回答が多かった。表4-47に、日・独と同じ分類の3種類についてそれぞれを含んだ回答者の比率を示す。したがって数値の計は100%を超える。

表4-47 客のみぶり(在日外国人)

	含うなずき	含おじぎ	含ほほえみ	その他	有答者数
全体	50.3	43.5	20.2	2.1	193
男	43.2	50.0	11.4	4.5	88
女	56.2	38.1	27.6	—	105

「うなずき」(nod)には, slight nod <軽イウナズキ>, bow of the head <頭曲ゲ>などを含むみぶりをまとめた。「おじぎ」(bow)には, bow from the waist up <腰カラ上ヲ曲ゲル>, bow of the upper body <上体ヲ曲ゲル>, bow slightly from the hips <オシリカラ軽ク曲ゲル>などをまとめた。単にbowと記した場合、頭部だけの曲げの可能性もあるが、一律に「おじぎ」の類と扱った。

「うなずき」と「おじぎ」をそれぞれ含んだ回答が半数前後でほぼ並立している。このうち「うなずき」は女性に、「おじぎ」は男性に多いという性差が見られる。「ほほえみ」は全体で2割だが、女性で多い。

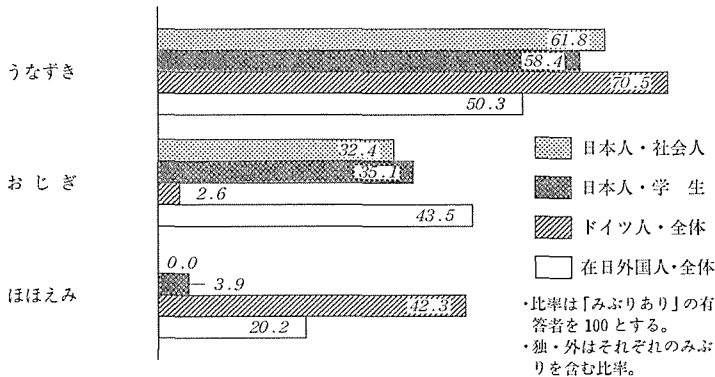


図4-48 客のみぶり（日・独・在日外国人の比較）

(iv) 日・独・在日外国人を対照して

図4-48に、三者を対照した図を示す。三者とも「うなずき」が一番多いみぶりである。特にドイツ人にこれが多いのが目立つ。ドイツ人の「うなずき」(Kopfnicken)は、別の章で扱った場面でも頻度の高いみぶりであるが、日本人の目で見ると、日本人の「うなずき」とやや異なるみぶりである場合があるようだ。日本人にとっては、頭部が正立状態からまず前方に曲げられるのが「うなずき」の典型だと思われるが、ドイツ人の場合はこれと異なり、頭部が正立状態からまず後方へ少し傾き、そして前方へ戻る動きをすることがしばしば見られる。この観察は今回の研究分担者の間でも、2年間滞独した高田をはじめ、ほぼ一致している。日本語でいえば「うなずき」というより「あごしゃくり」に近いともいえるみぶりである。もちろん、日本語の「あごしゃくり」がもつ尊大・ごうまんといったニュアンスはないと考えるべき動作である。ドイツ人の全ての場合がそうである訳ではなく、前傾から始まる日本風の「うなずき」もよく見られるが、上記のような観察のあったことを注記しておきたい。

「おじぎ」は日本人と在日外国人で3～4割あるのに対し、ドイツ人にはほとんど見られない。在日外国人に4割を超す「おじぎ」が現れたのは興味深い。日本という外国での行動を答えたことで、日本人以上に「おじぎ」を意識

した結果が得られたのかもしれない。前述のように、“bow”だけの回答を一律にこれにまとめたことも、bow of the head（「うなずき」扱いにした）のつもりの回答を含めることになり、「おじぎ」を増加させる結果になった可能性も残るので注意しておきたい。

「ほほえみ」は、日本人にはほとんど意識されていないものであるのに対し、在日外国人で2割、ドイツ人では4割をしめる。

日本人にとって「おじぎ」は「うなずき」よりあらたまったみぶり、「ほほえみ」は親しみのこもった表情だといえるだろう。ドイツ人の回答にも「ほほえみ」に „freundlich “〈友好的ナ、親シミアル〉という形容をつけたものが見られた。日・独共通して多い「うなずき」以外に、日本人はあらたまった「おじぎ」を、ドイツ人は親しさを込めた「ほほえみ」を、それぞれ比率で第2位の回答として寄せていることになる。言語形式についても、ドイツ人には丁寧度のやや減じる傾向を指摘しようという考えを述べたが、ここでのみぶりの対比もそれと結びつけて考えることができようか。在日外国人は「おじぎ」を日本人程度に選ぶ一方、「ほほえみ」もドイツ人ほどではないが忘れない。両者の中間的な状況である。やはり、外国での行動を答えたという特殊性を考慮に入れて読むべきだろう。

4.2.9. 品物を手渡すとき、店員は？

前項の客の言語行動に対する、店員側の言語行動をたずねる質問である。デパートでの万年筆買い場面の、最後の小場面として、言語形式とみぶりをたずねた。質問文は以下のとおり。

店員は、品物を、何と言って渡しますか。そのときのことばを記入して下さい。

・そのとき店員は何かみぶりをつけますか？

1. とくにみぶりはない

2. みぶりをつける → どんなみぶりですか。なるべく具体的に記入して

下さい

客の立場からみた店員の言語行動をたずねている点に注意したい。

(1) 用いられる言語形式

(i) 日本人

回答を整理すると、大きく三つの種類の発話表現が現れていることがわかる。

④「お待たせしました」類、⑤「ありがとうございました」類、⑥「またご来店下さい」類の3種類である。

店員が品物を客に手渡す場面をより細かく段階に分けるとすれば、

④'包んだ品物を運んできて客の前に来る段階

⑤'品物を手渡す段階

⑥'手渡し終わった直後の段階

のように区分できると思われるが、回答に現れた3種類の表現はおおむね、a, b, cの記号どおりこの3段階に直接該当する発話表現であるといえよう。

表4-49に④～⑥の表現の回答出現率を示す。最も多いのが⑤の感謝表現で、社会人・学生とも9割近くがこれを含んだ回答を記した。社会人で、男性や高年齢層に多めの傾向がある。④の「お待たせしました」類は全体で1割強、⑥の「またご来店下さい」類は数パーセントという少数だが、ともに男性より女性でこれらの表現まで含めた回答者

表4-49 品物を渡す店員の表現内容（日本人）

		④ 「お待たせ しました」 類あり	⑤ 「ありがとう」 類あり	⑥ 「またご来店 下さい」 類あり	回 答 者 数
社 会 人	全体	10.8	89.5	4.3	511
	男	9.6	90.0	4.0	449
	女	19.4	85.5	6.5	62
	若	14.4	85.2	4.6	195
	中 壮	6.9 10.9	91.4 93.1	3.7 4.7	187 129
学 生	全体	13.9	85.6	7.2	587
	男 女	10.6 16.8	84.1 86.8	3.9 10.2	284 303

(注) 複数を含む回答者がいるので計は100%を越す。

が多かった。以上の回答状況は、回答者が④'～⑥'の段階のどれに焦点をあてて答えたか、つまりは設問の意図をどこに重点をおいて汲みとったかによると考えるべきであって、現実の買物場面で、これらの表現が上記のような比率その

ままで現れるとは解釈すべきでないだろう。この点に注意して、②～④の各表現を少し詳しくみていこう。

②の「お待たせしました」類は、大別すると「お待たせしました」系と「お待ち遠さまでした」系とに分かれる。前者には「お待たせいたしました」「お待たせ申上げました」など、後者には「お待ち遠さまでございました」等を含めた。これらの表現の半数近くは②の感謝表現と併記されている一方、④の「またご来店下さい」類の表現とは全体で5人が併記したにとどまった。

表4-50 品物を渡す店員の発話―「お待たせしました」と感謝表現―（日本人）

		② 「お待たせしました」系		「お待ち遠さまでした」系	
		⑤ 感謝表現なし	感謝表現あり	感謝表現なし	感謝表現あり
社会人	全体	4.5	5.7	0.6	—
	男	3.6	5.3	0.7	—
	女	11.3	8.1	—	—
学生	全体	7.5	5.3	0.9	0.2
	男	6.0	3.5	1.1	—
	女	8.9	6.9	0.7	0.3

表4-50のように、「お待たせしました」系が社会人1割強、学生1割2分に現れ、それぞれ男性より女性に多めである。「お待ち遠さまでした」系はごく少なかった。

⑤の感謝表現の回答状況を表4-51に示す。ここでは、この感謝表現を①「ありがとう」系、②「どうもありがとう」系、③「毎度ありがとう」系の3系にわけた。それぞれ「～ございます」「～ございました」および文末丁寧表現なしをまとめたものである。また、表には②「お待たせしました」類、④「またご来店下さい」類との併記状況も示した。

感謝表現を記さなかった比率は社会人で1割、学生で1割5分程度にとどまり、大部分は前記の3系の形式のうちのいずれかの感謝表現を含む回答を寄せた。最も多い形式は①「ありがとう」系で、社会人の5割強、学生の5割弱がこれである。いずれでも男性の方にこの形が多い。次いで2割～3割弱が②「どうもありがとう」系を選んだが、これはどちらかといえば女性の方に多い。③

表 4-51 店員の感謝表現（日本人）

		① 「ありがとう」 だけ	② 「どうも ありがとう」 だけ	③ 「毎度 ありがとう」 だけ	④ 「お待たせ しました」類 との併記	⑤ 「またご来 店下さい」 との併記	感謝表現 なし (含無回答)	計
社 会 人	全体	52.3	20.7	6.5	5.7	4.3	10.6	511
	男	54.1	20.3	6.2	5.3	4.0	10.0	449
	女	38.7	24.2	8.1	8.1	6.5	14.5	62
	若	46.2	24.6	3.6	6.2	4.6	14.9	195
	中	58.2	20.3	7.0	2.1	3.7	8.6	187
	壮	52.7	15.5	10.1	10.1	4.7	7.1	129
学 生	全体	46.0	26.1	1.9	5.5	6.8*	14.5	587
	男	51.1	23.2	3.2	3.5	3.5*	15.9	284
	女	41.2	28.7	0.7	7.2	9.9*	13.3	303

(*: 学生4名 (男1, 女3) の④, ⑤, ⑤3表現併記者を含む)

「毎度ありがとう」系は社会人に比較的多く選ばれた。値は小さいが若く中く壮という年齢差も傾向として見られるようである。④「お待たせしました」類との併記が5%程度（やや女性が多め）、⑤「またご来店下さい」類との併記もほぼ同じ割合である。

⑤の「またご来店下さい」類、つまり客の再来をうながす表現には「またどうぞ」「どうぞまたおこし下さい」などもまとめたが、この類の回答は、前掲表4-49のように、全体で数パーセントの人が記入しただけであった。そのうちでは、女子学生に多め（10.2%）なのが目立つ。

(ii) ドイツ人

回答記入者は304人(94.1%)、回答の異なり数はちょうど100種類であった。回答は表現内容から分類すると次の5種類に分けられる。

②品物を持ってきて手渡す際のことば

Bitte schön!

〈サアドウゾ〉

Hier ist Ihr Füllfederhalter.

〈アナタノ万年筆ハココデス〉

など。以下「Bitte 類」と呼ぶ。

①感謝表現

„Danke.“ „Danke schön.“ „Vielen Dank.“ „Ich danke Ihnen.“

〈既出〉

など。「感謝表現」ないし「Danke 類」と呼ぶ。

②再来をうながす表現

Beehren Sie bitte uns bald wieder!

〈ジキニ再ビ私ドモニゴ光臨ノ榮ヲ賜リマスヨウ〉

Auf Wiedersehen!

〈再ビ会ウノヲ＝サヨウナラ〉

など。「Wieder 類」(〈再ビ〉類)と仮に呼ぶ。

③勘定を求める表現

Zahlen Sie bitte dort an der Kasse!

〈アソコノレジデオ会計ヲドウゾ〉

Macht 45 DM.!

〈45 マルクデス〉

など。「勘定要求表現」と呼ぶ。

④その他

Sie haben einen guten Kauf gemacht.

〈アナタハ結構ナ買物ヲナサイマシタ〉

Hoffentlich haben Sie viel Freude damit.

〈大イニゴ満足ノイキマスヨウニ〉

Darf es sonst noch was sein?

〈何カ外ニナオアルベキカ? = 何カ別ノゴ用ハ?〉

など。「その他の表現」と呼ぶ。

以上の5種類の表現は、2～3種類が併記されて回答に現れた場合が多い。
それぞれの表現が現れたのべ出現頻度を表4-52に示す。

最も頻度の高かった② Bitte 類は、典型的な形式として、

Bitte!	19.5	(男 17.8 女 23.7)
Bitte schön!	19.2	(男 18.4 女 22.4)
Bitte sehr!	13.0	(男 10.5 女 17.1)
Hier, bitte!	4.3	(男 2.0 女 7.2)

(数値は全て、当該形式だけを記入した回答者の比率)

などを有する表現群で、日本語で全体に共通する意味を考えれば「サア、ドウゾ」という意味のものである。この類の表現だけからなる回答は全体の 68.4 % (男 65.5 %, 女 70.9 %) で、単一の表現類としては最高の頻度で現れた。

表 4-52 品物を渡す店員の表現内容 (ドイツ人)

	㉑ Bitte 類 あり	㉒ Danke 類 あり	㉓ Wieder 類 あり	㉔ 表現 あり 勸定 要求	㉕ 表現 あり その他	計
全 体	84.5	18.1	7.6	5.9	5.3	304
男	81.3	18.0	8.6	8.6	5.0	139
女	87.3	18.2	6.7	3.6	5.5	165
若	85.5	17.9	5.6	5.6	3.9	179
中	88.4	20.9	9.3	7.0	7.0	43
壮	80.5	17.1	11.0	6.1	7.3	82

本節でみてきた買物場面の各小場面には、いくつか „bitte“ という形式の現れるものがあった。前場面までは、この „bitte“ が、それだけで依頼や要求を表すものか、単なる呼びかけ語なのか、副詞的な (〈ドウカ〉に当る) 用いられ方をしたものか、などについて回答の文面からだけでは不明確な場合が多く、したがって „bitte“ について積極的な言及は避けてきた。しかしながら、ここで扱う店員の品物渡し場面での „bitte“ は、次のような理由で〈サアドウゾ〉などに該当する手渡しの際の発話形式と考えてよいと思われる。第 1 に、回答の冒頭に „Bitte schön!“ 等の如く独立した文の形を備えて記されたものが多いこと、第 2 に „Bitte schön! Danke schön!“ のように文字通りの感謝表現と併記された場合 (23 例, 7.6 %) がいくらかあり、 „Bitte“ 類が感謝表現以外

の意味を表していると考えられること、である。もちろん、これらのことからだけでは、意味的に〈サアドウゾ〉だけを表すものか、日本語に類推して〈オ待タセシマシタ〉という軽い謝りの意味など別の意味も添えられたものかは、なお不明確であるが、そのいずれであっても、少なくとも手渡す段階そのものの発話と解釈することは十分できる。日本語の「お待たせしました」類がそれほど長い時間待たせなくても発せられることを思えば、実質的には、〈サアドウゾ〉という品物渡しの定型表現と考えられるのと同じような事情があるかもしれない。

⑤の Danke 類は、感謝表現として、前場面の客からのそれと同様な異なり形式をもって回答されている。ただし、„Ich“ をきちんとつけた表現は 5 例、感謝対象を明示する „für……“ の句を含むものは 2 例と少なく、また „Besten Dank.“ (2 例) のような形容詞プラス „Dank“ という形の表現も少ない。recht, herzlich, schön など、客の場合現れた形容詞は、ここでは現れなかった。

⑥ Wieder 類のうち、最も多いのが „Auf Wiedersehen.“ であるが、これを原義に引き寄せて「またどうぞ」と解釈すべきか、あいさつ表現として「さようなら」と解すべきかもここでは不確かである。ただし、前掲の „Beehren Sie bitte uns bald wieder.“ などは文字通り再来をうながす表現である。

④の勘定要求表現については、一般的なドイツのデパート・店舗での支払い方法をふまえて見なければならない。日本では、品物を包んでくれた店員がほぼ同時にレジでの精算もしてくれるが、ドイツでは、品物を包んでくれる店員は勘定書き（請求書：メモ程度）を品物と一緒に渡すだけで、客は近くにあるレジ（別の店員が担当している）まで行って自分で精算しなければならないのが普通である。そこで「勘定要求表現」と呼んだ発話がこの段階の店員からなされるわけである。

⑦「その他の表現」には、〈他二何カ?〉と客の希望を追ってたずねる表現のほか、日本人の立場からは耳慣れない内容の〈アナタハイイ買物ヲシタ〉〈キットゴ満足ナサルデシヨウ〉などにあたる表現がいくつかみられたことを注意しておく。

次ページに、④～⑦の表現の併答状況（回答のあった組合せに限る）を示し

ておく。年齢層別集計は省く。

	全 体	(男 女)
㊸ Bitte 類だけ	68.4	(65.5 70.9)
㊸ Bitte 類+㊹ Danke 類	6.3	(3.6 8.5)
㊸ Bitte 類+㊺ Wieder 類	3.9	(5.8 2.4)
㊸ Bitte 類+㊻勘定要求	2.6	(5.0 0.6)
㊸ Bitte 類+㊼その他	2.0	(0.7 3.0)
㊹ Danke 類だけ	6.9	(9.4 4.8)
㊹ Danke 類+㊺ Wieder 類	2.0	(1.4 2.4)
㊹ Danke 類+㊻勘定要求	1.0	(2.2 —)
㊹ Danke 類+㊼その他	0.7	(0.7 0.6)
㊺ Wieder 類+㊻勘定要求	0.3	(0.7 —)
㊻勘定要求だけ	2.0	(0.7 3.0)
㊼その他の表現だけ	2.6	(3.6 1.8)
㊸ Bitte 類+㊹ Danke 類+㊺ Wieder 類	1.3	(0.7 1.8)
回答者数	304 人	(139 165)

(iii) 在日外国人

275 人 (71.6 %) の回答があった。日本語による回答を日本人の場合と同じ 3 種類にわけると、

㊸ 「お待たせしました」 類あり	6.2 %
㊹ 感謝表現あり	83.6 %
㊺ 「またご来店下さい」 類あり	8.4 %
その他	5.8 %
DK	5.5 %

のような内訳になった。このほか、英語による回答として、

“Thank you.”, “Thank you very much.” などの感謝表現	4.7 %
“Come again.” という再来をうながす表現	2.2 %

が現れた。百分率はいずれも有答者に対するのべ出現頻度で計算してある。

回答の集中した、日本語による感謝表現の内訳は、前と同じ分類を施せば、

「ありがとう」系	27.6 %
「どうもありがとう」系	50.9 %
「毎度ありがとう」系	4.4 %

のように分布しており、この他に、「おおきにありがとう」「おおきに」「どうもおおきに」も関西地区に関係のある回答者から寄せられていた（計1.5%）。日本人の回答（表4-51）と比べて、在日外国人は店員から「どうもありがとう」を多く言われていると意識しているようである。「ありがとう」系と「どうもありがとう」系の出現比率が、両者の間で、約20%対50%という値をとりつつちょうど逆転しているのである。その他の回答状況は、日本人のそれと類似しているといえる。

(iv) 日・独を対照して

注目されるのは、感謝表現が日本に多く現れる（約9割）のに対してドイツでは2割弱と少ないこと、逆に、「お待たせしました」類がドイツで多く（約8割5分）、日本に少ない（1割強）ことという二つの対比である。しかしながら、この対比は二つとも、日・独の買物の具体的な展開の差異をふまえれば、日・独間の言語行動様式の基本的なちがいだと考えることはできないものである。つまり、先にドイツ人回答の④勘定要求表現についての箇所所述べたとおり、ドイツでは、店員から品物が手渡される段階ではまだ支払いが済んでおらず買物の展開が終局まで至っていない。最終的な段階の発話としての、店員からの感謝表現は、まだ言うべきところに至っていないのである。これに対して日本では、通常は品物が渡される前後に、同じ店員との間で支払い・受取りが行われており、品物の渡される段階は店員にとっても客にとっても買物の終局と言ってよい。ドイツで感謝表現が少ないのは、次の段階（つまり別の場所・別の店員相手の精算段階）まで最終的な感謝表現が留保されているからだ、と考えられるのである。そして、それにかわってこの段階では、前に「手渡しのとときの発話」と呼んだ「お待たせしました」類（Bitte schön）が比率としては多く現れていると考える。

本項の小場面において日・独を対照すべき点があるとすれば、以上の、言語行動様式そのものの差異ではない、いわば言語外的な買物の仕方の差異と、そ

れが結果した限りの発話内容の差異であると思われる。

㊦の「またご来店下さい」類の表現の現れ方も、買物の最終段階で日・独を対照すべきであるとすれば、ドイツではレジの店員の発話を調べてこれを本項の日本側の結果と比べるべきであろう。本項で扱った限りでは、この、再来をうながす表現の現れについて日・独間にはほぼ似た状況にあった（ともに数パーセントの出現率）。しかし、これを買物の終局における対照結果とただちにみるわけにはいけないと思われる。

(2) みぶり

品物を客に渡すときの店員のみぶりである。前項4.2.8.の(2)で客のみぶりをみたのと同じように結果を示していく。

表4-53 店員のみぶり「なし」の比率

			みぶりなし	回答総数				みぶりなし	回答総数
日 本 人	社 会 人	全体	19.6	511	ド イ ッ ス 人	全体	72.4	323	
		男	18.9	449		男	69.1	152	
		女	24.2	62		女	75.4	171	
	学 生	全体	17.2	587	在 日 外 国 人	全体	16.1	384	
		男	16.2	284		男	19.2	203	
		女	18.2	303		女	12.7	181	

まず、「店員に特にみぶりはなし」と答えた人の比率を表4-53に示す。日本人が社会人、学生とも2割弱、在日外国人も同程度と少なかったのに比べ、ドイツ人は7割前後で顕著な差を示した。日本人とドイツ人には、女性の方に「みぶりなし」の比率が多めであること、在日外国人では男女がこの逆であることも指摘できよう。

この数値を、同じ場面の客にみぶりがないと答えた人の比率(表4-44)と比較すると、次ページのようになる。つまり、日本人は、客にみぶりはなしが店員にはあると考えており、ドイツ人は客にも店員にもみぶりはなしと、在日外国人は逆に両方にあると、それぞれ三者三様のとらえ方をしているわけである。この対比は、具体的なみぶりの現れ方以前の、より基本的なことがらであり注

目してよい。

	客	店員
日本人社会人	79.8	19.6
〃 学 生	68.5	17.2
ドイツ人全体	73.1	72.4
在日外国人全体	30.7	16.1

(i) 日本人

前項では3種類のみぶり群を区別しただけだが、店員のみぶりについては、これに「深々としたおじぎ」という分類項目を増やした。「深々としたおじぎ」「丁寧なおじぎ」「最敬礼」などをまとめたものである。

表4-54に、有答者をもとにした各みぶりの回答頻度を示した。「うなずき」が4割前後、「おじぎ」が4～5割、「深々としたおじぎ」が、1割強という分布で、「ほほえみ」はほとんどない。「うなずき」が社会人に、「おじぎ」が学生にそれぞれ多く、階層による差が見られる。男女差のあり方は、社会人と学生との間にもちがいが見られるし、みぶりの種類によっても異なっておりまちまちである。

表4-54 店員のみぶり（日本人）

		う な ず き	深 々 と し た お じ ぎ	お じ ぎ	ほ ほ え み	そ の 他	有 答 者 数
社会人	全体	44.7	12.2	41.9	—	1.3	394
	男	45.5	11.5	41.5	—	1.4	347
	女	38.3	17.0	44.7	—	—	47
学 生	全体	36.1	12.3	51.2	0.2	0.2	471
	男	33.2	15.0	50.9	0.4	0.4	226
	女	38.8	9.8	51.4	—	—	245

前項の客のみふりとの対照は後述する（(v) 参照）。

(ii) ドイツ人

ドイツ人では、「深々としたおじぎ」にあたる回答（tief verbeugen <深くオジグスル> など）がわづかだだったので、「おじぎ」にまとめた（表4-55 参照）。

最も多かったのが「ほほえみ」で全体の約半数を占める。これは男性に特に多い。「うなずき」は「ほほえみ」と併記された分を合わせても3割（女性で4割）どまりであった。「おじぎ」は少ない。

表4-55 店員のみふり（ドイツ人）

	う な ず き	お じ ぎ	ほ ほ え み	十 ほ ほ え み	う な ず き	そ の 他	有 答 者 数
全体	23.8	4.8	52.4	8.0	11.1		63
男	15.2	6.1	63.6	9.1	6.1		33
女	33.3	3.3	40.0	6.7	16.7		30

(iii) 在日外国人

客のみふりの回答と同様に、二つ以上のみふりを併記した回答が多いので、「深々としたおじぎ」を除いて、それぞれのみふりを含む回答の割合（のべ出現率）で示す（表4-56）。数値の計は100%を超えることになる。

「おじぎ」を含んだ回答が8割弱あり、特に男性では84%にのぼる。これに「深々としたおじぎ」を加えると、全体で8割強、男性では9割の人が、店員

表4-56 店員のみふり（在日外国人）

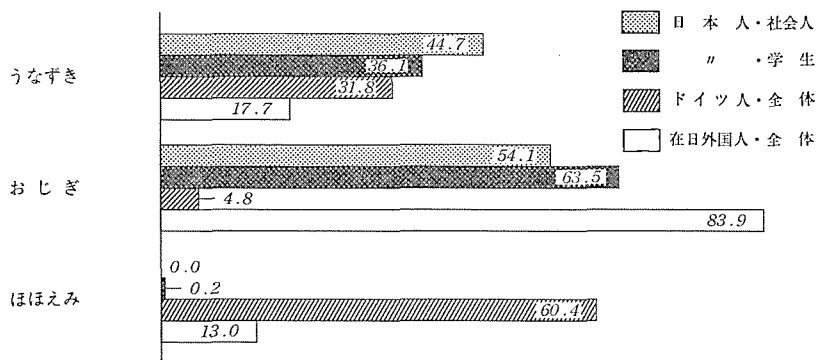
	含 うなずき	深々とした おじぎ	含 おじぎ	含 ほほえみ	そ の 他	有 答 者 数
全体	17.7	5.7	78.2	13.0	1.1	261
男	11.2	5.2	84.3	9.0	1.5	134
女	24.4	6.3	71.7	17.3	0.8	127

はおじぎ、礼、会釈、最敬礼など「おじぎ」をするものとうけとっていることがわかる。これに対して、「うなずき」や「ほほえみ」は、女性に多めという性差を示しつつも、全体としてはそれぞれ2割にみえない少数派である。在日外国人にとって、日本の買物場面で接する店員の「おじぎ」の印象が非常に強いということの現れと考えられる結果である。

(iv) 日・独・在日外国人を対照して

図4-57に、3種類のみぶりごとに、日・独・在日外国人の回答比率をまとめた。「深々としたおじぎ」は「おじぎ」に加えた。

図4-48で、客のみぶりとしては日・独・在日外国人共通して「うなずき」が最頻値を示していた。これに比べ、店員のみぶりは分布を異にする。「うなずき」はある程度の割合を占めながらも、順位としてはどこでも2位にとどまる。日本では「おじぎ」が「うなずき」より少し多めで最も多く、ドイツでは「ほほえみ」が、また在日外国人では「おじぎ」が、それぞれ他を圧して特徴的に多い。この特徴は、日本人や在日外国人に多い「おじぎ」がドイツ人にきわめて少ないこと、逆にドイツ人に目立つ「ほほえみ」が日本人・在日外国人で少ないこと、というみぶりの側からみた分布の差異としても指摘できる。



(注) 比率は「みぶりあり」の有答者を100とする。ドイツ人・在日外国人はそれぞれのみぶりを含む率。

図4-57 店員のみぶり（日・独・在日外国人の比較）

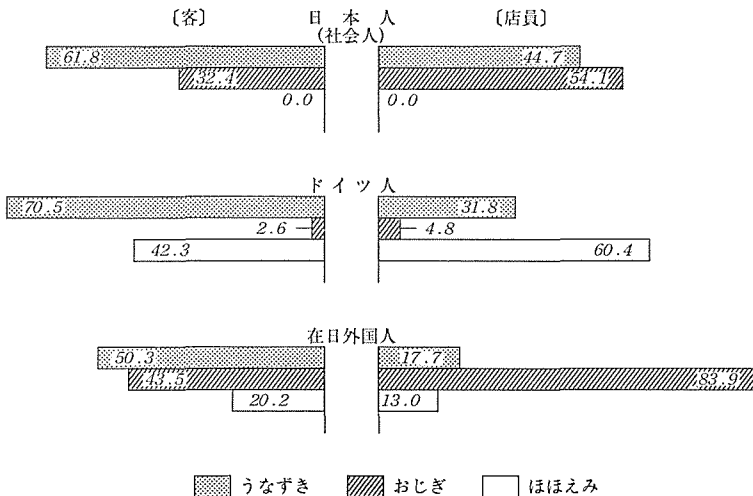
ドイツ人の „Kopf nicken“ と日本人の「うなずき」とが細かな点では異なるという、前項でふれたような事情は、多かれ少なかれ他のみぶりにについてもふまえなければならない。しかしながら、ここで得られた結果は、店員のみぶりとして現れるという条件（context：環境・文脈）においては、たとえば「ほほえみ」という同じ表情も、日・独・在日外国人にとっては相当異なる意味・機能をもって受けとられている、ということをも物語っているといえよう。

（v）客と店員のみぶりを対照して

4.2.8.（2）、4.2.9.（2）で見た、客と店員のみぶりをここでまとめて見ておく。日本人は社会人を例にとり、これとドイツ人、在日外国人との三者について「うなずき」「おじぎ」「ほほえみ」の客・店員それぞれにおける現れを図示すると、図4-58のようになる。図の棒柱の示す意味がこれまでと異なることに注意されたい。

図から次のように概括することができよう。

日本人は、客も店員も「うなずき」と「おじぎ」の2種類のみぶりしかない。そのうち客は「うなずき」を「おじぎ」の倍近くの比率で多く選ぶのに対し、店員は両みぶりほぼ半々で応対すると意識されている。「ほほえみ」はほと



（注）比率は「みぶりあり」の有答者を100とする。

図4-58 客と店員のみぶり

んど意識されていない。ドイツ人は、客も店員も「おじぎ」はほとんどしないで、客は「うなずき」を、店員は「ほほえみ」を多く選ぶと意識されている。在日外国人は、「ほほえみ」をドイツ人ほど意識してはいないものの、日本人ほど無意識でなく、客は「うなずき」と「おじぎ」を半々くらいに、また店員は大多数が「おじぎ」を、それぞれ選ぶと意識している。このうち、ドイツ人や在日外国人に意識された「おじぎ」や「うなずき」は、日本人に意識されていない「ほほえみ」の添えられたものである場合が相当含まれていたことに留意しておきたい。

以上の結果から、ここでは次の2点を注目しておきたい。第1は、「ほほえみ」が、日本人にとって客の表情としても店員の表情としても意識にのぼらないものであるのに対して、ドイツ人には非常に強く意識されていること、および、在日外国人から見れば日本人店員の表情としても結構意識されるものであること、である。第2は、「おじぎ」が、ドイツ人には選ばれないみぶりであるのに対して日本人には客・店員双方のみぶりとして重要な位置を占め、その日本人店員を在日外国人の眼で見たときには、日本人が意識している以上に強く意識する対象になる、そのようなみぶりである、という点である。

「おじぎ」がドイツ人に劣勢で、「ほほえみ」が日本人の意識に欠落しているという対照それ自体は、異文化間の差異として指摘すればここでの目的は一応達せられる。しかしながら、在日外国人から得られた結果は、日本人の意識しないところ（その典型が店員の「ほほえみ」である）を彼らが意識していたり、日本人の意識以上に増幅された意識を彼らがもっていたり（店員の「おじぎ」するという、まさに異文化接触の状況のもとでの当事者の意識のあり方を示している）と考えるべきだと思われる。

本章で主として言語形式を扱った筆者は、在日外国人の調査結果を日・独のそれと別扱いにして、直接対照することを避けてきた。その理由は前にも述べたが（p.209）、いま、より積極的に言い直すとすれば、在日外国人の調査結果は、ここで試みたような異文化接触・外国語接触の実態を把握するという観点から扱われるべきだと考える。日・独の対照研究に即していえば、在日の日本人、在独のドイツ人の調査（これが本報告書で当面目指したものだが）をふま

え、その次に行くべき、在独の日本人、在日のドイツ人への調査の必要性を物語っているのが、今回の在日外国人調査だと言ってもいい。上で見た「おじぎ」と「ほほえみ」の調査結果は、そうした事情を具体的に示していると筆者は考える。言語形式については避けた在日外国人調査への積極的な言及を、ここでみぶりについてはある程度試みた理由もここにある。

4.2.10. まとめ

デパートで万年筆を買うときの言語行動様式について、九つの小場面に区分して調査した結果を見てきた。それぞれの箇所では指摘できたことから、主として日・独を対照する視点から、かいつまんで列挙しておく。ただし、簡潔にするため、考慮すべき条件や留保事項は述べない。誤解を避けていただくためには、該当する各々の項に戻られたい。

(1) 陳列ケースに近づいた客は？

○店員を呼ばず、ひとりで品物を選びたいと思う人が多数を占める点で、日・独は共通する。

○店員に話しかけるとすれば、日本人は「すみません」などの呼びかけが多く、ドイツ人は、単刀直入に用談をもちかける人が多い。

○とりあえず「万年筆が欲しくてきた」と来意を告げるところから始めるタイプはドイツ人に多く、日本では女子学生などにこのタイプが多めであるほかは、品定めを一応したあと特定の品物を目指した「この万年筆を……」と申し出るタイプが多い。

(2) 客が陳列ケースに近づいたら店員は？

○店員は積極的に話しかけてくると意識している人が、日・独とも多数派だが、特に日本にこの意識をもつ人が多い。

○言語表現としては、「迎え入れ」表現と「初接触」の表現とに、日・独間はずれが考えられる。日本の「いらっしゃいませ」(迎え入れ)と「万年筆ですか」

(初接触) とにまたがるものとして、ドイツの „Kann ich Ihnen helfen?“ などがある。逆にぴったりこの位置にくる日本語表現はないようである。

(3) 店員が話しかけてきたら？

◦日・独とも、多数の人は積極的に話す点、接触を避ける人が2～3割いる点で共通する。ただし、避ける人の中で、「だまって見てまわる」人は日本で目立つ。

◦接触を断る発話の冒頭に、何らかの感謝表現を入れて、文末まできちんと言い切るタイプの多いドイツ人と、感謝表現も少なく、口ごもりがちに途中で言いよどむタイプの多い日本人、という対照性がある。

(4) インクの入れ方や使い方の質問は？

◦聞く人が8割の日本と、聞く人・聞かない人が半々のドイツとで差が見られる。在日外国人はその中間。

(5) 試し書きは？

◦日・独とも8割近くがさせてもらえると思っている。

◦ただし、試せないときそれを要求する人は、日本人には3割と少なく、ドイツ人には6割と多い。在日外国人はドイツ人に似る。

(6) 品物を指差す手振りは？

◦ひとさし指だけで指すのが客の手振り、手のひらをひろげ上を向けて示すのが店員の手振り、という結びつきは、日・独・在日外国人に共通する。ただし、独・在日外国人には無答が多いのに対し、日本人は9割がこの結びつきを意識しており、定型性意識は非常に強いといえる。

(7) 買いたい万年筆がきまったら？

◦ドイツ人は一人称の希望表現を選ぶ人が多いのに対し、日本人には二人称構文(命令・要求表現)を選ぶ人が多い。

○ドイツでは、この段階になると、表現の丁寧さがやや減じる傾向が指摘できそうである。

(8) 品物を受け取るとき、客は？

- 定型性の高い感謝表現を用いる場合が多いという点で日・独は共通している。
- だまって受け取る人が、日本人の方に多い傾向が見られる。
- 日本人は、ことばを発するとしても感謝表現だけの人が多いが、ドイツ人には „Auf Wiedersehen!“ のようなあいさつ表現を添える人がいる。
- みぶりでは、日・独ともに「なし」と意識する人が多い中で、「おじぎ」の多い日本と「ほほえみ」の多いドイツとが対照的である。

(9) 品物を手渡すとき、店員は？

- 買物の進展する中で、品物を手渡すという店員の行動の占める位置が日・独で異なり、このことから、ドイツでは「お待たせしました」類の表現が多いのに対し、日本では「ありがとう」類の感謝表現が多いという対比が得られる。◎
- 「またご来店下さい」と再来をうながす表現は、調査の限り似た出現状況を示すが、これも買物の場面的な条件を考慮すれば、言語行動様式としての共通性かどうかは不明である。
- みぶりでは、ドイツに「みぶりなし」と意識する人が多く他と異なり、みぶりの形としては客の場合と同様、「おじぎ」が日本で、「ほほえみ」がドイツで、それぞれ特徴的である。在日外国人の結果は、日本人のもつ意識が「増幅された」状況を示していると考えられ、この点、日・独についても、より進んだ対照研究が望まれる。

4.3. 道聞き

相手にものをたずねて答を要求する言語行動ということで、「見知らぬ街で道を聞く」という場面を設定し、相手と呼び止めて道を聞き、礼を言ってわかれるまでの一連の行動について、いくつかの質問をした。

相手に反応を要求する言語行動という点では、前節の「買物行動」と同じであるが、「買物行動」の場面では、売店・デパートの店員は客の要求に応ずるべくそこにいる人物であり、客は逆に店員に何かを要求すべくそこに現れた人物であるということが両者の間で前もって了解されていると考えられるのに対して、「道聞き行動」の場面では、たずねるもの、たずねられるものという役割が、前もっての了解なく、臨時の、その場限りに設定されたものであるという点で、ふたつの場面の間には相違があると考えられる。買物と道聞きという、一見つながりの薄くみえる項目を同じ章に置いた理由はここにある。

設定した具体的場面は、「40 歳ぐらいの見知らぬ男の人に博物館への道をたずねるとしたら」というものである。日本人と在日外国人に対しては「東京で」とし、博物館は特定のものとはしなかった。ドイツ人に対しては、「ミュンヘンで」とし、博物館は、「ドイツ博物館 (das Deutsche Museum)」と実在の博物館への道をたずねる場面とした。博物館の限定の仕方、街の規模等、厳密に言えば同じ場面設定とはならないかもしれないが、一応相対応するものと仮定して比較することにする。

なお、質問項目は、日独では共通するところを多くしたが、在日外国人に対しては共通するものが多くない。比較は、従って、日独を中心に行うことになる。

4.3.1. 誰にたずねるか

話が前後するが、先に述べた場面設定をする前に、「見知らぬ町で道をたずねるとしたら、どんな人にたずねるか」という質問をし、「警官」「店の人」「通行人」という選択肢を用意した。なお、在日外国人に対しては、「日本人に道を聞くとしたら」という限定を加えた。その結果を図4-59（社会人）、図4-60（学生）に示す。複数回答があり、合計は100％を超えている。

日本人は、「店の人」「通行人」にたずねることが多いようである。社会人では「店の人」が多く、学生では「通行人」がやや多い。社会人を若（195人）、中（187人）、壮（129人）の順に年代別に見ると、「店の人」が50.3, 57.8, 67.4（％）、「通行人」が43.6, 38.0, 27.1（％）となっていて、「店の人」は上の世代に好まれ、「通行人」は若い世代に好まれている。若い世代の傾向は、学生の示す傾向と一致している。この両カテゴリーでは、社会人、学生とも男女の差はほとんど見られなかった。

これに対して、ドイツ人の反応はずいぶんと様相を異にする。社会人、学生ともに、「通行人」

という反応が、社会人（218人）

で80％を超え、学生（105人）では95％にも達しているのに対して、「店の人」

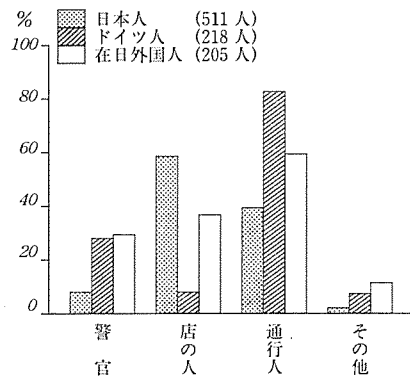


図4-59 誰にたずねるか(社会人)〔複数回答〕

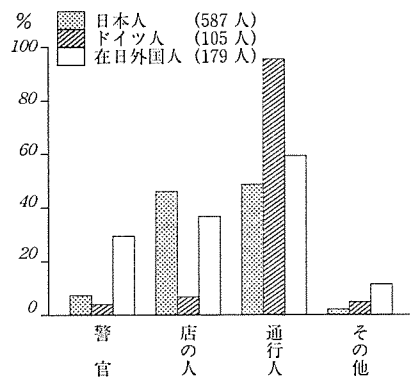


図4-60 誰にたずねるか(学生)〔複数回答〕

に聞くという人は極端に少なく、社会人で8.3%，学生では6.7%しかない。

ドイツの店の構えは、日本の八百屋や乾物屋のように道の上にまで品物を出すようなことは考えられず、入口も重いドアを押して入らなければならない。日本の小売店のように、間口を開け放って全てこれ入口といった造りではない。我々日本人から見る限りでは、気軽にとびこんで道をたずねるという雰囲気ではない。

ドイツ人にとって、店に入っていく人物は何か具体的に買物をする意志があって入っていくのであって、買物以外で店に入るということは理屈に合わないとしても考えるのだろうか。「なぜ店では道をたずねないか」という質問をしたいところである。筆者のドイツ滞在中の経験からも、日本の店とは違った印象があるように思える。我々としては、例えば衣類などを求める場合、「何かいいものはないか、あれば買おう」といった程度の気持で店に入るとは普通の行動だと思うが、ドイツの店では、入るとすぐに、「何が欲しいか」「色は何色か」「材質は何を希望するか」とたたみかけて問われることが常だった。調査してみなければ分からないことではあるが、具体的な希望を持たずに店に入るということは一般的な行動ではないという印象であった。そのためかどうかは分からないが、どんな小さな町の小さな店でも、ショーウィンドーはきれいにかざりつけられている。閉店後もしばらくは明かりがともされていることが多い。「ただ何となく」という人はウィンドーショッピングを楽しむわけである。余談が過ぎたが、「店の人」には道を聞かないという結果を得て連想したことである。

年代別でみると、社会人の若年層で「通行人」が多く、学生の反応と一致する。若い人はとくに「通行人」を好むようである。

「警官」に対する反応も日独ではずいぶん異なっている。日本人は「警官」に聞くことが非常に少ない。「交番」という世界に知られた制度がありながら、このように少ないのは意外とも言えよう。日本では、見知らぬ町で警官に道を聞こうとすると、まず、交番を見つけないといけない。日本の警官は、四六時中町をパトロールするということはなく、交番にいる時間は少なくない。一般的に言って路上で警官に出会うことはそれほど多くないのではなかろうか。

交番の場所を人に聞くくらいならば目的の場所を直接聞く方がいいという理屈になる。日本人がとくに警官嫌いとも思えないから、このようなことを考えるわけである。

これに対して、ドイツ人では、社会人と学生とでずいぶんと違った反応を示す。社会人は3割近くの人が「警官」に聞くと答えている。ドイツの場合、交番というものはないから、警官は常に路上をパトロールしているわけである。日本と比較してどちらが路上で出会う確率が高いかは、計測してみなければ分からないが、ドイツで警官に出会うとしたら路上というわけであるから、日本よりは聞きやすいのかもしれない。年代別でみると、壮年層では86人中41.9%となり、かなり高率である。これに対して、若年層では88人中15.9%となっている。若い人は警官をあまり好まないということになる。

この若い世代の傾向は、学生の示す反応と軌を一にする。ドイツ人学生ないし社会人の若年層は極端な警官嫌いということであろうか。路上で出会う確率は社会人と変わりはないはずであるから、学生は道聞きの相手として警官を選ばないと考えざるを得ない。とくに、男子学生は45人中2.2%と最も低い値を示す。はっきりと警官嫌いと言うことが言えよう。

在日外国人の反応は、「通行人」「店の人」の順に多い。「警官」もかなりの割合にのぼっている。「通行人」を呼び止めるのは、社会人では若い人に多いようである。日本人・ドイツ人・在日外国人をとおして、若い人は「通行人」を選ぶという傾向がある。気軽に呼び止めて質問できるからだろうか。

在日外国人の示す特徴として、「その他」が多いことである。注記を記入してくれた人が多かったが、多くは、「その場で聞ける相手ならばだれでも」といったものが多かった。日本人、ドイツ人と違って、「外国人」として日本で生活している人にとって、相手を選んではいられないということなのであろうか。

4.3.2. 道をたずねる

先にも述べたように、「40歳くらいの男性に道を聞くとしたら」という場面を設定して、以下に示すいくつかの質問を行った。

(1) 話しかける言葉

道を聞くために相手呼び止めて話しかけることばを選択肢を示して質問した。複数回答が少しあり、回答は100%をやや上回った。

日本人では、社会人、学生とも「すみません」が圧倒的に多く、それぞれ218人中94.5%、105人中91.8%にものぼった。「アノー」や「チョット」は数パーセントの反応しかなかった。「呼びかけのことばなしに直接聞く」というのは、社会人で0.6%、学生では全く無かった。

ドイツ人には、Entschuldigen Sie と Verzeihung のふたつを選択肢に示した。Entschuldigen Sie は、社会人で79.4%の人が選んでいるが、学生では95.2%と率が上がっている。社会人では若い人に多く、性別では、社会人、学生とも男性の方に多い。Verzeihung は少なく、社会人では12.4%、学生で5.7%となっている。年代別では、社会人の上の年代でよく用いられている。性別ではどちらも女性の反応が多かった。

たずねる相手を「40歳くらいの男性」としたわけであるから、「同世代の人、あるいは女性からはときに Verzeihung を用い、若い世代、あるいは男性からは Entschuldigen Sie を用いて話しかける」傾向があるということになろう。同じ「失礼します」でも丁寧に微妙な違いがあるのであろう。上記2形のほか、Verzeihen Sie, Entschuldigung などの形もあるが、今回の質問では割愛した。

「呼びかけのことばを用いず直接道を聞く」というのがドイツ人の場合、社会人で12.4%、学生でも2.9%見られた。日本人と比較して、やや多い。

(2) みぶり

続いて、話しかけるときのみぶりについて、同じく選択肢を示して質問した。その結果を図4-61(社会人)、図4-62(学生)に示す。凡例に示したみぶりと、日本人・ドイツ人・在日外国人それぞれの選択肢との対応を以下に示す。

「顔を見る」

- ・「相手の顔を見る」
- ・Ich sehe ihm ins Gesicht.
- ・Look at his face.

「肩をたたく」

- ・「相手の肩を軽くたたく」
- ・Ich klopfe ihm leicht auf die Schulter.
- ・Tap him lightly on the shoulder.

「おじぎ・あごしゃくり」

- ・「おじぎをする(上半身を軽く前にたおす)」
- ・Ich nicke mit dem Kopf.
- ・Bow (slightly bending the upper half of the body forward).

ドイツ語の Ich nicke mit dem Kopf. は3章で随所にふれられた「あごしゃくり」である。「おじぎ」は、むしろ, sich verbeugen の方に対応するものであるが、図示の便宜上このようにまとめた。

両図の示す傾向はほぼ似通っ

たものと言えよう。ドイツ人では「顔を見る」がほとんどを占め、他のみぶりはごくわずかである。3章で記述された「あいさつ行動」ではかなりの反応のあった, Ich nicke mit dem Kopf; 「あごしゃくり」がほとんど選ばれていない。このみぶりは、相手にものをたずねるときの導入行動としては不適切なみぶりであるらしい。

日本人では、「おじぎ」「顔を見る」の両方に分かれている。「おじぎ」は社会人の方によく選ばれている。「肩をたたく」は1%以下であった。

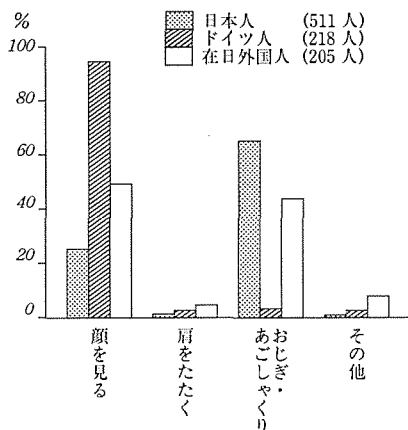


図4-61 道聞きのみぶり(社会人)〔複数回答〕

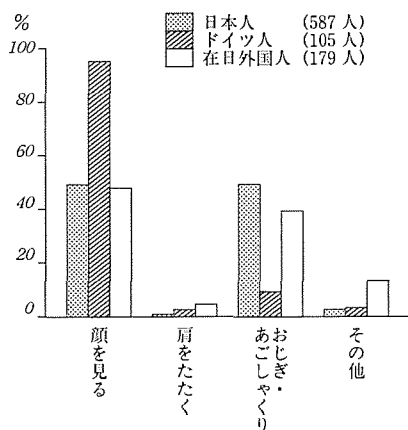


図4-62 道聞きのみぶり(学生)〔複数回答〕

在日外国人は日本人と同じような反応を示している。これらのみぶりが一般の英語話者の多数を占めるものとは考えにくい。とくに、「おじぎ」がこのように高いのは注意する必要がある。あくまで、「東京で」という条件の下での回答であるということを考慮に入れるべきである。日本人の行動の典型に近づこうとする意識の現れと見るべきところであろう。

(3) 何と云ってたずねるか

この質問はドイツ人にだけ行ったものである。話しかけたあと、何と云って博物館への道を聞くかを具体的な文にして記入してもらう方式で質問した。

記入された文表現は、少しの違いも区別して数えると、社会人、学生合わせて 202 種類の異形が見られた。微細な違いをまとめて整理した結果、社会人で 127 種類、学生で 66 種類、両者合わせた異なりで 169 種類の表現が得られた。それらをまとめた過程や、変種のすべてをここに示すことは紙幅の都合上省略せざるを得ない。ここでは、一定の観点からさらに大きくまとめたものについて分析した結果を示すにとどめる。

全体の異なりが 169 種類にものぼる文表現は、分類しようとすればさまざまな観点があり得て、それはそれで興味深いことであるが、それぞれのカテゴリの度数が小さくなって分析に堪えなくなる。従って、ここでは、以下のような観点を立てて、非常に大まかな類型化を行った。

(i) 文の丁寧さ

a. 接続法第II式の用いられているもの

たとえば、

-Könnten Sie mir bitte sagen, wie ich von hier aus zum Deutschen Museum komme ?

-Könnten Sie mir bitte den Weg zum Deutschen Museum zeigen ?

-Würden Sie mir bitte sagen, wo es entlang geht zum Deutschen Museum ?

-Könnten Sie mir den Weg zum Deutschen Museum sagen ?

といった表現である。動詞の形だけから言えば、最も婉曲で丁寧な表現と言え

るものである。以下「接続法Ⅱ（の類）」と呼ぶ。

b. 直説法による疑問文

たとえば,

-Können Sie mir bitte sagen, wie ich zum Deutschen Museum komme ?

-Können Sie mir den Weg zum Deutschen Museum sagen ?

-Ich bin fremd hier, können Sie mir den Weg erklären ?

のような表現である。Sie を用いたふつうの質問形式であるが、下の c. の類と違って, können が用いられ, 「～の道を教えてくださいか」という婉曲表現をとっている点に注目した。以下便宜上「Können Sie（の類）」と呼ぶ。

c. 直接疑問詞から始める疑問文

たとえば,

-Wie komme ich zum Deutschen Museum auf dem kürzesten Weg ?

-Wie geht es zum Deutschen Museum ?

-Wo ist das Deutsche Museum ?

などのように、いきなり疑問詞で始める疑問文をひとまとめにした。このほかに,

-Kennen Sie den Weg zum Deutschen Museum ?

のようなものも「知っているか」といきなり質問する形式であるという点からここに置いた。これらは、こちらが知りたいことを直接に質問する点で、上の b. の Können Sie の類の婉曲表現とは異なる。以下「直接疑問(の類)」と呼ぶ。

(ii) bitte の有無

文に丁寧さを加える副詞, bitte が付加されているかどうか注目した。bitte のほか, vielleicht, wohl の付加された表現もこれに含めた。これらの有るものを以下「bitte」と略す。

(iii) 直接質問しないで、自分の状況だけ言うもの

たとえば,

-Ich suche das Deutsche Museum.

は「ドイツ博物館を探しています」としか言わない。

-Ich möchte ins Deutsche Museum.

は möchte という a. の形式は用いているが、「ドイツ博物館へ行きたいのです」としか言っていないのでここに入れた。これらを「状況」と略す。

以上の五つの観点から、すべての文を分類すると、以下に示す七つの組み合わせが得られた。それに、質問をとりちがえたと思われる明らかな誤回答を「その他」として計八つのカテゴリーに類型化した。それぞれの型に典型的な表現を付して以下に示す。() 内にはそれに類別される文の異なりの数を、社会人、学生の順に示しておく。

「接続法II+bitte」(社会人 26, 学生 18)

-Könnten Sie mir bitte sagen, wie ich zum Deutschen Museum komme ?

「接続法IIのみ」(7, 7)

-Könnten Sie mir den Weg zum Deutschen Museum sagen ?

「Können Sie+bitte」(25, 15)

-Können Sie mir bitte sagen, wie ich zum Deutschen Museum komme ?

「Können Sieのみ」(25, 14)

-Können Sie mir sagen, wie ich zum Deutschen Museum komme ?

「直接疑問+bitte」(7, 1)

-Wie komme ich bitte ins Deutsche Museum ?

「直接疑問のみ」(19, 6)

-Wie komme ich zum Deutschen Museum auf dem kürzesten Weg ?

-Wo ist das Deutsche Museum ?

「状況」(6, 1)

-Ich suche das Deutsche Museum.

「その他」(12, 4)

…例省略…

以上のようなカテゴリーについて、それぞれの数値を表4-63に示す。

なお、無回答は、社会人に24人、学生に1人それぞれあった。ここでは、社会人218人、学生105人のうちから無回答を差し引いた社会人194人、学生104人を分母としてそれぞれパーセンテージを出して示した。

接続法第II式に bitte を付加する表現は最も丁寧な言い方と考えられる。この

表 4-63 何と言ってたずねるか (ドイツ人)

		接続法II+bitte	接続法IIのみ	Können Sie+bitte	Können Sieのみ
社会人	全 体	17.0	6.2	21.1	26.8
	男	10.4	9.4	15.6	29.2
	女	23.5	3.1	26.5	24.5
	若	21.3	6.1	20.7	26.8
	中	18.9	—	21.6	24.3
学生	壮	10.7	9.3	21.3	28.0
	全 体	30.8	10.6	23.1	23.1
	男	29.5	11.4	15.9	29.5
	女	31.7	10.0	28.3	18.3

		直接疑問+bitte	直接疑問のみ	状 況	そ の 他	人 数
社会人	全 体	4.1	12.4	3.6	8.8	194
	男	4.2	18.8	6.3	6.3	96
	女	4.1	6.1	1.0	11.2	98
	若	3.7	8.5	3.7	8.5	82
	中	8.1	18.9	—	8.1	37
学生	壮	2.7	13.3	5.3	9.3	75
	全 体	1.0	6.7	1.0	3.9	104
	男	—	6.8	—	6.8	44
	女	1.7	6.7	1.7	1.7	60

形は、社会人では3番目に多く用いられているが、学生では最上位にある。社会人では壮年層には少なく年齢が下がるほど増加していて、学生の示す傾向と軌を一にする。道を聞く相手として40歳位の人物を想定したのであるから、この表現形は若い人から年上の人に対して用いられることが多いということになる。

性別でみると、社会人、学生とも女性の方が多い。女性にも好まれる形だと言えることができる。

同じ接続法第II式でも、bitteを伴わない表現は値が低くなっている。われわれのドイツ語会話の学習でも、Ich möchte gerne……とか ich hätte gerne……, Könnten Sie bitte……などのように、モーダルな表現にはモーダルな副詞を付けるように教わるが、この数字からも、接続法第II式にbitteの伴わない表現はあまり選ばれないらしいということがうかがえる。

Können Sie を用いる要求表現は、最も多く用いられるようである。bitte のあるものとなないものとを合わせると 50 % 弱の値を示す。このうち, bitte の付いたものは, 社会人, 学生とも女性の方がかなり多い。先の「接続法II+bitte」と合わせて見ると, 「bitte は女性が多く用いる」ということが言えるようである。

bitte を付けない Können Sie は, 社会人では最も多く用いられている, ごくふつうの依頼, 要求の表現である。性別で見ると, 社会人, 学生とも男性の方により多く用いられている。年齢による違いはあまり見られない。

直接疑問詞で始める質問は, あまり丁寧な表現ではないと考えられる。得られた回答にもこの表現は多くない。とくに学生には少ない。社会人では若年層に少ない。若い人から 40 歳位の人に向かって発する質問形式ではないようであるが, 社会人の男にはかなり用いられている。

(4) 何と言って礼を述べるか

道を教えてもらったあと何と言って礼を述べるかを選択肢を用いて質問した。日本語の選択肢は,

- ・「アリガトウゴザイマシタ」
- ・「アリガトウ」
- ・「ドウモ」
- ・「スミマセンデシタ」

の四つを示し, ドイツ語では,

-Vielen Dank

-Danke

の二つを示した。

日本人の礼のことは, 「アリガトウゴザイマシタ」が最も多く, 社会人で 74.0 %, 学生で 76.3 % 見られた。社会人では年齢が高いほど多くなっている。社会人, 学生とも女性の方が多い。

つぎに多いのは「スミマセンデシタ」であるが, 社会人で 15.1 %, 学生で 10.2 % と多くはない。(1) で述べた「呼びかけ」では, 「スミマセン」が 90 % を超えていたのに比べると, 非常に少ないと言えよう。

「ドウモ」は、「最近のことばづかい」は」という批判の矢面に立たされている応答詞である。このような礼を述べる場面などでは盛んに用いられそうな気がするが、得られた結果は、社会人で2.3%，学生で4.6%であった。言語意識としては、「ドウモ」で済ますのではなくて、「アリガトウゴザイマシタ」と言うべきだと考えているということであろう。

ドイツ人については、図4-64に示した。

Vielen Dank が圧倒的に多いが、学生よりは社会人、男性よりは女性、若い人よりは年齢の上の人がそれぞれ Vielen Dank を用いる割合が高い。Danke より Vielen Dank の方が丁寧な礼の述べ方と考えられるから、若い人より年齢の上の人の方が丁寧な礼を述べるということになるが、そうすると、先の（3）で若い人の方がより丁寧な依頼表現を用いて道をたずねるという結果と相反することになる。なぜそうなのかは今のところ不明と言わざるを得ない。

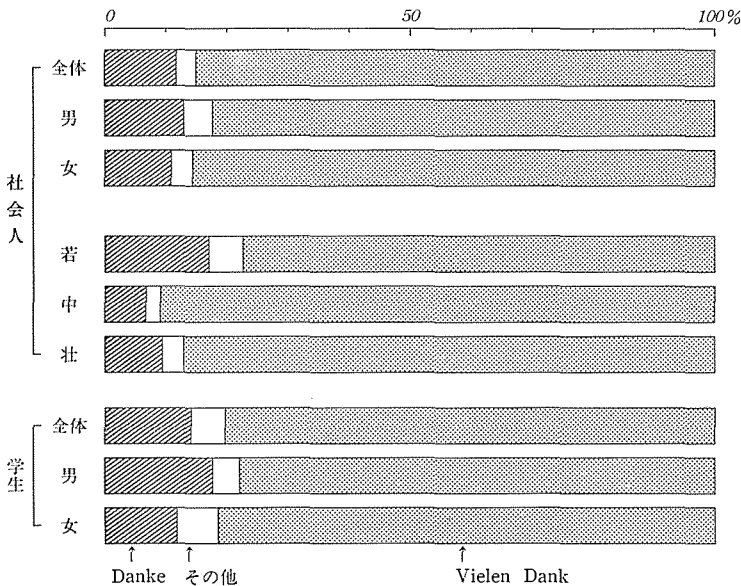


図4-64 礼のことば（ドイツ人）

なお、礼のこととしては、このほか、Danke schön, Danke sehr, Herzlichen Dank, Ich bedanke mich などがよく用いられる。日本語に比べて種類が多いと言えよう。今回の質問では、Danke と、一言だけにするか、Danke のほかに何か付けるかという点に注目して上記の 2 形を代表として選択肢に挙げ、他の形は割愛した。

(5) 礼を述べるみぶり

ドイツ人にだけ行った質問である。(4)で礼を述べる時のみぶりを選択肢を示して質問した。選択肢は、

-Ich nicke mit dem Kopf. (あごしゃくり)

-Ich verbeuge mich. (おじぎ)

-Ich gebe ihm die Hand. (握手)

の三つを示した。

最も多いみぶりは「あごしゃくり」であった。社会人で 83.5 %, 学生で 87.6 % 見られた。かなりの高率と言えよう。筆者の滞独中の経験、観察からも、礼を言う場面は「あごしゃくり」の行われる典型的な場面のひとつのように思われる。筆者の経験では男女差はあまりないように思われたが、社会人、学生とも女性の方がやや多い。「おじぎ」「握手」はわずかである。道を教えてもらった礼程度では「おじぎ」や「握手」はしないのであろう。

4.3.3. 道をたずねられたら

「逆に、あなたが 40 歳くらいの男性に呼びとめられて道をたずねられたら」という場面を設定して、さらに二、三の質問をした。

(1) 呼びとめられたときの返事は

日本語の選択肢は、

・「ハイ」

・「ナンデショウ」

- ・「ナンデスカ」
- ・何も言わない

の四つを示した。

社会人では、「ハイ」が46.6%、「ナンデショウ」が26.0%、「ナンデスカ」が23.5%見られた。このうち、「ハイ」は女性と若い人とにやや多く、「ナンデショウ」は年齢の高い人にやや多かった。「ナンデスカ」は男性の反応がかなり高かった。

これに対して、学生では、「ハイ」が68.7%も見られ、社会人に比べてかなり高い値を示している。「ハイ」だけで済みますのは、ややぶっきらぼうだとすれば、若い人に多いのは社会人の若年層傾向と合わせてうなずける結果かもしれない。「ナンデショウ」はわずか8.3%で、「ナンデスカ」も15.3%しか見られなかった。社会人に比べてかなり低い値となっている。

「何も言わない」というのは社会人、学生とも非常に少なく、いずれも1%以下である。

ここに選択肢として示した表現は、呼び止められたことへの応答であって、この次に「道を教えてくれ」という依頼表現が先方から発される順序になるわけであるが、ドイツ語の質問では、「呼び止められて道を聞かれた。あなたはどうか応答するか」というもので、日本語の質問と場面設定が同じではない。

ドイツ語の選択肢は、

-Ja, gern! (ええ喜んで)

-Ich sage nichts und erkläre direkt den Weg. (何も言わずに直接道を説明する)

の二つであった。

「喜んで」と答えた人は、社会人で55.5%、学生で34.3%である。それぞれ男性の方がやや値が高い。これに対して、「何も言わずに」という人が、社会人では35.3%、学生では57.1%となっている。聞かれたら何も言わずに道を教えるという行動は、我々の感覚だと何かぶっきらぼうなように感じられるのだが、これだけの人に支持されているということはしっかりした根拠のあることであろう。前項の(3)で示した道を聞く文が、我々のドイツ語の知識から

してかなり丁寧な表現も多く答えられていたことと対比して、やや注目される
ところである。これがドイツ人の言語行動であると受けとるべきであろうが、
なお、問題点として残しておきたい。

(2) 呼びとめられたときのみぶり

日独ともに、「相手の目を見る」と「目を伏せる」を選択肢として示したが、
どちらも「目を見る」が高率を以て答えられていた。日本人は目をそらすとよ
く言われるが、このような形で質問するとほぼ全員が「目を見る」と答える
ということである。このような短時間、いわば瞬間的に相対するような場合は、
実際に相手の目をたしかに見ているということであろうか。

(3) 相手が礼を言ったのに対して

相手が礼を言ったのに対する応答について、日本語では、

- ・だまって立ち去る
- ・「イイエ」
- ・「ドウイタシマシテ」

ドイツ語では、

- Keine Ursache!
- Ja, bitte!
- Bitte sehr!
- Gern geschehen!

をそれぞれ選択肢として示した。ドイツ語はいずれも「どういたしまして」に
相当する表現である。

日本人の社会人では、「イイエ」「ドウイタシマシテ」がそれぞれ 46.0, 45.2
%と相半ばしているのに対して、学生では「イイエ」が 51.8%, 「ドウイタシ
マシテ」が 37.3% となっている。(1) の「ナンデショウ」と同じく、学生は
丁寧な表現が苦手ということであろうか。

ドイツ人では、二つ以上答えた人が多く、また反応も四つの表現に分散して
いる。最も多いのが、Gern geschehen で、社会人 55.0%, 学生 48.6% となっ

ている。ついで、Bitte sehr が社会人 28.4 %, 学生 40.0 % となっている。Keine Ursache は社会人 17.9 %, 学生 19.0 % である。Ja, bitte は少なく、それぞれ 3.7 %, 7.6 % となっている。

これらがどのようなニュアンスの違いを持っているのかは、この調査の結果からは分からない。属性による違いも顕著には見られなかった。今後の課題としたい。

(4) そのみぶり

相手が礼を言ったのに対する上記 (3) の応答の際のみぶりについては、日独ともに、

- ・会釈 (頭を軽く前にたおす)
- Ich nicke mit dem Kopf. (あごしゃくり)
- ・おじぎをする (上半身を軽く前にたおす)
- Ich verbeuge mich. (おじぎ)

の二つである。

日本人では、「会釈」が、社会人で 87.3 %, 学生で 84.7 % となっている。「おじぎ」は、社会人 6.7 %, 学生 8.2 % と少ない。

ドイツ人では、「あごしゃくり」がやはり多く、社会人で 75.2 %, 学生で 82.9 % となっている。先の自分が礼を言うときのみぶりと比べてやや値が下がっているが、やはり典型的な「あごしゃくり」場面とすることができよう。

「おじぎ」はほとんど見られない。社会人で 4.1 %, 学生では 0 % となっている。自分が礼を言う場合にも少なかったが、こちらの方がさらに少ない。ドイツ人独特とも言える、かかとをきつと引いて「きをつけ」をするようにしながら上半身をかすかに前に倒す、やや男性的、あるいは、軍人風なあいさつは、ここでは不適切と見られているのであろう。

5. 身体の空間的な位置・距離

5.1. 対人行動における空間的要素

5.1.1. 調査の観点と項目

本章では、言語行動に随伴する非言語的行動の一側面として、話し手と話し相手の身体の空間的な位置・距離を扱った設問の結果について述べる。

言語行動に参加する人と人、特に話し手と話し相手の間の、空間的な位置関係——距離とか対位の角度などが、その場のコミュニケーションの重要な要素であることについては、Hall, E. T. (1966)をはじめとする、いわゆる Proxemics (「距離論」「接近論」「近接学」などと訳される) の分野で、従来いくつかの研究・実証が進められている (補注 p.308)。動物の個体間の位置・距離がもつコミュニケーション論的な意味の検討をふまえつつ、人間の対人行動における空間的要素に照明が当てられ、たとえば「社会的距離 (social distance)」「個人的距離 (personal distance)」という個人間の距離の遠近についての型の存在が指摘されたりしてきた。この観点に立って言語社会や民族のちがいに応じた、対人的な空間的要素のもつ意味や機能のちがいが指摘されてもいるし、なにより、日本人としての我々の日常の暮らしの中で、対人的な待遇意識 (親しみ、畏れ、うやまい、あなどり……) が、行動としては対人的な空間的要素の選択によって、つまり文字通り近づくか離れるか、正対するか斜めに向かうかという、身の置き方の選択によって表現される事態はごくふつうに経験されるであろう。

そこで、今回の調査でも、このようなことがらの一端を扱うことを目指し、日本人とドイツ人への調査項目として次に掲げるような設問を加えた。

(1) まず、具体的な質問に入る準備として、質問で想定してもらう場面に話し相手（行動の相手）として登場する人物に、回答者の周囲の実際の人物の中から、次のような性と親疎の条件にあう4人を選び出しておいてもらう。

Aさん：顔見知りであるがあまり親しくない同性の人（以下、「Aさん」なし「疎・同性」と略す）。

Bさん：顔見知りであるがあまり親しくない異性の人（「Bさん」「疎・異性」）。

Cさん：最も親しい同性の人。たとえば、友人・兄弟姉妹・親子など（「Cさん」「親・同性」）。

Dさん：最も親しい異性の人。たとえば、配偶者、兄弟姉妹など（「Dさん」「親・異性」）。

(2) この4人の人それぞれについて、その人がどんな具体的な関係の人かを、次の選択肢の範囲でたずねる。

- | | | |
|--------------|---------|-------|
| 1. 学校（時代）の友人 | 2. 近所の人 | 3. 同僚 |
| 4. 仕事上の知人 | 5. 兄弟姉妹 | 6. 親子 |
| 7. 配偶者 | 8. 親類 | |

Aさん～Dさんそれぞれが相手になるものとして、以下の場面を想定して質問する。

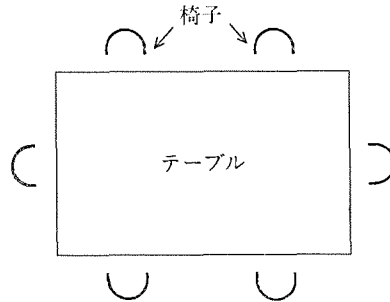
(3) あなたが一人で街を歩いているとき、Aさんに出会ったとします。そのとき、あいさつするとして、ことばのほかにみぶりであいさつするとしたら、どんなふうにしますか〔「出会ったとき」と略す。質問したのは、日・独双方〕。

(4) 相手の人とあいさつしたあと、しばらくそこで立ち話をするとして。そのときあなたと相手の人との距離はどうでしょうか〔「立ち話の距離」と略す。日・独で質問した〕。

(5) また、立ち話の際の身体の向きはどうでしょうか〔「立ち話の向き」と略す。独だけで質問〕。

(6) 立ち話のあと、並んで歩きながら話をするとして。そのとき二人の距離はふつうどれくらいですか〔「歩くとき」と略す。日・独で質問した〕。

(7) さらに話を続けるためレストランへ入るとします。テーブルと椅子が図のように置いてあったとして、二人はどの位置に座りますか〔「座席」と略す。



独だけで質問]。

上記(3)～(7)の各質問には選択肢を掲げ、それによって回答するよう求めた。〔 〕内に示したように、(5)と(7)はドイツだけで質問した項目である。主として調査票の量的な制約から日本では省いた。また、在日外国人には、想定してもらうA～Dさんが、外国で暮しているという制約から日・独の回答者の場合と異なり、限られる場合の多いことが予想されたこと、および調査票の量(日・独で質問しなかった別の項目が多くあった)の制約のあったことの理由から、(1)～(7)のどれも質問していない。

さらに、ドイツでは、調査対象の約半数に対してだけ、これらの設問を含んだ調査票を用いて調査し、残りの半数には調査しなかった。調査に応じてもらえる時間の制約を考慮して、やむをえずとった措置である。結果的に、表5-1に示すような属性の回答者、計159人から回答を得た。日本人は、全回答者(社会人511人、学生587人)から回答を得ている。

表5-1 「空間的位置・距離」の質問へのドイツ人回答者属性

属性 職業	性 別		年 齢 層		計
	男	女	若	中・壮	
社 会 人	25人	34人	30人	29人	59人
学 生	43	57	96	4	100
計	68	91	126	33	159

(注) 全回答者323人の49.2%。年齢層は人数の関係で「中年」「壮年」をまとめた。

なお、本章で扱う結果の一部は、次の講演で中間的な紹介がなされている。

林 大 (1982)「言語行動の国際比較」

(日本行動計量学会第 10 回大会公開講演会。1982 年 8 月 28 日。この講演の草稿に手を加えたものが、『行動計量学』第 10 巻第 1 号 (通巻 18 号) に同題目で掲載されている。日本行動計量学会発行。同年 12 月)

(補注) Proxemics およびその周辺の問題を扱った行動研究は欧米で数多い。ここではそれらに言及する余裕がないが、管見に入った関連文献を列挙しておく。以下に列挙するものを含めて、Key (1977) pp.113～114 その他には、Proxemics 関係の研究が数多く挙げられている。

Argyle, M. (1975), Birdwhistell, R. L. (1970), Hall, E. T. (1966), Hall, E. T. (1977), Goffman, E. (1963), Hinde, R. (ed. 1972), Key, M. R. (1982), Kendon, A., Harris, R. M. & Key, M. R. (ed. 1975), Laver, J. & Hutcheson, S. (ed. 1972), Montague, A. (1971), Watson, O. M. (1970), Weitz, S. (ed. 1974). 以上。

5.1.2. 想定された相手

まず、質問 (1), (2) で得られた A さん～D さんの、回答者との関係について結果を示しておく。回答者の属性別集計はのちの分析に利用しないのでここでは省く。

(1) A さん (疎・同性)

	日 本 人		ド イ ツ 人	
	社会人	学 生	社会人	学 生
学校の友人	14.7	71.7	15.3	35.0
近所の人	36.2	20.1	22.0	14.0
同 僚	11.9	2.0	30.5	29.0
仕事上の知人	29.9	2.7	11.9	3.0

その他	1.0	1.4	16.9	19.0
無 答	6.3	2.0	3.4	—
<hr/>				
回答者数	511 人	587 人	59 人	100 人 (以下同じ)

(2) Bさん(疎・異性)

	日 本 人		ドイツ人	
	社会人	学 生	社会人	学 生
学校の友人	9.4	72.1	8.5	29.0
近所の人	39.9	17.4	16.9	11.0
同 僚	10.6	1.0	44.1	34.0
仕事上の知人	29.4	2.7	10.2	5.0
その他	3.7	4.3	15.3	19.0
無 答	7.0	2.6	5.1	2.0

(3) Cさん(親・同性)

	日 本 人		ドイツ人	
	社会人	学 生	社会人	学 生
学校の友人	28.6	72.1	13.6	40.0
近所の人	1.6	1.2	3.4	6.0
同 僚	25.2	4.1	22.0	16.0
仕事上の知人	7.6	0.9	—	—
兄弟姉妹	14.1	8.7	15.3	14.0
親 子	13.1	9.4	22.0	11.0
親 類	3.5	1.4	5.1	1.0
その他	0.8	0.4	11.9	12.0
無 答	5.5	2.0	6.8	—

(4) Dさん(親・異性)

	日 本 人		ドイツ人	
	社会人	学 生	社会人	学 生
配偶者	39.9	1.5	22.1	3.0

兄弟姉妹	19.2	19.4	}	71.1	88.0
その他	33.7	76.2			
無 答	7.2	2.9		6.8	9.0

Aさん、Bさんという疎の相手として想定された人では、近所の人と仕事上の知人が日本人の社会人に目立つ。これに対してドイツでは同僚が多いが、これは選択肢 (Kollege / Kollegin <同僚・仲間の男性形／女性形>) の表現が日本語の「同僚」より広い概念で、学校仲間、先輩・後輩、上司・部下なども含むものであることが関係していよう。

Dさん (親・異性) についてドイツでは選択肢を日本ほど細かく掲げなかった。日本の学生では上表で「その他」にまとめた 76.2 % のうち、48.6 % が学校の友人と答えている。ドイツでも特に学生では、この回答が「その他」に高い比率で含まれていると推測される。

以下で、具体的な場面についての回答結果を示す際、繁雑になるのを避けて、必ずしも全ての場合に上記の想定された相手別の集計は示さず、Aさん、Bさん……でまとめて集計するにとどめることが多い。特に回答数の少ないドイツではそうせざるを得ないが、回答が上記のような関係の人を想定して寄せられたものであることはいつも留意されているべきである。

5.2. 出会ってから，着席するまで

5.1.1.に示したとおり，質問で設定した（３）～（７）の場面は，人に街で出会い，立ち話をし，並んで道を歩き，レストランに入って着席する，という，一連の流れの中でとらえたものである。対人的な空間的要素を問題にしうる場面はもちろん他にも多く考えられようが，ここでは，場面間に連続性をもたせ，回答する際にいくらかでも“リズム感”が感じられるようにとの配慮をした。

以下，項にわけて，各場面の結果を示す。

5.2.1. 出会ったときのあいさつ・接触

設問（３）では，街で相手に出会ったときの最初のあいさつ行動を，身体の距離・接触をふくめた次のような選択肢を掲げて質問した。

1. 相手を見てほほえむ (Ich blicke ~ an, lächle nur und berühe ~ nicht.
〈～ヲ見テホホエミ，～ニハ触レナイ〉)
2. 軽く手をあげる (Ich hebe nur die Hand und berühe ~ nicht. 〈手ヲアゲルダケデ，～ニハ触レナイ〉)
3. 会釈する（頭を軽く前にたおす） (Ich nicke leicht mit dem Kopf. 〈頭デ軽クウナズク〉)
4. おじぎをする（上半身を軽く前にたおす） (Ich verbeuge mich und beuge den Kopf. 〈オジギヲシ，頭ヲマゲル〉)
5. 片手で握手する (Ich gebe ~ die Hand. 〈～ト（片手デ）握手スル〉)
6. 両手で握手する (Ich gebe ~ beide Hände. 〈～ト両手デ握手スル〉)
7. 相手の肩に手をおく (Ich lege meine Hand ~ auf die Schulter. 〈～ノ

肩ニ自分ノ(片)手ヲ置ク>>

8. 相手の肩をたたく (Ich klopfe ~ auf die Schulter. <~ノ肩ヲタタク>>)

9. 相手を抱く (Ich umarme ~. <~ヲ抱ク>>)

10. ほおずりする (Ich drücke meine Wange an die von ~. <ホホヲ, ~ノホホニツケル>>)

11. キスをする (Ich gebe ~ einen Kuß. <~ニ接吻スル>>)

(1) 4人の相手ごとの結果

以下、Aさん～Dさんのそれぞれを相手にした場合ごとの結果を、主として男女別のヒストグラムによって見ていく。図示するにあたっては、次のような原則によっている。

① 回答は、それぞれの場合に選択肢を三つまで同時に選んでよいとした。ここではそのうち、回答欄の第1欄に記入されたものの集計を図示する。回答結果の全体を見渡すと、結果的に、第1欄だけの結果と、三つの欄の総和の結果と、少なくとも選ばれた順位においては（比率は動くが）かなり並行的な状況にあるといえる。そこで、ここでは簡潔のために第1欄の結果だけを図示することとした。ただし、場合によっては、たとえば「ほほえむ」という表情と「手をあげる」という動作とが第1位と第2位を占めるような場合、具体的には「手をあげながらほほえむ」というように、両者が同時に選ばれることが多いと解釈すべき例がないわけではない。選択肢の内容が共起可能なもの同士である場合はその可能性が残っている。しかし、質問では、表情・動作・位置などを区別していないので、厳密にこうした例を特定することは残念ながらできない。

② 日本人については、社会人と学生をそれぞれ男女にわけて示すが、ドイツ人は人数が少ないため、全体 (159 人) の性別だけを扱う。年齢層別の集計は必要な場合だけ本文でふれるにとどめる。

③ 日本人の社会人と学生の間にあまり差異がない場合は、どちらか一方だけ図示し、他方は、図の横に数値だけ示すにとどめる。主として社会人の結果を図示した。

④ 掲げた選択肢のうち、日本人とドイツ人のいずれかに1%程度以上の回答がみられ、日・独を対照するうえで必要と思われたもののみ図示する。

⑤ 無答、「その他」は図示しないのを原則とする。

(i) Aさん(疎・同性)の場合

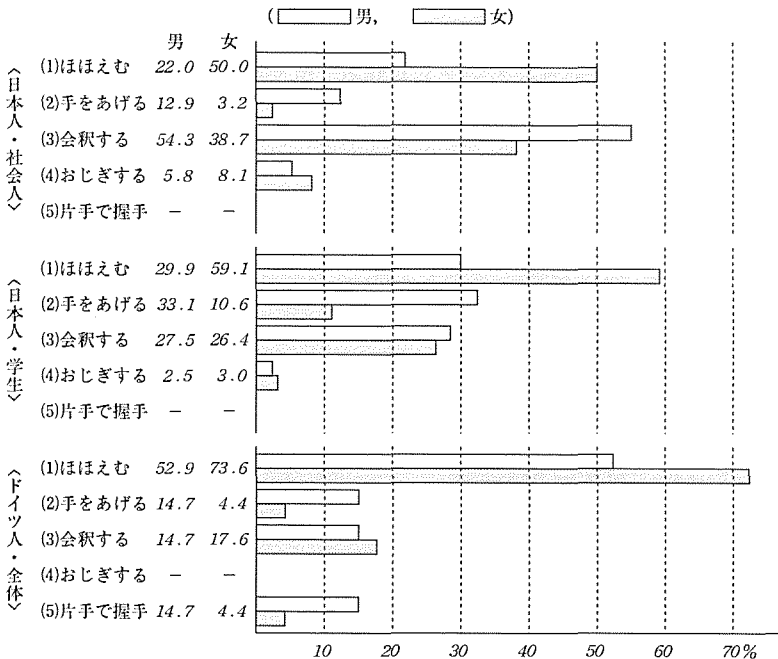


図5-2 出会ったとき — Aさん(疎・同性)

図5-2に結果をならべた。三つの図はたがいに異なる様子を示している。

日本人の社会人では、男性で「会釈する」が、また女性で「ほほえむ」がそれぞれ半数に選ばれ最も多く、次いでこの二つが入れかわって男女各々の第2位を占め、合計して8割弱(男)～9割弱(女)という大半をおおっている。図は省くが、年齢層別にみてもこの概略はかわらず、ただ、「会釈する」が若年層(49.7%)より中年層(58.8%)で高く、「おじぎする」が若(5.1%)・中(3.7%)より壮年層(10.9%)で高い比率を占め、高年者ほどあらたまったあいさつが増える傾向がみられる。一方、学生では、女性に「ほほえむ」が6

割と多いのは社会人とかわらないが、男性では「手をあげる」「ほほえむ」「会釈する」がそれぞれ3割前後でならぶ。こうした日本人とちがって、ドイツ人では「ほほえむ」が他を圧して多く、「会釈する」が男性で第2位に現れるといっても2割以下である。

「おじぎ」が1割以下ながらも現れる日本人と現れないドイツ人の対比、およびその逆でドイツ人の特に女性にみられる「片手で握手」が日本人にみられないという対比も注目される。(6)以降の、相手への接触度の高い選択肢は、日・独とも、疎・同性のAさんにはまだ現れない。

(ii) Bさん(疎・異性)の場合

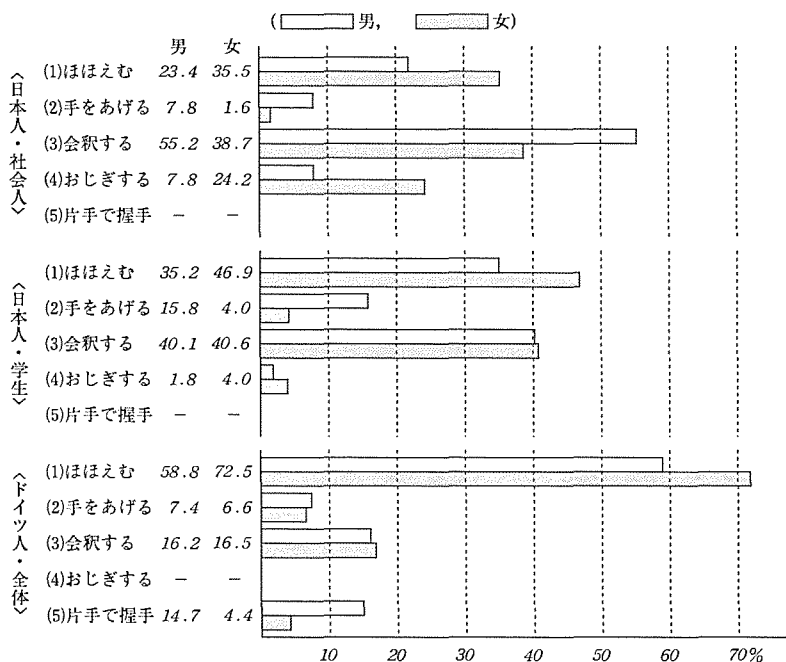


図5-3 出会ったとき — Bさん(疎・異性)

図5-3を、前の図5-2と比べながら見ると、日本人の社会人男性ではほとんど変化が見られないのに対して、女性で「ほほえむ」が減り「おじぎする」が増えているのが目立つ。「ほほえむ」は壮年層でわずかに減るだけであるから

(若：30.8%→30.3%，中：20.9%→24.1%，壮：24.0%→17.8%)，その減少には性の要因が効いているようである。学生では，男性の「手をあげる」比率が半減し（Aさん：33.1%→Bさん：15.8%），「会釈する」割合が伸びたことと，女性で，社会人女性と同じ「ほほえむ」が減り「会釈する」が増える動きのあることの2点が指摘できる。AさんとBさんの性のちがいにより，日本人では以上の変化があるのに対して，ドイツ人にはほとんど変化がみられない。

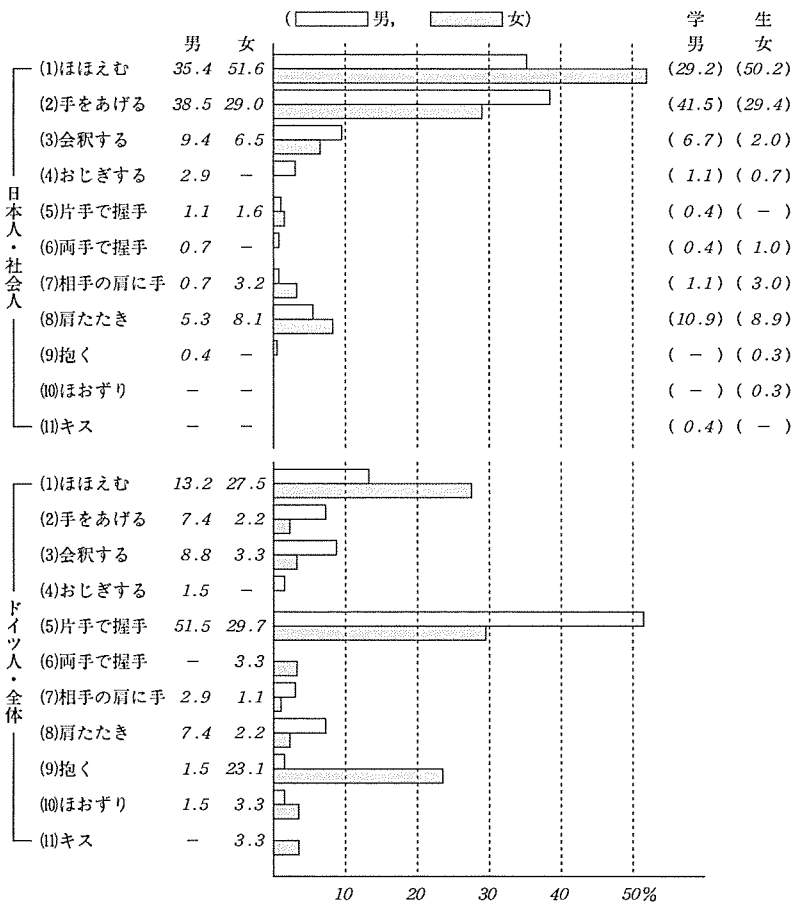


図5-4 出会ったとき——Cさん（親・同性）

(iii) Cさん(親・同性)の場合

図5-4に、日本人の社会人とドイツ人の結果を図示し、日本人学生は数値だけを示す。

疎の関係にあるA、Bさんの場合に比べて、親しいCさんの場合は「(6)両手で握手」以後の、接触度の大きな選択肢が多かれ少なかれ選ばれていることが特徴的である。日本人については、同性という条件で一致するAさんと比べて、社会人・学生とも、また男女とも、「会釈する」「おじぎする」が大きく減り、かわって「手をあげる」が増える。男性では「ほほえむ」が増えることも指摘できる。「片手で握手」「肩たたき」「相手の肩に手」など、A、Bさんに対しては現れなかった、相手に直接触れる行動が1割未満ながらも選ばれている。こうした動きは各年齢層に共通しており、特徴的なかたよりはない。

ドイツ人では、「ほほえむ」が大きく減り(Aさんの場合と比べて、男性が52.9%→13.2%，女性が73.6%→27.5%)，かわって「片手で握手」が男性で目立ち、女性ではこれと「相手を抱く」の両者が目立つ。そのほかの相手に触れる行動も、日本人より少しずつ多めに現れている。

日・独を比べれば、相手に触れない「ほほえむ」「手をあげる」が多い日本と、「片手で握手」「抱く」という接触する行動の比率の高いドイツとの対比が注目されよう。

(iv) Dさん(親・異性)の場合

図5-5に示した。日本人について、異性という共通点のあるBさんの場合と比べると親しいDさんに対しては「会釈する」「おじぎする」が減り、「ほほえむ」「手をあげる」が増える。しかし、親しさの点で共通するCさんの場合と比べると、「手をあげる」が少し減り、「ほほえむ」が少し増えるほかは、ほとんど差が見られない。つまり、性の異同という条件はあまり関与せず、親疎の要因の方が大きな働きをしていることになる。

これに対してドイツ人の方は、Bさんの場合に比べればもちろん、Cさんと比べても「片手で握手」が大きく減ったり、「抱く」「キス」の増加が顕著だったりして、明らかな差異を示す。ドイツ人は、AさんとBさんの間の差が少なかった。これらをまとめると、疎の関係にある相手には性の異同にかかわらず

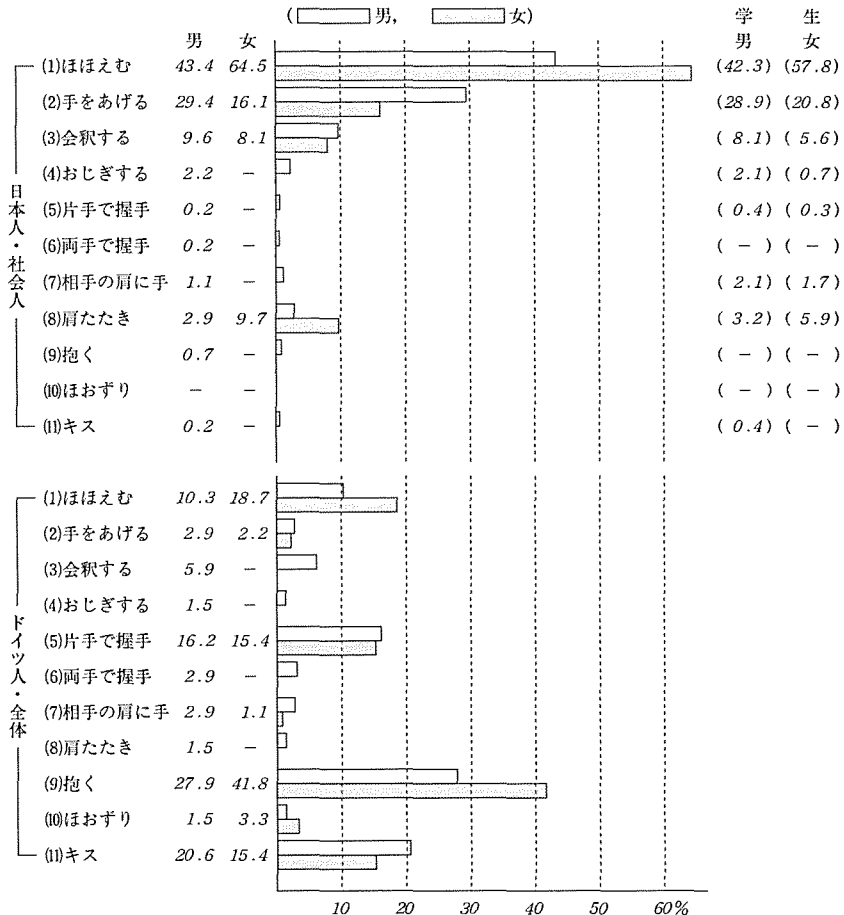


図5-5 出会ったとき——Dさん（親・異性）

「ほほえむ」「会釈する」が多く、相手に触れるとしても「片手で握手」くらいであるのに対して、親しい関係の相手には直接触れる比率が増大し、それも異性に対してはより接触の度合いが強くなる、というように、ドイツ人においては親疎の要因と同時に性の要因も（特に親の相手で）関与していると考えられる。

日・独を比べたとき、Cさんで指摘した、相手に触れない日本人と、相手に触れるドイツ人との差異は、このDさんの場合に一層顕著なものになっている。

(2) 主な行動の、相手による推移

以上はAさん～Dさんそれぞれについて「出会ったとき」のあいさつの行動を見たのだが、選ばれた行動のうちのいくつかは、日本人の男女の差や日・独の差を顕著に示す鍵になるものであった。ここでは、そうした選択肢のうち、「ほほえみ」「手をあげる」「会釈する」「おじぎする」の四つについて、それぞれの行動が相手の変化によってどんな選ばれ方をしているかの比率の推移をみておこう。図5-6から図5-9にそれぞれの行動の日本人社会人とドイツ人全体の結果を、一つの図にAさん～Dさんに対する選択率を並べる形で図示した。日本人学生については、社会人の図の横に数値だけを示す。

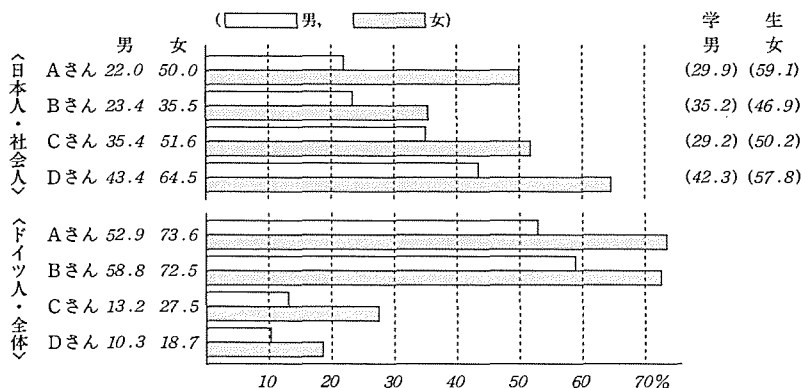


図5-6 出会ったときの「ほほえみ」

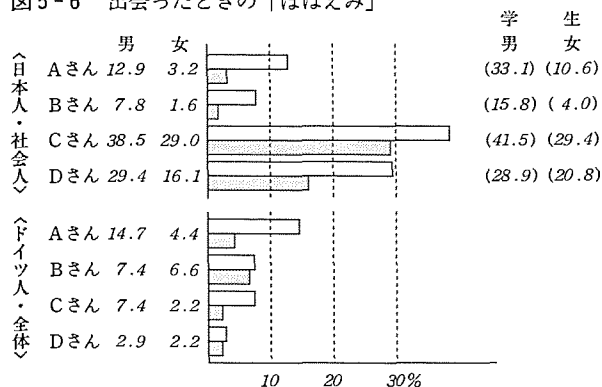


図5-7 出会ったときの「手をあげる」

「ほほえみ」(図5-6)は、ドイツ人で疎の相手(A, B)に対して多く選ばれるが親の相手(C, D)でこれより大きく減る。これに対して日本人では、男性では全く逆に、疎の相手より親の相手に対しての方が多い。また日本人女性の場合は、異性(B, D)に対しては男性と同じ傾向なのに対して、同性の相手(A, C)に対してはほとんど変化せず高い比率で選ばれている。

「手をあげる」(図5-7)は、日・独とも疎の相手に対しては似た数値を示し、特に男性は疎の同性(A)に1割強選んだのに対し、異性(B)には減るという点で日・独共通である。これに対し、親の相手の場合は、日本人では男女ともかなりの比率で選ばれるのに比べ、ドイツ人は疎の相手の場合よりむしろ

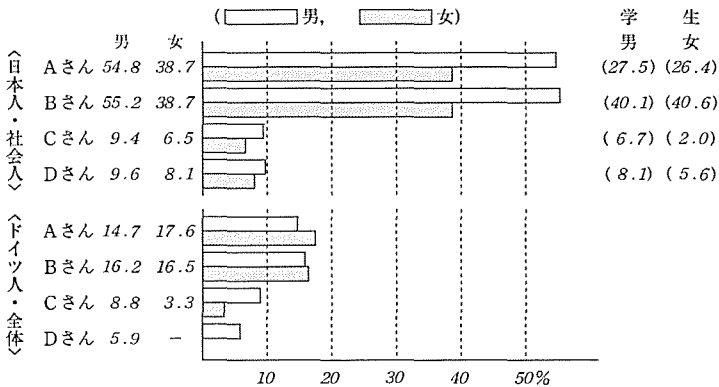


図5-8 出会ったときの「会釈する」

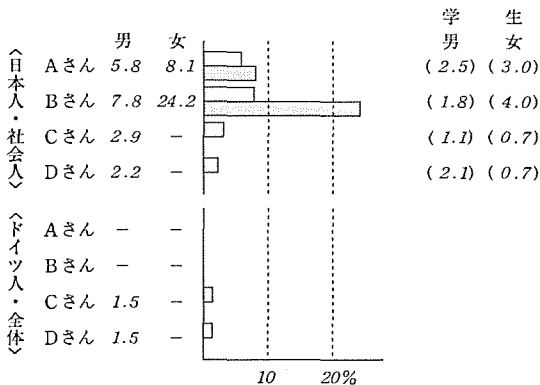


図5-9 出会ったときの「おじぎ」

ろ減る，という対比が見られる。親の相手でも同性（C）の方が異性（D）の場合より多いという特徴は，日本人では，男女共通してみられるのに対し，ドイツ人ではこの特徴は男性だけにしかみられない。これもひとつの対照すべき点だろう。

「会釈する」（図5-8）は，日本人の，特に社会人男性の，疎の相手に対する場合に多い行動で，この点について相手の性の異同はかわらない。親の相手にこれが減るのは，程度の差こそあれ日・独共有の特徴である。「会釈する」比率が日・独の間で大きく異なるのは，相手が疎の関係の人である場合であり，相手が親の関係の人の場合は，特に本人が男性であると日・独間にはほとんど差異はない。

「おじぎ」（図5-9）についても，日・独間に差異がみられるといってもそれは相手が疎の場合にはっきりしているだけであり，親の相手に対して少ないのは日・独共通のことである。

一方，日本人にほとんど選ばれず，ドイツ人に特有といえる三つの行動を，

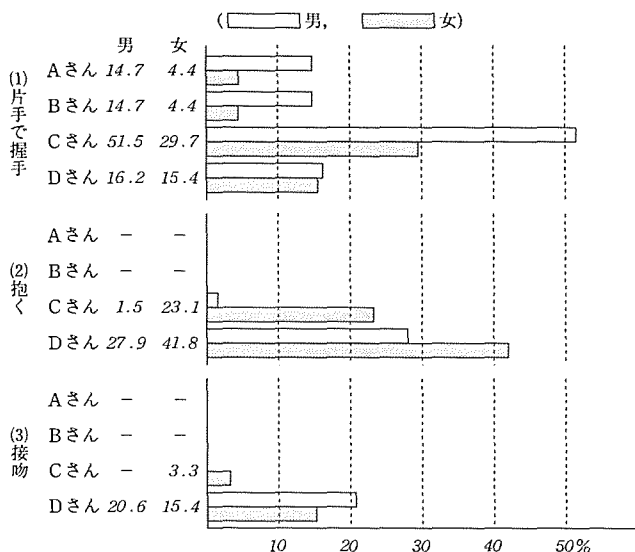


図5-10 出会ったときの，ドイツで目立つ行動（ドイツ人・全体）

図5-10に示した。「片手で握手」は親しい同性に対して特に男性がする行動であること、「相手を抱く」のは女性は親しければ性の異同によらずある程度するのに対し、男性は親しい異性だけであること、「接吻」は親しい異性にほぼ限定された行動であることなどが示されている。

(3) 想定された相手による差異（日本人）

上に述べたところは、出会う相手を親疎・性別の属性で抽象化したAさん～Dさんとしてまとめて見た結果であるが、前述（5.1.2.）のように、回答者がそれぞれ自分の周囲のどういう関係者をAさん～Dさんに想定したかは幅があった。ここでは、この、想定した相手による選択肢の選ばれ方の差について、特に注意すべき点に限って触れておく。ドイツ人は回答数が少ないので、日本人についてだけ述べる。

Aさん（疎・同性）として想定されたうち特徴的なものは「近所の人」（社会人の36.2%，学生の20.1％がこれを考えた）である。

表5-11に、比較のため「学校の友人」を想定した回答者の数値と並べて示したが、「近所の人」を想定した回答者においては、「手をあげる」が少なく、「会釈する」がかなり多いことがわかる。他に「同僚」「仕事上の知人」を想定した社会人は214人いるが、これらの回答者は「学校の友人」を想定した人に似た回答をしている（学生にはこれが少なく、表5-11で大半が含まれている）。同じように「あまり親しくない同性の知人」として想定されるとしても、近所の

表5-11 「近所の人」がAさんに想定された場合（日本人）

回答者	選択肢 想定したAさん	ほほえむ	手をあげる	会釈する	おじぎする	回答者数
社会人	学校(時代)の友人	34.7	26.7	36.0	2.7	75
	近所の人	21.1	3.8	66.5	7.6	185
学生	学校の友人	49.2	26.4	20.6	1.2	417
	近所の人	30.0	8.5	51.7	7.6	118

(注) 無答、その他は省略してある。

人は、「手をあげる」というややくだけた行動がとりにくく、逆に「会釈する」「おじぎする」というあらたまった行動がふさわしい、そのような相手と意識されていると解釈するのが適当だろう。

このことは、Bさん（疎・異性）として想定された「近所の人」についても該当する。数表は省くが、「手をあげる」が他の場合は10～15％であるのに3.4％、「会釈する」が他が40％台であるのに64.2％という差異を示している（社会人の場合）。

Cさん、Dさん（ともに親の相手）として想定されたうち、「親子」「兄弟姉妹」という家族は他と異なる状況を示す。Cさんとして想定された場合、「ほほえむ」が家族に対しては4～5割であるのに対して他では2～3割台、逆に「手をあげる」は「親子」には17.9％、「兄弟姉妹」には30.6％であるのに対して他には4～5割という対比である。Dさんとして想定された場合もほぼこれに似た結果を示す。ただ、「配偶者」は、「ほほえむ」が49.3％、「手をあげる」が29.6％で家族（血縁者）と同類だが、「肩をたたく」（6.4％）など直接触れる行動が目立つ点で、家族を含めた他と異なっている。

（4）Cさん、Dさんに「あらかじめ約束をしておいて街で会ったとき」

表5-12 会い方によるちがい（日本人・社会人）

相手	会い方	回答者 選択肢	ほ ほ え む	手 を あ げ る	会 釈 す る	肩 た た き
C さ ん	たまたま	男	35.4	38.5	9.4	5.3
		女	51.6	29.0	6.5	8.1
	約束して	男	24.5	54.3	8.5	2.7
		女	50.0	40.0	—	—
D さ ん	たまたま	男	43.4	29.4	9.6	2.9
		女	64.5	16.1	8.1	9.7
	約束して	男	34.3	43.9	7.1	1.3
		女	54.8	32.3	4.8	1.6

（注） 主たる選択肢だけを示す。回答者数；男＝449人，女＝62人。

日本人については、CさんとDさんに限って、上記のような条件をつけて追加質問をした。最も親しい人に「街を歩いていて（たまたま）会う」という場面設定は、特に都会ではやや不自然であると考えたからである。

結果は、表 5-12 のように「手をあげる」の比率が「約束しておいて会ったとき」の方が高くなるという差異で現れた。おそらく、『着イタヨ』『ア、来タ来タ』『ココダヨ』というような意味あいの「手あげ」なのだろう。たまたま会ったときの「手をあげる」行動——こちらは『オヤ』『ヤア』『アレ』というべきものか——とは異なるものと考えられる。

これ以外の選択肢は、「手をあげる」が増えた分を補う形で減っている。

5.2.2. 街で立ち話をするときの距離

掲げた選択肢は四つである。

1. 握手のできないくらいの距離

Wir sind voneinander so weit entfernt, daß wir uns nicht einmal die Hand geben könnten.

〈互イニ握手ヲ交ワセナイクライノ距離デ離レル〉

2. 握手のできるくらいの距離

Wir sind voneinander so weit entfernt, daß wir uns die Hand geben könnten.

〈互イニ握手ヲ交ワセルクライノ距離デ離レル〉

3. 相手の体に触れられるくらいの距離

Wir sind voneinander so weit entfernt, daß ich A (bzw. B, C, D) mit der Hand berühren könnte.

〈自分ガAサン（B, C, Dサン）ニ手デ触レラレルクライノ距離デ離レル〉

4. 抱きあえるくらいの距離

Wir sind uns so nahe, daß wir uns umarmen könnten.

〈互イニ抱キアエルクライノ近サニ位置スル〉

Proxemics の分野で、たとえば Hall (1968) は対人間の距離を近いものから順に, intimate distance, personal distance, social-consultive distance, public distance の 4 段階に類型化している。前の 3 段階にはそれぞれ close / not close (近相／非近相) を区別して細分化する考えも示されている。今回の調査票でも基本的にはこの 4 段階の枠組みをふまえながら、選択肢の文言としては「握手」「触れる」「抱く」という具体的な行動を鍵にして距離を表現した。

(1) 4 人の相手ごとの結果

(i) A さん (疎・同性) の場合

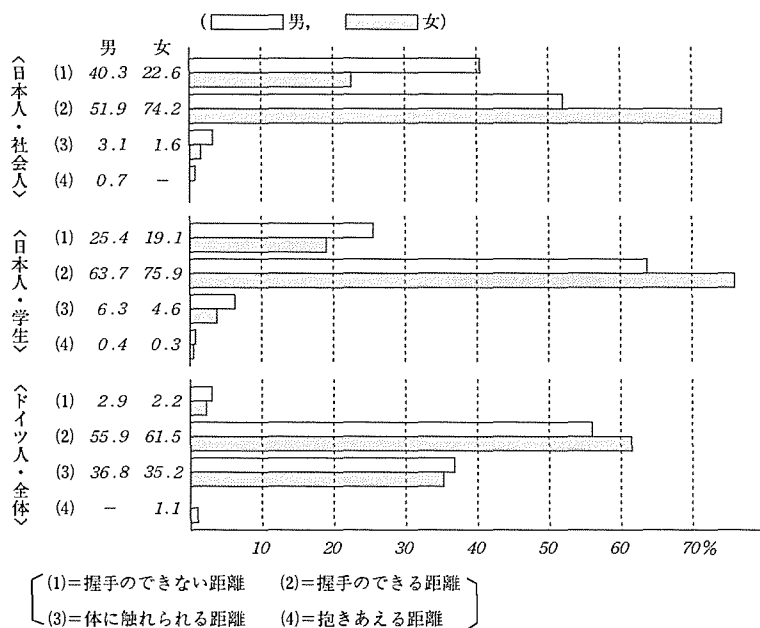


図 5-13 立ち話・距離 — A さん (疎・同性)

図 5-13 に、これまでと同様の図で示した。日本人もドイツ人も最も多いのは「握手のできる距離」である。

日本人の場合、女性は社会人も学生も 4 分の 3 くらいが「握手のできる距離」を選んだが、男性は、社会人だとこれより遠い「握手のできない距離」が 4 割

と多めで、学生は2割5分程度にとどまって、近い位置の人が高率となる。図は省略したが、年齢層別では「握手のできない距離」が年齢とともに多くなり（若31.3%，中40.6%，壮45.0%），逆に「握手のできる距離」は減る（若60.5%，中52.9%，壮48.1%）。つまり若い人は近く位置するわけである。

これに対し、ドイツ人は第2位が「体に触れられる距離」で、日本人より近い位置が選ばれている。男女の差はないといえる。

(ii) Bさん（疎・異性）の場合

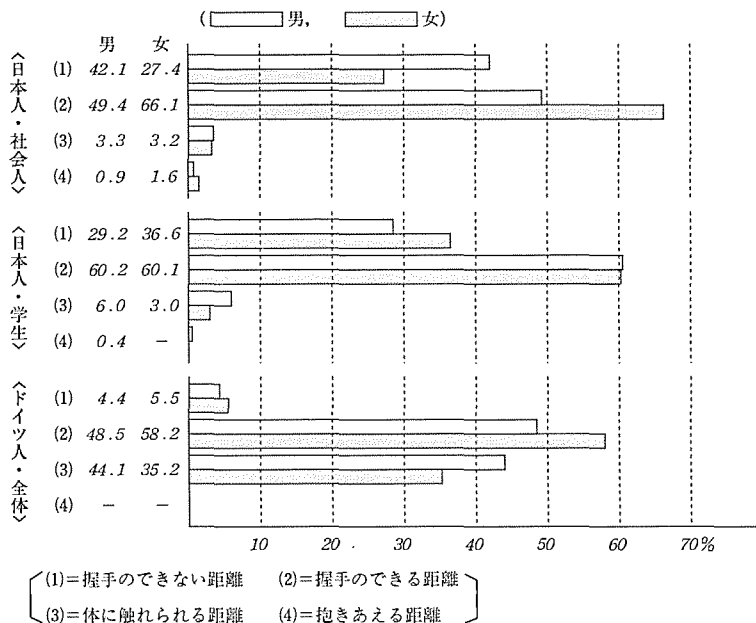


図5-14 立ち話・距離——Bさん（疎・異性）

図5-14に示す。Aさんの場合と比べて、日本人では男性はほとんど変化がないのに対して、女性は「握手のできる距離」が減り、「握手のできない距離」がその分増える。前項で見た「出会ったとき」においても、日本人女性は疎の相手に対して性の異同を気にしていたが、ここでも疎の異性には、同性に対するよりも遠い位置を選ぶ傾向がみられる。年齢差はAさんの場合と同じで、若いほど近く（といっても「握手のできる距離」）を選ぶ率が高い。

ドイツ人では、女性にはAさんの場合との差がみられないのに対して、男性では「握手のできる距離」が減り、「体に触れられる距離」が増え、日本人の動きと反対で、むしろ近づく動きを示す。

(iii) Cさん（親・同性）の場合

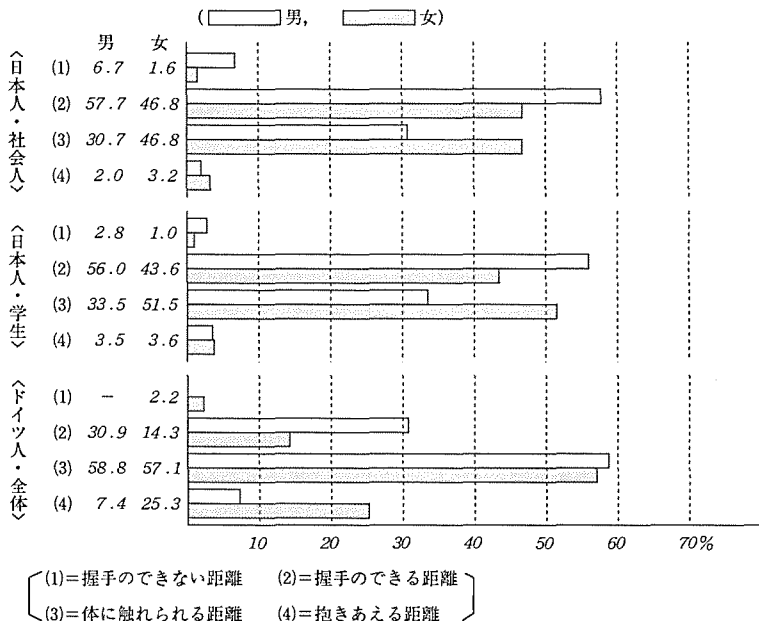


図5-15 立ち話・距離——Cさん（親・同性）

図5-15に示す。疎の相手に比べ大きく変わった状況を示す。日本人では、社会人・学生とも、男性が「握手のできる距離」が6割弱、「体に触れられる距離」が3割である。女性はこの二つが半々にわかれる。年齢層別では、やはり若い層に「体に触れられる距離」が他より多く（若38.5％、中28.9％、壮29.5％）、壮年層では「握手のできない距離」もまだ1割強残っている。

ドイツ人では、男女とも最頻値は「体に触れられる距離」（6割弱）だが、第2位は、男性が「握手のできる距離」（3割）で遠い位置、女性が「抱きあえる距離」（2割5分）で近い位置となっている。

(iv) Dさん（親・異性）の場合

図5-16に示す。Cさんの場合と比べると、日本人の男女は異なる動きを示す。

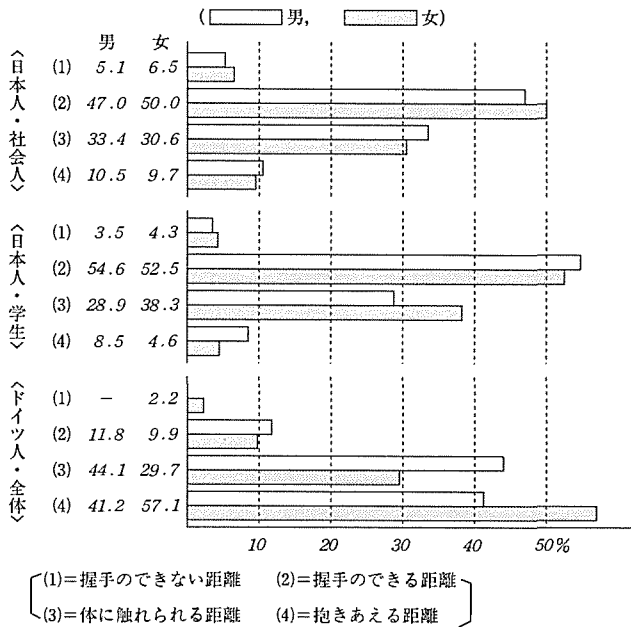


図5-16 立ち話・距離——Dさん（親・異性）

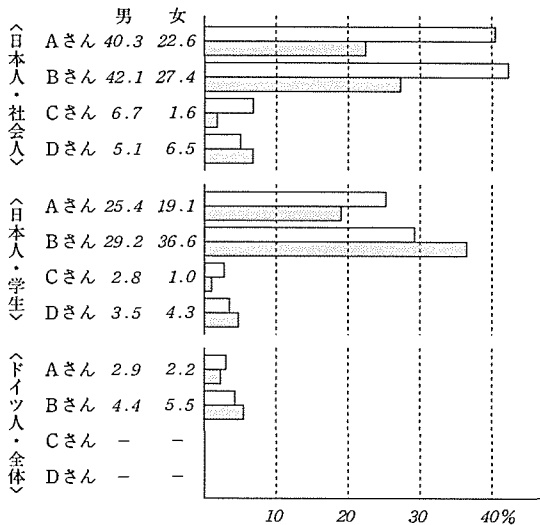


図5-17 立ち話・距離の「握手のできない距離」

女性はCさんの場合より「体に触れられる距離」が減り、「握手のできる距離」が増え、やや離れるのに対して、男性は特に社会人で「握手のできない距離」が減り、「体に触れられる距離」や「抱きあえる距離」が増え、近づく。

これに対してドイツ人は男女とも「抱きあえる距離」の比率が大きくなり、近い位置をとる人が多いことを示している。特に女性はこの傾向が強い。男性では、「体に触れられる距離」と「抱きあえる距離」がほぼ同率（4割強）だが、それでもCさんの場合より近い位置をとる人が多いことはかわらない。

(2) 主な選択肢の、相手による推移

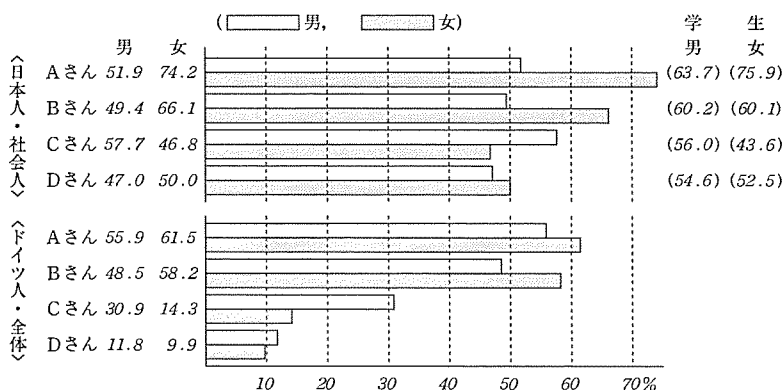


図5-18 立ち話・距離の「握手のできる距離」

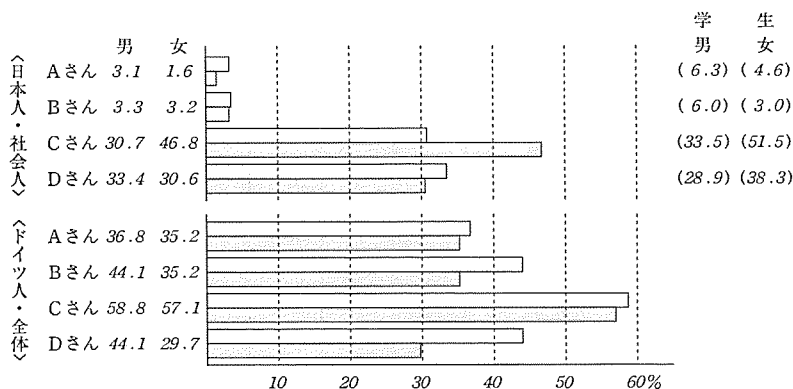


図5-19 立ち話・距離の「相手の体に触れられる距離」

図5-17~19に、「抱きあえる距離」をのぞく三つの選択肢の、相手による頻度の動きを図示しておく。「握手のできない距離」は日本人の社会人と学生を別図としたが、他は学生を数値だけですませた（図の横に示した）。

「握手のできない距離」（図5-17。p.327 参照）は疎の相手、それも異性（Bさん）で最も多く現れる。日本人には親の相手にも少しずつ現れるが、ドイツ人はこれと同程度が疎の相手に現れるだけできわめて少ない。

「握手のできる距離」（図5-18）は、大きな傾向として、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ の順に比率を下げていく選択肢である。ただ、日本人の社会人男性では親の同性（Cさん）で高い比率を占めること、日本人女性ではCさんよりDさん（親しい同性より異性）で少し高めになること、が特異な点である。

「相手の体に触れられる距離」（図5-19）は、日本人の社会人男性をのぞいて、Cさん（親・同性）で最も多く選ばれる。ただ、日本人では疎の相手にほとんど現れないのに対し、ドイツ人では4割前後現れており、明瞭な対比をみせている。

（3）想定された相手による差異（日本人）

Aさん、Bさんとして想定された関係者のうち、「近所の人」は前項と同様、他とちがった状況を示す。詳しい数表は略すが、Aさんの場合を示せば、

	握手のできない 距離	握手のできる 距離
{ 学校の友人, 同僚, 仕事上の知人 }	30.7%~31.4%	61.3%~66.0%
近所の人	53.5%	42.2%

（日本人・社会人）

上記のように、他に比べて「握手のできない距離」が多く、「握手のできる距離」が少ない。つまり、「近所の人」はより遠い位置を選ぶ相手と意識されているのである。

Cさん、Dさんとして想定された「家族」や「配偶者」は、前項で特徴がみられたが、ここでは特に他とかわる状態にはないようである。

(4) 「距離得点」による検討

上記(1), (2)でみてきた内容をまとめて見わたすため, 「距離得点」と呼ぶ数量を計算した。これは, Aさん～Dさんそれぞれについて, 「握手のできない距離」が選ばれた比率に4点, 「握手のできる距離」の比率に3点, 「体に触れられる距離」の比率に2点, 「抱きあえる距離」の比率に1点をかけ, これらを合計したものである。理論的には4点から1点の間に分布し, 小さいほど近い距離がその相手に対して意識されていることを表しうる数量である。もちろん, 与えた4点～1点という値と間隔そのものに, 選択肢の内容が厳密に反映されているという保証はない, 近似的な数量である。

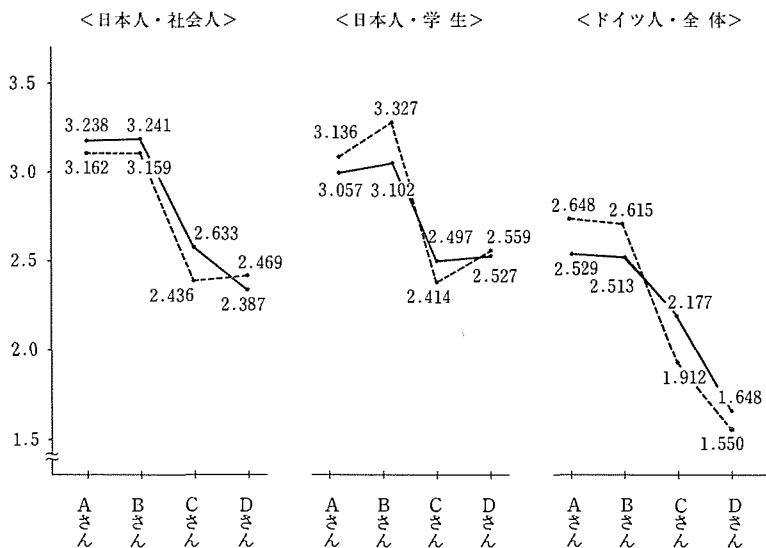


図5-20 立ち話の「距離得点」の比較 (— 男, --- 女)

図5-20に, 日本人社会人, 同学生, ドイツ人をそれぞれ男女別にして計算したところにもとづき, 便宜的に折れ線グラフを示した。前に指摘したことがらをはじめとして, 興味ある結果をよみとることができる。主なものを箇条書きで指摘する。

- ① 日本人の女子学生をのぞいて, AさんからBさんにかけては水平に推移し, 距離が変わらない。もちろんそれぞれの距離そのものは日本人社会人>同学

生>ドイツ人の順で小さくなる。日本人女子学生は疎の異性で目立って遠いという特徴を示す。

- ② BさんとCさんの間に、つまり疎から親にかわるところで、距離の減少がみられることも全てに共通する。この減少の幅は男性より女性の方が少しずつ大きい。
- ③ CさんからDさんの移行において、日本人は社会人男性をのぞいて、むしろ距離が大きくなる動きがみられる。ドイツ人は逆に、相当急激に距離がちまる。
- ④ ドイツ人が疎の人に対してとる距離は、日本人が親の人に対してとる距離に相当するような、日本人からみれば近いものである。
- ⑤ 日本人よりドイツの方が、男女の間の意識の差がいくらか大きい。ドイツ人女性の場合、男性より、疎の相手には遠く、親の相手には近く、という片寄りがはっきりしている。日本人学生にもこの性差がみられるが、Dさんでこの一貫性がくずれる。日本人社会人の女性は、相手による距離の選択幅が男性よりいくらか小さい。

5.2.3. 街で立ち話をするときの、体の向き

この設問はドイツだけで提出した。選択肢は4種類を掲げた。

- 1. Wir stehen uns gerade gegenüber.
〈我々ハ丁度正面ヲ向き合ッテ立ツ〉(↔↔)
- 2. Wir stehen in einem Winkel von ca.90 Grad.
〈我々ハ約90度ノ角度デ立ツ〉(⌟)
- 3. Wir stehen in einem Winkel von ca.120 Grad.
〈我々ハ約120度ノ角度デ立ツ〉(⌠)
- 4. Wir stehen nebeneinander.
〈我々ハ並ンデ立ツ〉(±)

これらは会話をするときの対位を調査のため類型化したものだが、より一般的には「背中あわせ」や「270度(⌠⌠)」などを含んだHall, E.T.の9段階が

表 5-21 立ち話の体の向き (ドイツ人・全体)

回答者	相手	向き					回答者数
		正面	90°	120°	同方向	無答	
男	Aさん	76.5	7.4	11.8	—	4.4	68
	B	77.9	7.4	11.8	—	2.9	
	C	80.9	5.9	8.8	1.5	2.9	
	D	77.9	4.4	10.3	2.9	4.4	
女	A	83.5	4.4	11.0	—	1.1	91
	B	82.4	5.5	11.0	—	1.1	
	C	83.5	7.7	6.6	1.1	1.1	
	D	84.6	4.4	8.8	1.1	1.1	

提案されて調査にも利用されている (Watson, 1970)。ただ、9段階のうちここでいう「4. 並ンデ立ツ」までを準備しておけば大半のデータはその範囲に入るらしいことが同書の数表からわかる。

得られた結果を表 5-21 にまとめて示す。表にみられるとおり、「正面」(選択肢 1.) が、AさんからDさんまで相手の親疎・性によらず、また回答者の性によらず、一貫して 8 割前後の高率を占めた。他の選択肢はいずれも 1 割以下(人数で 10 人以下)で、比率の動きがみられるとしても人数でいえば 2, 3 人の変化だけである。「同方向」(選択肢 4.) はほとんどいなかった。

つまり、ドイツ人は立ち話をする際、互いの体の向きを、大多数は正対する角度で構え、体を開いて構えるのは 2 割以下の少数派であること、そして、これは相手と自分の性の異同や親疎によらないこと、がわかる。

立ち話の際の対人距離は、前項のとおりいくつか注目すべき属性差や相手による差がみられたのに対し、その折の体の向きは、いわば単調である。あるいは、日常的にあまり意識化されていない対人行動であって、そのことが上表のような結果に結びついたのかもしれない。筆者の実感からすれば、日本語社会では、相手との親疎や性の異同あるいは会話への積極性などによって、たとえば真正面を向き合って話しにくい場面や逆にそうしないと無礼な感じを与えるおそれのある場面などがあり、この設問の結果は他と同様に期待されたが、十分それに答えたものとは言い難い。調査項目の量の点で割愛せざるを得なかった日本人への実施をふくめて、場面をより具体的に設定するなどの検討をふま

えた調査を今後に期したい。

5.2.4. 街を並んで歩くときの距離

立ち話ののち、街を二人並んで歩くとした場合の、二人の体の距離（横方向だから「間隔」と呼ぶべきではあるが、ここでは単に「距離」と即物的に呼ぶ）の大小を問う設問である。掲げた選択肢は八つである。

1. 肩が触れないだけの距離

Wir gehen in solchem Abstand nebeneinander, daß sich unsere Schultern nicht berühren. 〈我々ハ互イノ肩ニ触レナイクライノ距離デ並ンデ歩ク〉

2. 肩がときどき触れ合うくらいの距離

Wir gehen in solchem Abstand nebeneinander, daß sich unsere Schultern manchmal berühren. 〈我々ハ互イノ肩ガ時々触レルクライノ距離デ並ンデ歩ク〉

3. 腕を組んで歩く

Wir gehen Arm in Arm. 〈腕ヲ組ンデ歩ク〉

4. 手をつないで歩く

Wir gehen Hand in Hand. 〈手ヲツナイデ歩ク〉

5. 相手の腰に手を回す

Ich fasse ~ um die Taille. 〈私ハ〜ヲ腰ノトコロデ抱ク〉

6. 相手が自分の腰に手を回す

~ faßt mich um die Taille. 〈〜ガ私ヲ腰ノトコロデ抱ク〉

7. 互いに腕を腰に回す

Wir fassen uns um die Taille. 〈我々ハ互イニ腰ノトコロヲ抱ク〉

8. 互いに肩を組んで歩く

Wir legen uns die Arme um die Schulter. 〈我々ハ互イニ肩ノトコロニ腕ヲ置ク〉

(1) 4人の相手ごとの結果

(i) Aさん(疎・同性)の場合

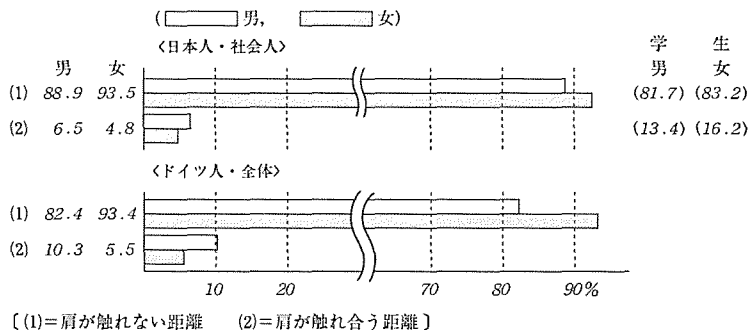


図5-22 歩くとき——Aさん(疎・同性)

図5-22に図示したように、選ばれたのは「肩が触れない距離」と「肩がときどき触れ合う距離」の二つであり、日本人・ドイツ人ともに前者が圧倒的に多い。ドイツ人男性や日本人学生で「肩が触れ合う距離」が1割を超えるが、少数派である。どちらの選択肢にも年齢層による差はない。

(ii) Bさん(疎・異性)の場合

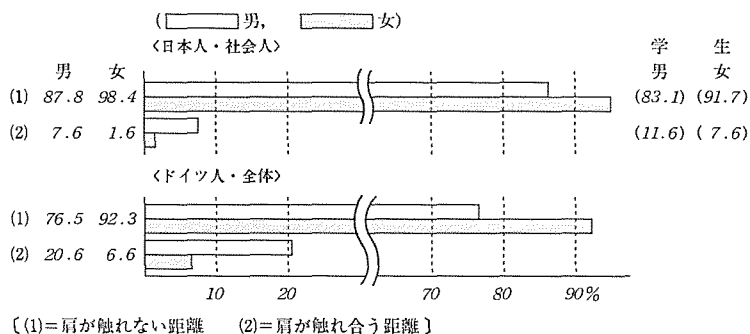


図5-23 歩くとき——Bさん(疎・異性)

図5-23に示す。ここでも「肩が触れない距離」が圧倒的に多く、他に「肩が触れ合う距離」が少し現れただけである。

前のAさんと比べると、日本人・ドイツ人とも女性はBさんの場合の方が「肩が触れない距離」を多く選んでおり、異性の相手とは遠くを歩く人が多いことを示している。これに対して、ドイツ人男性は逆で、わずかながらもBさんの場合の方が「肩が触れ合う距離」を多く選んで、より近くを歩く人の増えることがわかる。日本人の回答に年齢層差はない。

(iii) Cさん（親・同性）の場合

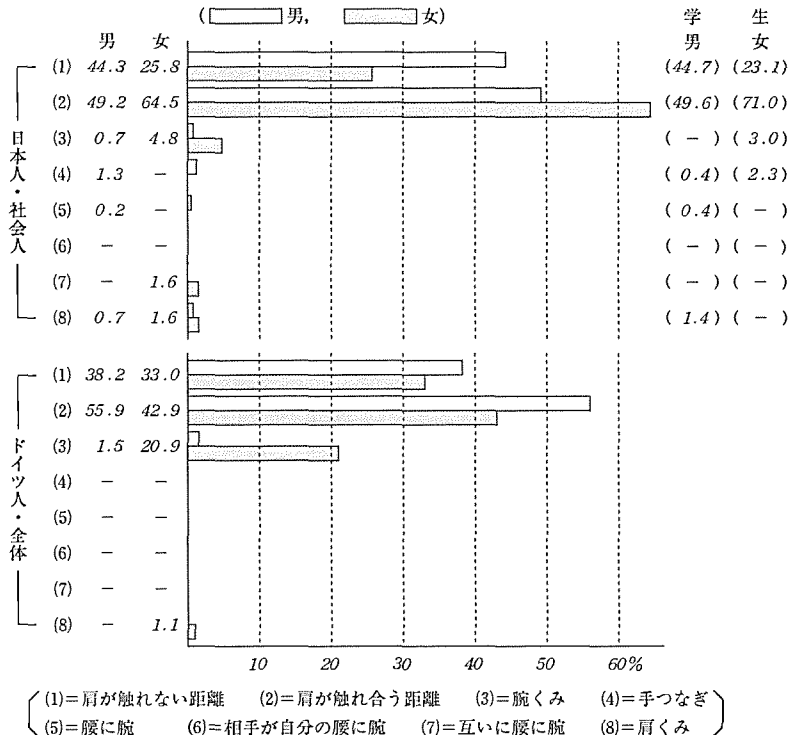


図5-24 歩くとき——Cさん（親・同性）

図5-24に示す。「腕くみ」以降の、直接ないし意識的に相手に触れながら歩く選択肢が少しずつ度数をもつものの、それぞれの図で最も多いのは「肩が触れ合う距離」で、第2位は「肩が触れない距離」である。

日本人・ドイツ人とも男性はこの1位、2位の二つが似た割合で現れ、かつその二つだけで大部分をおおっているのに対し、日本人女性は「肩が触れ合う

距離」を7割前後の多数が選び、ドイツ人女性はこの二つに「腕くみ」が続いて目立った割合を占める、という特徴を示す。つまり、日本人・ドイツ人とも親しい女性同士は、親しい男性同士より近い距離で歩いていると解釈できる。日本人について、年齢層による顕著な差はみられない。

(iv) Dさん（親・異性）の場合

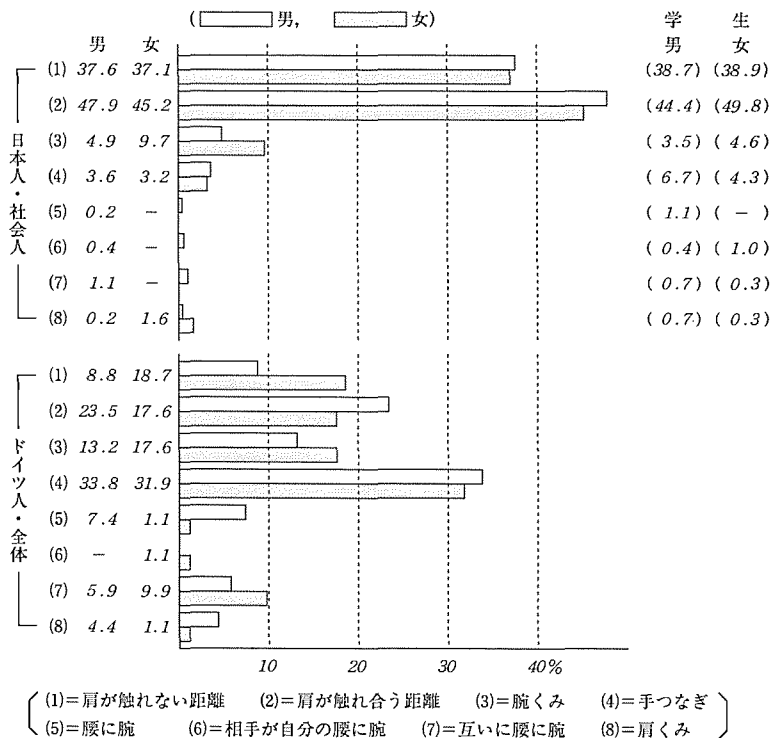


図5-25 歩くとき — Dさん（親・異性）

図5-25に示す。日・独の差異が最も大きくみられる場合である。

日本人では、Cさんの場合と比べて、男性は「肩が触れない距離」が少し減り、その分だけ「腕くみ」や「手つなぎ」が増えている。つまり近い距離を答えた人が増える。これに対して女性は、「肩が触れ合う距離」が20%程度減り、その分が、より遠い「肩が触れない距離」（約10%増）と、より近い「腕くみ」「手つなぎ」などに、つまり遠近両方向に分かれて現れている。

一方、ドイツ人ではCさんの場合との差異は非常に明瞭である。「肩が触れない距離」「肩が触れ合う距離」は2割程度以下に減り、かわって「手つなぎ」「腕くみ」「互いに腰に腕」などの近い位置の回答が目立って増える。

日本人で「腕くみ」「手つなぎ」を選んだ人は若年層（各々8.7％，5.6％）か中年層（5.9％，3.2％）で、壮年層にはほとんどいない（0.0％，0.8％）。

（2）主な選択肢の、相手による推移

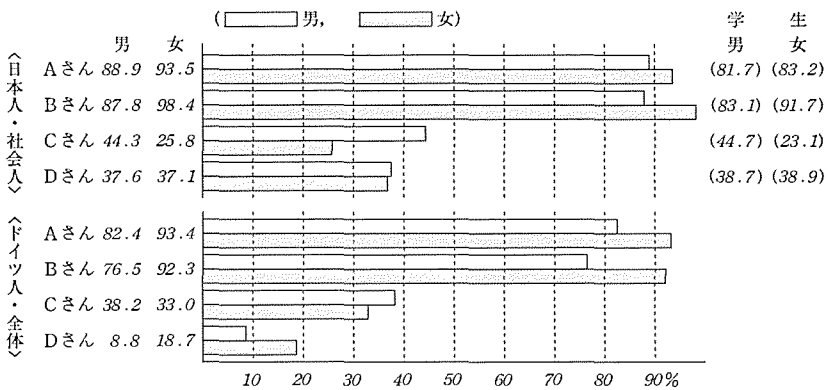


図5-26 歩くときの「肩が触れない距離」

図5-26に「肩が触れない距離」、図5-27に「肩が触れ合う距離」の、相手による選択率の動きを示す図を掲げる。

「肩が触れない距離」は、日・独とも、Aさん、Bさんでは大多数の人が選んでいるが、疎から親に至って半減する。このうち、日本人女性は、親の相手でも同性にはあまりこれを選んでいないこと、ドイツ人男性は親しい異性にはほとんど選ばないこと、などの特徴がみられる。これを選ばない場合は、すべて、より近い位置で歩くと回答することになるので注意すべき特徴である。

「肩が触れ合う距離」は、Aさん、Bさんについては「肩が触れない距離」を選ばなかった人の大部分に選ばれており、疎の相手に対する近い方の位置である。日本人においては男性がCさん、Dさんの間でほぼかわらない割合で選んでいるのに対し、女性はCさんの場合の方が多い。日本人の場合、この選択

肢より近い位置はドイツ人ほど選ばれないから、親しい相手でも、近づくとしてもこの距離までという限界を示している。女性でCさんよりDさんにこれが少ないのは、前述のとおり、かなりの部分がより遠い「肩が触れない距離」に動いたことと連動している。これに対して、ドイツ人の場合は、この選択肢よりも近い距離の回答がCさんに、それ以上にDさんに多く現れるから、「肩が触れ合う距離」がDさんに至って減るのは、日本人女性の場合と意味が異なる。

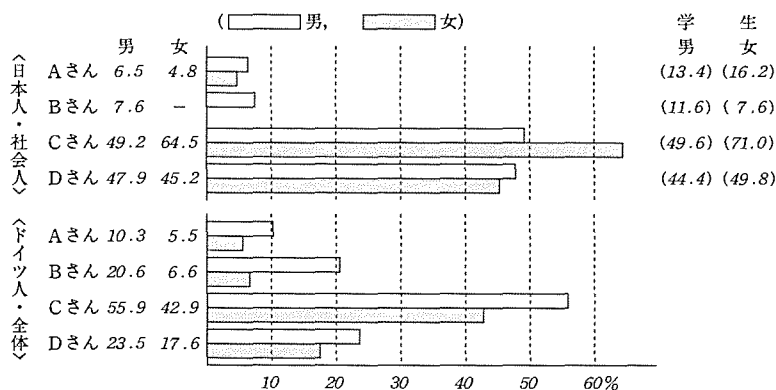


図5-27 歩くときの「肩が触れ合う距離」

図5-28に、「手つなぎ」と「腕くみ」のドイツ人による選択率を示した。「手つなぎ」は親しい異性との間での歩き方であることがわかる。「腕くみ」は、親

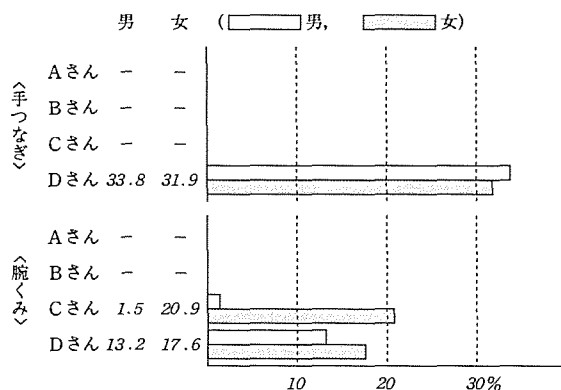


図5-28 歩くときの、ドイツで目立つ行動（ドイツ人・全体）

しい女性同士の間か、親しい異性との間かで選ばれている。

(3) 想定された相手による差異（日本人）

Aさん、Bさんについては、選ばれたのが「肩が触れない距離」に集中しているから、想定した相手の差異は無視できよう。

Cさんについては、学生回答者では「学校の友人」を想定した人と「兄弟姉妹」や「親子」を想定した人の間に差がある。

		肩が触れない距離	肩が触れ合う距離	回答者数
「学校の友人」	男	43.8 %	52.4 %	(208 人)
	女	22.9	73.4	(214)
「兄弟姉妹」	男	50.0	45.0	(20)
	女	12.9	77.4	(31)
「親子」	男	62.5	31.3	(16)
	女	30.8	59.0	(39)

特に男性回答者で、「肩が触れない距離」と「肩が触れ合う距離」との比率が、「学校の友人」想定者と家族を想定した人との間で逆転している。社会人回答者では、「学校の友人」「同僚」「兄弟姉妹」「親子」それぞれ、二つの選択肢の比率は男女とも一定していた。

Dさんについては、社会人で「兄弟姉妹」想定者と「配偶者」想定者に差がみられる。男女とも「配偶者」に対する方が「兄弟姉妹」に対するよりも近い距離に傾く。

		肩が触れない距離	肩が触れ合う距離	回答者数
「兄弟姉妹」	男	54.7 %	41.9 %	(86 人)
	女	41.7	50.0	(12)
「配偶者」	男	27.6	56.8	(185)
	女	26.3	42.1	(19)

他の関係者を想定した人は数が少ないので安定した結果とはいえないが、「学校の友人」が「配偶者」に似ているほかは、「兄弟姉妹」型が多い。「学校の友人」の中には、最も親しい異性という条件から、より親密な間柄の人を想定し

た場合が含まれていると推測できる。

(4) 「距離得点」による検討

立ち話の距離で試みた「距離得点」を、ここでは次のように算出した。相手に触れない距離として「肩が触れない距離」に2点、時々触れる距離として「肩が触れ合う距離」に1点、相手との接触が持続する、この二つ以外の選択肢に0点を与え、選択率を乗じてAさん～Dさんの「距離得点」を計算する。この場合は2点から0点の間を動き、値が小さいほど近い距離（接触する程度の高い距離）の選ばれていることを示す数量である。

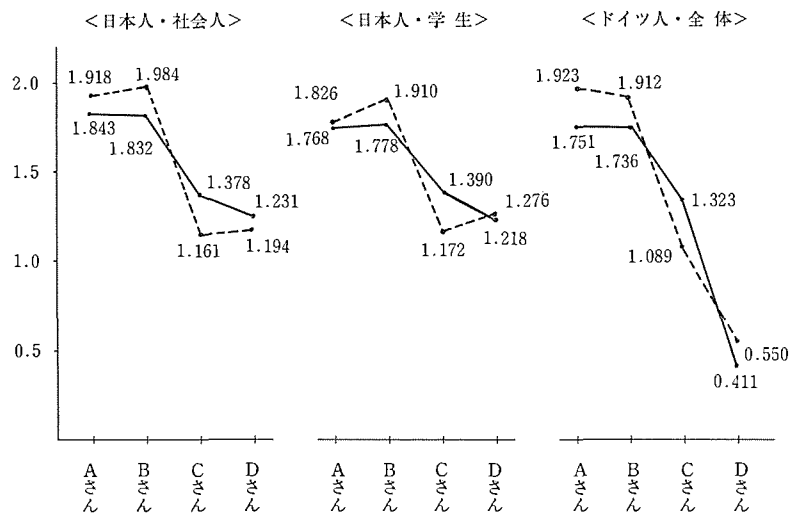


図5-29 歩くときの「距離得点」の比較 (— 男, --- 女)

図5-29に、日本人社会人、同学生、ドイツ人全体の得点を示した。注意される点を列記する。

- ① 日本人女性をのぞいて、他の回答者は、AさんからBさんへ水平に推移し、疎の相手なら性にかかわらず歩く距離がかわらないことが読みとれる。日本人女性はAさんよりBさんの方が数値が大きいく、同じ疎の相手でも異性には

遠い位置を選ぶことが示されている。

- ② 同様に、日本人女性をのぞいて、他の回答者は、CさんからDさんへ右下がりて推移しており、親しい異性には近づくことがわかる。これと逆に、日本人女性は右上がりの動きをみせ、親しくても異性には同性によりも遠ざかることを示している。①、②は、日本人女性が性の異同について他の回答者と異なる意識をもっていることを物語っている。
- ③ BさんからCさん、つまり疎の相手から親の相手にかわるところで相手との距離がちちまるのは全てに共通する。このうち、女性の方が男性より大きな変化をするのは日・独に共通する。この背景として女性は男性よりも、疎の相手には遠く、親の相手には近い位置で歩くという、レインジの大きな選択をする特徴をもっていることが指摘できる。
- ④ CさんからDさんへの推移は、日本人女性をのぞいて距離をちちめる方向のものだが、そのちちまり方は日本人男性ではゆるやかであるのに対して、ドイツ人、特に男性で急激である。
- ⑤ 疎の相手に対してとる距離は、日・独の間であり差はない。これは立ち話の際の距離の状況（前述5.2.2.(4)④）と異なる点である。ただし、親しい異性への距離には日・独の間はかなり大きな差がみられる。

5.2.5. 観察調査の試み

以上は街を二人が並んで歩く際の対人距離についての、アンケートによる意識調査の結果であるが、この点については第1章に述べたとおり、実地の観察調査を試みたので、ここでその結果を報告しておく。

(1) 観察調査の概要

この観察調査は、研究全体を進めるため研究分担者が西ドイツに滞在する間、折りを見つけては街角に20分～30分たらずみ、道をいく二人づれの「対人距離」をアンケート調査の選択肢と同じ枠組みで記録してみたものである。観察記録をとったのは、石井と杉戸の二人である。以下の点を一応の共通の目安として

実施した。

- ① 記録する二人づれ（以下「ペア」と呼ぶ）は、老若男女、人種などを問わない。街路に一定の範囲を定め、そこを通り過ぎるペアなら、目に入ったペアから記録する。
- ② 記録するとき、そのペアができれば会話中である方がのぞましい。ただ黙りこくっているペアは見逃すようにする。
- ③ ペアの構成者の性別、年齢層、関係を推定して記録しておく（このうち「関係」は「兄妹」なのか「友人」なのか「夫婦」なのかなど、外から、それも外国人としての眼で推測するのは困難だった。以下の集計では、残念ながら割愛する）。
- ④ 記録地点は、主として西ドイツのマンハイム市その他の都会だが、そのうちでも買物や仕事の人の往来の多い主要な街の道路とする。
- ⑤ 記録時間帯は、平日の午後2時から4時ごろの間を中心にする。天気は少なくとも雨や雪が降っていないことを条件とする。

記録用紙は、一つのペアの分だけ示すと次のようなものである。

性	年齢	関係	<input type="checkbox"/> 肩もふれぬ位	<input type="checkbox"/> 肩ふれあう位
<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">—</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> </div> </div>		<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> 夫婦か？ 友人か？ 兄弟か？ 親子か？ </div> </div>	<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <input type="checkbox"/> 腕くみ <input type="checkbox"/> 腰に腕まわし <input type="checkbox"/> 片方、肩に手 </div>	<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <input type="checkbox"/> 手つなぎ <input type="checkbox"/> 両方、腰に腕 <input type="checkbox"/> 肩くみ </div>

（2）観察調査の結果

調査は1回につき100組のペアを記録し、これを計14回おこなったので、全部で1400組のペアが記録できた。

ペアの性別構成は、197組（14.1％）が男同士、884組（63.1％）が男女、319組（22.8％）が女同士という割合であった。この三つごとの記録結果を、表5-30に示す。

表 5-30 観察調査——ペアの性別による集計（総数1400組）

	肩の触れない距離	肩の触れる距離	腕くみ	手つなぎ	相手の腰に腕が片方が	相手の腰に腕が両方が	肩に片方が手をかける	肩くみ	その他	ペアの数
男同士	48.2	46.7	1.0	3.0	—	—	—	1.0	—	197 ^組
男と女	15.5	23.6	27.7	24.9	2.3	2.5	1.7	0.2	1.6	884
女同士	27.6	40.4	27.3	4.1	—	—	—	—	0.7	319

結果は、ペアの性別でそれぞれに異なる様子を示している。男同士のペアは「肩が触れない距離」と「肩が触れ合う距離」の二つが約半数ずつを占め、他はほとんどない。女同士のペアはこれに比べると「肩が触れない距離」が3割弱まで減り、かわって「腕くみ」が同じくらいまで現れる。男と女の二人づれでは、「肩が触れない距離」「肩が触れ合う距離」とともにさらに比率を下げ、4分の1を占める「手つなぎ」をはじめとした、より近い距離の歩き方が増える。

こうした歩き方をまとめてとらえるため、5.2.4.（4）と同様に「距離得点」を計算すると、

男同士：1.43 女同士：0.96 男女：0.55

となり、男女のペアは非常に近い距離で歩いていること、男同士は離れて歩いていることなどがわかる。

記録には、あくまでも推定だが歩く人達の年齢が10歳きざみで得られている。ただし、たとえば「50歳の人と30歳の人ペア」は50歳のペアとみなすというように、ペアの構成員が別の年齢層に属す場合は、高年齢の人の方で数えた。いま、10代と20代を「若」、30代と40代を「中」、50代以上を「老」と区分して、表5-30で度数の多かった四つの歩き方それぞれの、年齢層別の推移をみてみよう。各年齢層での、ペアの性別構成は以下のとおりである。

	若 中 老 計			
男同士	60 組	88 組	49 組	197 組
男と女	168	411	305	884
女同士	116	70	133	319

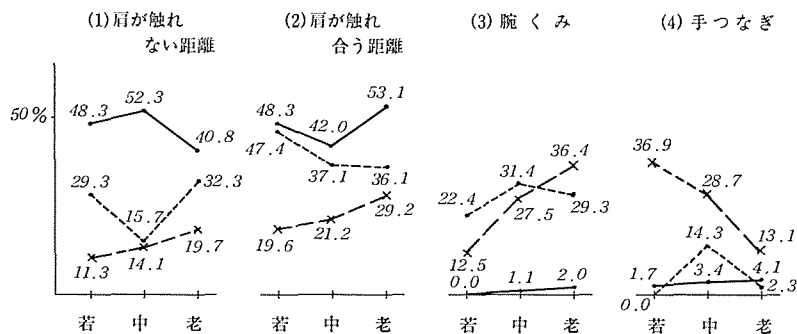


図 5-31 観察調査 — 主な歩き方の年齢層別グラフ

(— 男同士, ×-× 男女, 女同士)

図 5-31 に、4 種の歩き方の年齢層別集計を図示した。「肩が触れない距離」「肩が触れ合う距離」が男同士のペアに多いのは若・中・老の各年齢層に共通している。女同士のペアで「肩が触れ合う距離」と「腕くみ」はほぼ各年齢層に共通しているとみてよいが、中年層には「肩が触れない距離」が他より少なく、「手つなぎ」が多いという特徴がある。女の子をつれた母親というペアが思い浮かぶが、現実にはこの種のペアが特に多かったわけではない。

注目されるのは破線で示した男女のペアの数値である。「肩が触れない距離」「肩が触れ合う距離」「腕くみ」の三つが、若<中<老の順に高い比率で現れ、逆に「手つなぎ」は年齢の上昇とともに減少していく。年齢に応じた歩き方の特徴がきれいな推移を示しているといえよう。

この図からは、日本人の眼でみると日本ではちょっと想像しにくい様子が浮んでくる。たとえば、「中年や老年の女性同士のペアは 3 分の 1 が腕を組んで歩

いている」「50代以上の男女のペアは3分の1以上も腕を組んで歩いている」「中年の男女のペアは4分の1以上が手をつないで歩いている」などである。今回は、同様の観察調査を日本国内では実施しなかったが、日常の体験からして、以上のような事例はおそらく日本と対照的な点であると思われる。

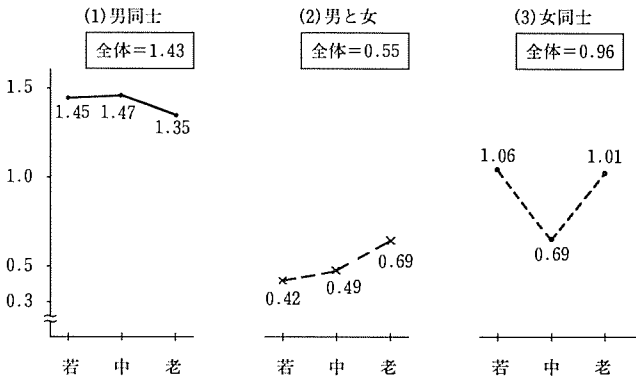
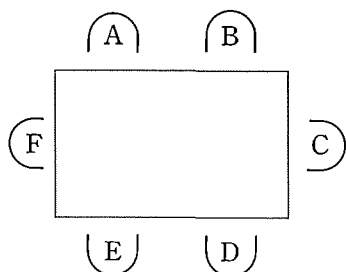


図5-32 観察調査——「距離得点」

最後に、図5-31から計算した「距離得点」を、図5-32に図示しておく。男同士は各年齢層共通して離れて歩き、男女のペアは、年齢とともに離れて歩くようになるとはいえ、全般的にはかなり近くを歩き、女性同士はこれらの中間的な歩き方をする、という対比が得られている。そしてこの結果は、アンケート調査で得られた結果のうち、図5-29に示した、親しい同性に対する場合のドイツ人男性の得点(1.323)、女性の得点(1.089)および親しい異性に対する男・女の得点(0.411, 0.550)と、それぞれの値や関係が似ており、互いに調査結果を補強しあっていると言えるものである。

5.2.6. レストランでの座席

対人的な身体的位置を扱うアンケート項目の最後でドイツ人に対してだけ質問した、レストランでの座席の占め方についてみていく。



1. AとB(またはEとD)「横並び」
2. AとF(またはBとC,
EとF,CとD)「斜め」
3. AとE(またはBとD)「近い正面」
4. CとF「遠い正面」
5. AとD(またはBとE)「対角線」

回答は、上図にもとづいて、5種類の座り方からひとつを選択してもらった。

テーブルの大きさとか、壁や窓、出入り口や通路などとの位置関係とかの、座席を選ぶ場合に条件となりそうな(あるいはマナーとして考慮に入れるべき)ことがらは排除して、ただ二人の位置関係だけをたずねた。なお、座る位置としては「AとC」「BとF」などもありうるが不自然だと考えて除外した。

回答の結果を図5-33に図示した。「遠い正面」や「対角線」の位置は、相手の親疎や性別によらず、ほとんど選ばれなかった。また「横並び」の位置も、男性回答者を中心として1割弱に選ばれたにとどまった。多くの人に選ばれたのは「斜め」と「近い正面」である。

このうち、「近い正面」は、疎の相手、特にBさん(異性)で6割強と最も多く選ばれた。これは回答者の性によらず共通する。疎の相手には、次いで「斜め」が女性回答者でやや高め(特にAさんに対して)である。

親の関係になると「斜め」が多くなる。Cさん(同性)では「近い正面」と半々を分けあい、Dさん(異性)ではこれより2割前後多くなり、最頻値を示す。これらの割合に大きな性差はないといってよからう。

図5-33では、AさんとCさん(ともに同性)の場合の間に大きな差異がみられず、BさんとDさん(ともに異性)の場合の差が大きい。つまり、座席の占め方は、相手と同性であればあまりかわらないのに対して、相手が異性であるとき、親・疎の関係にも配慮が及んで位置がかわるという関係が指摘できる。

以上、レストランでの座席について見たがこの設問も調査票や調査時間の制約から日本人と在日外国人には実施できなかった。日本では古来、座の上下

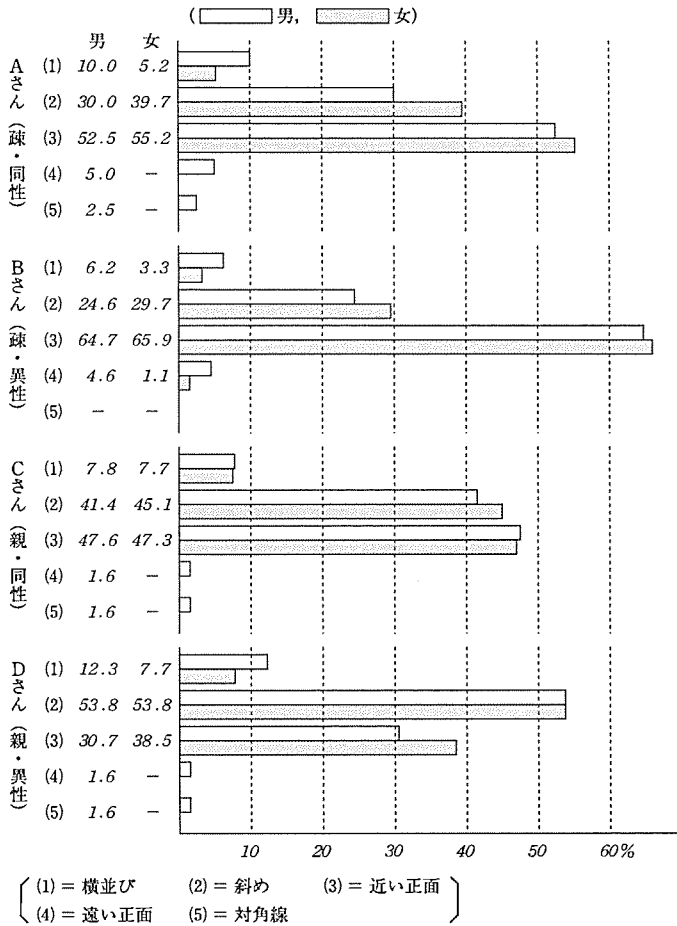


図5-33 レストランの座席 (ドイツ人・全体)

(かみしも)、正面・向こう正面などという礼法上のしきたりが待遇行動に深くかかわっている。レストランという比較的新しい環境以外での調査もふくめて、今後を期したいと思う所以である。

5.2.7. まとめ

以上、二人の人が街で出会ってからレストランに入るまでを一連の小場面と

してとらえ、二人の身体の空間的な位置・距離・接触という行動に焦点をあてて見てきた。本章で明らかになったことからいうと、全体を通じて指摘できる注意点をいくつか列記し、まとめたい。

1. 日・独の対照ができた3項目、「出会ったとき」「立ち話の距離」「歩くとき」のいずれでも、全体としてはドイツ人の方が日本人より“近い”位置で行動をするといえる。“近い”とは、「出会ったとき」では握手や肩たたき、「立ち話の距離」では握手できる距離、体に触れられる距離、抱きあえる距離、「歩くとき」では腕くみ、手つなぎなど、多かれ少なかれ、相手の身体に接触することのある行動をする際の身体位置である。
2. ただし、ドイツ人であってもすべてにわたって日本人より近いわけではなく、相手との親疎関係や性の異同によって幅はもちろんある。おおまかには、疎の相手に対する場合は日本人と同じ程度の遠さを保つことも少なくない（「歩くとき」など）。これに対して、親しい相手に対しては、あきらかに日本人より近い場合が多い。
3. ドイツ人は、親疎関係、性の異同関係のふたつを意識して対人距離を選択している場合が多い。日本人女性にもこの特徴がみられる。これに比べて、日本人男性は、どちらかといえば親疎関係に重点をおいた選択をしている場合が多い（「立ち話の距離」「歩くとき」など）。

本章の冒頭で述べたように、対人的な空間的要素は対人行動として、とりわけ言語行動に随伴する非言語的行動の一側面として重要な位置をしめることがらである。ここでは、そうしたことからいうごく一部分が検討できたにとどまる。ともすれば、「ラテン系の人には“近い”」「日本人は“遠い”」というような概括的な印象論に陥りがちなこの種の問題を考えるためには、ここで残された調査をはじめとして、また今回の調査がもっていた制約を取り除きつつ、今後とも各種の調査を積み重ねていくべきであろう。言語形式の運用と異なり、日頃それほど明確な意識をもちにくい分野のことからであってみれば、一層その必要性が痛感される。

6. 反省と今後の課題

この研究は、対照言語学的また社会言語学的な観点から、日本人とドイツ人（これに加えて在日外国人）との言語行動様式の相違点を明らかにしようとしたものである。このように日本人と外国人の言語行動の比較対照を目的とする調査研究は、国立国語研究所としては初めての試みであり、また他にも類例の少ないものの一つである。

われわれは、この研究を通じて、本書の各章節（および英文概要）で述べたような数多くの知見を得ることができた。しかし、その反面、方法論的にも調査内容面にも不十分な点が少なくない。この意味では、今回の調査研究はこれからの新しい研究へ向けてのパイロット・サーヴェイとして位置づけられるべき性格のものといえる。そこでこの章では、今回の調査の反省を中心に、今後の国際比較研究ないしは異文化接触を取り上げるときのいくつかの問題点について述べる。

（１） 被調査者の選定 ― 今回の調査対象者は機関ないし個人の伝手を求めて得られた。これは、最初に行われた、西ドイツ国内調査実施上のやむを得ない事情に起因した措置に基づいている。しかし、日本人とドイツ人との比較対照を目指すということでは、多少の困難性はあるとしても、やはりサンプリングによって被調査者を得るべきであっただろう。また、たとえ今回のような方法が避けられないものであったとしても、日本の社会人その他でみられたような、性別・年齢別などの比率の著しい片寄りが生じないための配慮はなされなければならなかったと反省される。

（２） アンケート調査 ― 前項同様、西ドイツ調査での制約上、調査法とし

て留置式のアンケート調査によらざるを得なかった。このような方法からでも本書で述べたような多くの成果が得られたわけではあるが、3章・4章でみたような具体的な場面で具体的に発せられることばを調べるには、やはり個別面接法によることが望ましい。研究費その他の面で難しい面もあるが、外国での調査を行うには、その国の言語話者に調査員として参加してもらう体制を考えるべきであろう。同じことは日本国内の外国人を対象とする調査においてもいえることである。

(3) 調査票の形式 ― 今回の調査票は、作業・実施の手順上、ドイツ語版、日本語版、英語版（在日外国人用）の順に作成されたが、この3種の調査票の間で形式上の不統一がいくつかみられている。つまり、日独英の3者またそのうちの2者の比較対照を図る項目において、①場面設定状況や質問文の微妙な違い ②回答形式の不一致（書き込み式と選択肢式、一肢選択式と多肢選択式など） ③選択肢の対応関係のずれ（呈示選択肢数、カテゴリー内容の非対応）などが散在している。この種の不統一には、翻訳上のやむを得ないずれや調査票の改良といったことによるものも少なくはないが、予め全体の見渡しを十二分に行うことで避けられたものもいくつかみられる。外国での予備調査を十分行うのは予算の面で難しいことであるが、企画段階で、日本に居住するその国の言語話者の積極的な参画をおおぐなどの工夫を行うべきであろう。

(4) 在日外国人調査 ― 今回は得られた資料の数の関係から英語話者（主にアメリカ人）に限って言及した。一口に在日外国人といっても出身国、母語別などで言語行動様式は当然異なる。今後は他言語話者に関する資料も積極的に得る努力をすべきであろう。また、在日外国人の異文化社会への接触状況をみるという点では彼らの母国での言語行動の実情を知る研究が必要であろう。同様の観点からいえば、在日ドイツ人、在独日本人を対象とする調査をも考えるべきであろう（一部実施したが、分析に堪える量までは得られなかった）。いずれも今後の課題といえよう。

(5) 翻訳 ― 質問形式や回答形式の統一化もさることながら、この種の調査研究では翻訳上の問題が大きい。誤訳は言うまでもなく論外であるが、意味上の一定の対応関係が保たれたとしてもそれで十分かという問題が残る。たと

えば、程度副詞「ときどき」(独:manchmal, 英:Once in a while また sometimes) の指す程度の範囲はどのくらい重なるか、また「会釈する」みぶりの具体的な形象とその意義・丁寧さにはどのような違いがあるか、といった問題がある。また、ある概念とそれに対応することばが、一方にあり他方にない場合の翻訳はどうするか、といった問題もある。後者は、ある言語社会で記号学的に有徴である言語行動が別の社会では無徴となるケースにもつながる問題ともいえるが、これについては(7)で再び述べる。さらに言えば、比較のための質問文と選択肢が字面として同一であったとしても、二つ以上の文化社会でその質問のねらいの同一性が必ずしも保証されるとは限らないといえる。他にもいろいろ単なる技術面を越えた翻訳上の課題が多い。今後の検討課題といえよう。

(6) 言語以外の情報——外国人、外国文化との比較調査を行う場合、言語学的な知識が必要なことは当然であるが、これとは直接的には関係しない言語以外の知識の有無も問題となる。たとえば、買物行動場面の言語行動を比較対照しようとする際には、彼我の一般的な買物行動の始発から終了の過程の実態を事前に知っておく必要がある。同じデパートでの買物といっても、4.2.で述べられているように、客と店員との最初の接触の仕方と機能、また代金の支払形態など日独間で異なるものがある。同様のことは、4.3.「道聞き」の場合の交番の有無や店の形態の違い、キオスクの設置場所と機能(4.1.)、あるいは「外国語・外国人」ということばの指す対象と範囲(2.2.)、その他随所にみられる。こういった一見枝葉とも思われるかも知れない情報を把握しておくことが、異文化比較にとって意外と重要なのである。

(7) ゼロの言語行動——前項とある意味では同じことかも知れないが、ある文化社会では当然のこととして行われる具体的な言語行動が、別の社会では存在しない、あるいは別の形で現れることがある。名刺の交換、おじぎと握手といったことがそうである。また、見知らぬ人にあいさつするか否か、そのあいさつはことばによるか、みぶりを主体とするか、といったこともある。われわれが調査票を作成する場合、どうしても日本人にとって有徴な言語行動に傾きやすい。日本では無徴であるがドイツでは有徴な行動、また両者ともに無徴

な行動を調べるための工夫も必要であろう。このためには、場面自体の研究とそこで生じうる（また、生じえない）具体的な行動を把握した上で、ある程度ユニバーサルな設問を設けることが必要であろう。ただし、これを求めるに際しては、最初は日本人の発想から、次いで外国人の立場に立って、というように立脚点を変えながら研究を進めることになろう。

（８） 言語行動様式——言語行動は場面の制約において行われるコミュニケーション行動である。本来は個人的なものであるが、その発現の仕方は、その個人が属する文化的・社会的集団の規範にある程度拘束される。つまり、特定集団に許容される言語行動の様式が存在するわけである。ただし、集団ごとに認められる行動の様式は、ある程度幅のあるものであり、また特定場面で一種しか存在しないわけではない。これを調査を通じて明らかにするには、まず具体的な場面で行われるひとりひとりの言語行動の実態を調べ、社会集団あるいは言語社会の成員に共通のまたは特徴的な言語行動を抽出することになる。とは言っても、言語行動の生じる場面の種類は大小とりまぜて無数にあるので、これをすべて調べるわけにはいかない。場面の分類整理とモデル化が必要といえる。これについては、従来から、いくつかのものが提唱されてはいるが、十分に首肯しうるものはない。今後の重要課題の一つ、というよりは、言語行動の研究はここに出発すべきものであろう。

以上、今回の調査を通じて感じた国際比較研究の問題点の一部を思いつくまに記してきた。他にも考えておかねばならない事柄は多い。この点については、今後ともいろいろな機会に論議されねばならないであろう。

われわれの今回の研究は、始めにもふれたように、パイロット・サーヴェイであり、日独の言語行動の対照研究はこれをもって完了したわけではない。これからも折をみつけて継続していきたいと考えている。また、比較対照の相手もドイツだけではなく、他の国にも広げる必要があるし、取り扱う言語行動の種類も検討の余地が多い。文化摩擦が問題になっている現在、言語学の側から、この問題の解決への資料を提供することも、この種の研究に負わされた重要な役目の一つといえようか。

日本人用調査票

I (a) まずはじめにつきの質問に答えて下さい。適切な選択肢の番号に○印を、
の部分には適切な語句を記入して下さい。

- (1) 生年月日 1. 明治 _____ 年 _____ 月生まれ _____ 歳
2. 大正 _____ 年 _____ 月生まれ _____ 歳
3. 昭和 _____ 年 _____ 月生まれ _____ 歳
- (2) 性別 1. 男 _____ 2. 女 _____
- (3) 国籍 1. 日本 _____ 2. その他 _____
- (4) 現住所 _____ 都道府県 _____ 郡市 _____ 区町村
- (5) 同居者 1. 同居者なし 2. 両親 3. 配偶者
4. 子供 (_____ 人) 5. 友人・恋人 6. その他 _____
- (6) 住居形態 1. 一戸建住宅 2. 集合住宅 (アパート・マンション等)
3. 学生寮 4. その他 _____
- (7) 生まれてから現在までの住まいの場所
0 歳から _____ 歳まで _____ 都道府県
_____ " _____ " _____ 都道府県
_____ " _____ " _____ 都道府県
_____ " _____ " _____ 都道府県
_____ " _____ " _____ 都道府県
- (8) 職業 (なるべくくわしく) _____
- (9) 学歴 1. 新制 1. 中学校 1. 卒業
2. 旧制 2. 高等学校 2. 中途退学

3. 大 学 _____ 学部 3. 在学中
 4. 短期大学 _____ 学科
 5. その他 _____

(b) つぎに外国あるいは外国語について、あなたの経験をお尋ねします。

(1) あなたが学習した外国語は何ですか。

1. 英語 2. フランス語 3. ドイツ語
 4. ロシア語 5. 中国語 6. その他 _____

(2) 日常外国人と接触がありますか。

1. ない

2. ある→それは個人的なものですか。職務上のものですか。

1. 個人的 2. 職務上 3. その他 _____

・平均して月に何回くらい外国人と話をしますか。 _____ 回くらい

・その外国人はどこの人ですか。また、その外国人とはふつう何語(日本語で話す場合も含む)で話すことが多いですか。()の中に使うことばを記入して下さい。

1. アメリカ人 (語) 2. イギリス人 (語)
 3. フランス人 (語) 4. ドイツ人 (語)
 5. ロシア人 (語) 6. 中国人 (語)
 7. その他 _____ 人 (語) _____ 人 (語)

(3) 外国へ行った(住んだ)ことがありますか。

1. ない

2. ある→どこの国へ、どのくらいの期間、どのような目的で、何歳のときに行きましたか。

(何回も行ったことのある人は最近5回まで記入して下さい)

行 先	期 間	目 的	何歳のとき
例 { 韓 国	2 週間	観 光	25 歳のとき
西ドイツ	1 年と 6 カ月	仕事で	33 歳から 34 歳まで

II 言語生活および言語意識

それぞれの選択肢の中から適切なものを選び、番号に○印をつけて下さい。また
 _____の部分には適切なことばを記入して下さい。

- (a)(1) この1カ月間に個人的な手紙やはがきを何通くらい書きましたか。
 1. 書かなかった 2. 1～3通 3. 4～5通 4. 6通以上
 ・どのような用件で書くことが多いですか。 _____
- (2) この1週間に個人的な電話を何回くらいかけましたか。
 1. かけなかった 2. 1～5回 3. 6～10回 4. 11～20回
 5. 21回以上
 ・どのような用件でかけることが多いですか。 _____
- (3) 1日平均してどのくらい新聞を読みますか。
 1. 全く読まない 2. 10分未満 3. 20分未満 4. 30分未満
 5. 30分以上
 ・どのような新聞を読みますか。よく読む順に記入して下さい。
 新聞名 _____, _____, _____, _____
- (4) 毎日平均してどのくらいテレビを見ますか。
 1. 全く見ない 2. 30分未満 3. 1時間未満 4. 2時間未満
 5. 3時間未満 6. 4時間未満 7. 5時間未満 8. 5時間以上
- (5) 新聞を駅の売店などで買うことがありますか。
 1. 買わない 2. まれにしか買わない 3. ときどき買う
 4. しょっちゅう買う
 ・どのような新聞を買うことが多いですか。
 新聞名 _____, _____, _____, _____
- (6) 近所の人とおしゃべりするのは好きですか。
 1. 嫌いなほう 2. 好きなほう 3. どちらともいえない
- (7) 集会や会議などに出席するのは好きですか。

1. 嫌いなほう 2. 好きなほう 3. どちらともいえない

(8) 待合室で見知らぬ人に話しかけますか。

1. 話しかけないほう 2. とくどき話しかけるほう
3. どちらともいえない

(9) 手紙や日記を書くのは好きですか。

1. 嫌いなほう 2. 好きなほう 3. どちらともいえない

(10) 新聞や雑誌などを読むのは好きですか。

1. 嫌いなほう 2. 好きなほう 3. どちらともいえない

(b)(1) 「外国語」ということばを聞いたとき、何語を思いうかべますか。

思いうかぶ順に記入して下さい。

_____, _____, _____, _____

(2) 日本に来ている外国人は、当然日本語を話すべきだと思いますか。

1. はい 2. いいえ 3. わからない

(3) 外国人が日本語を学んで、日本人と同じくらい上手に話せるようになると思いますか。

1. ほとんどの人が話せるようになる
2. かなりの人が話せるようになる
3. 話せるようになる人は少ない
4. 全然いない 5. わからない

(4) 顔見知りの外国人が、まちがった日本語で話したら、直ちに訂正しますか。

1. 必ずする 2. することが多い 3. とくどきする
4. まれにしかしない 5. しない
6. その他 _____

(5) 外国人に片言の日本語で道を聞かれたら、どうしますか。

1. ふつうの日本語で道を説明する
2. とくにゆっくりと、はっきりした日本語で、道を説明する

3. 片言の日本語で話す（さもなければ通じないと思うから）
4. 英語で道を説明する
5. 何語が話せるか確めて、もしそのことばができれば、そのことばで道を説明する
6. 何も言わないで（あいまいに、にやにやしながら）手を左右に振って逃げる
7. その他_____

III きまったあいさつ

私たちは毎日の生活の中で、あるきまったあいさつ（ことばづかいだけでなく、身振りも含めて）をすることが多いと思います。

(a) まず、家庭の中でのあいさつについてお尋ねします。

イ) あいさつを「する」か「しない」かに○印をつけて下さい。

ロ) 「する」に○印をつけたときには、そのときのことばを_____に記入して下さい。

また、どんな身振りをするかについては で囲んだ「身振りの選択肢」の中から適切なものを選んでその番号を（ ）に記入して下さい。

ハ) 同時に二つ以上の身振りをするときには、二つ以上の番号を記入してもかまいません。

ニ) 適切な選択肢がない場合には、身振りを具体的に「その他_____」に記入して下さい。

身振りの選択肢

- | |
|---------------------------|
| 1. 深々とおじぎをする（上半身を深く前にたおす） |
| 2. おじぎをする（上半身を軽く前にたおす） |
| 3. 頭を軽く前にたおす |
| 4. 上半身は動かさず軽くひざだけを折る |
| 5. あごをしゃくる |
| 6. 手をあげる |
| 7. 手を振る |
| 8. 握手をする |
| 9. 抱き合う |
| 10. キスをする |
| 11. 床や畳などに正座しておじぎをする |
| 12. 帽子をとる |
| 13. 帽子に手をやる |

- (1) 夕食を食べ始めるとき、きまったあいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
→ 身振り () () () その他 _____

- (2) 夕食を食べ終わったとき、あいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
→ 身振り () () () その他 _____

- (3) 以下の(4)~(9)の質問については家族の中から一名を選び、その人を思い浮かべて答えて下さい。

- ・いま想定した人の番号に○印をつけて下さい。

1. 父 2. 母 3. 兄弟姉妹 4. 子供

5. 配偶者 6. その他 _____

- ・その人は何歳くらいの人ですか。 _____ 歳

- (4) 朝起きてその人 ((3)で○印をつけた人) にはじめて会ったとき、あいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
→ 動作 1. 立って 2. 座って
→ 身振り () () () その他 _____

- (5) 夜寝る前に、その人にあいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
→ 動作 1. 立って 2. 座って
→ 身振り () () () その他 _____

- (6) 外出するとき、その人にあいさつをしますか。

1. しない
 2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立って 2. 座って
 → 身振り () () () その他 _____

(7) その人が外出するとき、あなたはあいさつをしますか。

1. しない
 2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立って 2. 座って
 → 身振り () () () その他 _____

(8) 帰宅したとき、家にいるその人にあいさつをしますか。

1. しない
 2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立って 2. 座って
 → 身振り () () () その他 _____

(9) その人が帰宅したとき、家にいるあなたはあいさつをしますか。

1. しない
 2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立って 2. 座って
 → 身振り () () () その他 _____

(b) つぎに、道で知人に会ったときのあいさつについてお尋ねします。

以下の(1)～(5)の質問では、該当する動作に○印をつけ、身振りについては

☐ 中の選択肢から適切なものを選び、その番号を()に記入して下さい。

身振りの選択肢

1. 深々とおじぎをする(上半身を深く前にたおす)
 2. おじぎをする(上半身を軽く前にたおす)
 3. 頭を軽く前にたおす
 4. 上半身は動かさず軽くひざだけを折る
 5. あごをしゃくる 6. 手をあげる

- | | |
|-----------|-------------|
| 7. 手を振る | 8. 握手をする |
| 9. 抱き合う | 10. キスをする |
| 11. 帽子をとる | 12. 帽子に手をやる |

(1) 朝のうち、道で近所の親しい人に会ったとき、あいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
 → 身振り () () () その他 _____

(2) 昼ごろ道で近所の親しい人に会ったとき、あいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
 → 身振り () () () その他 _____

(3) 夕方道で近所の親しい人に会ったとき、あいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
 → 身振り () () () その他 _____

(4) 今日が誕生日の同性の知人に会ったとき、どうしますか。

1. 何もしない

2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
 → 身振り () () () その他 _____

(5) 家族に不幸があった知人に会ったとき、どうしますか。

1. 何もしない

2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
 → 身振り () () () その他 _____

IV 買 物

(a) 駅の売店でいつも買う（値段のわかっている）新聞や週刊誌などを買うときの行動についてお尋ねします。

(1) まず、あなたが駅の売店で（よく）買うものを一つ想定して下さい。

1. 新聞 2. 週刊誌などの雑誌類
3. たばこ 4. その他 _____

(1)で選んだ品物を買うときどんな買い方をすることが多いですか。また店員はどんな売り方をすることが多いですか。もっともふつうだと思う行動を選んでその番号に○印をつけて下さい。

(2) 何がほしいかを店員に伝えるとき（その品物は客からも店員からも届く所に並んでいるとする）

1. 自分でとって、店員にだまってこれを示すことが多い
2. 自分でとって、「すみません」、「これ」くらいは言って示すことが多い
3. （店員にほしいものをつげ）とってもらようにすることが多い
4. （店員にほしいものをつげ）自分でとることが多い

(3) 代金を出すとき、あなたは

1. （値段がわかっているの）何も言わずにお金を出すだけのことが多い
2. 「これでいいの?」、「はい」くらいは言って出すことが多い
3. 出す金額を言うことが多い。例えば「はい、〇〇円」

(4) 店員はどういう売り方をすることが多いですか。

1. だまってお金を受けとるだけ。また、おつりがあってもだまって渡すだけ
2. 「ありがとう」くらいは言う
3. 新聞名などを確認したり、代金やおつりの金額を言ったりするなど、はっきりことばを発する

(5) 買い終えて店を離れるとき、あなたは

1. だまって離れる。おつりがあってもだまって受けとることが多い
2. 「どうも」、「ありがとう」くらいは言うことが多い

- (b) デパートで万年筆を買うとします。もしその場で選んで買うとしたらどんな買い方をしますか。

- (1) まず、買いに行くデパートをどこにするか。だいたいいくらくらいの万年筆を買うかを頭の中で決めて下さい。

想定したデパート _____ 所在地 _____

想定した金額 _____ 円くらい

以下(2)~(10)のそれぞれについて、もっともふつうだと思う買い方を選びその番号に○印をつけて下さい。

→がついた番号を選んだときは、それぞれの質問に応じて、そのとき使うと思うことば、あるいは、身振りを記入して下さい。

- (2) 万年筆が並んでいるケースに近づいたら

1. まずこちらから店員を呼び、相談する

→何と言って店員を呼びますか。 _____

2. 店員に話しかけられれば答えるが、こちらから呼んだりはないで品物をながめて、できるだけひとりで選ぶ

3. 店員が話しかけてきてもできるだけさけ、だまって品物を見ようとする

- (3) 万年筆のショーケースに客が近づくと店員はどうすることが多いと思いますか。

1. すぐに客に話しかけてくることが多い

→何と言って話しかけてくることが多いですか。 _____

2. 客から呼ばれるまで話しかけてこない店員が多い

- (4) ショーケースに近づいたら店員が話しかけてきました。そんなときはどうしますか。

1. こちらの希望を言ったり、意見を求めたり、積極的に話す

2. 店員に答えはするが、自分で探すのでひとりにしておいてくれるよう断わる

→何と言って断わりますか。 _____

3. だまってその店員から離れ、自分だけで品物を見てまわる

- (5) これはと思う万年筆がみつかったら、ペン先の太さ、インクの入れ方、など

使い方を聞きますか。

1. 得心のいくまで店員に聞く 2. いちおう聞いておく
3. あとで説明書を読めばわかることだから聞かない

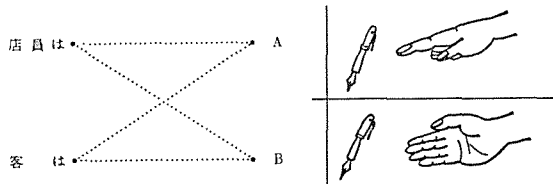
(6) 万年筆を手にとって、手ざわり、書きあじを試すことはできますか。

1. だいたいどの店でも試させてくれる
2. ほとんど試させてくれない店が多い

→ その場合、試させてくれと要求しますか。

1. 必要なことから要求する
2. 必要でもないし、商品に手を触れない方がよいので要求しない

(7) 万年筆を手や指でさし示すとき、客と店員はそれぞれどんな手振りで示すことが多いですか。人とその手振りを実線で結んで下さい。



(8) 買う万年筆が決まったとき、店員にふつうどう言いますか。そのときのことばを記入して下さい。 _____

(9) 買った品物を店員から渡してもらったとき、もしあなたが何か店員に言うとしたら、何と言いますか。そのときのことばを記入して下さい。

・ そのときあなたは何か身振りをつけますか。

1. とくに身振りはない
2. 身振りをつける → どんな身振りですか。なるべく具体的に記入して下さい。 _____

(10) 店員は、品物を客に何と言って渡しますか。そのときのことばを記入して下さい。 _____

・そのとき店員は何か身振りをつけますか。

1. とくに身振りはない

2. 身振りをつける→どんな身振りですか。なるべく具体的に記入して下さい。 _____

V 学校でのあいさつ

あなたが高等学校や中学校に通っていたときのことを思いおこして、つぎの質問に答えて下さい。こうしなければならないとか、こうした方がよいというのではなく、実際に自分はこうしていたということを思い出して答えて下さい。ことはあなたの当時のことばづかいのままを記入し、身振りは該当する番号を()に記入して下さい。

(1) まず、あなたの通っていた学校を一つ(高等学校でも中学校でもかまいません)思いうかべて下さい。

学校名 _____ 所在地 _____ 都道 _____ 府県 _____ 郡市 _____ 区 _____

・また、その学校に通っていたのは何年ごろのことですか。

1 明治

2 大正 _____ 年ごろ

3 昭和

身振りの選択肢

1. 深々とおじぎをする(上半身を深く前にたおす)
2. おじぎをする(上半身を軽く前にたおす)
3. 会釈する(頭を軽く前にたおす)
4. 上半身は動かさず軽くひざだけを折る
5. あごをしゃくる
6. 手をあげる
7. 手を振る
8. 握手をする
9. 抱き合う
10. キスをする
11. 帽子をとる
12. 帽子に手をやる

- (2) 朝、校門を入ろうとすると、先生に会った生徒はどんなあいさつをしましたか。また先生から生徒へはどんなあいさつがありましたか。

・生徒から

- ことば _____
- 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
- 身振り () () () その他 _____

・先生から

- ことば _____
- 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
- 身振り () () () その他 _____

- (3) 学校の廊下ですれちがうとき、先生と生徒はどんなあいさつをしましたか。

・生徒から

- ことば _____
- 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
- 身振り () () () その他 _____

・先生から

- ことば _____
- 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
- 身振り () () () その他 _____

- (4) 授業が始まるとき、先生と生徒は何か決まったあいさつをしましたか。

・あなたは

- ことば
 - 1. なかった
 - 2. あった _____
- 動作 1. 立って 2. いすにかけたまま
- 身振り
 - 1. なかった
 - 2. あった () () ()

その他 _____

・先生は

- ことば
 - 1. なかった
 - 2. あった _____
- 動作
 - 1. 立って
 - 2. いすにかけたまま
- 身振り
 - 1. なかった
 - 2. あった () () ()

その他 _____

(5) 授業が終わったとき先生と生徒は何かいさつをしましたか。

・あなたは

- ことば
 - 1. なかった
 - 2. あった _____
- 動作
 - 1. 立って
 - 2. いすにかけたまま
- 身振り
 - 1. なかった
 - 2. あった () () ()

その他 _____

・先生は

- ことば
 - 1. なかった
 - 2. あった _____
- 動作
 - 1. 立って
 - 2. いすにかけたまま
- 身振り
 - 1. なかった
 - 2. あった () () ()

その他 _____

(6) 授業中、先生から出された問題に答えようとする生徒は、どんな意志表示の行動をしましたか。

・ことば _____

・身振り

- 腕は
 - 1. まっすぐのばしてあげる
 - 2. ひじを曲げ体の横であげる
 - 3. ひじを机につけてあげる
- 手、指は
 - 1. 全部の指をのばす
 - 2. ひとさし指のみのばし、他は曲げる

3. 全部の指をまげ、こぶしをつくる
4. 指をならす
5. 手のひらを振る

(7) 先生に指名され質問に答える生徒は、いすから立って答えましたか。それともすわったままで答えましたか。

1. 立って答えることが多かった
2. いすに腰をかけたまま答えることが多かった

(8) 先生に対して答えるとき、生徒が腕を組んでいることは、

1. ごくふつうにすることだったし、してもおかしくなかった
2. ぶしつけなこと、してはいけないこととされていた

(9) 先生に対して答えるとき、生徒が鼻や口に手をあてていることは、

1. ごくふつうにすることだったし、してもおかしくなかった
2. ぶしつけなこと、してはいけないこととされていた

VI 公 園 で

日曜日の朝、公園を散歩していると、近所の同年輩の親しい人に出会いました。前問と同様に以下の質問に答えて下さい。

身振りの選択肢

1. 深々とおじぎをする（上半身を深く前にたおす）
2. おじぎをする（上半身を軽く前にたおす）
3. 会釈する（頭を軽く前にたおす）
4. 上半身は動かさず軽くひざだけを折る
5. あごをしゃくる
6. 手をあげる
7. 手を振る
8. 握手をする
9. 抱き合う
10. キスをする
11. 帽子をとる
12. 帽子に手をやる

(1) あなたはその人にあいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
 → 動作 1. 立ち止まる 2. 立ち止まらない
 → 身振り () () () その他 _____

(2) とくに用事がないとして、何か話題をみつけて話をしますか。

1. しない

2. する → どんな話題が多いですか。
 1. 天気 2. 仕事 3. 健康 4. スポーツ
 5. 政治 6. その他 _____

(3) その人と話をしている間、どこを見て話しますか。

1. 相手の目 2. 相手の口

3. 相手の目や口以外のところ (具体的に: _____)

4. 相手を見ないようにする → ではどこを見ますか。

(具体的に: _____)

(4) 別れるとき、その人にあいさつをしますか。

1. しない

2. する → ことば _____
 → 身振り () () () その他 _____

VII 道きき、道教え

見知らぬ町で道がわからなくなったとします。

(1) そんなときにあなたはだれかに気軽に、道を尋ねるほうですか。

1. 気軽に尋ねる

2. どちらかといえば気軽に尋ねる

3. あまり尋ねない

4. 全く尋ねない

(2) 道を尋ねるとしたらどんな人に尋ねますか。(上で、4に○をした人は、どうしても尋ねなければならない場合のことでお答え下さい)

1. 警官

2. 近くの店の人

3. 通りがかりの人

4. その他 _____

(3) たとえば、東京で通りがかりの40歳くらいの見知らぬ男性に博物館への道を尋ねるとします。

・そのとき何と言って話しかけますか。

- | | |
|------------------|----------------|
| 1. 呼びかけずにすぐ道を尋ねる | 2. 「すみません (が)」 |
| 3. 「ちょっと」 | 4. 「あの一」 |
| 5. その他 | _____ |

・そのときの身振りはどうですか。

- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1. 相手の顔を見る | 2. 相手の肩を軽くたたく |
| 3. おじぎをする (上半身を軽く前へたおす) | 4. その他 |
| | _____ |

(4) 相手の人が親切に道を教えてくれました。何と言ってお礼を述べますか。

- | | |
|------------------|---------------|
| 1. 「ありがとうございました」 | 2. 「ありがとう」 |
| 3. 「どうも」 | 4. 「すみませんでした」 |
| 5. その他 | _____ |

(5) 今度は逆に、あなたが道を歩いているとき、40歳くらいの男性に呼び止められたとします。

・何と言って返事をしますか。

- | | | |
|------------|---------|-------------|
| 1. 何も言わない | 2. 「はい」 | 3. 「なんでしょう」 |
| 4. 「なんですか」 | 5. その他 | _____ |

・そのとき身振りはどうですか。

- | | | |
|------------|----------|--------|
| 1. 相手の目を見る | 2. 目を伏せる | 3. その他 |
| | | _____ |

(6) 相手の人が道を尋ねてきました。あなたが親切に教えてあげると相手の人はお礼を言いました。

・それに対して何と言いますか。

- | | |
|---------------|----------|
| 1. だまって立ち去る | 2. 「いいえ」 |
| 3. 「どういたしまして」 | 4. その他 |
| | _____ |

・そのときの身振りはどうですか。

- | |
|-------------------------|
| 1. 会釈する (頭を軽く前にたおす) |
| 2. おじぎをする (上半身を軽く前にたおす) |
| 3. その他 |
| _____ |

VIII 接触および距離

以下の質問に入るまえに、つぎのような条件を満たす4人の人物を思いうかべ、順にAさん、Bさん、Cさん、Dさんと名付けて下さい。

- | | |
|-------------------------------------|-------|
| イ. 顔見知りであるがあまり親しくない同性の人 | : Aさん |
| ロ. 顔見知りであるがあまり親しくない異性の人 | : Bさん |
| ハ. 最も親しい同性の人
(たとえば、友人、兄弟姉妹、親子など) | : Cさん |
| ニ. 最も親しい異性の人
(たとえば、配偶者、兄弟姉妹など) | : Dさん |

今、思いうかべたA～Dさんはあなたとどんな関係の人ですか。下の選択肢から選んで()の中に番号で記入して下さい。また、その人と月に何回くらい会いますか。

関係の選択肢

- | | | |
|--------------|---------|-------|
| 1. 学校(時代)の友人 | 2. 近所の人 | 3. 同僚 |
| 4. 仕事上の知人 | 5. 兄弟姉妹 | 6. 親子 |
| 7. 配偶者 | 8. 親類 | |

- Aさん——→ () の関係で月に _____ 回くらい会う
 Bさん——→ () の関係で月に _____ 回くらい会う
 Cさん——→ () の関係で月に _____ 回くらい会う
 Dさん——→ () の関係で月に _____ 回くらい会う

以下の質問では、これらの人々に対するあなたの行動についてお尋ねします。

- (1) あなたが一人で街を歩いているとき、Aさんに会ったとします。そのときあいさつするとして、ことばのほかに身振りであいさつするとしたら、どんな

ふうにしますか。つぎの「身振りの選択肢」の中から適切なものを選んで下の
 ()の中にその番号を記入して下さい。場合によって異なった身振りをする
 場合には、よくする身振りから順に三つまで記入して下さい。

身振りの選択肢

- | | |
|------------------------|-------------|
| 1. 相手を見てほほえむ | 2. 軽く手をあげる |
| 3. 会釈する（頭を軽く前にたおす） | |
| 4. おじぎをする（上半身を軽く前にたおす） | |
| 5. 片手で握手する | 6. 両手で握手する |
| 7. 相手の肩に手をおく | 8. 相手の肩をたたく |
| 9. 相手を抱く | 10. ほおずりする |
| | 11. キスをする |

Aさんに () () () その他 _____

(2) 同様にB, C, Dさんに会いました。そのときの身振りはどうですか。

Bさんに () () () その他 _____

Cさんに () () () その他 _____

Dさんに () () () その他 _____

(3) それでは、Cさん、Dさんとあらかじめ約束をしておいて街で出会った場合
 はどうですか。

あらかじめ約束したCさんと出会ったとき () () () その他 _____

あらかじめ約束したDさんと出会ったとき () () () その他 _____

(4) 相手の人とあいさつしたあと、しばらくそこで立ち話をするとします。その
 ときあなたと相手の人との距離はどうでしょうか。適切な選択肢の番号を選ん
 で () に記入して下さい。

選 択 肢

- | |
|---------------------|
| 1. 握手のできないうくらいの距離 |
| 2. 握手のできるくらいの距離 |
| 3. 相手の体に触れられるくらいの距離 |
| 4. 抱き合えるくらいの距離 |

Aさん→ () その他 _____
 Bさん→ () その他 _____
 Cさん→ () その他 _____
 Dさん→ () その他 _____

(5) 立ち話のあと、並んで歩きながら話をするとして、そのときの二人の距離はふつうどれくらいですか。下の選択肢から三つ以内選んで下さい。

選 択 肢

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1. 肩が触れないだけの距離 | |
| 2. 肩がときどき触れ合うくらいの距離 | |
| 3. 腕を組んで歩く | 4. 手をつないで歩く |
| 5. 相手の腰に腕を回す | |
| 6. 相手が自分の腰に腕を回す | |
| 7. 互いに腕を腰に回す | 8. 互いに肩を組んで歩く |

Aさん→ () () () その他 _____
 Bさん→ () () () その他 _____
 Cさん→ () () () その他 _____
 Dさん→ () () () その他 _____

ご協力ありがとうございました。

国立国語研究所

Summary

Since its establishment in December, 1948, the National Language Research Institute (Kokuritsu Kokugo Kenkyuzyo) has conducted extensive investigations on *gengoseikatsu*, the use of language in context, of people in every region of Japan. The present research is an extension of these investigations and examines the patterns of linguistic behaviour of Japanese and foreigners (in particular, Germans) from a contrastive linguistic and sociolinguistic point of view. Previously, contrastive research on the linguistic behaviour of foreigners was conducted using data from a variety of literary genres and movies. The present research is the first attempt by the National Language Research Institute to carry out an investigation of the actual linguistic behaviour of foreigners and Japanese. Little former research on this topic exists.

With international exchange becoming more and more prevalent, cultural friction among societies from different cultures has been a source of many problems. While a variety of attempts have been made, a linguistic perspective has generally been lacking. It is important to develop an objective description of the linguistic behaviour patterns of peoples with varied cultural backgrounds to help analyze the sources of cultural friction. We were faced with many financial and methodological problems in trying to get this project off the ground. However, thanks to the financial assistance from the Japanese Ministry of Education (Monbushô) and the Japan Association for the Promotion of Science (Nihon Gakuzyutsu Sinkôkai), we were able to begin the present research. The reason we chose Germans as the foreigners to use for comparison with Japanese in the present research was because of our association with the Cultural Agreement between Japan and the Federal Republic of Germany (Das Kulturabkommen zwischen Japan und der Bundesrepublik Deutschland, Niti-doku Bunka Kyôtei).

The present study was carried out in cooperation with the German Language Institute (Institut für Deutsche Sprache) of West Germany. It was conducted over the period from 1977 to 1981 in both West Germany and Japan using written questionnaires. The subjects of this investigation were Germans living in several cities centered around Mannheim, West Germany, and Japanese and foreigners living in several areas of Japan. The final sample size for each class is given below.

	Non-student members of society	Students	Total
Germans	218	105	323
Japanese	511	587	1,098
Foreigners in Japan	205	179	384

Our reasons for including foreigners in Japan in this investigation were twofold: first, to obtain comparative data on foreigners in Japan, i.e. inhabitants in a foreign culture, to compare with Japanese and Germans living in their native countries, and second, to ascertain the nature of Japanese linguistic behaviour patterns as seen by foreigners in Japan. Foreigners in Japan were people who spoke English as their first language (primarily Americans, also the sample contained many foreign students and people involved in teaching Japanese as a second language). Speakers of other foreign languages were excluded since we were unable to obtain a sample size large enough for analysis.

The main results obtained from this investigation, focusing on the comparison of Japanese and German linguistic behaviour, are summarized below for each chapter. The first chapter, "The Investigation: Justification and Methodology" is omitted since its content was referred to above.

Chapter 2 "The Use of Language in Social Context and Linguistic Awareness"

This chapter deals with the amount of contact by the subjects with the mass media, private correspondence (letters, diaries, etc.), attitudes toward interaction with other people, contact with foreign languages and foreigners, etc. The results in this chapter are summarized below.

- (1) Compared with Germans and foreigners in Japan, Japanese had considerably more contact with the mass media, i.e. television, newspapers, etc.
- (2) On the other hand, the transmission of private correspondence by Japanese was rather low and the percentage of Japanese who liked face-to-face communication with neighbors and strangers was the smallest of the three groups studied.
- (3) In summary, while the communication activity of the Japanese was relatively passive, Germans and foreigners were in a more active category. Comparing the Germans and foreigners in Japan, foreigners in Japan were slightly more active.
- (4) When the Japanese were asked which languages came to mind when they heard the phrase "foreign language," and which foreign languages they had studied, English was by far the most common answer given, followed by French and German. Few other languages were mentioned, and those appeared at extremely low percentages, although Chinese was mentioned slightly more often than others.

(5) On the other hand, Germans gave a large variety of languages in addition to English and French, e.g. Spanish, Italian, Russian, etc., but few mentioned Japanese. This suggests that in comparison with the Japanese, Germans had a wider awareness of foreign languages.

(6) In response to the question of whether foreigners should speak the language of the country in which they reside, 40% of the Japanese answered in the affirmative while 95% of the Germans answered that they did not think so. Slightly more of the foreigners living in Japan felt one should speak Japanese than those who didn't.

(7) When asked whether they thought foreigners could achieve native proficiency in a second language, 70% of both the Japanese and Germans, said yes, and 25% said no. On the other hand, foreigners in Japan were negative and most thought few people could learn to speak as well as a native.

(8) More Germans (60%) than Japanese (approximately 40%) said they would correct foreigners if they made mistakes. However, only 25% of the foreigners in Japan said that they were corrected when they made mistakes.

(9) Over 60% of the Japanese and Germans said they would give directions slowly if they were asked for directions in broken language by a foreigner. When foreigners in Japan were asked about Japanese behaviour most said that the Japanese would give directions slowly, but a higher percentage than the Japanese answered that the Japanese gave directions at normal speed.

(10) When the Germans were asked about the differentiation of "Sie" and "du," about half said they approved of the differentiation. Of those who said they preferred only one form, almost all favored the use of "du."

The results given in (10) through (14) below are from an investigation conducted only on foreigners in Japan.

(11) 90% of the foreigners in Japan said that they talked with Japanese people every day but only about half said that they spoke to Japanese only in Japanese.

(12) Foreigners in Japan felt that spoken Japanese was easy compared to the written language. In particular, 60% thought pronunciation was easy. This was considerably higher than the percentages given for the other categories on the questionnaire (writing system 6%, grammar 24%). Overall these results seem to suggest that excluding the writing system, Japanese is an easy language to learn. However, it is difficult to make comparisons with other languages based on the results of this investigation alone.

(13) A large number of foreigners in Japan enjoyed contact with traditional Japanese culture: Japanese food, Japanese inns, Kabuki, Noh, etc. In general, there was a tendency for the percentage to increase with the number of years of residency in Japan. Similarly, this figure was larger for people who wanted to live in Japan permanently and people who had a desire to visit Japan repeatedly in the future.

(14) In order to investigate the actual types of friction between different cultures, we asked subjects about the following three Japanese behaviours which differ from western customs and etiquette: making slurping sounds while eating *soba* ('buckwheat noodles'), not looking at the person one is talking to, and not giving a clear yes or no answer. The following percentages of foreigners in Japan reacted negatively to these three behaviours: 12%, 42%, 61%, respectively. Percentages of negative responses increased from non-verbal behaviour with no direct communication intention to verbal behaviour having a direct communicative purpose. This could very well represent a general tendency in the interaction between different cultures. We feel that further investigation in this area, increasing the types of behaviour studied, should be carried out in the future.

Chapter 3 "Greeting Behaviour"

In this chapter we present the results of investigations on the existence of "greeting" behaviour in the home, on the street, in a park, at school, etc. and the linguistic expressions and accompanying body movements used in these contexts.

(15) A larger percentage of Japanese than the other two groups said that they used a conventionalized expression when they finished dinner, although they did not say "greetings" when they woke up, went to bed, etc.

(16) Compared with the Germans, the Japanese had few greetings which were accompanied by physical contact.

(17) All three groups said that they often greeted acquaintances and friends when they met them on the street.

(18) Results indicated that Japanese did not exchange birthday greetings very much.

(19) While Germans had a single conventionalized expression to say to someone who had had a misfortune, Japanese had a variety of expressions for this context.

(20) Results indicated that Japanese students did not express their condolences as well as German students.

(21) When greeting acquaintances and friends they run into while walking in a park, most Japanese said they would raise their hand or wave, while most Germans said they would give a slight bow from the waist up, or shake hands.

(22) Japanese and Germans said that they would talk about the weather when there was no particular topic of conversation, while foreigners in Japan said that they would talk about the weather, work and research.

(23) Responses to questions about the greetings exchanged between students and teachers at school showed that Germans used a high percentage of conventionalized expressions. On the other hand, Japanese had few

conventionalized expressions other than *ohayoo gozaimasu* ('good morning') for this context.

(24) The majority of the Germans said that they gave a slight nod of the head with this greeting while most Japanese gave a slight or deep bow from the waist.

Chapter 4 "Shopping and Asking for Directions"

This chapter gives the results of an investigation of the linguistic behaviour in the following three contexts: 1) buying a newspaper at a station newsstand, 2) buying a fountain pen at a department store, 3) asking for directions in an unfamiliar area.

(25) Results indicated that Germans would speak more than Japanese when buying something at a station newsstand. There was no difference between Germans and Japanese in the amount of verbal exchange before and during the actual purchase. However, there was a difference in the amount of verbal exchange between the shopkeeper and customer after the purchase was made. Therefore this difference probably stems from the fact that there are no conventionalized linguistic expressions in Japanese that are used after a customer has made a purchase. Note it is difficult to use the expression *sayoonara* ('good-bye') in this context.

(26) Results for all three groups showed that a higher percentage of women spoke in this context than men. This difference was most pronounced for Japanese, next for foreigners in Japan, and least so for Germans.

(27) When buying a fountain pen, Japanese said that they would say *sumimasen* ('excuse me') when they approached the display case, while Germans said that they would ask about their business immediately.

(28) In particular, Japanese said that even if they were addressed by the salesperson they would still look around without saying anything.

(29) When answering the salesperson to the effect that they would look on their own, Germans said they would use complete sentences that included an expression of gratitude. On the other hand, Japanese did not include an expression of thanks and their sentences did not have a clear ending.

(30) For all three groups, most said that the customer would point to a particular sales item with his/her index finger and the salesperson would point with his/her hand palm face up.

(31) 90% of the Japanese answered this question, in contrast to the majority of Germans and foreigners in Japan, who chose not to respond. This may suggest that Japanese have a stronger awareness of hand movements.

(32) Most Japanese said that they would not say anything when the salesperson gave them a fountain pen that they had bought. On the other hand, most Germans said that they would add an expression of gratitude and say good-bye in this context.

(33) In response to the question about who they would ask for directions, most Japanese said that they would ask a nearby shopkeeper or passerby. Few said that they would ask a policeman.

(34) The overwhelming majority of Germans said that they would ask a passerby for directions and a very small number said that they would ask a shopkeeper. Non-student members of society also said that they would ask a policeman but very few students gave this response.

(35) Foreigners in Japan said that they would ask passersby, shopkeepers, policemen or anyone who happened to be in the area for directions.

(36) In response to the question about what they would say if they were asking a man about forty years old for directions, most younger Germans said that they would use the subjunctive II and most women said that they would also add *bitte* ('please'),

(37) Most older men said that they would ask in the indicative.

(38) In this context most Japanese said they would give a deep bow from the waist. Most Germans said that they would look at the man's face and only a few said that they would give a slight nod of the head. The behaviour of foreigners in Japan was similar to that of the Japanese.

(39) When thanking someone for giving directions, the number of Germans who said they would give a slight nod of the head increased.

Chapter 5 "Physical Contact, Proxemics"

In this chapter we examined the behaviour of two people meeting each other or walking on the street, and the distance between people when they were standing around talking.

(40) Responses indicated that in all of these contexts, when the two people who were involved knew each other well, Germans would stand closer to each other than Japanese.

(41) When they met someone, Germans said that they would stand at a hand-shaking or shoulder clasping distance.

(42) When standing around talking, most Germans said that they would be in a position where they could touch or hug the other person.

(43) When walking, most Germans said they would do things like clasp arms or touch the other person in some way.

参 考 文 献

- Argyle, M. (1975) "*Bodily Communication*" Methuen & Co., London
- Birdwhistell, R. L. (1970) "*Kinesics and Context — Essays on Body-Motion Communication*" Univ. of Pennsylvania Press, U.S.A.
- Goffman, E. (1963) "*Behavior in Public Places*" The Free Press of Glencoe (邦訳『集まりの構造』丸木・本名訳。誠信書房。1980)
- Hall, E. T. (1966) "*The Hidden Dimension*" Doubleday & Co., New York (邦訳『かくれた次元』日高・佐藤訳。みすず書房。1970)
- Hall, E. T. (1968) "*Proxemics*" "Current Anthropology" 9, Univ. of Chicago Press [Weitz (1974) に再録]
- Hall, E. T. (1977) "*Beyond Culture*" Doubleday & Co., New York (邦訳『文化を超えて』岩田・谷訳。TBSブリタニカ。1979)
- 林 大 (1982) 「言語行動の国際比較」(『行動計量学』第10巻第1号。日本行動計量学会)
- 林 大 (1983) 「言語行動の国際比較のために」(『日・仏語の対照言語学的研究 論集』非売品)
- Hinde, R. (ed. 1972) "*Non-Verbal Communication*" Cambridge Univ. Press, London
- 放送事情調査部 (1980) 「'80海外放送界の現状」(『文研月報』30-1)
- 放送世論調査所 視聴率グループ (1980) 「テレビ・ラジオ視聴の現状 — 昭和54年11月全国視聴率調査の結果から」(『文研月報』30-3)
- 経済企画庁国民生活局 (1975) 『生活時間の構造分析』大蔵省印刷局
- Kendon, A., Harris, R. M., Key, M. R. (ed. 1975) "*Organization of Behavior in Face-To-Face Interaction*" Mouton, The Hague
- Key, M. R. (1977) "*Nonverbal Communication — A Research Guide & Bibliography*" Scarecrow Press, N.J., U.S.A.
- Key, M. R. (ed. 1982) "*Nonverbal Communication Today — Current Research*" Mouton, Berlin

- 国立国語研究所 (1981) 『大都市の言語生活——分析編』(報告70-1) 三省堂
- Laver, J., Hutcheson, S. (ed. 1972) “*Communication in Face to Face Interaction*” Penguin Books, G.B.
- 水谷 修 (1978) 「外国人に対する日本語教育」(『岩波講座 日本語 別巻』) 岩波書店
- Montague, A. (1971) “*Touching; The Human Significance of the Skin*” Columbia Univ. Press (邦訳『タッチング』佐藤信・佐藤方訳。平凡社。1977)
- ネウストプニー, J.V. (1979) 「言語行動のモデル」(講座『言語』第3巻, 南不二男編『言語と行動』大修館書店)
- NHK 編 (1981) 『国民生活時間調査 昭和55年度』日本放送出版協会
- NHK 放送世論調査所 (1982) 『西ドイツ調査結果の概要——日米との比較』非売品
- 野元菊雄 (1978) 『日本人と日本語』筑摩書房
- 杉戸清樹 (1981) 「あいさつの言葉と身振り」(文化庁『ことばシリーズ14 あいさつと言葉』) 大蔵省印刷局
- Watson, O.M. (1970) “*Proxemic Behavior — A Cross Cultural Study*” Mouton, The Hague
- Weitz, S. (ed. 1974) “*Nonverbal Communication — Readings with Commentary*” Oxford Univ. Press, U.S.A.
- 郵政省編 (1980) 『通信白書 昭和54年版』大蔵省印刷局

索引

- (1) 索引は、見出し項目の内容によって、一般項目索引、言語形式索引（日本語、外国語）、みぶり・距離・位置索引の3部に分けた。
- (2) ページ数の肩に、必要に応じて、J・G・Eの略号をつけた。これらは、J（Japanese）、G（German）、E（English）の略であり、当該の見出し項目が、それぞれ日本人、ドイツ人、在日外国人に関連するページであることを示す。ただし、「日本語語形索引」においては、略号は次の意を表わす。

J：日本語の言語形式

G：ドイツ語に与えた訳語としての日本語

E：英語に与えた訳語としての日本語

- (3) 本文の記述と、索引の見出し項目とを一致させていない場合がある。本文の記述を内容的にまとめて登録した場合や、言語形式を統一した場合などである。

一般項目索引

あ 行

あいさつの有無	100 ^J , 107 ^G , 111 ^E , 117 ^J , 123 ^G , 126 ^E
あいさつのことば	105 ^J , 121 ^J , 125 ^G , 131 ^J , 136 ^J , 137 ^G , 142 ^G , 144 ^E , 149 ^E , 155 ^J , 158 ^G , 160 ^J , 161 ^G , 163 ^J , 164 ^G , 165 ^J , 166 ^G , 168 ^J , 170 ^G , 172 ^J , 173 ^G , 174 ^J , 175 ^G , 176 ^J , 177 ^G , 204 ^G
あいさつの動作・みぶり	98, 103 ^J , 108 ^G , 113 ^E , 119 ^J , 124 ^G , 128 ^E , 133 ^J , 136 ^J , 138 ^G , 142 ^G , 145 ^E , 150 ^E , 156 ^J , 159 ^G , 161 ^J , 162 ^G , 163 ^J , 165 ^G , 166 ^J , 167 ^G , 169 ^J , 170 ^G , 172 ^J , 173 ^G , 175 ^J , 176 ^{JG} , 177 ^G
あいさつ場面	97, 116, 131 ^J , 137 ^G , 143 ^E , 153
あいさつをする行動・主体	100 ^J , 117 ^J , 122 ^G , 126 ^E

相手とみぶり	146 ^E , 150 ^E
アナウンサーのことば	61 ^G
アンケート調査	15, 349
言い切り・言いさし	233 ^J , 235 ^G
「イエス・ノーを直接言わないのをどう思うか」	87 ^E , 88 ^E
意志表示のことば・みぶり	178 ^J , 180 ^G
一人称構文	206 ^G , 223 ^G , 235 ^G
一様性	106 ^J , 130 ^{JG}
「異文化に適應できるか」	90 ^E
売場での「相談」内容	202 ^J
売場に近づいての最初の行動	194
「英語」	45, 49, 50
応答	223 ^G
お金の受け取り方・支払い方	188, 189
「音をたててソバをすするのをどう思うか」	85 ^E , 88 ^E

か 行

買物客の行動	187, 189, 194,
--------	----------------

228, 238, 247, 250, 259, 283
 買物の終わりの行動 189
 外国語学習の経験 49
 「『外国語』というは何語?」 45
 外国語との接触 45
 外国語の意味 45
 外国語の上達 54
 外国語の世界の広がり 48
 「外国人がまちがえたら訂正するか」
 55
 「外国人に道を聞かれたら」 57
 外国人の日本語観 73^E
 学習した外国語 49
 学生 17, 20
 学歴 23
 学校でのあいさつ 153^{JG}
 家庭でのあいさつ 97
 「歌舞伎や能が好きか」 83^E
 観察調査 15, 341^G
 「漢字を見たことがあるか」 51^G
 感謝表現 234^G, 260^J,
 263^E, 271^J, 274^G, 277^E
 勘定要求表現 276^G
 完備文 256^G
 慣用性 222^G
 キオスクでの新聞購入頻度 32
 キオスクの機能 7, 186, 351
 疑問文の要求・希望 207^G
 距離得点 330^{JG}, 343^G
 「近所の人とおしゃべり」 38, 41
 空間的要素 305
 警官の機能 290
 敬語の用法 76
 言語以外の情報 351
 言語行動 1, 3, 6, 352
 言語行動場面 5, 352
 言語生活 2, 25
 公園でのあいさつ 131
 「肯定・否定の応答の区別」 75^E
 行動の相手 306^{JG}

行動をする側・される側のことば・
 みぶり 105^J, 108^G, 110^G
 購入申し出の希望・要求
 251^J, 253^G
 交番 290, 351
 校門でのあいさつ 155^{JG}
 呼称 158^G, 164^G
 個人的距離 305
 こ・そ・あ 202^J
 ことばなし 168^J, 174^J, 180^G
 「子供のときのことば」 65^G

さ 行

在日外国人調査 11, 18, 350
 指し示す手振り 247
 雑誌を買う 186^{JE}
 サンプルング調査 349
 指示詞 202^J
 指示代名詞 256^G
 私信通数 34
 質問 216, 218^J, 222^G
 品物を受け取ることば・みぶり
 259, 265
 品物を渡す店員のことば・みぶり
 271^J, 279
 社会人 17, 20
 社会的距離 305
 「集会への出席の好悪」 39, 41
 授業開始のあいさつ 167^{JG}
 授業終了のあいさつ 174^{JG}
 試用を要求する 245
 「初対面で気軽に話せるか」 42
 親疎 306, 316^{JG}
 身体の接触 115^{JG}
 新聞閲読時間 29
 「新聞・雑誌を読むことの好悪」 33
 新聞の流通機構 33, 185
 新聞を買う 186^{JE}
 随伴行動 97, 116
 性の異同 306^{JG}, 316^{JG}

接続法(第Ⅱ式) … 207^G, 294^G, 297^G
 ゼロの言語行動 … 2, 7, 351
 先生の行動・動作 … 162^{JG}, 166^{JG}
 想定された人 … 101^J, 308^{JG},
 321^J, 329^J, 339^J

た 行

待遇意識 … 305
 待遇形式 … 105^J
 「滞在国の言語」 … 52
 対人間の距離 … 324
 対人行動 … 42, 305, 348
 「対人接触態度」 … 38
 滞り期間 … 24^E
 立ち止まる主体 … 155^J, 163^J, 165^{JG}
 立ち話をするときの体の向き … 331^G
 立ち話をするときの距離
 … 323^{JG}, 330^{JG}
 立ってするあいさつ … 102^J, 112^E
 たばこを買う … 187^{JE}
 誕生日 … 116
 「男女の話し方の違い」 … 77^E
 「地方で話が通じなかった経験」 … 66^G
 中間回答 … 42
 「中国語」 … 48, 50
 調査企画・実施 … 12
 調査票 … 350, 353^J
 「朝鮮語」 … 48
 直説法疑問文 … 295^G
 通常体 … 106^J, 120^J
 出合いのあいさつ … 131^J,
 137^G, 143^E
 出会ったときのみぶり … 311^{JG}
 丁寧形式 … 252^J
 丁寧さ … 186, 207^G, 212^{JG},
 224^G, 294^G, 299^G
 丁寧体 … 106^J, 120^J
 「手紙・日記を書くことの好悪」 … 36
 「手紙・はがきを書く」 … 34
 「テレビ視聴時間」 … 25^{JG}, 28^E

テレビ普及率 … 27^{JG}
 店員が話しかけてきたときに断る
 … 231
 店員が話しかけてくる／こない … 212,
 213^J, 214^G, 215^E
 店員と積極的に話す … 228
 店員に対することば … 199^J, 203^G
 店員の行動 … 189, 213,
 248, 270, 283
 店員を呼ぶ／呼ばない … 194
 天気の話 … 134^J, 140^G, 147^E
 「電話での使用言語」 … 37^E
 「電話利用回数」 … 36^{JE}
 「ドイツ語」 … 47^{JE}, 49^{JE}
 ドイツ人調査 … 17
 ドイツ人のドイツ語観 … 60^G, 64^G, 68^G
 倒置文 … 256^G
 同僚 … 310^{JG}
 特定・不特定の申し出 … 202^J, 209^G
 「どの程度、日本語がうまくなりたいか」
 … 78^E
 「トルコ語」 … 48

な 行

並んで歩くときの観察調査 … 341^G
 並んで歩くときの距離 … 333^{JG}
 西ドイツ国内調査 … 15
 「日独語の対照言語学的研究」 … 9, 12
 二人称構文 … 207^G, 223^G
 二人称代名詞の使い分け … 67^{JG}
 二人称名詞のむずかしさ … 76^E
 「日本語」 … 47^{GE}, 50^G
 日本語学習の教師 … 71^E
 日本国内調査 … 16
 日本語(の学習)経験 … 51^G, 70^E
 日本語のむずかしさの原因 … 73^E
 「日本食が好きか」 … 80^E
 日本人調査 … 17

日本人との接触率	71 ^E
日本人と話すときのことば	72 ^E
「日本人の言語行動様式に関する 比較対照的研究」	13
日本人の購読新聞名	30 ^J
日本人の習慣的行動に対する意見	84 ^E
日本人の性格	91 ^E
日本人文化に対する好み	80 ^E
「日本に永住したいか」	89 ^E
年齢階級別の人数	21
年齢層（若・中・壮年層）	22
「年齢や考え方の違った人たちと つきあいたいのか」	42

は 行

パーソナルメディア接触	34
売店で買う物	186 ^{JE}
売店の機能	185
「箸が使えるか」	81 ^E
初接触	219 ^J , 221 ^G , 227 ^{JG}
「話すときの視線回避」	86 ^E , 88 ^E
被調査者	16
「標準ドイツ語を話すか」	65 ^G
表情	114, 128, 145
「不幸の意味」	116
ふだん読む新聞	30 ^E
「フランス語」	47, 49, 50
proxemics	305, 324
平均年齢	20
母語別の人数	18 ^E
ほしいものを伝える行動	187
翻訳	350

ま 行

前置き	201 ^J , 204 ^G
マスメディア接触	25
万年筆買い	193

「万年筆の使い方を聞くか」	238
「万年筆を試すことができるか」	242
「見知らぬ人への話しかけ」	39, 41
店の機能	290, 351
道聞き	288
道でのあいさつ	116
道で呼び止められたときのみぶり・返事	300 ^{JG} , 302 ^{JG}
道を聞いた礼のことば・みぶり	298 ^{JG} , 300 ^G
道を聞く相手	289
道を聞くことば・みぶり	292 ^{JGE} , 294 ^G
迎え入れ	216 ^J , 221 ^G , 226 ^E , 227 ^{JG}
目線	135 ^J , 140 ^G , 148 ^E
面接調査	350
もちかけ（表現）	204 ^G

や 行

夕食のあいさつ	106 ^G , 114 ^E
要求・希望（表現）	205 ^G
要求表現	210 ^E , 298 ^G
呼びかけ	204 ^G , 211 ^{JG} , 219 ^J , 292
読み書き能力	78 ^E

ら 行

来日理由	24 ^E
臨時的役割	288
礼に対する返答・みぶり	302 ^{JG}
廊下でのあいさつ	162 ^{JG}
「ロシア語」	48, 50

わ 行

別れのあいさつ	136 ^J , 141 ^G , 148 ^E
「和式旅館か洋式ホテルか」	82 ^E
話題の選択	134 ^J , 139 ^G , 147 ^E

あのう ……………	292 ^J	こんばんは ……………	121 ^J
ありがとう(ございました) ……	189 ^{JGE} , 259 ^J , 263 ^E , 271 ^J , 278 ^E , 298 ^J	さようなら ……………	136 ^J
いいえ ……………	302 ^J	失礼します ……………	136 ^J , 292 ^G
いただきます ……………	105 ^J	じゃあ ……………	250 ^J
行ってきます ……………	105 ^J , 106 ^J	すみません(が) ……………	199 ^J , 201 ^J , 210 ^E , 219 ^J , 250 ^J , 259 ^J , 292 ^J
いってらっしゃい(ませ) ……	105 ^J , 106 ^J	すみませんでした ……………	298 ^J
いらっしゃいませ ……………	217 ^J , 226 ^E	ただいま ……………	105 ^J
おかえりなさい(ませ) ……………	105 ^J	では(また) ……………	136 ^J , 149 ^E , 250 ^J
お願いします ……………	199 ^J , 219 ^J	どういたしまして ……………	302 ^J
おはよう(ございます) ……	105 ^J , 121 ^J , 132 ^J , 144 ^E , 155 ^J , 160 ^J , 168 ^J	どうも ……………	189 ^{JGE} , 259 ^J , 263 ^E , 278 ^E , 299 ^J
お待ちせ ……………	271 ^J	どれ・どんな物 ……………	218 ^J
おめでとう ……………	121 ^J	なんでしょう ……………	301 ^J
おやすみ(なさい) ……………	105 ^J	なんですか ……………	301 ^J
起立, 礼! ……………	168 ^J	はい(はあい) ……………	178 ^J , 301 ^J
気をつけて ……………	106 ^J	ばいばい ……………	136 ^J
下さい ……………	251 ^J	また ……………	136 ^J
ごちそうさま(でした) ……………	105 ^J	見る ……………	232 ^J
こんにちは ……………	121 ^J	をお探ですか ……………	218 ^J

ドイツ語・英語語形索引

Auf Wiedersehen! ……………	109, 142, 175, 262	Guten Morgen / Tag! ……………	158, 164, 204
Bis Morgen! ……………	177	(Guten) Tag! ……………	109, 125, 221
bitte ……………	204, 221, 274, 295, 297	Hallo! ……………	109, 110, 138, 204
Bitte sehr! ……………	303	Heil Hitler! ……………	159
Danke! ……………	234, 261, 276, 299	Herzlichen Glückwunsch! ……………	125
Entschuldigen Sie! ……………	204, 292	Hi! ……………	144
Entschuldigung! ……………	204	Ja, gern! ……………	301
Fräulein! ……………	203	Kann Ich Ihnen helfen? ……………	221
Gern geschehen. ……………	302	Keine Ursache! ……………	303
(Good) bye (bye). ……………	149	Können Sie~ ……………	295, 298
(Good) morning. ……………	144	Mahlzeit! ……………	110
(Gute) Nacht! ……………	109	(mein) (herzliches) Beileid. ……………	125
(Guten) Abend! ……………	109, 125	Morgen! ……………	110
Guten Appetit! ……………	109	Nacht! ……………	110
(Guten) Morgen! ……………	109, 125, 138, 170, 204	See you later. ……………	149
		Tag / Abend / Morgen. ……………	110

Tschüß	109, 110, 142, 175	Wie war es ?	110
Verzeihung !	204, 292	Wiedersehen.	110
Vielen Dank !	299	zum Geburtstag	125
Wie geht es ?	125		

みぶり・距離・位置索引

相手に触れられる距離	323 ^{JG}	座席	346 ^G
	325 ^{JG} , 329 ^{JG}	正面を向き合う	332 ^G
握手する	99 ^{JGE} , 118 ^J , 124 ^G , 127 ^E , 139 ^G , 146 ^E , 150 ^E , 300 ^G , 314 ^{JG} , 316 ^{JG} , 321 ^G	座ったまま	171 ^G , 176 ^G , 181 ^G
握手のできる(できない)距離	323 ^{JG} , 324 ^{JG} , 329 ^{JG}	接触する	316 ^{JG}
あごをしゃくる	98 ^{JGE} , 159 ^G , 165 ^G , 177 ^G , 293 ^G , 300 ^G , 303 ^{JG}	抱き合う	99 ^{JGE} , 107 ^G , 114 ^E , 127 ^E
頭を前に倒す	98 ^{JGE} , 104 ^J , 118 ^J	抱き合える距離	323 ^{JG} , 326 ^G , 328 ^J
腕をくむ	179 ^J , 182 ^G , 336 ^{JG} , 338 ^G , 343 ^G	抱く	312 ^{JG} , 316 ^G , 321 ^G
腕を腰に回す	333 ^{JG} , 337 ^G	立ち止まる／止まらない	118 ^J , 123 ^G , 127 ^E , 132 ^J , 145 ^E , 155 ^J , 159 ^G , 163 ^J , 164 ^G
腕をのばす／のばさない	178 ^J , 180 ^G	立つ	169 ^J , 171 ^G , 175 ^J , 176 ^G , 179 ^J , 181 ^G
うなずく	107 ^G , 113 ^E , 124 ^G , 127 ^E , 267 ^J , 268 ^{GE} , 280 ^J , 281 ^G	手をあげる	98 ^{JGE} , 104 ^J , 118 ^J , 133 ^J , 161 ^J , 314 ^J , 316 ^J , 318 ^{JG} , 321 ^J , 323 ^J
会釈する	133 ^J , 139 ^G , 146 ^E , 150 ^E , 156 ^J , 163 ^J , 169 ^J , 175 ^J , 303 ^J , 313 ^J , 318 ^{JG} , 321 ^J	手を合わせる	114 ^E
おじぎする	98 ^{JGE} , 104 ^J , 114 ^E , 118 ^J , 127 ^E , 133 ^J , 146 ^E , 150 ^E , 156 ^J , 159 ^G , 163 ^J , 169 ^J , 175 ^J , 267 ^J , 268 ^E , 280 ^J , 281 ^E , 284 ^G , 293 ^J , 294 ^E , 300 ^G , 303 ^J , 313 ^J , 314 ^G , 318 ^{JG}	手をつなぐ	333 ^{JG} , 336 ^{JG} , 338 ^{JG} , 343 ^G
顔を見る	292 ^{JGE}	手を鼻や口にあてる	179 ^J , 182 ^G
肩が触れ合う(合わない)距離	333 ^{JG} , 334 ^{JG} , 337 ^{JG} , 339 ^J , 343 ^G	手を振る	99 ^{JGE} , 104 ^J , 108 ^G , 114 ^E , 118 ^J , 124 ^G , 127 ^E , 133 ^J , 146 ^E , 150 ^E
肩をたたく	322 ^J	にこりとする／しない	114 ^E , 128 ^E
体に触れられる距離	325 ^G , 326 ^J	人さし指をのばす	181 ^G
キス(接吻)する	99 ^{JGE} , 107 ^G , 114 ^E , 316 ^G , 321 ^G	ふかふかとおじぎする	98 ^{JGE} , 120 ^J
		帽子をとる	99 ^{JGE} , 124 ^G
		ほほえむ	145 ^E , 149 ^E , 268 ^{GE} , 281 ^G , 284 ^{JG} , 313 ^J , 314 ^G , 318 ^{JG} , 322 ^J
		みぶりなし	177 ^G , 265 ^{JGE} , 279 ^{JGE}
		目を見る	135 ^J , 140 ^G , 148 ^E , 302 ^{JG}
		指をならす	181 ^G
		指をのばす	179 ^J , 181 ^G



国立国語研究所報告 80 言語行動における日独比較

1984 年 3 月 31 日 第 1 刷発行

定価 8,000 円

著 作 者 国 立 国 語 研 究 所

発 行 者 株式会社 三 省 堂
代表者 上 野 久 徳

発 行 所 株式会社 三 省 堂
東京都千代田区三崎町二丁目 22 番 14 号
電 話 編 集 (03) 230-9411
販 売 (03) 230-9412
総 務 (03) 230-9511
振替口座 東京 6-54300

N.D.C.分類番号 801

〈日独比較・400 pp.〉 落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-385-30658-3

国立国語研究所の 《社会言語学研究》報告書概要

○八丈島の言語調査（報告 1，1950 年）

創立後、最初の共通語化の調査。共通語化の程度は共通語使用場面の量に比例することが示されている。

○言語生活の実態（報告 2，1951 年）

福島県白河市で行った共通語化の調査。日本での社会言語学的調査研究の先駆として注目されている。学歴、生育地、両親の出身地の 3 要因が共通語化に強く関与する等の結果が得られた。

○地域社会の言語生活（報告 5，1953 年。報告 52，1974 年）

山形県鶴岡市における約 20 年を隔てた 2 度の共通語化調査。2 回の調査から、共通語化の要因は時勢により異なること、共通語化には四つの段階が考えられる等が明らかになった。

○敬語と敬語意識（報告 11，1957 年。報告 77，1983 年）

上記同様、同一地域社会（愛知県岡崎市）で約 20 年を隔てて行った調査。敬語使用の判断基準は 2 回の調査でほとんど変わらなかった。使い分けに関しては、現在の方がうまくなった等のことが明らかになった。

○共通語化の過程（報告 27，1965 年）

北海道入植者を対象に行われた世代差の調査。語彙は 1・2 世間で、文法や音韻は 2・3 世間で、共通語化の程度に落差がある等が指摘された。

○待遇表現の実態（報告 41，1971 年）

島根県松江市の 1 家庭での 24 時間録音調査に基づく。日常会話における待遇表現の表れ方には、会話の種類・機能・話題が関与することを、話しことば資料の電子計算機処理を通じて解明する。

○言語使用の変遷(1)（報告 53，1974 年）

福島県北部の農・山村での調査。年齢と学歴の 2 要因が共通語化に強く関与し、音声・語彙は共通語化しやすいが、文法は比較的方言形式が残しやすい等の結果が得られている。

○大都市の言語生活 —— 分析編 ——（報告 70-1，1981 年）

東京・大阪での大規模な調査。調査は、語彙・文法・アクセント・敬語などの言語的側面のほか、住民意識・ふるさと意識など多岐にわたる。「見ラレル」より「見レル」という語形が優勢であることをはじめとして、大都市住民の言語状況について多くの知見を示す。

○大都市の言語生活 —— 資料編 ——（報告 70-2，1981 年）

上記の「分析編」では繁雑を避けて示さなかった各種統計結果を網羅する。

○企業の中の敬語（報告 73，1982 年）

日立製作所・日鐵建材という一般企業の従業員各層が、日常の勤務生活の中で敬語をどう意識し、どう使っているかを解明しようとした調査。敬語行動に関わる要因を、職階を軸としつつ在社歴・職種など種々の観点から分析する。